二〇一七年度―二〇一九年度、および二〇二〇年度
常葉大学共同研究報告書

おもしろい木宮泰彦　初稿

若松大祐（編著）

表紙の背景写真
「静岡女子高等学院設立趣旨」（学校法人常葉大学歴史資料館蔵）
（本稿 102 頁に活字を収録）

目　次

序文　1

第１部　研究者としての足跡　3

⑴　著述活動の図像化……若松　大祐　5
⑵　木宮泰彦の略年表……7
⑶　草薙キャンパスの創立者銅像前の記念碑文……9
⑷　創立者木宮泰彦『日華文化交流史』の出版始末……10
⑸　木宮泰彦の奮闘……11
⑹　『日華文化交流史』の版本と翻訳……12
⑺　『日支交通史』と『日本古印刷文化史』の関係……13
⑻　創辦人木宮泰彦《日華文化交流史》出版始末……14
⑼　木宮泰彦的奮鬥……15
⑽　《日華文化交流史》版本與翻譯……16
⑾　《日支交通史》與《日本古印刷文化史》之關聯……17
⑿　The course of events leading to the publication of *A History of Japan-Sino Cultural Exchange* by the founder of our institution, Yasuhiko KIMIYA……18
⒀　Yasuhiko KIMIYA's Struggles……19
⒁　The different versions and translations of *A History of Japan-Sino Cultural Exchange*……20
⒂　The relationship between *A History of Japan-Sino Exchange* and *A Cultural History of Print in pre-Modern Japan*……21
⒃　より高きを目指して……江藤　秀一　22

第２部　主要論著の概要　25
⑴　序文の再録と概要の作成……27
⑵「日本震災史概説」の概要……28
⑶『日支交通史』の序文……31
⑷『日本古印刷文化史』の序文と概要……35
⑸『日華文化交流史』の序文と概要……57
⑹「静岡女子高等学院設立趣旨」……102
⑺　主要著作目録……104

第３部　研究活動に対する評価　105
⑴　関係資料の所在……若松　大祐　107
⑵　木宮泰彦の臨地調査……関　智英　114
⑶　日本での『日華文化交流史』に対する評価……若松大祐ほか　137
⑷　中国での『日華文化交流史』に対する評価……尤淑君、石暁軍ほか　154
⑸　木宮泰彦の立場
１．生家西湖山龍雲寺……木宮　敬信　179
２．『日支交通史』と『日華文化交流史』の関係……濱川　栄　181
３．木宮泰彦と皇国史観……濱川　栄　185

第４部　学内共同研究の取り組み　203
⑴　学内共同研究の歩み……205
⑵　主著から木宮泰彦の思いを汲み取る……木宮　敬信　214
⑶　著者の書物への熱意に触れる……中野　直樹　216
⑷　皇国史観との関わり……濱川　栄　218
⑸　木宮泰彦の研究を疑う……若松　大祐　219

後序　221
関係者一覧　222

序　文

若松　大祐

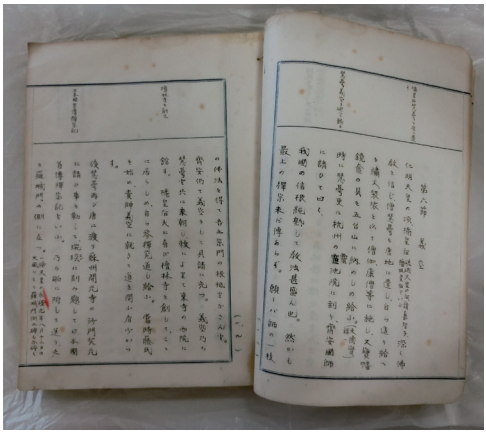
『おもしろい木宮泰彦初稿』は、2017年度から2020年度までの4年間にわたる常葉大学共同研究の成果報告書である。内容は、共同研究のメンバーが主に学内の紀要や活動などで発表した文字資料や図像資料である。実のところ、共同研究において得た知見を文字通り書き散らしていたところ、江藤秀一学長からの叱咤激励を受け、一冊にまとめるにいたった。これまで学校法人常葉大学内では、『国史大辞典』に掲載された文章を転載し、木宮泰彦を説明してきた。対して、『おもしろい木宮泰彦初稿』はようやく常葉大学が自らの言葉で木宮泰彦を語る一歩になったといえよう。

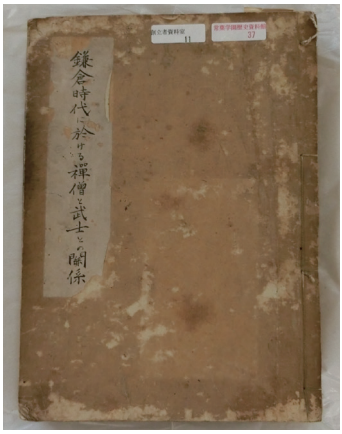
そもそも、木宮泰彦はどのような研究者だったのか。この素朴な問いかけから、我々の共同研究が始まった。木宮泰彦に関する書籍は、学校法人常葉大学内で数冊編纂されてきた。しかし、そうした書籍の性格は、常葉学園の創立者である彼を教育者として顕彰する傾向にある。研究者としての側面に言及したのは、木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』（静岡:静岡谷島屋、一九八五年）だけだろう。確かに人口に膾炙しなくなった研究者木宮泰彦に同書が再び注目したのは、大きく評価できる。何よりも、同書が収録した情報は大変有益である。しかし、同書は研究者としての顕彰を急ぐあまり、木宮泰彦の研究の到達点を羅列するに留まり、木宮泰彦の限界についてほとんど触れていない。結局のところ、木宮史学の特徴はよくわからないままである。

そこで我々は木宮泰彦の主著を実際に繙き、その概要をまとめながら、到達点と限界を確認しようと試みた。また、学外の専門家に助けを求めたこともある。すると、木宮泰彦の描く日中関係史が極めて平板であり概括的であることが、改めて判明した。木宮の描く歴史像が常識的なのであれば、常識たらしめたのは木宮本人ではなかったか。あるいは、日中関係史という研究領域における常識の形成に、木宮の研究はどれほど関与したのか。我々はこの仮説を引き続き疑わなければならない。

木宮史学の特徴の一つは、ものごとをわかりやすく説明するところにある。本稿がこれから述べるように、表をふんだんに使うのはその代表例である。木宮泰彦のつけたタイトルも特徴的である。1920年10月、彼は冨山房より『おもしろい日本歴史の話』を刊行した。同書刊行よりちょうど一〇〇年を経過した現在の我々からすれば、同書がおもしろいのかどうか、別に議論が必要になろう。しかし、彼がよ

り多くの人を日本史へ誘おうと心掛けていたことは確かである。本稿は木宮泰彦の顰に倣い、『おもしろい木宮泰彦初稿』と名付けた。編者の怠惰により、誤字脱字や書式不統一を始めとして、内容上の未熟な分析や矛盾が残る。そこで本稿を「初稿」としてまずは世に問う。読者諸賢からの指摘や批判を得た後に、来年度に定稿『おもしろい木宮泰彦の話』を上梓したい。





卒業論文「鎌倉時代に於ける禪僧と武士との関係」1913 年
（学校法人常葉大学歴史資料館蔵）

第１部
研究者としての足跡

(1)　著述活動の図像化

若松　大祐

毎年の木宮泰彦の命日、すなわち之山忌には、大学学生課と協力して創立者木宮泰彦に関する作品を展示してきた。作品はいずれもポスターであり、木宮泰彦の研究者としての業績を紹介するものである。木宮泰彦は歴史学者であったから、その研究業績は歴史研究の専門書や一般書として出版され、今に残る。しかしながら、出版から百年が経過するものもあり、現在の人々には木宮泰彦の研究業績は理解しづらい。そこで、木宮泰彦の業績を図像化することを試みた。絵画、写真、デザインについては、大学造形学部の学生諸氏の協力を得ることができた。彼ら / 彼女らは自身の考えたことを自由自在に図像化するから、私は制作を依頼するたびに驚かされている。

ふと考えれば、仏教にしてもキリスト教にしても難しい教義を図像化して信徒に伝えてきた。寺院には釈尊の、教会にはキリストの生涯や教えがそれぞれ彫刻や絵画で示されている。それに、木宮泰彦こそは自身の著作で一覧表や年表をふんだんに使い、繁雑な情報を見やすく整理していた。『日支交通史』と『日華文化交流史』では１枚ずつではあるものの、日華交通路図というカラーの地図を載せた。いわば図像化は彼の研究の特徴でもあった。そこで私も木宮泰彦の顰に倣ったわけである。

本稿に所収の作品（ポスター）

日本語	中国語	英語
(4)　創立者木宮泰彦『日華文化交流史』の出版始末	(8)　創辦人木宮泰彦《日華文化交流史》出版始末	⑿ The course of events leading to the publication of *A History of Japan-Sino Cultural Exchange* by the founder of our institution, Yasuhiko KIMIYA
(5)　木宮泰彦の奮闘	(9)　木宮泰彦的奮鬥	⒀ Yasuhiko KIMIYA's Struggles
(6)　『日華文化交流史』の版本と翻訳	⑽　《日華文化交流史》版本與翻譯	⒁ The different versions and translations of *A History of Japan-Sino Cultural Exchange*
(7)　『日支交通史』と『日本古印刷文化史』の関係	⑾　《日支交通史》與《日本古印刷文化史》之關聯	⒂ The relationship between *A History of Japan-Sino Exchange* and *A Cultural History of Print in pre-Modern Japan*

之山忌で展示した作品（ポスター）

作品	2017 年度	2018 年度	2019 年度	2020 年度
⑷ & ⑸	公開	改訂	公開	改訂
⑹	（無）	公開	改訂	改訂
⑺	（無）	（無）	（無）	公開
⑼	（無）	（無）	公開	公開
⑿ & ⒀	（無）	（無）	（無）	公開
⒁	（無）	（無）	（無）	公開

（展示場所）2017 年度は常葉大学瀬名キャンパスのみ。2018 年度以降は瀬名キャンパスと草薙キャンパスで展示している。

（注）上の２つの表の（　）の数字は本稿第１部の目次に対応している。

(2) 木宮泰彦略年表

西暦（元号）	年齢	事　　項
1887（明20）	0	10月15日、静岡県浜名郡入野村に生まれる。
1906（明39）	19	早稲田大学予科に入学する。
1907（明40）	20	第一高等学校に入学する。
1910（明43）	23	第一高等学校を卒業する。 東京帝国大学文科大学史学科に入学する。国史を専攻する。三上参次（恩師）、萩野由之、田中義成、黒板勝美に師事する。
1913（大2）	26	卒業論文「鎌倉時代に於ける禅僧と武士との関係」を提出する。東京帝国大学を卒業する。 京都花園学院教諭となる。
1915（大4）	28	臨済宗大学（現花園大学）講師を兼任する。 京都帝国大学大学院に入学する。内田銀蔵、三浦周行、原勝郎らの指導を受ける。
1916（大5）	29	『栄西禅師』を丙午出版者より刊行する。 千葉県立大多喜中学校教諭となる。
1918（大7）	31	福岡県立福岡中学校教頭兼教諭となる。
1920（大9）	33	山形高等学校教授となる。 『おもしろい日本歴史の話』を冨山房より刊行する。
1923（大12）	36	水戸高等学校教授となる。 『参考日本通史』を冨山房より出版する。
1926（大15）	39	『日支交通史』上巻を金刺芳流堂より刊行する。
1927（昭2）	40	静岡高等学校教授となる。 『日支交通史』下巻を金刺芳流堂より刊行する。
1930（昭5）	43	天皇の静岡行幸に際し、進講する。題目は「日支の交通路―日隋・日唐・日宋・日元・日明」。
1931（昭6）	44	中等学校教科書『新日本史』を冨山房より刊行する。
1932（昭7）	45	『日本古印刷文化史』を冨山房より刊行する。
1933（昭8）	46	岩波講座『日本歴史』の「日宋関係」を執筆する。
1937（昭12）	50	『参考新日本史』を冨山房より刊行する。 中学校教科書『新日本史』初級用・上級用の各一巻を冨山房より出版する。

西暦（元号）	年齢	事　　項
1939（昭14）	52	実業学校用教科書『新日本史』初級用・上級用の各一巻を冨山房より出版する。 静岡高等学校教頭となる。
1940（昭15）	53	『日支文化交渉一覧図と年表』を冨山房より刊行する。 文部省より満洲国および中華民国に出張を命ぜられる。 『日本喫茶史』を冨山房より刊行する。 教科書『新日本史』（実業校用）が、国史教科書五種選定の一つに選ばれる。
1941（昭16）	54	全国高校入試問題作成委員を務める。 『禅と印刷』（「禅講座」中の一冊として）を雄山閣より刊行する。
1942（昭17）	55	『日本民族と海洋思想』を刀江書院より刊行する。
1943（昭18）	56	静岡県史跡名勝天然記念物臨時調査委員を務める。
1946（昭21）	59	静岡高等学校長事務取扱となる。 願により静岡高等学校を退職する。 静岡女子高等学院を創立し、院長に就任する。
1948（昭23）	61	財団法人常葉学園を設立する。 常葉中学校を創立し、校長に就任する。
1951（昭26）	64	静岡女子高等学院を常葉高等学校と改称し、校長に就任する。
1955（昭30）	68	『日華文化交流史』を冨山房より刊行する。
1959（昭34）	72	学校法人常葉学園理事長に就任する。
1963（昭38）	76	常葉学園橘高等学校を創立し、校長に就任する。
1965（昭40）	78	常葉学園橘中学校を創立し、校長に就任する。
1966（昭41）	79	常葉女子短期大学及び同附属とこは幼稚園を創立し、学長に就任する。これを機に常葉高等学校・同中学校を三男栄彦に、橘高等学校・同中学校を四男和彦にそれぞれ譲る。
1969（昭44）	82	10月27日自宅で病に倒れ、30日脳血栓のため死去する。 静岡市の臨済寺に眠る。

* 関智英および宮原佳昭が、創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』（静岡：編者、一九九二年）、三一五 - 三三二頁などより抜粋してそれぞれ作成したものを、その後に若松大祐が合成した。

(3)　常葉大学草薙キャンパスの創立者の銅像前の記念碑文

常葉學園創立者木宮泰彦先生は東京帝國大學史學科卒業後各地の舊制高等學校教授などを歴任すること三十有餘年に及び學者としてはた教育者として偉大なる業績を擧げられた。

　敗戰後國運復興の道は一に青少年教育の振興に在りとの確信の下に、敢然として茲に常葉學園を創立し、苦心經營能く幾多の困難を克服して以て今日の盛運を招來した。

昭和四十五年十月

後學福原龍蔵謹撰并書

静岡瀬名キャンパスの銅像

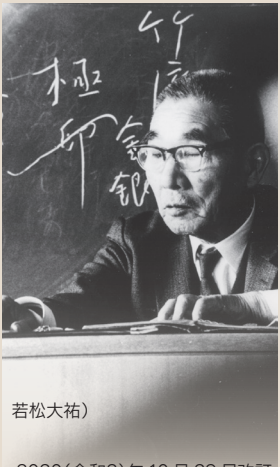
静岡草薙キャンパスの銅像

創立者木宮泰彦『日華文化交流史』の出版始末

木宮 泰彦（KIMIYA, Yasuhiko、男性、1887～1969 年、享年 82 歳）	
1887 年	静岡県浜名郡入野村（現浜松市西区入野町）の西湖山龍雲寺（せいこさんりょうぅんじ）に生まれる。龍雲寺は、臨済宗（中国の禅宗五家の1つ）の妙心寺派に属す。
1913 年	東京帝国大学文科大学（現東京大学文学部）史学科を卒業する。
1926-27 年	**『日支交通史』上下巻（東京：金刺芳流堂）を出版する** [※1]。
1940 年	文部省の命を受けて中国へ出張し、江南の寺院を巡歴する [※2]。
1945 年	1 月、学校教育への功績と日中関係の研究が認められ、勲三等瑞宝章を受ける。3 月、**東京大空襲に遭い、『日支交通史』の増補改訂版の原稿が焼失する** [※3]。8 月、日本の敗戦。
1946 年	静岡女子高等学院を浅間神社北回廊で開校する。
1948 年	財団法人常葉学園の設置が認可される。1950 年には学校法人への組織変更が認可される。
1955 年	**『日華文化交流史』（東京：冨山房）を出版する** [※4]。『日支交通史』の増補改訂版にあたる。
1966 年	常葉女子短期大学（静岡校舎）が開学し、初代学長になる。
1969 年	10 月 30 日、逝去する。静岡市（葵区大岩町 7-1）の臨済寺に眠る。

之山忌（しざんき）：

之山とは、木宮泰彦先生の雅号である。学園の創立者である木宮泰彦先生の命日に、先生の遺徳を偲ぶ行事のことを、之山忌と呼ぶ。



人　柄：

木宮泰彦先生は当時の高校教師としては非常に研究熱心であり、小さな研究をコツコツと積み重ねた。それを活かしたユーモラスな授業は、生徒に人気だった。旅に出たり、学校行事へ積極的に参加するなど、魅力がつまった人物だったそう。

[制作] 平成 29 年度常葉大学（静岡）学友会役員・花谷充生（造形学部）、愛宕航希（造形学部）
[監修] 平成 29 年度常葉大学共同研究「『日華文化交流史』とその時代」（代表者：外国語学部講師、若松大祐）
[参考文献]『木宮泰彦：その生涯と業績』（静岡：創立者生誕一〇〇年記念委員会、1992 年）。

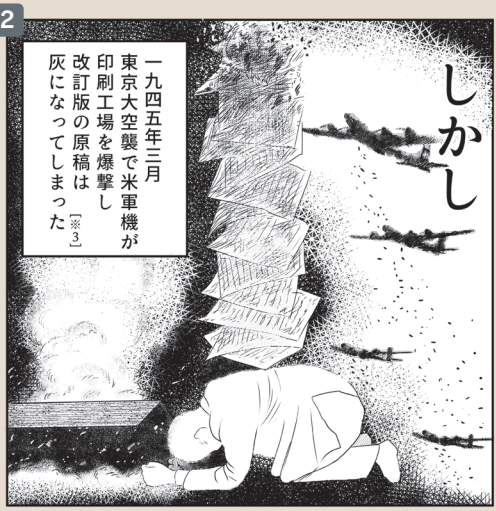
2017（平成29）年 10 月 29 日制作。2020（令和2）年 10 月 29 日改訂。

木宮泰彦の奮闘

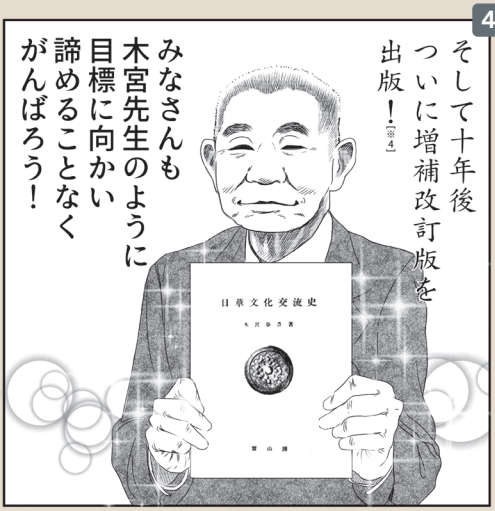
1

3

2



4



ここに登場する『日華文化交流史』は、木宮泰彦先生の代表的な著書である。同書は、古代から近世までの日本と中国の交流を描いたものであり、日中関係史や（日本の）対外関係史という研究分野では、今なお先駆的存在であり続けている。

［作画］中村大太（造形学部）、［構成］花谷充生（造形学部）

［監修］平成 29 年度常葉大学共同研究「『日華文化交流史』とその時代」（若松大祐・外国語学部）

［参考文献］木宮泰彦『日華文化交流史』（東京：冨山房、1955 年）。

2017（平成 29）年 10 月 29 日制作。2021（令和3）年 3 月 8 日改訂。

『日華文化交流史』の版本と翻訳

【原書①】

『日支交通史』
木宮泰彦
〔上下巻〕
（東京：金刺芳流堂 / 1926-27 年）

以下の他にも、中国語訳が出版されているようである。

米軍機に爆撃されて一度消失している。

増補改訂版 →

【原書②】

『日華文化交流史』
木宮泰彦
（東京：冨山房 / 1955 年）

翻訳

『日中文化交流史』
木宮泰彦（著）/ 胡錫年（訳）

（北京：商務印書館 / 1980 年）

翻訳

『中日交通史』 木宮泰彦（著）/ 陳捷（訳）

〔上下巻〕
（上海：商務印書館 / 1931年）

〔王雲五主編「万有文庫」第 2 集漢訳世界名著 / 7 冊〕
（上海：商務印書館 / 1935 年）

翻訳（台湾）

台湾でも出版された。

『中日交通史』 木宮泰彦（著）/ 陳捷（訳）

〔「万有文庫薈要」、台一版〕
（台北：台湾商務印/1965年）

〔台 2 版〕（台北：九思 / 1978 年）

1935 年版と内容は同じ。

〔鄭培凱主編「近代海外漢学名著叢刊」/ 7 冊〕
（太原：山西人民 / 2015 年）

【縮訳】

これは、原書①および日本人による日中交流史に関する 2 冊の合計 3 冊を総合し圧縮し、中国語に訳出したものである。

『中国日本交通史』
王輯五
〔中国文化史叢書 / 第 2 輯〕
（上海：商務印書館 / 1937 年）

翻訳（日本語）

『日支交通史』
王輯五（原著）/ 今井啓一（訳註）
（京都、東京：立命館出版部 / 1941 年）

◆問題点

『日華文化交流史』（1955 年）は、『日支交通史』（1926-27年）の増補改訂版である。したがって中国語訳の最良のものは、胡錫年（訳）『日中文化交流史』（1980 年）であろう。しかし、昨今の出版事情により多くの人が参照しやすい中国語訳は、陳捷（訳）『中日交通史』（1931年など）になっている。

制作者
［作図］武藤陽香（造形学部）
［写真］飯塚美結（造形学部）
［監修］平成 30 年度常葉大学共同研究「『日華文化交流史』とその時代」（代表：若松大祐）

2018（平成30）年 10 月 28 日制作。
2021（令和３）年 3 月 8 日改訂。

『日支交通史』と『日本古印刷文化史』の関係

常葉創立者の木宮泰彦は、日本文化の特徴が何なのかについて研究した。代表作は、『日華文化交流史』（東京：冨山房、1955年）である。同書は旧著『日支交通史』を増補改訂したものである。議論の内容を踏まえると、『日支交通史』は『日本古印刷文化史』と補完関係にあると言えよう。

『日支交通史』

東京：金刺芳流堂 (1926-27 年)

仏僧の往来に即して、古代から近世までの日本と中国の文化交流の歩みを跡付けたもの。

増補改訂版

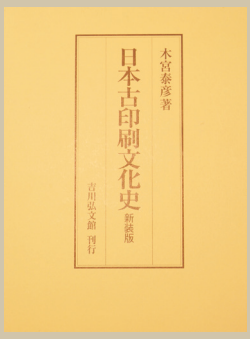
『日華文化交流史』
(1955 年)

補完関係

『日本古印刷文化史』

東京：冨山房 (1932 年)

（中国の影響を受け）日本が自らの文化を形成していく歴史的経緯を、印刷に即して論じたもの。



古代

日本から中国へ僧侶が留学し、中国から日本へ高僧が到来した。遣隋使や遣唐使という官業貿易が始まり、律令（中国法）や仏典が日本へ伝わる。日本では、供養のための経典の奉納が写経から印刷物へ変わっていく。整版（1枚の板に彫って作る印刷版）で印刷した経典が、日本における仏教の伝承や普及と連動した。

近世

日中間での留学僧と高僧の往来は、両国間の官業貿易とともに続く。禅宗の登場により、仏教のみならず、儒学や詩文や医学など広範囲の中国文化が日本へ伝わる。印刷の方法も整版から活字版に変わる。日本ではひらがなやカタカナや日本画が印刷に登場する。仏僧や官吏だけでなく武士や商人も印刷事業に携わり、印刷物をひもとくようになった。

デザイン：原賀美空（造形学部学生）/ 文：若松大祐（2020 年度常葉大学共同研究）
2020 年 10 月 28 日制作。2021（令和 3）年 2 月 28 日改訂。

創辦人木宮泰彥《日華文化交流史》出版始末

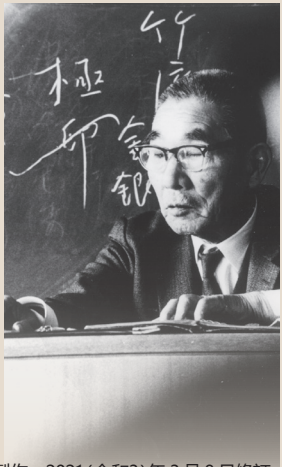
木宮 泰彥（KIMIYA, Yasuhiko，男，1887 ~ 1969 年，享壽 82 歲）	
1887年	生於日本靜岡縣濱名郡入野村（今濱松市西區入野町）西湖山龍雲寺。龍雲寺屬於臨濟宗（係源自中國禪宗五家七宗之一）的妙心寺派。
1913年	畢業於東京帝國大學文科大學（今東京大學文學院）歷史系。
1926-27年	出版《日支交通史》上下卷（東京：金剌芳流堂）[※1]。
1940年	奉日本教育部之命至中國一個月，遍歷江南的寺院 [※2]。
1945年	1 月，在學校教育和日中關係史研究上有貢獻，獲頒日本國勳三等瑞寶章。3 月，東京遭到嚴重轟炸，《日支交通史》增訂版手稿被燒毀 [※3]。8 月，日本戰敗。
1946年	在靜岡市淺間神社北長廊，創辦靜岡女子高等學院。
1948年	設立財團法人常葉學園。1950 年改制為學校法人。
1955年	出版《日華文化交流史》(東京：富山房）[※4]，為《日支交通史》之增訂版。
1966年	創辦常葉女子短期大學（靜岡校區），擔任首任校長。
1969年	10 月 30 日逝世，長眠於靜岡市臨濟寺（葵區大岩町 7-1）。

之山忌：

木宮泰彥，號之山，本校創辦人。每年 10 月 30 日為木宮泰彥先生之忌辰，為緬懷先生遺德，將每年此日訂為「之山忌」。

性　格：

木宮泰彥先生曾任高等學校教師，他與當時一般高等學校教師不同的是，非常熱衷研究，累積研究成果。他在課堂上善用自己的研究成果，授課幽默風趣，受學生歡迎。會旅遊，也樂於參加學校活動，具個人魅力。



[製作] 平成 29 年度常葉大學（靜岡）學生會委員：花谷充生（造形學系），愛宕航希（造形學系）。
[監修] 平成 29 年度常葉大學共同研究「《日華文化交流史》及其時代」（外文學院講師：若松大祐）。
[參考文獻]《木宮泰彥：生涯與成就》（靜岡：創立者誕生一百年記念委員會，1992 年）。

2017(平成29)年 10 月 29 日製作。2021(令和3)年 3 月 8 日修訂。

木宮泰彥的奮鬥

《日華文化交流史》是木宮泰彥先生的代表著作。該書敘述自古代到近世的日本與中國之交流。至今仍是日中關係史和日本對外關係史研究的先驅。

【圖繪】中村大太（造形學系學生）

【製作】花谷充生（造形學系學生）

【監修】平成 29 年度常葉大學共同研究「《日華文化交流史》及其時代」（外文學院講師，若松大祐）

【參考文獻】木宮泰彥《日華文化交流史》（東京：富山房，1955 年）。

2017（平成 29）年 10 月 29 日製作。2021（令和 3）年 3 月 8 日修訂。

《日華文化交流史》版本與翻譯

【原書①】

《日支交通史》
木宮泰彦
〔上下卷〕
（東京：金剌芳流堂 / 1926-27 年）

此外，亦有其他中文版本。

曾遭美軍戰鬥機攻擊燒毀的增訂版手稿。

增補改訂版

【原書②】

《日華文化交流史》
木宮泰彦
（東京：冨山房 / 1955 年）

翻譯

《日中文化交流史》
木宮泰彦（著）/ 胡錫年（譯）

（北京：商務印書館 / 1980 年）

翻譯

《中日交通史》 木宮泰彦（著）/ 陳捷（譯）

〔上下卷〕
（上海：商務印書館 / 1931年）

〔王雲五主編「萬有文庫」第 2 集漢譯世界名著 / 7 冊〕
（上海：商務印書館 / 1935 年）

翻譯（台灣）

也在台灣出版。

《中日交通史》 木宮泰彦（著）/ 陳捷（譯）

〔「萬有文庫薈要」、台一版〕
（台北：台灣商務印/1965年）

〔台 2 版〕（台北：九思 / 1978 年）

與 1935 年版內容相同。

〔鄭培凱主編「近代海外漢學名著叢刊」/ 7 冊〕
（太原：山西人民 / 2015 年）

【縮譯】

該書是由王輯五依原書①和其他日本人撰寫的 2 本中日交流史，共 3 本書的內容，加以綜合，濃縮，譯成中文。

《中國日本交通史》
王輯五
〔中國文化史叢書 / 第 2 輯〕
（上海：商務印書館 / 1937 年）

翻譯（日文）

《日支交通史》
王輯五（原著）/ 今井啓一（譯註）
（京都、東京：立命館出版部 / 1941 年）

◆爭論

《日華文化交流史》(1955 年) 是《日支交通史》(1926-27 年) 的增訂版。最好的中譯版是胡錫年翻譯的《日中文化交流史》(1980 年)。然而，由於出版狀況，最容易參考的中譯版則是陳捷翻譯的《中日交通史》(1931 年等)。

製作者
[圖繪] 武藤陽香（造形學系學生）
[照片] 飯塚美結（造形學系學生）
[監修] 平成 30 年度常葉大學共同研究「《日華文化交流史》及其時代」（代表：若松大祐）

2018 (平成30)年 10 月 28 日製作。
2021 (令和 3)年 3 月 8 日修訂。

《日支交通史》與《日本古印刷文化史》之關聯

常葉創辦人木宮泰彥研究何謂日本文化。代表著作為《日華文化交流史》(東京：富山房，1955 年)。該書是《日支交通史》的增訂版。根據書中討論的內容來看，《日支交通史》與《日本古印刷文化史》亦可說具互補關係。

《日支交通史》

東京：金剌芳流堂 (1926-27 年)。

該書依佛僧的往來，敘述日本與中國自古代至近世的文化交流之進展。

增訂版

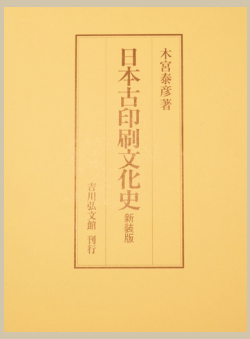
《日華文化交流史》
(1955 年)

互補關係

《日本古印刷文化史》

東京：富山房 (1932 年)。

該書根據印刷，敘述日本受到中國的影響，形成自我文化的歷史進展。



古代

僧侶從日本到中國留學，高僧從中國到日本傳教。遣隋使和遣唐使開始官方貿易，律令（中國法制）和佛典傳到日本。在日本，作為祭祀奉納的經典，從原本的手寫經書轉變為印刷物。整版（以一張木板雕刻而成的印刷版）印刷的經典也帶動日本佛教的傳承與普及。

近世

往來於中日兩國之間的留學僧和高僧，與兩國的官方貿易同時進行。隨著禪宗的出現，不僅是佛教，儒學、詩文、醫學等廣範的中國文化也傳到日本。印刷方法亦由整版印刷轉變為活字版印刷。在日本，印刷品也開始出現平假名、片假名和日本畫。不只是佛僧與官吏，武士與商人也參與印刷事業，閱讀印刷品。

［圖繪］原賀美空（造形學系學生）［監修・文字］若松大祐（2020 年度常葉大學共同研究）
2020（令和 2）年 10 月 28 日製作。2021（令和 3）年 2 月 28 日修訂。

The course of events leading to the publication of *A History of Japan-Sino Cultural Exchange* by the founder of our institution, Yasuhiko KIMIYA

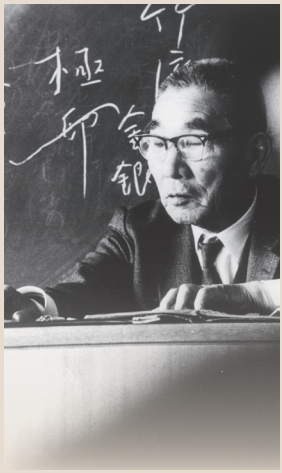
Yasuhiko KIMIYA, Male, 1887-1969 (aged 82).	
1887	Is born in Ryo'un Temple, Irino Village, Hamana Commandery, Shizuoka Prefecture (Presently Irino town, West Ward, Hamamatsu City, Shizuoka). Ryo'un Temple belongs to the Myoshin-ji branch of the Rinzai Zen school, (one of the five Chinese schools of Zen).
1913	Graduates from the Department of History at the College of Letters, Imperial University of Tokyo, Japan (Presently the University of Tokyo).
1926-27	**Publishes *A History of Japan-Sino Exchange***, Volumes 1 and 2 (Tokyo: Kanasashi Horyudo). [*1]
1940	Visits Korea, Manchuria, and China at the request of the Ministry of Education, Japan, and makes a tour of the temples in Jiangnan, China. [*2]
1945	January - In recognition of contributions to school education and also his research of Japan-Sino relations, receives the Order of the Sacred Treasure, Gold Rays with Neck Ribbon, Japan. March - **The original draft of the revised and expanded edition of *A History of Japan-Sino Exchange* is lost to fire in the Tokyo air raids.** [*3] August - Japan loses the war.
1946	Establishes Shizuoka Girls' Senior High School in the northern corridor of Sengen Shrine, Shizuoka City.
1948	The Incorporated Foundation Tokoha Gakuen is approved. Approval granted for reorganization into an incorporated educational institution in 1950.
1955	***A History of Japan-Sino Cultural Exchange*** (Tokyo: Fuzanbo) **is published.** [*4] This book is the revised and expanded edition of The History of Japan-Sino Exchange (1926-1927).
1966	Tokoha Women's Junior College (Shizuoka Campus) opens and Kimiya becomes first president.
1969	Dies on October 30 and is interned at Rinzai Temple (7-1 Oiwa town, Aoi Ward, Shizuoka City).

Shizan-ki

Shizan was the pseudonym of Yasuhiko Kimiya, the founder of the Tokoha educational institution. On the anniversary of his death an event in memory of his virtues is held named Shizan-ki.

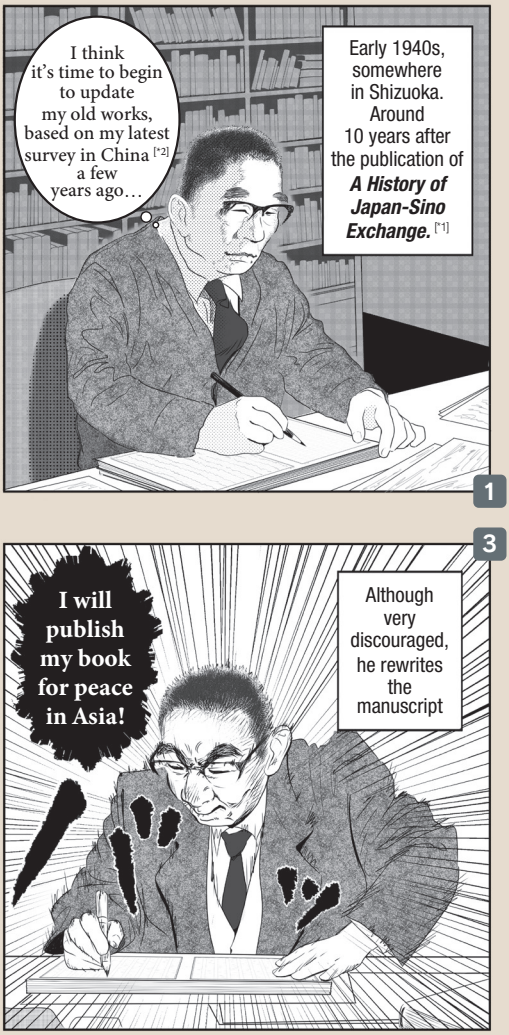
Character

Professor Yasuhiko Kimiya was very enthusiastic about research as a high school professor, and steadily accumulated small amounts of research. As he took advantage of this enthusiasm for his research, his lessons were humorous, and he was a popular professor. He is remembered as a charming person who participated actively in school events.



[Created by] Mitsuo HNATANI (Faculty of Art and Design), an officer of students' association, 2017.
Koki ATAGO (Faculty of Art and Design), an officer of students' association, 2017.
[Authorised by] 2017 Joint Research, Tokoha University, "*A History of Japan-Sino Cultural Exchange* and its Time" (Representative: Daisuke WAKAMATSU, a lecture of Faculty of Foreign Studies).
[References] *Yasuhiko Kimiya : His Life and Achievements*, (third impression) Shizuoka: 100th Anniversary of the Founder Commemorative Committee, 1992. (in Japanese)
Created on the 29th of October 2017. Revised on the 8th of March 2021.

Yasuhiko KIMIYA's Struggles



A History of Japan-Sino Cultural Exchange , that appears in this comic is a book that is representative of Yasuhiko Kimiya's works. The book describes the exchange between Japan and China from ancient times to the early modern era, and still continues to be a pioneering work in the field of research on the history of Japan-Sino relations, and the history of Japanese foreign exchange.

[Artist] Daita NAKAMURA, a student of Faculty of Art and Design.
[Composition] Mitsuo HANATANI, a student of Faculty of Art and Design.
[Authorized by] 2017 Joint Research, Tokoha University, "*A History of Japan-Sino Cultural Exchange* and its Time" (Representative: Daisuke WAKAMATSU, a lecture of Faculty of Foreign Studies).
[References] Yasuhiko Kimiya, *A History of Japan-Sino Cultural Exchange*, Tokyo: Fuzanbo, 1955.

Created on the 29th of October 2017. Revised on the 8th of March 2021.

The different versions and translations of *A History of Japan-Sino Cultural Exchange*

Original document 1

A History of Japan-Sino Exchange
Kimiya Yasuhiko
(Volumes 1 and 2)
Tokyo: Kanasashi Horyudo, 1926-27

It appears that other Chinese translations in addition to the below have also been published

The original draft is destroyed in US military bombing

Expanded and Revised Edition

Translation

A History of Sino-Japan Exchange

Written by Kimiya Yasuhiko Translated by Chen Jie

Volumes 1 and 2
Shanghai: The Commercial Press, 1931

'Wanyou Wenku Series' Edited by Wang Yunwu in 'The 2nd World Famous Authors - Chinese Translations' 7 volumes
Shanghai: The Commercial Press, 1935

Translation (Taiwan)

It was also published in Taiwan

A History of Sino-Japan Exchange

Written by Kimiya Yasuhiko Translated by Chen Jie

Wanyou Wenku Selected Works, Taiwanese 1st edition
Taipei: Taiwan Commercial Press, 1965

(Taiwanese 2nd Edition)
Taipei: Chiussu, 1978

The contents are the same as the original(1935)

Edited by Cheng Pei-Kai 'Series of Classic Oversea Studies on Modern Chinese Culture' 7 volumes
Taiyuan: Shanxi Renmin, 2015

Abbreviation

This is a consolidated and compressed Chinese translation of three works - Kimiya's original document, as well as 2 other works about Japan-Sino exchange history by Japanese authors

A History of Sino-Japan Exchange
Wang Jiwu
Chinese Cultural History Series, Number 2
Shanghai: The Commercial Press, 1937

Translation (Japanese)

A History of Japan-Sino Exchange
Wang Jiwu, Translated by Imai Kei-ichi
Tokyo, Kyoto: Ritsumeikan Press, 1941

Original document 2

A History of Japan-Sino Cultural Exchange
Kimiya Yasuhiko
Tokyo: Fuzanbo, 1955

Translation

A History of Japan-Sino Cultural Exchange

Written by Kimiya Yasuhiko Translated by Hu Xinian

Beijing: The Commercial Press, 1980

Problem

A History of Japan-Sino Cultural Exchange (1955) is the expanded and revised edition of *A History of Japan-Sino Exchange* (1926-27) . The 1980 translation of *A History of Japan-Sino Cultural Exchange* by Hu Xinian is arguably the best Chinese translation. However, recently, the most easiest referenced translation is *A History of Japan-Sino Exchange* by Chen Jie (1931 etc.).

Produced by:
Layout: Muto Haruka
Photos: Iizuka Miyu
Authorized by: 2018 Joint Research, Tokoha University, "*A History of Japan-Sino Cultural Exchange* and its Time", Wakamatsu Daisuke.
Created on the 28th of October 2018.
Revised on the 8th of March 2021.

The relationship between *A History of Japan-Sino Exchange* and *A Cultural History of print in pre-modern Japan*

Yasuhiko KIMIYA, the founder of the Tokoha educational institution, researched the characteristics of Japanese culture. His most important work is *A History of Japan-Sino Cultural Exchange* (Tokyo: Fuzanbo, 1955). This book is the revised and expanded edition of *A History of Japan-Sino Exchange*. According to Kimiya, his two works, *A History of Japan-Sino Exchange*, and *A Cultural History of print in pre-modern Japan* mutually complement each other.

A History of Japan-Sino Exchange, Volumes 1 and 2
(Tokyo: Kanasashi Horyudo, 1926-27).

This book describes Japan-Sino Cultural Exchange from the ancient-era to the pre-modern one, based on Kimiya's research following the coming and going of Sangha (Buddhist monks) between the two countries.

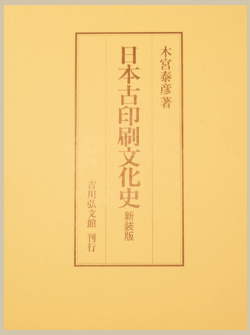
Revised and expanded edition:

A History of Japan-Sino Cultural Exchange (1955).

To be read in conjunction with:

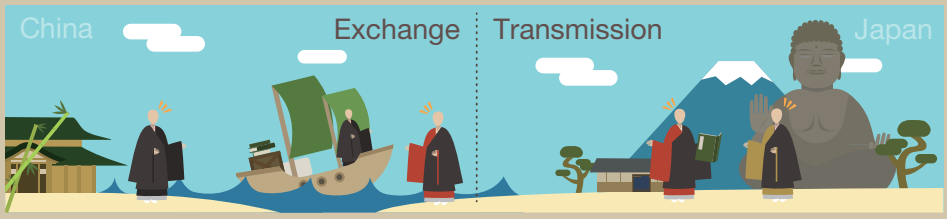
A Cultural History of Print in pre-Modern Japan
(Tokyo: Fuzanbo, 1932).

This book describes the historical process by which Japan formed its own culture under the influence of China through the act of printing, based on Kimiya's research.



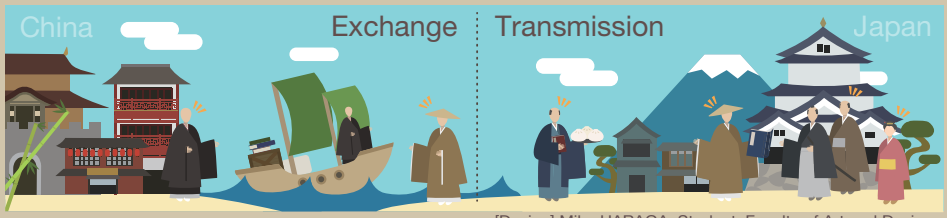
Ancient-era

Japanese Sanghas went to China to study Buddhism and high priests came to Japan from China on missionary work. The Japanese diplomatic missions to the Sui dynasty and Tang dynasty of China start official trade between the two countries. The Chinese law system and Buddhist Scriptures are brought to Japan. In Japan, the way of dedicating Buddhist sutra for memorial services changes gradually from handwritten sutra to printed ones. Buddhist sutra printed on woodblock print (made from one flat piece of wood), is connected with the transmission and spread of Buddhism in Japan.



Early Modern-era

The travelling between Japan and China by Japanese Sanghas studying Buddhism and Chinese high priests continues along with official trade between the two countries. With the advent of Zen Buddhism in China, Chinese culture in general (not only Buddhism but also Confucianism, literature, and medicine) is brought to Japan. Printing methods change from woodblock printing to movable type printing. In Japan, printing methods advance, and Japanese cursive syllabaries called Hiragana and Katakana as well as Japanese-style images appear in print. Many people, not only Sanghas or officials, but also the warrior-class (samurai), townspeople and merchants, start to become involved in the affairs of printing.



[Design] Miku HARAGA, Student, Faculty of Art and Design.
[Text] Daisuke WAKAMATSU, Associate Professor, Faculty of Foreign Studies.
Created on the 28th of October 2020. Revised on the 28th of February 2021.

(6)　より高きを目指して

常葉大学学長　江藤　秀一

学校法人常葉大学の建学の精神は、「より高きを目指して～ Learning for Life ～」であるが、それは本法人創立者木宮泰彦の生き方そのものであったことが、創立者の自伝などをまとめた『八十年の生涯』（１９７０）や折々に記した書き物からうかがわれる。

木宮泰彦は昭和２１（１９４６）年６月８日に静岡女子高等学院を静岡浅間神社北回廊にて開設した。第二次世界大戦後１年も経たないそのころの日本は、進駐軍の支配下にあり、食べるものも着るものも不足していた。『八十年の生涯』に静岡女子高等学院の卒業生が次のように記している。

「長い闇夜が明けて、混乱の中にも、新らしい波が押し寄せて参りました昭和二十一年六月、私共の母校静岡女子高等学院が呱々の声をあげました。荒涼たる焼野と化した静岡市……、アチコチに、ヤミ市が立ち並び、人々は住宅難もさることながら、その日の糧を求めることに必死の形相でありました。」（p.503）

実際に、創立者は静岡では食べ物を容易に得られず、浜松まで食料の買い出しに行った。それでも米を得られなかったようで、芋をたくさん買ってきたとのことである。創立者は、そのような戦後の混沌とした状態から、日本を再び立ち上がらせるには、何よりも教育が重要だと考え、１９４６年に旧制静岡高等学校の教授を辞して、先に述べた静岡女子高等学院を設立したのであった。その設立趣意書には、次のように教育の持つ無尽の力に対する信念が込められている。

「敗戦によって混沌・不安・惨苦のどん底に陥った日本をして再び立ち上らしめ、光輝ある平和な文化新日本を建設する為には、何といっても先づ教育の力に俟たなければなりません。」

先の卒業生によると、「新聞の片隅にホンの小さな募集広告がのり、五十名募集のところ、二百余名の応募があったと伺っております」とのことである。そして、

戦争中、勤労動員で勉強を放棄させられたその卒業生は、喜びを次のように述べている。

「和紙にしみてゆく水のように、私の心の中にしみ透ってゆく知識……、それは何と甘く、何と香わしい、砂漠で飲む清水のようなものでした。私共の若さは、ともすれは「自由」「民主主義」「男女同権」という耳新らしいことばに眩惑されて、方向を見失い勝ちでしたが、先生は平静に真理の神髄を教えて下さったのです。」(p.503)

創立者は歴史学者であり、この一節から、時流に流されることなく真理を探究する研究者としての姿勢がうかがわれる。

静岡女子高等学院を始めた２年後には、現在の６・３・３・４制の学校制度が始まり、創立者は何とか資金繰りをし、１９４８年、静岡市水落の地に常葉中学を開設した。新制の中学校を設立するに当たって、静岡の名産である柑橘類の橘を詠った聖武天皇の「橘は実さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいや常葉の樹」という御製に因み、学校を「常葉」と名付けた。

その３年後の１９５１年には常葉高校を、そして１９６３年には橘高校を開設した。橘高校を設立した２年後の１９６５年、常葉は創立２０周年を迎え、『たちばな』という常葉高校で発行していた雑誌に、創立者は次のように述べている。

「創立二十周年記念式典を挙げるに当たり、つらつら過去を回想すると、大戦直後静岡は一面焼野原と化し物資は著しく不足し、僅かの食糧ですら容易に得られなかった。従って私の学校経営は全く欠乏と苦難の連続だった。これを譬えると前人未踏の高山に分け登るようなものであった。或る時は密林中に迷い込んで、もがき苦しんだこともあり、或る時は渓流に架せられた丸木橋を渡るような危険を冒したこともあり、また或る時は岩壁を撃じ登り、一歩踏みはずせば、千仞の谷底に顛落するようなこともあった。しかし幸いなことには、多くの人々の絶大な支援を蒙って年々歳々生徒は増加し、校地も拡張され、校舎もつぎつぎに増築された。ここで漸く七・八合目までたどり着き、眼界もやや開けて来たかの感がある。遠く望めば紫色にかすむ美しい山々、近く俯瞰すれば麓の静かな村里が見える。家・森・田・畑・川・橋など指呼のうちに眺められる。だが、まだ前方には女子短大設置という高い峰が聳えている。私は齢既に

八十才に垂んとし、日は既に西に傾きつつあるが、もうひと踏張りして頂上を極めねばならない。」

創立者は翌年の１９６６年に高い峰である短期大学と幼稚園を設置し、２０周年時に述べた目的を果たした。

創立者は『八十年の生涯』の中で、八十歳時のことを次のように述べている。

「幸に八十歳の長寿を保つたから、常葉学園を設け、常葉女子短大・常葉橘二高校・同二中学・とこは幼稚園の六つの学校を創立した。厚生省の発表によると現在八十歳のものはなお平均五・二二年の余命があるという。私はもう五・六年生き長らえて、これ等の学校がみな揃って益々栄えるように努めたいと思う。」

これらの想い出の記からも察せられるとおり、創立者は８０歳になっても、さらなる目標をもって常葉の発展に努める決意を述べている。このように、困難にもめげずに努力し続けて目標を達成する強い意志こそが、本学の建学の精神である「より高きを目指して～ Learning for Life ～」の神髄である。

常葉はこれまで７５年の間、教育活動を通して社会に貢献してきた。昨２０２０年３月までの卒業生は総数１５万人を超え、静岡県内の様々なところで活躍し、地域に貢献している。在籍者数は、幼稚園から大学まで約１万２千人を数え、静岡県内最大規模の総合学園となった。ますます教育機関としての責任は重くなる。これから本格的に若年層の人口減少期を迎えることになり、私学経営は冬の時代になると言われるが、どのように厳しい時代になろうとも、私たちは創立者と同様に「教育の力」を信じ、学生の教育と指導に力を尽くし、平和な文化国家を発展させるという使命を果たさなければならない。

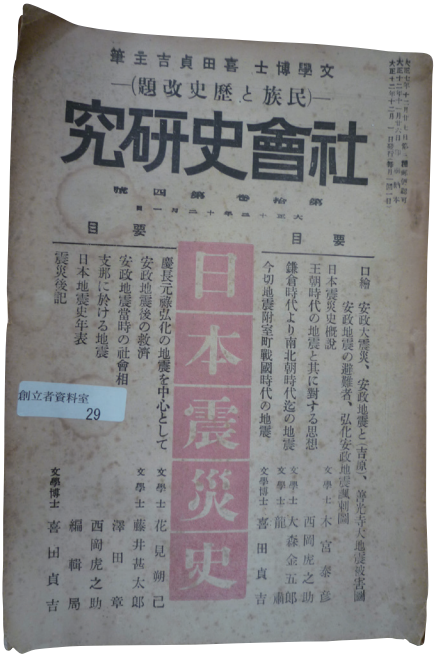
第 2 部
主要論著の概要

(1)　序文の再録と概要の作成

若松　大祐

木宮泰彦の主著である『日本古印刷文化史』、『日華文化交流史』はいずれも大部であり、全てのページをめくるだけでも大変である。そこで、本稿では主著の序文を再録し、概要を掲載した。その際、「日本震災史概説」の概要、『日支交通史』の序文、「静岡女子高等学院設立趣旨」の全文も収録した。『日支交通史』と『日華文化交流史』は中国語にも訳出されたから、訳者による序文も再録している。（ただし、日本語へ訳出する時間的な余裕がなかった。）木宮泰彦の研究内容に関心を持った人は、本稿に収めた序文や概要を読めば、木宮史学に接近できるだろう。

とはいえ、我々共同研究のメンバーは日本史を専門にしていないから、我々の作成した概要には不充分な点も多いだろうし、誤った点もあるにちがいない。それに、概要には作成する人間の好みが表れている。概要を踏み台にして原著を読み進め、木宮史学への理解を深めてほしい。


文學博士　喜田貞吉主筆

—(民族と歴史改題)—

日本震災史

社會史研究

第四部　第拾號

大正十三年十二月一日

目要

目要

口檜　安政大震災、安政地震と寺院、禅宗寺大地震殺害圖

安政地震の遺聚者、弘化安政地震風潮圖　文學士　木宮泰彦

日本震災史概説　文學士　西岡虎之助

王朝時代の地震と其に對する思想

鎌倉時代より南北朝時代迄の地震　文學士　大森金五郎

今切地震附室町戰國時代の地震　文學博士　喜田貞吉

慶長元禄弘化の地震を中心として　文學士　花見朔己

安政地震後の救濟　文學士　藤井甚太郎

安政地震當時の社會相　澤田章

支那に於ける地震　西岡虎之助

日本地震史年表　編輯局

震災後記　文學博士　喜田貞吉

創立者資料室
29

(2)「日本震災史概説」(1923)

木宮泰彦「日本震災史概説」の概要[1]

中野　直樹（編著）

木宮泰彦（1887－1969）の「日本震災史概説」は、喜田貞吉（1871－1939）が主筆する『社会史研究』（『民族と歴史』から改題）第10巻4号に掲載された論文である。書誌情報は下記の通り。

木宮泰彦「日本震災史概説」、『社会史研究』第10巻4号〔日本震災史〕（東京：日本学術普及会、1923年12月）、pp.1－17。
木宮泰彦「日本震災史概説」、奈良県部落解放研究所編集『民族と歴史』〔復刻版〕東京：不二出版、1997年。

『社会史研究』第10巻4号は「日本震災史」と題する特集号であり、本号の冒頭（本文とは別のp.1－2）に「日本震災史に就いて」という主旨説明がある。この主旨説明によれば、このたびの特集は「今年九月一日より三日に亘れる関東地方の大震災」、すなわち1923年の関東大震災をきっかけにして編んだものであるという。地震と火災との併発に注目し（p.1）、復興以上の建設に進むため、日本の先人たちの努力の跡を顧みようと試みたのである（p.2）。木宮の巻頭論文がこの特集の総論に当たり、日本の震災史を概説する。本誌には所収論文7編があり、それぞれが各論となっている。基本的には日本史上の大きな地震をそれぞれ時系列的に扱う。さらに比較の視点から「支那における地震」を載せ、参考資料として「日本地震年表」も収録する。

木宮泰彦「日本震災史概説」は十章に分かれる。内容は大きく、前半と後半に二分でき、前半（一から六まで）は日本史上の地震を概観する。後半（七から十まで）は、関東大震災で生じた問題を克服するために、特に江戸時代の明暦の大火（1657年3月）での政府の対応を紹介する。後半はいわば歴史に基づく政策提言だともいえよう。

[1] 概要は、常葉大学共同研究に基づく読書会における参加者（中野直樹、若松大祐）の作成したレジュメを参照して作成した。

前半では、一で日本には過去千数百回の地震（の記録）のあったことを指摘する。木宮は震災の古名から説明を始め、各名称について典拠を挙げつつ説明している[2]。『日本書紀』や『古事類苑』にも地震の記事があり、これらを総合的に記述することで地震研究に寄与できる可能性を説く。なお、中国地方では地震の記録が少ないことから、木宮は今村明恒（1870－1948）の山陽道帝都説に理解を示す。

二では、天武天皇の時代に起きた地震について『日本書紀』の記述を用いつつ、回数と規模を記述する。

三以降は、各時代における地震の様相について順に説明する。三では、奈良時代を取り上げる[3]。海嘯（津波）と同時に川壅の危険性に触れる。この時代の地震の記述は『続日本紀』と『信越地震記』からが中心である。それらによれば、この時期の震災被害の規模とその発生時期について割りに詳しい記述が得られるようである。聖武天皇が、震災被害から民のために『最勝王経』・『大集経』・『大般若経』を読ましめたことなども記述されている[4]。

四では、平安時代と鎌倉時代の震災被害について規模と発生年が書かれている。平安時代の震災についての主な典拠は、『日本書紀』を除く『六国史』と『日本紀略』、『扶桑略記』である。鎌倉時代の資料としては『吾妻鏡』、種々の私記[5]が挙げられている。章末には、陰陽道の役割と改元のことが述べられる。

五では、室町時代から戦国時代までの震災について規模と発生年月日等が記述される。室町時代の資料は『後法興院記』、『永録年代記』[6]、『足利季世記』、『高代寺日記』、『応仁後記』が注に挙がる。織豊期の資料には、『清正記』、『泰平年表』（東照宮）が挙がる。

---

[2] 今回挙げられた、谷川士清『和訓栞』・新井白石『東雅』・越谷吾山『物類称呼』はいずれも日本語資料として重要だが、いずれもそのまま信用してよい資料ではない（なお、論文本文注１は倭訓栞の誤り）。木宮自身もこういった記述が文献にあるという紹介程度のつもりであろう。なお、『日本国語大辞典』（第二版）には、地震の呼名「なゐ」について、大地という意味が『日本書紀』に見えることと、語源を六つ挙げている。１、ネユリ（根揺）の約転か〔大言海〕。２、ニハワリ（庭破）の反。また、ニハユリ（庭揺）の反〔名語記〕。３、ナリヰ（鳴居）の義〔名言通・和訓栞〕。４、ナイリ（泥犁）の略。ナイリは黄泉の義〔和語私臆鈔〕。５、ナヰフル（地震）の下略。ナは土の義。ヰは場所や物の存在を明らかにする語尾〔日本の言葉＝新村出〕。６、ネヰフル（根居震）の下略〔日本語原学＝林甕臣〕。→「ないふる」の語源説。

[3] 論文本文注４の類字は衍字か。

[4] 仏教受容史上から注目される。

[5] 公家の日記の類か。

[6] 『永禄年代記』の誤り。

六では江戸時代の地震に議論が及ぶ。木宮は安政二年（1855 年）の大地震だけでなく、その予兆として前年からの異常気象にも着目する[7]。資料として『徳川実記』、『事語継志録』、『窓の須佐美』、『続地震雑纂』、『続徳川実記』、『震雷考説』、『泰平年表』（常憲公）が挙がる。近世の資料はかなり記述が詳しかったと見え、震災の発生日時とその規模だけでなく、被災人数や当時の社会状況も記述されている。

後半の七では地震のみならず火災へも着目する必要性を説く。そして関東大震火（関東大震災）と比較すべきものとして、明暦の大火を挙げる。大火直後に生じた食糧問題、江戸復興問題、失業者問題に言及する。江戸における火災の被害の大きさや、供養の様子などを記述する。資料としては『徳川実記』が挙がる。

八は、震災において生じる食糧不足や当時の政治決定など関連問題を論じる。米の支給の在り方などが詳しい。

九は、江戸における復興事業について述べられる。どういった指示が幕府側からなされていたのか、場所や金額など詳細である。

十は最終章となっている。この章では前章に引き続き震災に関連する問題として、失業者問題が取り上げられている。この問題に対する幕府の対応が記述されている。

木宮の「日本震災史概説」が説くのは、地震という観点から見た日本史であり、また日本史における地震である。簡にして要を得た論文であり、わずか 17 ページでありながら、1500 年にわたる日本の地震を概観することができる。

〈関連サイト〉

https://www.timr.or.jp/library/degitalarchives_kantodaishinsai.html

ホーム > 市政専門図書館 > デジタルアーカイブス > 関東大震災に関する資料

https://www.timr.or.jp/degitalarchives_kantodaishinsai/OA-0260/OA-0260_001.html

2-4. 震災誌（体験記・所感を含む）

OA-0260

「日本震災史」（日本学術普及会『社会史研究』第 10 巻 4 号 1923.12）

[7] 安政大地震の発生を前年の異常気象から理解するためには、そもそも地震と異常気象との因果関係の説明が必要になろう。

(3) 『日支交通史』(1926-1927)

木宮泰彦『日支交通史』〔上、下〕東京：金刺芳流堂、一九二六－一九二七年。

序言

過去に於ける支那は、實に我が文化の母國であつた。我が國は支那と交通することによつて、次々に新らしい文化を採り入れて、彼進めば我も亦進み、常に彼に追從して來た。從つて我が文化發展の跡を尋ね、その本質を究めるには、先づ日支交通の沿革を明かにし、文化の移植せられた狀況を察せねばならぬ。然らざれば到底眞實の姿を觀ることは出來ぬであらう。

輓近史學の發達に伴ひ、部分的には日支交通に關する研究の世に公にせられたものが尠くないが、統一的綜合的研究に至つては、甚だ乏しい憾みがある。よしあるも、概ね單なる外交史であり、貿易史であつて、文化移植の狀況を明かにしたものはない。今や我が國人の自國文化に對する研究熱は高まり、益々眞面目に、深刻に、その本質を探究しようとしてゐる。この時に當つて、文化の移植より考察した日支交通史のないのは、甚だしい缺陥といはねばならぬ。著者はこの方面の研究に志すこと多年、自ら蒐集し得たる材料に基き、こゝにこの小著を公にするに至つたけれども、顧みれば學淺く才菲く、その成果の幾もないのに、慚悚の情禁じ難いものがある。けれども著者がこれに關する研究の興味は、滃然として湧くが如く、已めんと欲して已む能はざるものがある。今後益々鋭意努力して、これが完成を期することゝしたい。

大正十五年七月
著者識

凡例

一　本書には外交貿易等に關することも、之を詳說したけれども、特に文化移植の有樣を明かにしようとした。從つて之に直接關係した遣隋・遣唐使を始め、我が留學生や歸化漢人に就いて、特に多くの頁を費した。若し夫れこの小著にして多少の特色あらば、この點であらうと窃に信じてゐる。

一　本書は先輩諸學者の研究に負ふ所が頗る多い。その直接恩惠を蒙つたものは、本文中若しくは各節の終に註記したけれども、なほ脫漏なきを保し難い。こゝに特記して、それ等の人々の學恩を謝したい。

一　本書に於て、部分的にいへば、著者の臆說を試みたものが尠くない。若しそれ等に就いて大方の叱正を得ば幸である。

一　本書の一部分には、曩きに專門雜誌に發表したものもあるが、今回上梓するに當り、多くの補正を加へた。

一　本書の時代區分は、大體支那王朝の變革を基準とした。これは支那に於ける各時代の特色ある文化の移植せられた有樣を明かにしようと考へたからである。

一　本書には、所々に、或る事項に關する概括一覽表を掲げた。これは、もと著者自身の研究の便宜上、作成したものであるが、また多少讀者の檢索に便ならんと信じ、挿入することゝした。

一　本書の年代には、概ね括弧して、西紀年代を記入し、對照上便ならしめた。

一　本書引用の漢文體のものには、もと白文のものもあつたが、一般讀者の便宜の爲めに、著者の意によつて、句讀・返點を施した。

一　本書の卷尾には、附録としてやゝ詳細なる日支交通年表と、重要事項に關する索引とを附して置いた。

一　本書の材料を蒐集するに當り、畏友駒澤大學教授今津洪嶽氏、文學士横田宗直氏、同桑田六郎氏並に水戸彰考館が、貴重なる所藏本借覽の便宜を與へられたに對し、こゝに深厚なる謝意を表したい。

上巻　目次

第一章　原史時代に於ける支那文化の波及
第二章　倭國と漢魏との交通
第三章　日本と支那南朝との交渉
第四章　上古の歸化漢人と文化の移植
第五章　遣隋使
第六章　遣唐使
第七章　遣唐使廢絶後の日唐交通
第八章　遣唐留學生と文化の移植
第九章　歸化唐人・印度人・西域人と文化の移植
第十章　五代に於ける日支交通
第十一章　北宋との交通
附　録　日支交通年表（皇紀一二五三－一七八六、西紀五九三－一一二六）

下巻　目次

第一章　南宋との貿易
第二章　入宋僧・帰化宋僧と文化の移植
第三章　元寇
第四章　元との貿易
第五章　帰化元僧と文化の移植
第六章　入元僧と文化の移植
第七章　征西府と明との交渉
第八章　足利幕府と明との通交貿易（其一）
第九章　足利幕府と明との通交貿易（其二）
第十章　入明僧・来朝明人と文化の移植
第十一章　明末に於ける日支の交通
第十二章　清との貿易
第十三章　来朝並に帰化明清人と文化の移植
附　録　日支交通年表（皇紀一七八七－二四九七、西紀一一二七－一七三七）

木宮泰彦（著）、陳捷（訳）『中日交通史』〔王雲五主編「万有文庫」第二集漢訳世界名著、七冊〕上海：商務印書館、一九三五年。

譯者序

中日之間，自東漢以來，國際之交誼，商舶僧侶之往還，二千年來，交通未絕。中國史籍，多語焉不詳，而日人此類記載則甚多。蓋我國文化所被(,)雖廣，但古代國際交涉則不繁，而日本古文化，則皆取自我國；雙方記述之或詳或略，亦勢使然也。然卽以日本史料而論，古代史籍，只存斷片，近人研究，又多限於一題；其能綜合二千年之史實，作有系統的敘述者，亦惟木宮泰彦之中日交通史，最稱完善。木宮氏蒐集中日古今材料數百種，詳加考證，比事屬辭，都四十萬言，吾人讀之，既可詳悉二千年來中日交通之經過，且關於古代外邦之以朝貢爲名，謀貿易之利，及我國之以羈縻政策，作懷柔手段，皆可一目了然。此書於民國二十年迻譯，倉猝付印，格式未能完善，今已改正。書中所引日人著作，今皆改用原文書名題目，以昭實在而便取閱。

譯者識

序文の中文訳

原序

過去之中國，實我國文化之母也。我國與中國交通，逐漸採取其文化，彼進一步，我亦追踪一步。故欲尋我國文化發展之跡而追究其本質者，必先明日支交通之沿革，方能考察文化移植之狀況。不然，終不能得其眞相也。

晚近因史學之發達，關於日支交通之部分的研究頗多，然統一的綜合的研究則甚鮮；卽有之，亦只外交史，貿易史，而非著明文化移植之經過者。今者我國人對於本國文化之研究，熱度甚高，益欲眞確的深刻的探究其本質，當此時代，若無由文化移植方面考察之日支交通史，憾憾事也。著者有志於此方面之研究者多年，玆根據歷年蒐集之材料，撰爲此書，公之於世。顧才疏學淺，成績無多，不無遺憾；雖然，著者研究之興味，油然未已，今後益加努力，當可達於完成之域也。

大正十五年　　著者識

原序　一

(4) 『日本古印刷文化史』(1932)

木宮泰彦『日本古印刷文化史』冨山房、1932 年、初版。
木宮泰彦『日本古印刷文化史』吉川弘文館、2016 年、新装版。

日本古印刷文化史に題す

本書は專ら印刷開版の上から、我が日本帝國文化の推移、發展、興隆の觀察を試みんとしたるものである。これは如何にもよき思ひ著きである。何物でも自ら語り、且つ傳ふべき歴史をもつてゐる。例へば一個の茶碗にしても、その用は單だ一杓の茶を盛るに過ぎざるも、茶碗そのものに含む所の意義は、極めて深長だ。これに由つて、その一般社會との關係を辿れば、尚更らその輪郭が擴大せられてゆく。況んや印刷開版そのものが、既に文化と極めて緊密なる關係をもつてゐるものなるに於てをや。

× × ×

然も此の如き思ひ著きにしても、それを實行する上に於ては、多大の骨折りを必須とする。特にその著者たらんには、一般の史學と書史學との素養を必須とする。著者は歴史專攻の篤學者にして、曾て『日支交通史』の好著を以て世に知られてゐる。予は著者の今回の著作が、必ず著者の目的を達し、前人未墾の新境地を開拓するもの少く無いであらうと信ずる。

本書は奈良朝に始り、江戸時代に終る。而して更に附録として、古刻書題跋集を添へてゐる。寛政以降我國に於て、吉田篁墩、市野迷庵、松崎慊堂、狩谷掖齋の徒出で來つて、校勘の學大いに行はれ、古書舊刻を單に蒐集するのみならず、これに就いてその由來を詳にし、その淵源を明にし、更に比較研究の業を盛んならしめ、その結果として、幕末には澁江抽齋、森枳園の『經籍訪古志』の如きを見るに至つた。而して明治の昭代に於ては、田中青山伯の『古芸餘香』あり、更に島田翰の『古文舊書考』あり、而して更に清末には楊守敬の『日本訪書志』あり、留眞譜あり。其他その類少からず。大正に入りては、和田雲村の『訪書餘録』の如きも、亦たその一に數ふべきものであらう。

× × ×

然かもこれ等は專ら各個の書籍に就て解題、若くは研究を試みたるものにして、本書の如く終始一貫、脈絡相通じ、一種の文化史を作したるものは、從來その例を見ず。但だ中村博士等の『世界印刷史』あるも、其の局面は世界にして、日本は其

の主なる一部分に止まる。故に日本古印刷文化史は、名實兩ながら著者を其の開拓者と云はねばならぬ。

予は著者が大膽にも、斯る大題目に向つて、その力を傾けたるを賀し、聊か此に敬意を表して置く。但だ此の如き大題目なれば、幾多の遺漏若くは紕謬あるべきは、著者と雖も、自から豫期せねばならぬ所。然も著者が勇往邁進、來者の爲にその新境地を開拓したるの功と勞とは、固より顯彰す可き價値がある。

昭和六年十二月二十一日
東京民友社樓上に於て
蘇峰　迂人

再版に際して

昭和七年二月、私は「日本古印刷文化史」と題する一書を公にした。それから三十余年の歳月は夢のように過ぎ去り、本書のために序文を寄せられた徳富蘇峰先生も、また特に題簽を賜った恩師文学博士三上参次先生も既に世を去られ、私自身もいつしか喜寿を過ぎ、白髪の老翁となった。

初め私がこの書を著そうとしたのは、開版印刷に関する研究は、文化史の一部門として、相当重要な地位を占むべきものと考えたからである。凡そ開版印刷事業の興隆進歩は、文化の普及発展を進め、文化の普及発展は更にまた開版印刷事業の興隆進歩を促し、互に因果関係にある。だから一時代の刊行書の開版の旨趣、内容、及び普及伝播の状況等を仔細に検討し、探究すれば、自らその時代の文化の特質、趨勢、思想の傾向推移、学問の発展興隆等を、ある程度把握することが出来ると思う。

かくて私は自らを揣らず、大胆にも日本古印刷文化史の体系を立てようと考え、昭和の初め五・六年に亙り、公務の余暇ある毎に、東京大学図書館、東京上野図書館、岩崎文庫、静嘉堂文庫、成簀堂文庫、宮内庁図書寮、神宮文庫、久原文庫、東大寺図書館、天理図書館、京都五山以下禅宗の諸大寺を訪ねて、古刻書を閲覧し、資料を蒐集し、刻苦数年、検討整理することに力めた。併し何分にも研究の範囲が余りに広汎に過ぎ、到るところに疑問百出して殆ど収拾するによしなく、筆を投じて長歎息することも数々であった。けれども翻って考えるに、これが完璧を期するには、今後永き年月に亙る調査と、多くの学者の研究を俟たねばならない。寧ろこれを公にして江湖の是正を乞うに如かずと考え、取敢えず梓に上したのがこの書である。故に徳富蘇峰先生も序文に、

本書の如く終始一貫、脈絡相通じ一種の文化史を作したるものは、従来その例

を見ず。

と称揚されたが、また一面には、

予は著者が大胆にも斯る大題目に向って、その力を傾けたるを賀し、聊か此に敬意を表して置く。但だ此の如き大題目なれば幾多の遺漏若くは紕繆あるべきは、著者と雖も、自ら予期せねばならぬ所、然も著者が勇往邁進来者の為に、その新境地を開拓したるのを功と労とは、固より顕彰すべき価値がある。

との御批評を賜ったが、全くその通りである。

本書は、出版してから既に三十余年の歳月を経過し、最早や世間から全く忘れられていたものと思っていたところ、数日前、突如として出版元冨山房から稀覯の書として再版したいとの申出があった。いよいよ再版するとなれば、出来るだけ遺漏を補い、紕繆を正すべきは著者としての責任である。併し、何分にも齢既に八十歳に垂んとし、視力は著しく衰え、細字を読むには一々拡大鏡を必要とする状態にある。のみならず、私は旧制静岡高等学校教授の職を退いてから、学校法人常葉学園理事長として、自ら創立した常葉(トコハ)・橘の両高校、及び併設中学校を経営管理すべき責務があり、また最近に於ける大学生急増対策として、四十一年度から女子短期大学開設の計画もあり、育英事業と学園の経営とに忙しく、静かに書斎に閉じ籠って研究に没頭する時間的余裕がない。よって止むなく旧版のまま再版することとした。希くば読者これを諒とせられよ。

幸に、私には昭和三十年七月に公にした「日華文化交流史」(冨山房発行)と題する一書がある。この書は大正十五年から昭和二年にかけて著した日支交通史上下二巻を公刊してから、折に触れ事に当って修正を加え、新たに研究したところをまとめて集大成したものである。特に昭和十五年、文部省の命により中国に出張する機会を得、往昔宋・元・明に留学した我が禅僧が、好んで掛錫した江南地方の禅院五山・十刹・甲刹などの寺々を巡歴して、彼等が禅を修めたのみならず、さまざまの文化を究め、或いは彼地の文化的所産を齎し、次ぎ次ぎに清新な刺戟を我が国に与え、文化の促進と発展とに貢献した状況を明かにした。従って、この書のうちには、彼地の典籍の将来は勿論、開版印刷、殊に唐様版に関する研究は能う限り詳細に論述している。読者この書をも繙かれ、日本古印刷文化史に欠けたところを補われなば、まことに幸である。

昭和四十年一月三十日

著者識

自序

凡そ印刷の興隆は文化の發展を促し、文化の發展は印刷の興隆を進め、互に因となり果となり、頗る密接な關係にある。從つて一時代の刊行物や、その開版の旨趣を探究すれば、自ら文化の趨勢、思想の傾向を察知し得る場合が多い。特に我が國の如く、印刷術の由來甚だ遠く、泰西にあつては、未だその萠芽だになかつた時代に於て、既に多くの刊本を出し、人文開發に及ぼす所の大であつた國に於ては、これに關する研究は、文化史の 一部門として重要な地位を占むべきものであるといはねばならぬ。然るに從來の研究は、概ね好事家が稀覯刊本の來歴を繹ね、愛書家が古刻書を蒐集して、版式・裝潢を稽ふるに止まり、是等を綜合して體系を整へた研究は甚だ乏しく、文化史の他の部門の研究に比して、頗る寂寥たる感がある。

予嘗て日支交通史と題する一小著を成すに當り、我が中世の文化が宋・元・明の文化に負ふ所甚だ多く、且つこれが移入は、萬里の鯨波を冒して陸續として支那に留學した僧徒の力によることを覺り、彼等の勞苦を憶ひ、轉ゝ深謝の念禁じ難きものがあつた。爾來予は頻りに斷簡零墨を辿つて、是等の留學僧にして、文献にその名の遺存するもの凡そ三百八十餘人の事蹟を探り、更に彼等が齎らした文化の各方面に亘つて研究を試みんと欲し、先づこれが第一着手として、五山版以下唐様系統に屬する諸版本を調査して、彼等が如何なる典籍を將來し、これを覆刻流布して、我が文化の發展に寄與したかを闡明しようと考へた。適ゝ文部省の精神科學研究費の交付を受くる光榮を擔うたから、こゝに公務の餘暇を以て、類りに東西の諸文庫・諸大寺を訪ねて秘籍を搜り、唐様版はもとより、和様版・活字版に至るまで、廣く古刻書を閲覽し、刻苦數年近者やゝ我が印刷文化史の體系を得たものゝ如く感ぜられた。仍つて自ら揣らずこれが敍述を試みるに、疑問續出して、殆ど收拾するによしなく、筆を投じて己が淺學を長嘆したことも數ゝであつた。併し今年一月廿三日、七十八歳の老齡を以て逝去した母が、生前に、うづ高く積まれた本書の材料を眺めながら、老人らしい思ひやりを以て、衷心からその完成を祈られたことを憶ひ、母の慈愛の記念にもと、再び勇を鼓して、漸くにして稿を了へた。稿成つた後、通讀するに、その成果の幾許もないのに慚悚の情禁じ難いものがある。且つなほ自ら意に滿たざる所も尠くない。併しながら若しこれが完璧を期するに於ては、更に幾年を要すべきか測り知ることが出來ぬ。寧ろこれを公にして江湖の是正を乞ふに如かずと信じ、杜撰をも顧みず、こゝに梓に上すことゝした。

本書の成つたのは、恩師文學博士三上參次先生並に靜岡高等學校長堀重里先生の

指導と激勵とに負ふ所が多い。また三上先生は特に本書の爲めに題簽を、德富蘇峰先生は序文を賜ひ、これを以て卷頭を飾ることを得たのは、寔に光榮の至りである。こゝに特記して諸先生に對し、深厚なる謝意を表する所以である。

昭和六年十二月二十三日夜
亡き母の温顏を偲びつゝ
著者識

凡例

一、　本書は奈良時代の印刷創始期から、江戸時代の活字版興隆期に至る上下凡そ八百五十餘年間の印刷文化を系統的に敍述したものである。

一、　本書に於て、著者自ら幾多の臆說を試みたが、また先進諸學者の調査研究に據る所が尠くない。その直接恩惠を蒙ったものは、本文中、若しくは各節の終に註記したけれども、なほ遺漏なきを保し難い。それ等の諸學者に對し、甚深なる敬意を表すると共に、謹んでその學恩を感謝する。

一、　本書に於ては、古刻書の寸法・廓界の有無・行數・字數等形式的方面の記述は、特に必要を認めざる限り、概ね省略した。また本書に引用・拔萃した古刻書題跋の配字も原本に從はなかつたものが多い。蓋し是等のことは、印刷文化史としては、寧ろ末梢的の事柄に屬し、且つ悉く正確に記載することは、殆ど不可能であるからである。

一、　本書の年代には、概ね括弧して、西紀年代を記入し、對照上便ならしめた。

一、　本書の附錄古刻書題跋集は、もと著者自らが研究の便宜上編纂したものであるが、後の研究者にとっても、必ずや重要なる文獻となるべきことを想ひ、煩を厭はず、悉く附載することゝした。

一、　本書の索引は、殊更に本書に記載した古刻書のみの索引とした。かくすれば一面日本古刻書總目録とも見らるべく、古刻書檢索上利便が少くないと信じたからである。

一、　本書の材料は、東にあつては、東京帝國大學史料編纂所・宮内省圖書寮・岩崎文庫・靜嘉堂文庫・成簣堂文庫・足利學校遺蹟圖書館、西にあつては京都帝國大學附屬圖書館・久原文庫・東大寺圖書館・神宮文庫を始め、京都・奈良の諸大寺に於て蒐集したものである。以上の諸文庫・諸大寺が無名の一學究に對し、貴重な藏本の閲覽・撮影を許され、多大な便宜を與へられたに對し、深厚なる謝意を表す。

木宮泰彦『日本古印刷文化史』の概要

中野　直樹（編著）

はじめに

本学創立者である木宮泰彦の『日本古印刷文化史』（以下、本書という）は、木宮之彦（1985）や『国史大辞典』などで、『日華文化交流史』と共に代表作として挙げられており、木宮泰彦の著作の中でも多方面から参照されてきた著書である。

本書は昭和七年（1932）に、冨山房より刊行された[1]。昭和四十年（1965）に再版が[2]、昭和五十年（1975）に三版が出ており[3]、平成二十七年（2015）には、新装版が吉川弘文館から刊行された（新装版は三版を用いている[4]）。これに伴ない、今後本書の再評価も行われることと思われる。本稿では本書の概要を示した上で、本書に関連することなども若干見ていきたい[5]。

また、本稿では新装版を用いることとする。以下の構成などはこれによる（本文中の表記などはすべて通行のものにした）。

一、各篇各章の構成

本書の構成を篇章ごとに示しておく。

序文
再版序

---

[1] 著者は本書以外にも、『おもしろい日本歴史の話』・『日華文化交流史』・『参考日本通史』・『参考新日本史』・『日本喫茶史』・『日支文化交渉一覧図と年表』を同社から出版している（木宮（1985））。また、本書は文部省の精神科学奨励金の助成を受けている（木宮（1932）・海野（1970））。本書がこの助成金を受けていることは、本書の出版に関して見逃せない点であるので指摘しておく。駒込・川村・奈須編（2011）、および文部科学省 HP「二　帝国学士院と学術研究会議」を参照のこと。なお、著者の戦時下における思想については、海野（1970）、木宮・小田（1987）・濱川（2019・2020）から窺うことができる。
[2] 再版に際して本文に変更は加えなかった旨、著者による序文にある。
[3] 再版・三版いずれも冨山房より刊行。
[4] 新装版は三版の覆刻であるが、三版の奥付は付されていない。
[5]『日本古印刷文化史』の概要は、常葉大学共同研究に基づく読書会における参加者（中野直樹、濱川栄、若松大祐）の作成したレジュメおよび中野（2020）をもとに作成した。

自序
凡例
目次
第一篇　奈良時代（印刷創始期）
　第一章　奈良時代の開版
　第二章　我が印刷術は独創か
第二篇　平安時代（印刷興隆期）
　第一章　平安時代の開版
　第二章　支那版本の輸入
第三篇　鎌倉時代（和様版隆盛期）
　第一章　奈良版
　第二章　高野版
　第三章　京洛版
　第四章　入宋僧と典籍の将来
　第五章　京都に於ける唐様版
　第六章　鎌倉に於ける唐様版
第四篇　南北朝時代（唐様版隆盛期）
　第一章　入元僧と典籍の将来
　第二章　京都禅院の開版
　第三章　地方禅院の開版
　第四章　元の彫工と開版
　第五章　武人の開版
　第六章　和様版の衰勢
第五篇　室町時代（印刷衰微期）
　第一章　入明僧と典籍の将来
　第二章　唐様版の衰頽
　第三章　和様版の衰微
第六篇　江戸時代（活字版興隆期）
　第一章　活字版の伝来
　第二章　勅版と官版
　第三章　私版
附録古刻書題跋集

日本古刻索引
解説

このように、奈良時代から江戸時代までの日本における印刷の歴史が時代順に示されており、印刷史が通観できるようになっている。また、地方版・私版にも記述が及んでおり、印刷史が幅広く押さえられている。本文頁総数は七一七である。

二、各篇各章の概要

内容は全部で六篇の構成となっている。その内容を以下序文から、凡例・目次を除いて順に概観していきたい。

（〇）序文

本書の本文は徳富蘇峰による序文（「日本古印刷文化史に題す」）から始まる[6]。ここで徳富は印刷についての歴史を辿ることの意義を強調する（「本書は専ら印刷開版の上から、我が日本帝国文化の推移、発展、興隆の観察を試みんとしたるものである。」（p.1））。また、これまで通史として日本の印刷史を完成させた本として例を見ないとして著者木宮を賞している（「本書の如く終始一貫、脈絡相通じ、一種の文化史を作したるものは従来その例を見ず。（中略）故に日本古印刷文化史は名実兩ながら著者を其の開拓者と云わねばならぬ。」（p.3））。

徳富の序文に続いて、再版について著者の序文がある。ここでは、本書を執筆した経緯が説明されている。また、冨山房より再版の申し出があったが、初版を直すことができなかった旨、記述されている。また、著者の『日華文化交流史』にも印刷関係の記述があるので、併せて読むよう要請する。

再版序の次に初版序が存する。印刷の歴史を考究する意義について述べており、文化史という大きな枠組みの一部門として印刷史が重要な位置を占めるとする。印刷史の研究は、従来個別的な検討にとどまっていたところ、著者は国内外の典籍を見、不十分ながらその歴史を体系化したと述べる。

初版序の最後には、著者の母校である東京帝国大学の指導教官三上参次と、当時の著者の勤務先であった旧制静岡高校校長堀重里から指導・激励があり、また、三上からは題簽を徳富からは序文をもらったことが書かれている。

[6] 著者と徳富との関係については後述する。

(一) 第一篇　奈良時代(印刷創始期)

第一篇「奈良時代(印刷創始期)」は、
第一章「奈良時代の開版」、
第二章「我が印刷術は独創か」、
から成る。本篇では奈良時代の印刷から記述されている。第一章では、本邦における印刷の起こりから説く。それは、『無垢浄光陀羅尼』所謂「百万塔陀羅尼」からとされるが、『日本霊異記』には、それより二十年早くに印刷が行われた可能性のある記述が見えるとする。実際のところは、『日本霊異記』に見える記述から考えると、印刷という段階には至っていなかったのではないかと著者は判断する[7]。

『無垢浄光陀羅尼』については、『続日本紀』・『東大寺要録』その他の記述を引用し、これの由来等を確認する。その他、塔基への書き込みや塔基の寸法、陀羅尼の書写者など詳しい。他に、この時代は、唐制の影響の濃い時代であることから、百万塔造立事業もこれに倣った可能性を指摘する。

また、『無垢浄光陀羅尼』の原版については従来から活字版説・木版説・銅版説があるが、諸説の長短を検討し、『無垢浄光陀羅尼』本文の字体および、当時銅印が鋳造されていた事実から、著者は銅版説をとっている[8]。

続く第二章では、本邦で広まった印刷術が独創によるものかどうかということが検討される。その際にまず唐土での印刷の起源を考察する。説としては、六朝起源説・隋唐起源説があるが、敦煌文書の刊記および、文書本文の印刷の程度から著者は唐初とみている。

結局、本邦の印刷術については、遣唐使を通して唐土から輸入した可能性を示唆する(「支那に於て開版せられた版本も含まれてゐたであらう」(p.48)・「支那版本が博多に来航した支那商船によって輸入せられたであらう」「支那に渡った僧侶によって將來せられた版本も少なくなかった。」(p.51))。遣唐使が唐土から齎した書籍の中に刊本があったことについては請来目録から確かめられる。

(二) 第二篇　平安時代(印刷興隆期)

第二篇「平安時代(印刷興隆期)」は、
第一章「平安時代の開版」、

[7]『日本霊異記』には、犯罪懺悔文の印刷についての記述がある。本文には「楷摸」とあり、これについて著者は摺衣の要領に近いものとみなし、印刷と考えるのに躊躇するとある。
[8] 概説書などでは今も木版説と銅版説とで記述が分かれている。藤井(1991)・川瀬(2001)など参照。

第二章「支那版本の輸入」、
から成る。資料上からは、神護景雲四年（770）から平安中期まで刊記のはっきりした資料はないものの、所謂伝教版その他があることについて触れている。但し、筆者はそれらが平安期に確かに刊行されたものであるかどうか疑わしいとする。

奥書の古いものとして、石山寺蔵『仏説六字神呪王経』・個人蔵『法華経』（巻第二）があがっているが、刊記の最も古いものとして、聖語蔵『成唯識論』が挙げられる（後述）。この本の刊記には、寛治二年（1088）とある（本文には影印が載せられている）。

平安初期においては、天台宗と真言宗が隆盛した時期であるが、それまで印刷に関しては中断していたと著者は結論する。要するに、中国からの商船が輸入した版本や中国へ留学した僧侶が（帰国に伴い）将来した版本が、長らく中断していた日本の「開版事業に幾多の刺戟を與へ、京都にあつては、摺供養に伴ふ天台經典の開版となり、奈良にあつては、春日明神の信仰につれて、法相典籍の印刻となつて現はれたもの」ということになるのである（p.59）。

次に、摺供養と当該期の開版事業について述べられる。平安中期以降においては、経典の装飾以外に数量でも信仰心を示したことが知られる（川瀬（2001））。著者はこの点に注目し、公家の日記等に見える摺経の巻数を表にしてまとめている。この表を見ると、当該期において様々な経典が印刷されていたことが分かる。しかも、この表には施主のほか、摺供養の目的、記述の典拠も挙げられており、当時の摺経の規模も分かる。

この時期の開版事業として見逃せないのは春日版であるが、鎌倉時代にも引き続き行われる。著者は、春日版という名称の新しさや、春日版が指す範囲に幅があることに注意し、刊行時期や刊記にあまり拘らず、興福寺ならびに春日社で開版され、一定の版式を有するものは春日版としてよいとし、定義を広くとる。

春日版の中で最古のものとしては、先ほど述べた寛治二年の『成唯識論』を挙げている。春日版は刊記が刷られないことが多いが、識語の類は存在しておりこれを『寧楽刊経史』から引用列挙する。

続く第二章では、まず唐土からの本の輸入について述べられる。五代から北宋にかけて、唐土では刊行される書籍の種類の増加や地方における刊行事業の増加など、開版事業の活発化したことが述べられる。

続いて、本邦における唐土からの書籍の輸入のことに触れる。この時代において、唐土から商船が来朝しており様々な品がやり取りされたわけであるが、著者はこの

中に唐土から刊本が入っていた可能性が高いことを指摘する。他に、同時期の蔵書家たちは宋版を有していたことにも触れる。また、唐土からの刊本の輸入は唐土からの商船からだけでなく、本邦の僧が大陸へ行き持ち帰ったものもあるとする。この辺りの事情は著者の『日支交通史』(のち、『日華文化交流史』)に詳しく述べられている。

(三)第三篇　鎌倉時代(和様版隆盛期)

第三篇「鎌倉時代(和様版興隆期)」は、
第一章「奈良版」、
第二章「高野版」、
第三章「京洛版」、
第四章「入宋僧と典籍の将来」、
第五章「京都に於ける唐様版」、
第六章「鎌倉に於ける唐様版」、
から成る。本書において和様版とは、唐様版(後述)とは異なる版式を有しており、本邦で刊行されたもののことを指している。

和様版として取り上げられるのは、奈良版・高野版・京洛版である。ここにいう奈良版とは、前代に興った春日版をはじめ、奈良で開版されたもののことを指しており、当該期において奈良の大寺院(興福寺・春日社・東大寺・西大寺・唐招提寺・法隆寺)において、各々の寺院で重視される典籍を中心に、特色ある刊行がなされたことを指摘する(「春日版の隆昌は、やがて南都の諸大寺を刺戟して、東大寺・西大寺・唐招提寺・法隆寺等をして、夫々開版事情に手を染めしむることゝなつた」(p.61))。

この中には、東大寺における印刷においては宋版の覆刻があること、西大寺においては書風が唐様を帯びていることなど重要な指摘がある。

次に高野版についてであるが、その名の通り高野山で開版されたものを指している。高野版は奈良版よりも開版時期が遅く、鎌倉中期以降とされ、版式等から奈良版の影響が濃いとする。本文中には、高野版の目録の本文が載せられており高野山と関係が深い密教経典が並ぶ。

高野版の開版事業に貢献したのは快賢という僧であった。そのあとを継ぐ安達泰盛と慶賢の名も挙がる。

和様版の最後は京洛版、すなわち京都において開版されたものを指す。この項目

では叡山版から記述される。鎌倉時代において、京都の貴族社会においては摺供養があり、天台宗の経典が多用されたとし、天台宗系の経典が開版されることは当然であるが、叡山版と明確に言いうるものは少ないという。

京都東寺等に蔵される叡山版の刊記について、著者の調査によれば最も古いもので弘安二年（1279）があり、最も新しいもので永仁四年（1296）となっており、足かけ十八年の事業であったことを指摘している。また、叡山版は奈良版・高野版と違い、版下が様々な人によって書かれている点が特異であると指摘する。

京洛版のうち、浄土教関連のものは奈良版・高野版と版式は同じ系統にあるものの、開版の時期は奈良版に次いで高野版に先んずるとする。当該の系統にある書名を列挙し、浄土教関連の典籍においては、刊記において版木の所在を全く明記しないなど独自の点があることにも触れられており、その理由として叡山からの圧力から逃れる為かなどとする論は興味深い。

第三篇第四章以下は、唐土からの典籍の輸入についての記述となっている（「日宋間を來往する商船が頻繁となるにつれ、我が僧侶の彼地に渡るもの多く、彼等は歸朝に際して多くの版本を齎し、これを覆刻摸刻するに至つた」（p.128））。ここから所謂唐様版の記述となる。この時期においては様々な目的をもって日宋間で人の行き来があった。本項においてはそれを踏まえる形で、本邦に輸入された諸版宋版一切経等について述べられている。

まず、宋版一切経について重源を例にしてどれほどの規模で輸入したものかなどの記述が見える。宋版一切経は開宝勅版をはじめ、系統が複雑なものを整理しており、各所に所蔵されている宋版一切経がどの版に属しているのかの情報もあって、詳細な記述となっている。

ここまでの記述は仏書中心であったが、第三篇第四章三節以降、禅籍・漢籍をはじめ、仏書以外の印刷について述べられる[9]。唐代以降五代･北宋を経て唐土では禅が盛んになっており、本邦でもその影響を受けるに至った。ここでは入宋僧が、仏書以外にも様々な典籍を二千巻以上の規模で輸入していたことを史料から指摘する（「佛教の経論章疏はいふまでもなく、禪籍・儒書・詩文集・醫書等を將来したことも少くなかつた。」（p.146））。章末には、『普門院経論章疏語録儒書等目録』の翻刻が載せられており、当時の禅僧が仏書以外にどのような本を所蔵していたのかが分かる。

[9] 鎌倉中期以前の本邦における印刷はそもそも仏書に偏っているので（川瀬（2001））、このようになるのは当然と言える。

最後の第五章では、本邦における唐様版の開版について、その先陣を切った京都泉涌寺版から述べられる。鎌倉時代には入宋する僧が多く、それらの僧の本拠地であった泉涌寺において、唐土の影響を受けた開版が行われたことを指摘する。

また、唐様版という名称についても説明される。この時期には所謂五山版があるが、著者は五山とその系統にある禅寺において開版されたものを限定して五山版とし、その他の宋・元・明版の覆刻またそれに倣ったものをも含め総括して唐様版と定義する。このように著者が定義するのは、先行研究が従来使ってきた五山版という概念では包括しにくい版本が存在するためである（その例として、博多版・大内版・薩摩版・駿河版が本文中に挙がる）。

禅僧と開版事業については、宗旨により経典類よりも高僧の語録や僧伝、詩文、韻書等が多く刊行されたことを確認する。また、宋代において禅宗と宋学との関係が深く、それを受けて本邦でも儒書の刊行があったことも指摘する。

東福寺普門院には印版屋一宇（著者は版木を収蔵した倉庫か印刷所であるかとする）があったことを指摘し、寺院内部にそういった施設があることの重要性を説く。

本篇の最後は鎌倉に於ける唐様版の開版について述べられる。日宋間の交流が深まるにつれ、唐土から来朝する僧が増加した。鎌倉に来た蘭渓道隆をはじめ、道隆に勧誘された兀菴普寧などが続く。その行き来の間に、様々な文化的交流があり開版事業もその一つであったとし、鎌倉に於いても語録等が開版され、宋から来朝した僧による跋文があることから、これらの開版において宋僧による指導があったことを推測する（「宋の文化は彼等によつて續々移入せられ、我が文化の各方面に亙って甚大な影響を及ぼすことゝなつた。中にも從來南北兩京並に野山の外にその例を見なかつた開版事業が、彼等によつて新に鎌倉にも興つた」(p.197)）。

また、入宋の際に本邦の禅籍を唐土で開版し、版木を持ち帰るということもあったことが記述されている。

（四）第四篇　南北朝時代（唐様版隆盛期）

第四篇「南北朝時代（唐様版隆盛期）」は、

第一章「入元僧と典籍の将来」、

第二章「京都禅院の開版」、

第三章「地方禅院の開版」、

第四章「元の雕工と開版」、

第五章「武人の開版」、

第六章「和様版の衰勢」、
から成る。

ここでは南北朝時代の印刷について、印刷と禅宗との関わりが述べられる[10]。この時期は主に日元間での貿易により、本邦には元版大蔵経や語録をはじめ種々の典籍が齎されたことを指摘し、それらの輸入は本邦での開版事業を刺激したとする。

この時期の出版に関して中心となった人物として春屋妙葩が挙げられている。また、天龍寺・建仁寺・南禅寺・東福寺等禅宗にとって中心的な寺院で各寺院に関係が深い人物による開版事業について述べられる。建仁寺版には武家の楠木正儀・佐々木氏頼から開版に際して援助があったことなど、禅僧と武家の関係を知る上で重要な指摘がある。

以上は当該期における京都での開版についてであったが、鎌倉など地方禅院における開版についても述べられている。禅僧たちは中央と地方の往来が頻繁であり、それに伴って印刷事業も地方へ伝播していったとする。

第四篇第四章では、彫工と開版の関わりが指摘される。本書において、彫工が重点的に取り上げられるのはこの章が初めてである。著者は五山版ほかの隆盛をみたのは禅宗が多方面からの帰依を得たことのほか、兪良甫はじめ優秀な彫工が多数唐土から渡来していたことを挙げている（「元の優秀なる雕工が相次いで、我が国に渡來し、我が開版事業に盡した」（p.258）・「唐様版の黄金時代は實に彼等の努力によって、現出されたものといつても過言ではあるまい。」（p.259））。

本邦において、営利目的の出版が成立したのは近世初期のこととされるが、南北朝期にその先駆けとなる動きがあったことを著者は指摘する。これ以前は、出版が有力者からの施財あるいは、広く助縁によりなされていたが、それらに依存しない出版の形式が始まりつつあったわけである。元代に刊行された典籍の刊記には某書院・某書堂とあり、すでに営利目的の出版があったことが知られるが、本邦でもそれに倣う形で、唐土から渡来した彫工が需要のありそうな書目を刊行し、生活の資としたとする。これには、兪良甫が刊行した書目がいずれも当時歓迎された書に偏っていることが傍証として挙げられる。

ほかに、義堂周信の『空華日工集』にも営利出版をする者についての記述がみえることが報告されており、書肆の存在は未だ無いものの、出版により利益を得るも

[10] 筆者は著者の未発表原稿「唐様版の研究」を常葉大学瀬名キャンパスにある歴史資料館で発見した。また、本人の自伝には五山版の研究を熱心に行っていた旨あるので、ここは特に力を入れて書いたものと思われる。未発表原稿「唐様版の研究」については、稿を改めて考察したい。

のが存在していたことが分かる。

このように、出版業態が多様化していった様子が分かるが、質の面でも様々であり、周信編集の『貞和集』をもとにした、某氏刊『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』の出来の悪さに驚いた周信が、改めて『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』を出版するなど、版権の観点などから見て重要なエピソードとなっている。

第四章末には、この時期のものと思われる唐様版の中で、刊記を欠いており出版事情が詳らかでないものの書目が列挙されており、どういったものが当該期に出版されていたのか、傾向が若干窺える。

続く第五章は、武家による開版について述べられる。武家による開版は、鎌倉時代の高野版における密教経典から始まり、南北朝期も引き続き行われた。この時期の資料として高師直の『首楞厳義疏注経』、足利尊氏の『大般若波羅蜜多経』が挙がる。

豊後の大友貞宗などは『法華経』二千部を印刷させたとの記述が『義堂和尚語録』に見え、大部の印刷も行っていたことが分かり、武家による印刷事業の勢いが窺える（但し、この二千部の所在は不明とのこと）。

南北朝期において、異彩を放つ印刷物として儒書が挙げられており、正平版『論語』について考察が行われる。正平版『論語』には三種の版本があるが（単跋本・二跋本・無跋本）、その刊行順については諸説ある。本文中では、島田翰が『古文旧書考』で、刊記を削った版木があることと、二跋本にしかない文が、正平年間よりも前に刊行された元亨版古文尚書他にもあることから、出版の順番は二、単、無であろうと推察したことを紹介し、著者もそれに従う。

第四篇最後の六章では、和様版の衰退について述べられる。南北朝期は著者によれば、唐様版の全盛期であった。とはいえ、和様版のなかでも春日版は南北朝期の版木が興福寺に残存していることから当該期に至ってもよく摺られたことが言われる（但し、この期の版本の残りはよくないとする）。

本文中には春日版『法華経』が挙げられ、刊記および『興福寺年代記』から、約百年の間に同じ願主によって十五度の開版があったことが知られる（同じ願主が百年以上生きることは考えにくいので、願主の意思を周囲の人が継いだものとみられる）。こういった、開版のありかたなども印刷史上見逃せない。

（五）第五篇　室町時代（印刷衰微期）

第五篇「室町時代（印刷衰微期）」は、

第一章「入明僧と典籍の将来」、
第二章「唐様版の衰頽」、
第三章「和様版の衰微」、
から成る。この時期に行われた日明貿易における諸品の中には、数多くの書籍がふくまれていたことを指摘し、輸入された典籍により諸学が刺激され、開版事業の発達を促したと推測する。

この時期に輸入されたのは明版であるが、高麗版の輸入もあった（「朝鮮との交通が頻繁となり、麗版大藏經を輸入する」（p.325））。特に、高麗版の輸入は南北朝以後室町期になってからのことというのは重要な指摘である。

応仁の乱後は、京都での開版事業も振るわなくなり、地方での事業が目立ってくる。それとともに、刊行される書目は禅籍よりも儒書・字書の類が増加するとし、政治の変遷が開版にも影響を与えることを指摘する。

また、この期において寺院以外で唐様版の開版事業が大いに展開したことが述べられる。このことは、五山が独占していた学問が外に解放されつつあった出来事として著者は注目している。

唐様版が全体として衰退傾向にある中で、京洛版を除いて和様版も同じく衰退の傾向を見せる。とはいえ、前代に引き続き春日版は『大般若経』を中心にして、開版が変わらず続けられたことを、興福寺に蔵せられている版木の刊記から指摘する。また、版木の一部が失われた時には、版木が追加された例も挙げる。

京洛版においては、浄土教に関する典籍の刊行が盛んであった。著者は、この期における浄土教の発展を反映したものと考える。他に、東寺での開版にも触れられる。

和様版の中には、書体が唐様版と似たように見えるものがあり、その刊記は五山とのつながりを示すので、唐様版からの影響があった可能性を指摘する。

この時期の京洛版においては、前代に引き続き平仮名交じりの典籍が刊行されており（『三部仮名抄』）、さらに振り仮名付きの典籍（『正信偈三帖和讃』）の出版も行われるなど、浄土教関係者による教化の努力の跡を見、文化普及の観点から注目される。

（六）第六篇　江戸時代（活字版興隆期）

第六篇「江戸時代（活字版興隆期）」は、
第一章「活字版の伝来」、

第二章「勅版と官版」、
第三章「私版」、
から成る。応仁の乱後は目立った開版は無かったものの、秀吉が一旦は全国統一を果たし、その後江戸時代に入ると、開版は再び発展した。この期に、朝鮮半島経由で活字が伝えられたことは印刷史上大きな出来事である[11]。

本篇においては、北宋に膠泥活字があったこと、その後は元代まで活字が振るわず、明代以降に再び活字が用いられだしたことを諸史料から示す。清代においても同様であり、勅版にも活字が用いられた。ただその活字は、武英殿にあったものの盗難により年々その数を減らし、発覚を恐れた臣に帝が唆され鋳つぶしたという。当時に於ける活字の扱いについての重要な記述である。

朝鮮の活字については、李氏朝鮮における状況を諸史料の跋文によって示している。このころ朝鮮で刊行された典籍が本邦にも残存していること、朝鮮版には銅活字以外に、鉄活字や陶活字があったことなども指摘される。

以上のように、東アジアの印刷文化を概説したうえで、本邦の印刷の状況を見ていく。本邦に活字が伝来したのは室町期であり、朝鮮出兵に関する戦利品によって、また宣教師によって齎されたということである。それ以前に活字が伝わらなかった理由として、入明僧が外交上諸事に忙しく、活字に目を付けられなかった可能性などを説いている。

本邦への活字技術の伝来については、後陽成天皇勅版の『勧学文』・『錦繡緞』の跋文等を引き、当時から活字は朝鮮から来たものという認識があったことを示している。印刷に関する意識が窺え、貴重な記述である。

次に、所謂キリシタン版についてであるが、ヴァリニャーノが日本に西洋式活字印刷機を持ち込んだことが述べられる。但し、西洋の活字版が本邦の印刷史に及ぼした影響が少ないということで、記述は甚だ簡単である[12]。

本篇では、勅版・官版・私版について詳しく述べられる。室町後期には勅版として後陽成天皇に係る『日本書紀』・四書等の刊行があったことが指摘される。また、後水尾天皇に係る勅版としては、『皇宋事宝類苑』が挙げられる。

官版としては、伏見版・駿府版が挙げられる。伏見版として『孔子家語』が挙げ

[11] 活字が朝鮮半島から伝えられたかについては諸説あるが、今本文の通りにしておく。
[12] キリシタン版の研究は『日葡辞書』の新出本の発見など、近年目覚ましい発展を遂げている。ここでは、関連書として『日本語活字印刷史』・『キリシタンと出版』の二書をまず挙げておきたい。Web 上でも、大英図書館蔵天草版『平家物語』・同『伊曽保物語』・同『金句集』が国立国語研究所によりカラーで公開されている。

られ、これの刊行に先立って勅版が盛んに刊行されていたので、その刺激によるものかとする。『孔子家語』のほか、伏見版の書目が列挙される。

駿府版としては、『大蔵一覧集』・『群書治要』が挙げられる。この二書については林道春と金地院崇伝が刊行に大きく関わっていることを諸史料から指摘する。特に『群書治要』刊行に際しては法度が定められ、勤務時間の制定や知人の見物の禁止など当時の事情が窺われ興味深い。

次に私版であるが、その先駆けとして文禄五年（1596）版『補註蒙求』・慶長二年（1597）版易林本『節用集』が挙げられる[13]。他に、饅頭屋本『節用集』について、その著者について考察する。

この時代においては、天台宗・日蓮宗の寺院において開版された典籍があったことに触れ、特に京都の要法寺版（直江版）の開版場所・開版者について『羅山文集』や『右文故事』から説明する[14]。

次に、要法寺以外の京都における諸寺の私版についてであるが、大光山本国寺や比叡山延暦寺、真言宗では清和院における開版など、少なくなかったことが指摘される。

また、活字版の大蔵経の企画があったことも重要である。この企画は伊勢常明寺の聖乗坊宗存という僧のものであったが、どこまで事業が進んだものか不明となっている。

このほか、奈良や高野山でも活字版による印刷事業が行われたことが指摘される。奈良における活字版の刊行は振るわなかったらしく、現存する典籍もわずかであることが言われる。一方の高野山においては、活字版が活発に刊行されたとし、主に密教関係の書目が列挙される。なお、当時の活字が高野山西禅院に収蔵されているとのことであり、活字の扱いについての重要な記述となっている[15]。

最後は嵯峨本について述べられる。ここではまず、慶長から元和にかけて平仮名・片仮名を交えた文学関係の刊行が盛んになったことが指摘される[16]。その中でも嵯

[13] 易林については本文中でも先行研究が紹介されるが、森末（1936）「易林本節用集改訂者易林に就いて」『国語と国文学』（13 - 9）・北（1975）「易林と夢梅」『国語学』（103）に詳しい。
[14] 本書の要法寺版の記述については新村出の「要法寺版の研究」（『典籍叢談』所収）に基づくところが多い旨、本文にて断られている。
[15] 本書の四一七頁には、後水尾天皇勅版の活字が加茂の祭の出鉾の下のおもりとして使われたという伝承が紹介されている。この伝承の信ぴょう性はともかく、活字の扱いにも様々あったものと想像される。
[16] 鈴木広光「制約から見えてくるもの―嵯峨本のタイポグラフィ」（『文字のデザイン・書体のフシギ』所収）に、嵯峨本の組版や文字遣い等について興味深い考察がある。

峨本は良質の料紙や挿絵の優美さなど装幀の豪華さで知られる。嵯峨本は定義によって認定される書目に違いがあるが、世に嵯峨本と言われている典籍を『辨疑書目録』等から列挙する。

和田維四郎「嵯峨本考」からも書目の引用があり、版下を誰が書いたのかということとその装幀から、嵯峨本を「光悦本」・「嵯峨本」・「嵯峨本類似書」・「嵯峨本でないもの」に分ける見方を紹介する。著者は和田の見方を全面的には支持せず、書風・装幀・出版時期から嵯峨本を定義すべきとの立場を取る。

また、従来は嵯峨本の殆どが整版であると考えられていたものの、実際は活字版が多いことを注意している。

(七) 附録

附録は、古刻書題跋集(全五百八十八文)と索引である。題跋集については、本文の注にも参照指示がありこれを見合わせることにより、刊行の経緯等がよく分かるので印刷史をより幅広くとらえることができる[17]。

三、本書に関連して

本書は、著者が旧制静岡高校に赴任直後に東京へ内地留学をした際に集めた資料により完成したものである。著者はこの機を利用して東西の文庫を訪ねている(木宮・小田(1987))。本書は書誌的事項や刊行に関わる事績について様々な典籍を縦横に利用し実証しており、本書凡例にもある通り様々な本を実見することができたこの機会を活かした記述となっている。

本書の標題は先を述べたように三上参次、序文は徳富蘇峰による。三上は、著者の東京帝国大学国史科時代の指導教官である。徳富と著者とは、昭和六年に著者が本書の執筆をしていたころ、有坂忠平に紹介され関係が始まった(旧制静岡高校時代の教え子に有坂弘という学生がおり、その父忠平は徳富蘇峰と親交があった。著者は忠平の紹介で成簀堂文庫所蔵の貴重書の閲覧をしたり、徳富来静の際に講演依頼をしたりするなど、浅からぬ縁があった(木宮(1937)、木宮・小田(同))。

さて、本書の序文で蘇峰は本書のカバーする範囲を評価する一方で、書誌等の誤

[17] 奥書・識語類を集成乃至注釈したものに、『上代写経識語注釈』・『点本書目』・「加点識語集覧」(『平安時代の仏書に基づく漢文訓読史の研究』(8)所収)などがある。これらは写経に関するものが中心であるが、本書に集成された印刷に関する刊記と合わせて見ていくことで、それぞれの世界の特徴が浮かび上がってくるものと期待される。

りについて指摘している。これは、すぐあとに述べるように、長澤によっても注意があるところである。

本書の初版が出版されてから今年で八十八年が経っており、再版されたときに本文に手を加えていないこともあって、書誌の誤り以外にそもそも記述が部分的に古くなっている[18]。学界からの本書についての評価については、木宮（1985）に詳しく纏められている。例えば、長澤規矩也の『和漢書の印刷とその歴史』にある重要参考文献の一覧にも本書が挙げられている。そこには、印刷を文化史としてとらえた見方を評価する一方で、書誌学的記述の誤りが指摘される[19]。

また、当時にあっては今より引用に関しておおらかであったのであろうが、先行研究の引用の仕方に今の目から見て危うさがある。例えば、本書三〇一頁から三〇四頁にかけて、島田翰の『古文舊書考』が引用されている。しかし、この箇所を『古文舊書考』と実際に比較したところ、著者の記述なのか島田の記述なのか、かなり判断しにくい書き方がされている（一応典拠は書かれているが、先行説と自説との境界が分からない）。本書の記述を著者の説であると思って引用すると、思わぬ形でプライオリティを侵害する虞があるので気を付けたい[20]。

もう一点付け加えておく。本書は、木宮（1985）によれば、木宮泰彦の著書『日支交通史』の副産物であるという（本書の注にもしばしば『日支交通史』の某頁を参照せよとある）。このように、本書は中国との関わりを重点的に書いたものであるから、所謂キリシタン版に関する記述が非常に乏しいというのは、仕方がないことかもしれない。ただ、折角奈良時代から江戸時代までの印刷の歴史を海外との関わりを含めて押さえられている本書であるだけに、キリシタン版のことなどももう少し盛り込まれていたならばと思うのである。

本書の紹介には西本（1932）と吉田（1932）がある。今回の新装版の末に付された上田純一[21]による解説（上田（2015））は、日中その他の交流をふまえた印刷史が本書において展開されている点を強調する。

---

[18] 例えば、宋版一切経の所蔵先など、現在は本書の記述より多くの場所が見つかっている。

[19] 本書に列挙される書名などに疑問点は確かにあった。例えば、本書九五頁『秘密寶鑰』は、『秘蔵寶鑰』の誤植ともとれるが、著者の見た本の外題或いは内題がこうだった、若しくは、引用元の書籍がこのように書いていた可能性もあり軽々に判断できない。

[20] 島田翰の書誌記述にも気を付けなければならないことは広く知られているが、本書三〇三頁にも「島田氏はまゝ虚構の説をなして居るから遽に信用し難い。」という記述があり、当時の島田への認識の一端を窺わしめる。島田については、杜・王（2014）に事績が解説されている。

[21] 上田純一（1950－）熊本県熊本市出身。京都府立大学文学部卒業、九州大学大学院文学研究科単位取得退学。九州大学文学博士。九州大学文学部助手、京都府立大学文学部歴史学科教授。2016 年定年退職、現在は同大学特任教授。

(4)『日本古印刷文化史』(1932)

また、木宮の著作の中には「禅と印刷」という論文があるが（木宮（1941））、これは本書の中で中世の印刷に関係する箇所を摘記したものである（木宮（1985））[22]。

以上、本書の内容およびその周辺のことなどをごく簡単に整理してきた。本書は先学が指摘する通り、内容に若干の修正が必要なところもあるが、印刷史として時代順に記述が並んでおり読みやすく、本邦における印刷の歴史の流れがよく分かる。単に印刷関連の記述や書誌情報を列挙するのではなく、なぜそのような印刷が行われたのか、なぜそのような版式となったのかなど、歴史的背景が踏まえられた記述が随所に見える。これには著者の専門分野の知識が動員されており、大変面白く読める。

本書二八〇頁には、南北朝期に印刷された『大般若経』の刊記についての記述があるが、『日本古刻書史』が刊記を摘記・入れ替えし、足利義詮と如春が印刷させたかのような記述になっていることを指摘し（実際は刊記に続きがあり、足利基氏が印刷させたものと考えられる）、刊記全文を載せていることなど、著者が可能な限り原本に当たっているからこそできる仕事である。刊記や奥書を載せる研究書は他にいくつもあるが、摘記の可能性が拭えず、引用には不安を覚えることがしばしばある。原文にできるだけ忠実にあろうとする著者の姿勢を支持したい。

以上、本書に記述された内容をすべて取り上げることはできなかったが、本書に関わる点をいくつか述べた。新装版が今後ますます多くの人に読まれることを希望する。

［参考文献］

上田純一（2015）「解説」木宮泰彦著『日本古印刷文化史　新装版』吉川弘文館

海野泰男（1970）「年譜」福原龍蔵代表編集『八十年の生涯　木宮泰彦自伝と追憶』八十年の生涯木宮泰彦自伝と追憶刊行会

川瀬一馬（2001）『書誌学入門』雄松堂出版

木宮栄彦・小田久夫（1987）『木宮泰彦　その生涯と業績』創立者生誕一〇〇年記念委員会

木宮泰彦（1932：初版）『日本古印刷文化史』冨山房

――――（1937）「思ひ出の数々」有坂弘編『有坂忠平』有坂弘

[22] 筆者が本書と比較したところ、木宮（1985）の指摘通り、本書に合わせて新規の記述は行われなかったと見られる。但し、若干の誤植訂正が行われている。例えば、本書二六二頁に「元宋」とあるが、この論文では「元末」に直されている。

――――（1941）「禅と印刷」『禅』（２）雄山閣
――――（1965：再版）『日本古印刷文化史』冨山房
――――（1975：三版）『日本古印刷文化史』冨山房
――――（2015：新装版）『日本古印刷文化史』吉川弘文館
木宮之彦（1985）『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』静岡谷島屋
駒込武・川村肇・奈須恵子編（2011）『戦時下学問の統制と動員』東京大学出版会
中野直樹（2020）「〈書評〉木宮泰彦著『日本古印刷文化史』（新装版）」『常葉国文』（35）常葉大学短期大学部日本語日本文学会
長澤規矩也（1952）『和漢書の印刷とその歴史』吉川弘文館
西本（1932）「〈書評〉日本古印刷文化史」『龍谷史壇』（10）龍谷大学
濱川栄（2019）「木宮泰彦と皇国史観―主として『日華文化交流史』に拠る―」『常葉初等教育研究』（４）常葉大学教育学部初等教育課程
――――（2020）「『日華文化交流史』に見る歴史学者・木宮泰彦の姿：『日華文化交流史』とその時代（１）」『常葉大学外国語学部紀要』（36）常葉大学外国語学部
藤井隆（1991）『日本古典書誌学総説』和泉書院
吉田（1932）「〈紹介〉日本古印刷文化史」『史林』（17－２）史学研究会
杜澤遜・王晓娟点校（2014）島田翰著『古文舊書考』上海古籍出版社（日蔵中国古籍書志）

(5) 『日華文化交流史』(1955)

木宮泰彦『日華文化交流史』東京：冨山房、1955 年。

序

過去凡そ千八百年の永きに亙り、日華兩國間には絶えず文化の交流が行はれた。我が國は上代から朝鮮半島を經由し、或いは直接に中國と交通して、次ぎ次ぎに新文化を攝取し、これを咀嚼し、醇化することによって、我が固有の文化を培ひ、特異優秀な國風文化を創造して來た。さうして時にはこれを中國に致して、その文化の發展をも促した。ゆえに日華兩國の文化發展の跡を討ね、その本質を究めるには、先づ兩國交通の沿革を明かにし、文化交流の情勢を察せねばならない。これ予が淺學菲才をも省みず、大正十五年から昭和二年にかけて、『日支交通史』上下二卷を公にした所以である。この書は交通史とはいへ、單なる外交史や貿易史ではなく、寧ろ文化の交流に重點を置いたものであった。さうしてその頃にはこの種の著述に乏しく、殊に日華文化の關係に就いて、終始一貫體系を整へた研究が全くなかったからであらう。いたく世の歡迎を受け、廣く購讀されたのみならず、昭和六年には中國の陳捷氏が本書を飜譯し、『中日交通史』と題して、上海商務印書館から出版し、次いで同十年には、同書館の普及版叢書である『萬有文庫』中にも入れられ、さらに翌十一年には、王輯五氏が本書を簡約して、『中國日本交通史』を公刊するなど、中國學徒にも益－廣く愛讀され、日華兩國民の融和親善にも多少の貢獻をなしたことは、著者の私かに喜びに堪へないところであった。

併しこの書はもともと取扱った事柄が多方面に亙ってゐたから、刻苦數年大いに力めたとはいへ、なほ史料の蒐集檢討の至らなかった點もあり、從って多少の遺漏若しくは紕繆のあることは免れ難いところであった。故にこの書が益－普及愛讀されるにしたがって、著者としての責任の重大なことを痛感し、慚悚の情禁じ難いものがあった。適―文部省から精神科學奬勵金を受けたのを機會に、數年に亙り宮内廳圖書寮・東京大學史料編纂所・岩崎文庫・京都大學圖書館・久原文庫・足利學校・神宮文庫・京都五山の寺々の書庫等を訪ねて、斷簡零墨を探り、これが更訂を試みたが、一方公私の業務は日と共に繁多を加えるのみで、容易に進捗せず、筆を投じて嗟嘆したことも數―であった。

昭和十五年の夏、文部省の命により中國に出張することとなり、先づ朝鮮・滿洲を經て中国に入り、往昔我が入宋僧・入元僧・入明僧等が好んで掛錫した江南地方

の禪院五山・十刹・甲刹などの寺々を巡歴して、その遺跡を探る好機會を得た。これ等の僧徒にして今日まで史籍に名を留めるものは四五百人の多數に上るであろうが、いづれも交通不便な時代に、萬里の鯨波を冒して彼地に渡り、佛敎はもとより儒學・詩文學・醫學・書道・茶道・繪畫・建築・造庭・印刷など、さまざまの文化を究めて歸り、或いは彼地の文化的所產を齎して、次ぎ次ぎに淸新な刺戟を與へ、我が文化の促進と發展とに貢獻した。故にそれ等の事蹟を徹底的に調査研究することは、日華兩國の文化の淵源・本質・發展を探る上に、極めて緊要であるばかりでなく、兩國の親善友好關係を促進する上にも等閑に附すべからざる事柄である。よって中國に出張したのを機會に、これ等に關する資料を蒐集し、再び勇を鼓して舊著の更訂に專心し、昭和十八年に至り漸く稿を了へた。これを舊著に比べると、特に文化交流の研究に於て、前人未墾の新境地を開拓したところもあり、紙幅に於ても約三分の一を增加し、內容體裁ともに全く更新されたかの感があったので、更めて『日華文化交流史』と題し、梓に上すこととした。併し當時は太平洋戰爭の最も酷な時で、戰局は日に日に苛烈深刻を極め、出版事業の如きは頗る困難な狀態にあったに拘らず、冨山房主の多大な好意と努力とにより逐次隘路を打開しつつ進め、二年餘を經過した昭和二十年三月に至り、將に公刊されようとした。時に偶―東京大空襲あり、不幸にも印刷所は燒かれ、原稿も資料も一夜にして悉く灰燼に歸して了った。これが爲め一時は失望落膽して、爲すところを知らない有樣であったが、更に勇を鼓し、公務の餘暇ある每に、筐底の資料を順次整理し、滿十年の後漸くこの一書を完成した。

この間に第二次世界大戰は終結し、その後に於ける世界の形成は著しく變化し、中國はソ聯を盟主とする共產圈に入り、我が國とは戰後十年を經ても、未だ國交の調整すら成らない狀態にあり、兩國民はそれぞれイデオロギーを異にし、政治・經濟に於ても、學問・敎育に於ても互に相容れないものがある。併し何といっても東亞の中樞をなすものは日華兩國である。兩國の國交が調整され、善隣の友好が達成されない限り、東洋に於ける永遠の平和は、到底期待し得られないであらう。讀者若し本書を味讀することによって、千八九百年の永きに亙る兩國の文化の交流、親善の關係を討ね、所謂同甘共苦の眞諦を悟らば、著者の最も幸とするところである。

昭和三十年三月

著者　識

〈現代語訳〉
木宮泰彦『日華文化交流史』東京：冨山房、1955年。

序

過去およそ1800年の長い時間に渡って、日華[23]両国の間には絶えることなく文化の交流が行われています。我が国は、大昔[24]から朝鮮半島を経由して、もしくは、直接、中国と交通[25]して、次々と新文化を取り込み、良く噛みくだいて、必要なものを採り入れ、不要なものを取り除くことによって、我が国固有の文化を培い、独特で優秀な国風文化を創ってきました。そして時には、これを中国にもたらして、中国文化の発展をも促しました。したがって、日華両国の文化の発展の軌跡を詳しく調べて、その本質を知るためには、まず両国の交通の移り変わりを明らかにして、文化交流の情勢を測り知らなければならないのです。これこそは私が勉強不足であるにもかかわらず、大正15年から昭和2年にかけて『日支交通史』[26]上下巻を出版した理由です。この本は交通史とは言っても、ただの外交史や貿易史ではありません。どちらかといえば、文化の交流に重点を置いたものでした。その頃は、このような種類の本や論文が少なく、特に日華文化の関係について、その始めから終わりまでを一貫した体系で整えた研究が全くなかったのでしょう。そのため、世間から非常に歓迎を受けて、広く購読されました。それだけにはとどまらず、昭和6年には中国の陳捷氏が本書を翻訳し、『中日交通史』[27]というタイトルで上海商務印書館から出版します。続いて昭和10年には、同じ商務印書館の普及版シリーズである「万有文庫」[28]の中にも入ります。さらに昭和11年には、王輯五氏が本書を短くまとめて、『中国日本交通史』[29]を出版します。このように、中国の研究者にもますます広く愛読され、日華両国民の融和[30]や親善にも多少の貢献をしたことは、著者の私がひそかに喜んでいたところでした。

しかし、この本はもともと取り扱った事柄が多方面に渡っていました。そのため、

---

[23] 日本と中国。
[24] 原文では「上代」。飛鳥時代と奈良時代。
[25] 人や物の行きかい。ここでは、交流と読み替えるのが適切である。
[26] 木宮泰彦『日支交通史』〔上下巻〕(東京：金刺芳流堂、1926－1927年)。
[27] 木宮泰彦(著)、陳捷(訳)『中日交通史』(上海：商務印書館、1931年5月)。
[28] 商務印書館の王雲五が主宰したシリーズであり、日本でいえば岩波文庫や中公文庫などに相当する。
[29] 王輯五著『中国日本交通史』(上海：商務印書館、1937年)。
[30] 打ち解けて、親しくなること。

数年間大いにがんばったとは言っても、依然として、史料の収集や検討が足りなかった点もあります。したがって、多少の書き漏らしや間違いのあることは、避けられませんでした。そこで、この書がますます普及して愛読されるに伴い、著者としての責任の重大さを痛感し、心やましい思いをせざるを得ませんでした。ちょうど文部省[31]から精神科学奨励金[32]を受けたことをきっかけとして、数年にわたり宮内庁図書寮・東京大学史料編纂所・岩崎文庫[33]・京都大学図書館・久原文庫[34]・足利学校[35]・神宮文庫[36]・京都五山[37]の寺々の書庫などを訪ね、書物の断片を探り、自身の本の書き直しを試みます。しかし、その一方で公的にも私的にも仕事が日を重ねるごとに忙しくなっていくばかりで、本の書き直しは簡単には進まず、投げ出して嘆くこともありました。

昭和15年の夏、文部省の命令で中国に出張することになります。まず朝鮮・満州を経由して中国に入りました。次に、昔、我が日本の入宋僧・入元僧・入明僧[38]たちが好んで、滞在し修行した江南地方の禅院五山[39]・十刹[40]・甲刹[41]などの寺々をまわって、その遺跡を調査するチャンスを得ました。かつての僧徒のうち、現在まで史籍[42]に名を残しているものは400、500人にのぼるでしょう。どの僧もみな、交通が不便な時代にとてつもなく長く続く悪路を乗り越えて中国へ渡り、仏教はもちろんのこと、儒学、詩文学、医学、書道、茶道、絵画、建築、造庭、印刷などの様々

---

[31] 文部科学省の再編以前の名称。

[32] 日本及び東洋の精神文化に関する研究を奨励するための資金。文部科学省ホームページ（https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318252.htm）より。

[33] 三菱第三代当主の岩崎久彌が収集した、奈良朝以後の古写本・古刊本、中国の宋・元・明・清の時代の古く、保存状態のよい写本や版本、朝鮮本などの資料。東洋文庫ホームページ（http://www.toyo-bunko.or.jp/library3/shozou/iwasaki.html）より。

[34] 実業家の久原房之助が収集した、国書・漢籍・仏書・古文書・芸術などの幅広い分野にわたる資料。五島美術館ホームページ（https://www.gotoh-museum.or.jp/collection/）より。

[35] 下野国足利荘、現在の栃木県足利市にある。日本で最も古い学校として知られ、その遺跡は大正10年に国の史跡に指定されている。史跡足利学校ホームページ（https://www.city.ashikaga.tochigi.jp/site/ashikagagakko/）より。

[36] 神道学最大の宝庫として知られる。日本の文化や伝統の調査、研究に欠くことのできない貴重な神道、文学、歴史などの和書を永久に保存することを目的としている。伊勢神宮ホームページ（https://www.isejingu.or.jp/about/cultural/）より。

[37] 京都における臨済宗の五大寺。

[38] 入宋とは日本の僧が宋へ行くこと。つまり、入宋僧は日本から宋に入国した僧のこと。入元僧、入明僧もそれぞれ元、明に行った日本の僧のこと。

[39] 禅の臨済宗において最高の格式をもつ５つの寺院。

[40] 臨済宗で、五山に次ぐ寺格の10の寺院。

[41] 五山、十刹に次ぐ寺格の称。

[42] 歴史書。

な文化をよく理解して、日本へ持ち帰りました。あるいは、中国で文化的に生み出されたものを日本へもたらし、次々に新しい刺激を与えて、我が日本の文化の促進と発展に貢献しました。したがって、そうした事実を徹底的に調査して研究することは、日華両国の文化の根源・本質・発展を知る上で非常に重要なのです。それだけではなく、両国の親善友好な関係を促進するためにも、放っておくわけにはいかない事柄なのです。そのため、私は中国へ出張したのを機会に、関連する資料を収集し、再び勇気を奮い起こして自身の本の誤りを修正したり内容を更新したり、集中して執筆作業を行いました。そして、昭和18年になってようやく書き終えます。この新しい本を元々の本と比べると、特に文化交流の研究において、今まで誰もたどりついていないところを開拓したこともあって、紙幅は3分の1ほど増え、内容と体裁も全て更新したように感じました。そこで、改めて『日華文化交流史』と題して、出版することにします。しかし、当時は、太平洋戦争の最も酷い時期で、戦局は日を増すごとに苛烈で深刻になっていき、出版事業のようなことは、非常に困難な状態でした。そうであったのに、冨山房の店主の多大な好意と努力により、順々に狭く険しい道を切り開きながら、前に進めました。2年余りが経過した昭和20年3月になり、まさに出版されようとしました。ちょうど偶然にも東京大空襲があり、不幸にして印刷所は焼かれてしまい、原稿も資料も一夜にしてことごとく灰となってしまったのです。そのため、一時は失望して落ち込み、どうすればよいかわからないほどの有様でした。しかし、もう一度勇気を奮い起こし、公務の暇があるたびに、資料ケースの底などになんとか残っていた資料を順次整理し、ちょうど10年後にようやくこの本を完成させました。

この間に、第二次世界大戦は終結し、その後の世界の形成は著しく変化します。中国はソ連を盟主とする共産圏に入ります[43]。中国は、我が国とは戦後10年が経っても、未だ国交の調整すらできていない状態です[44]。両国民はそれぞれ違うイデオロギー(世界観、人間観、価値観)を持ち、政治や経済においても、学問や教育においてもお互いに合いません。しかし、何といっても東アジアの中心を担うのは、日華両国です。両国の国交が調整され、隣り合う国としての友好が達成されない限り、東洋における永遠の平和は到底期待できないでしょう。読者がもしこの本をじっ

[43] 共産主義や社会主義の政党が統治する国家を、共産圏と総称した。ソビエト社会主義共和国連邦(ソ連、現在のロシア)は、共産圏の盟主(中心的な存在)であった。

[44] 日本国と中華人民共和国が日中共同声明を発表して国交を結ぶのは、1972年9月である。木宮が『日華文化交流史』を出版するために「序」を書いた1955年には、日本と中華人民共和国との間に国交はなかった。そして、木宮泰彦の存命中に日中国交正常化は実現しなかった。

くり読むことによって、1800、1900 年の長きに渡る両国の文化交流や友好関係を確認し、両国が苦楽を共にしてきたという真相をしっかり理解するならば、それは著者が最もうれしいことなのです。

昭和三十年三月
著者　識

〈現代語に訳出するあたって〉

- 主に小柳直人が現代語に訳出し、吉松愛結が訳注を付した。
- 中高生が読める文章表現にした。
- なるべく逐語訳を行うよう心がけた。
- 原文の一文は長いところが多々あった。そこで分割して句点を打ち、前後を接続詞でつないだ場合がある。
- 単語の意味を調べるに際し、『明鏡国語辞典』を使った。また、寺院の総称についてはコトバンク（https://kotobank.jp/）を使い、固有名詞（〇〇学校や〇〇文庫など）については、それぞれの公式サイトを使った。

木宮泰彦『日華文化交流史』東京：冨山房、1965 年、再版。

再版に際して

我が史学界の傾向を観るに、一般に国史研究者の視野は、あまりに国内に限られ、大陸の政変や文化の動向には殆ど無関心のようである。

これは国史研究の著しい欠陥であろう。いうまでもなく我が国は、アジヤ大陸とは海を隔て、東方に偏在する島国である。併し海は国と国とを隔離するが、また国と国とを結びつけるもので、遠距離の交通は、海によればこそ容易に行われる場合が多い。だから、原史時代に於てすら既に大陸の影響を蒙っていたことは、考古学の証明するところである。歴史時代に入ってから、大陸に於ける幾多の政変や文化の動向は、多少時代のずれはあっても、次ぎ次ぎに我が国に波及し、影響を及ぼしている。大陸との交通が殆ど杜絶した時代、我が国独特の、いわゆる国風文化が起ったといっても、仔細に検討すれば、これも既に前代に摂取し、受容したものを、咀嚼し、醇化したに過ぎないことが多い。だから国史の研究には視野を広くし、常に大陸の政変を考え、文化の動向を察しなくては、正しく理解することは困難であろう。私が浅学菲才もを省みず、夙に主として日中文化関係を明かにした「日支交通史」上下二巻を公にしたのは、これが為めである。

次いで、私は各時代に亙り、中国へ留学した我が僧侶、特に宋・元・明に留学した多数の禅僧が、帰国の際多くの典籍を将来し、これを覆刻して、我が国の文化の普及に力めたことを知り、これをまとめて「日本古印刷文化史」一巻を刊行した。

次に、さきに公にした日支交通史は幸に世に歓迎購読されたが、何分にも遺漏や誤謬が多く、著者としての責任を痛感し、折に触れて更訂を加え、殊に昭和十五年夏、中国に遊歴したのを機会に彼地で蒐集した資料をも加え、将に梓に上そうとした。然るに二十年三月東京大空襲によって、印刷所は焼かれ、原稿も資料も一夜にして灰燼に帰して了った。併しなお筐底に残っていた資料を整理して、三十年三月「日華文化交流史」と題して公にした。それから十年後、最近冨山房から稀覯の書として「日本古印刷文化史」と並んで、この書をも再版したいとの申出があり、著者としては更に訂正すべきであるが、時間的余裕もないので、旧版のまま再版した。希くば読者これを諒とせられよ。

昭和四十年四月

著者　識

木宫泰彦（著）、胡錫年（译）《日中文化交流史》北京：商務印書館，一九八〇年。

译序

1972 年中日恢复邦交以来，两国关系有了显著的改善。各种类型的友好活动，日益发展，访问参观，来往不绝。每年前来我国的日本朋友，数以万计。真是道路相望，与日俱增。中国人民现在都很关心日本，普遍希望能对日本有更多的了解。中日人民要世世代代友好下去这一共同愿望，更加促进了这种趋势，这是很自然的。

中日本是一衣带水的邻邦，有二千多年友好关系的历史，文化上的联系，十分密切，彼此给予对方的影响，非常深远。很多传统习惯，两国至今相同。现状是历史的继续和发展。眼前的现象，都有它的历史根源和背景。如能更多地掌握一些两国文化关系的历史知识，对于当前问题的认识，必有很大的裨益。

日本方面，有很多人在研究日中文化关系的历史，发表了不少著作，但大多限于某一历史阶段或专题，全面综述的为数不多。而木宫泰彦的《日中文化交流史》却是其中比较有代表性的一部著作。它从有史料可考起，直到明治维新前夕为止，按年代顺序，把大约二千来年间两国文化交流的历史事实及其影响后果，作了系统的叙述，为读者描绘出一个比较全面的轮廓。

作者木宫泰彦是日本静冈县人，1913 年东京大学史学科毕业后，曾先后在山形，水户、静冈等各高等学校任教授。退休以后，在静冈还自创办常叶学园，继续从事历史教学和日中文化关系史的研究，著作很多，主要的有：《日宋关系》、《日本古代印刷文化史》、《日本吃茶史》、《日本民族与海外思想》、《荣西禅师》等书，内容都很充实。此外，还有一部《中日交通史》，早在 1931 年就有中文译本，因此，中国读者，很多熟悉他的名字。

《日中文化交流史》是木宫泰彦战后出版的新书，综合了他生平研究的成果才写成的。虽以《中日交通史》为基础，但经过了大致十五年的继续钻研，并到朝鲜和中国的东北、江南等地区，对凡与中日文化交流有关的历史古跡，特别对宋、元、明三朝来华的日本学僧常到的江南各著名禅刹，巡礼了一遍，进行了实地调查，然后才完成的。凡对文化交流有关部分，作了大量补充修改，相反则适当删节，尤其对于宋、元、明三朝史实，补充特多。仅以篇幅计算，全书也增多了三分之一，内容当然相应充实，且也更加专门化了。据作者自述，本书完成于 1943 年，原定在 1945 年出版，但当时正处在第二次世界大战期间，原稿和印刷厂同时毁于空袭。此后作者根据自己保存的残稿和资料，重新进行整理修改，又费了整整十年的功夫，此书才终于在 1955 年得以出版。1965 年重印一次，内容并无更动。

(5)『日華文化交流史』(1955)

本书是部史学专著，内容丰富，很有参考价值。引用的史料很多，范围也广，大部分是经过仔细考订的，但仍有些失检之处。原因可能是多方面的，有的是对原材料理解不够正确，断句错误。例如《隋唐篇》第四章第七节引用隋高祖《立舍利塔诏》，作者对同一引文在两处作出了与原意恰好相反的解释。有的是对同一问题所引各种不同资料，未能融会贯通，因而造成矛盾。例如《隋唐篇》二章五节在叙述光明朝遣唐使要求增加入京人数时，作者引用了两份独立的报告，说法虽异内容实际一致，但作者未能统一起来，而说“二者必有一错”，表示存疑。有的可能是利用了两手材料，未经详加核对，以致造成讹传。本书《明清篇》一章五节引用《皇明实录》永乐四年条时，出现了重要遗漏。《南宋·元篇》五章十一节引用宋唐庚《斗茶记》时所作的解释，也和原意大相径庭。凡属这些问题，已由译者发现并经过核对证实的，都已在有关章节加上译注或按语。至于原书印刷上的错字或年号的错误等，一经查对证实，已分别加以订正，并不另作说明。

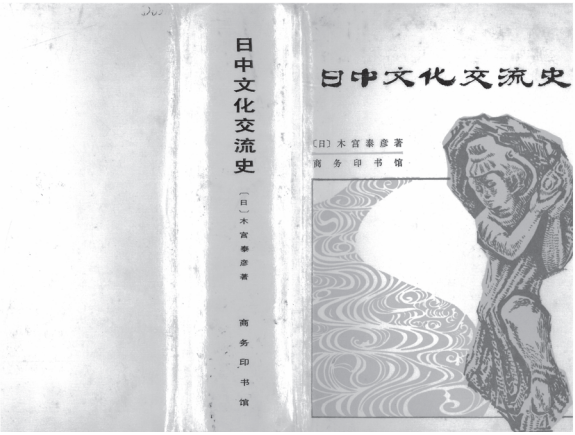
本书是战后出版的，特别在再版时（1965 年），日本史学界已经十分活跃，出现了不少新的研究成果，作者未能及时吸收，看来也是一个缺陷。

本书是六十年代初翻译的，当时原已准备出版，但在文化大革命期间稿件部分遗失，后来又经过重译补足，所以迟至今日才能与读者见面。全书分量较大，牵涉面很广，译者限于水平，错误一定不少，请读者指正。

胡锡年

1978 年 4 月 16 日于

陕西师范大学



木宮泰彦『日華文化交流史』の概要[45]

若松　大祐（編著）
WAKAMATSU Daisuke

一、本書全体の概要
二、各篇各章の概要

キーワード：『日支交通史』、常葉、日中関係史、対外関係史、仏教、禅、実証主義

一、本書全体の概要

木宮泰彦（一八八七－一九六九）は『日華文化交流史』（東京：冨山房、一九五五年。以下、時に本書と略す）で、古代から近世までの日本と中国の交流を描く。本書は九〇〇頁を越え、文字通りの大著である。順に図版が二五頁、序文が四頁（再版にはさらに序文が三頁付く）、目次が一二頁、本文が七二〇頁、日華通交年表が一〇三頁、索引が四五頁をそれぞれ占め、巻末には折り込み地図が一枚付く。

本文は全五篇からなるも、各篇の分量は均等ではない。それぞれ、
第一篇「漢・六朝篇」（全四章、全五七頁）、
第二篇「隋・唐篇」（全五章、全一七九頁）、
第三篇「五代・北宋篇」（全二章、全八一頁）、
第四篇「南宋・元篇」（全五章、全二〇一頁）、
第五篇「明・清篇」（全六章、全一九九頁）

[45] 本稿は、下記の三文をまとめてなる。若松大祐が三文を一つにまとめ、その後に濱川栄と木宮敬信が加筆修正を行った。
濱川栄「『日華文化交流史』に見る歴史学者・木宮泰彦の姿―『日華文化交流史』とその時代（一）―」、『常葉大学外国語学部紀要』三六号、二〇一九年三月、一－一九頁。
木宮敬信「『日華文化交流史』に見る元・明・清と日本との交易について―『日華文化交流史』とその時代（二）―」、『常葉大学外国語学部紀要』三六号、二〇一九年三月、二一－二九頁。
若松大祐「木宮泰彦『日華文化交流史』の学術的意義」、『常葉大学外国語学部紀要』三七号、二〇二〇年三月、三－一八頁。
主として、まず「一、本書全体の概要」は若松大祐論文の一部を改訂した。次いで、「二、各篇各章の概要」の［各篇各章の概要］は若松大祐論文から、［各篇での議論］は濱川栄論文からそれぞれ転載して改訂している。加えて、第四編第三章以下の［各篇各章の概要］や［各篇での議論］には、木宮敬信論文からも転載して改訂した個所を含む。

といったふうであり、各章の分量もまちまちである。

『日華文化交流史』全体の特徴として、次の三点が挙がろう。第一に、本書は約二〇〇〇年にわたる古代から近世までの日中交流を概観する。主に日本からの留学僧、中国からの帰化僧を主軸にした人的交流を扱う。こうした人間の往来は、単に仏僧だけにとどまらず、それぞれの時代の政治家や商人や文化人を巻き込む。その時々の政治的な目標や経済的な利益を背景にして、日中間での人間の交流は盛衰を繰り返す。交流の結果、日本には大陸からの様々な文化が移植されたのである。

そもそも木宮泰彦は日本史研究者として研究を展開し、『日華文化交流史』はあくまでも日本史研究における対外関係史(特に日中関係史)という研究分野での成果である。その『日華文化交流史』(および前身である『日支交通史』)が、篇題の示すように、二〇〇〇年にわたる日中交流の歩みを日本史上の時代区分(奈良時代、平安時代、……時代)でもなく、西暦(〇〇世紀－□□世紀)でもなく、中国の歴代王朝の区分によって表すのである。木宮は日本に対する中国の圧倒的な文化的影響を素直に認めていたから、中華王朝による時代区分を当然だと考えたのであろう。この篇題の立て方からは、戦前日本の自国至上の価値観に拘泥しない柔軟さを感じ取れる。とはいえ、巻末の付録「日華通交年表」では、『日支交通史』を踏襲し、第二次大戦終結後十年を経て刊行されたにも関わらず、皇紀を引き続き使っている。

中華王朝による区分とはいえ、木宮は時代ごとの性格に基づき、歴史を区分している。時代ごとの性格については、本稿でこれから確認していく。予め整理すると、次の表のようになろう。この時代区分は木宮のオリジナルなのかどうか、引き続き調査が必要である。

篇	中華王朝	国交	往来	主な担い手
第一篇	漢・六朝	民間交流	双方向	渡来人
第二篇	隋・唐	国家間交流	双方向	王朝、仏僧
第三篇	五代・北宋	民間交流	ほぼ中国から日本へ	海商
第四篇	南宋・元	民間交流	双方向	仏僧、海商
第五篇	明	国家間交流	双方向	王朝、仏僧、海商
第五篇	清	国家間交流	中国から日本へ	仏僧、海商

『日華文化交流史』は考察範囲が広いため、その叙述は概説的であり平板的になる。とはいえ、すべての時代を均一に叙述できることはなく、著者である木宮の思想や

専門領域が影響し、本書の議論には粗密がある。例えば、宋代以降の議論は、仏教の中でも禅宗に偏っている。そもそも禅宗以外の仏教に対外交流があったのかどうか、触れていない。また、木宮が日宋関係史を専門に研究していたから、日中交流の話題は江南に集中する。朝鮮半島を経由する日中交流も存在したはずであるものの、そこへの言及はほとんどない。

第二に、『日華文化交流史』は実証主義的な研究成果である。木宮泰彦は文献史料を博捜して史料に基づき、約二〇〇〇年に及ぶ日中交流を描く。本書は僧侶や船舶の一覧表をたくさん収録しており、ここにも実証主義的な性格が顕著に現われる。史料から得られた様々な情報を表で整序しているため、読者は知りたい情報にたどり着きやすい。また、歴史的なできごとの出現や消失を裏付けるために、史料を引用している。ただ、漢文（中国古典文）を白文のまま（時に返り点あり）貼り付けてあり、現代語訳を付けていないから、現代の読者にとっては不親切になるだろう。

このように木宮が実証研究を展開するのは、現在の日中関係の深化に、さらには東アジアの平和構築に貢献したいという実存的な意欲ゆえであった（序）。すると不思議なのは、『日華文化交流史』での叙述がアヘン戦争以降に、つまり幕末や晩清から始まる近代日中関係に及ばないことである。さらに、木宮は戦中や戦後の日中両国の激動やそこでの自らの体験を、『日華文化交流史』にわずかなりとも反映させていない。木宮は中国出張の半年前の 1940 年 2 月に、『日支文化交渉一覧図と年表』を冨山房より刊行している。同書に所収の年表では近代（書中では「現代」）に関する記述もある（本稿 213 頁）。また所収の一覧図は数種類に及ぶ。しかし、『日華文化交流史』の年表は前述の通り、近代に及ばない。また、一覧図は一枚だけである。なぜこの一覧図と年表を『日華文化交流史』に反映しなかったのか。

第三に、20 世紀後半以降の学術書に備わる作法が欠けている。二〇世紀後半になると、学問全般の水準が挙がっていた。『日支交通史』を出版した大正末年や昭和初年とは、学問の作法も大きく変化した。新しい作法は、序論では先行研究を踏まえて自他の主張の差異を明示し、本論では資料や先行研究の典拠を挙げながら議論を展開し、結論では本論での議論を改めて意義付けなければならなくなった。しかし、『日華文化交流史』は『日支交通史』を踏襲し、とりわけ「結論」や「あとがき」がない。浩瀚な大冊でありながら、あまりに唐突に終わるのである。

また、分析概念も操作的でない。『日華文化交流史』というタイトルからもわかるように、「文化」が分析概念（分析対象）である。しかし、木宮が考えるところの文化や交流というキーワードは定義されていない。日中両国の交流によって変容

した両国の文化について、操作的に示すことはない[46]。そもそも文化の内容は、第四篇第二章や第五章で挙がるものなのか。木宮は、まず文化という概念を、文化水準や生活水準というふうに、人間らしく生きる程度や性質という意味で使う。そして、一方で人間生活を政治、経済、社会、文化というようないくつかの領域に分け、そのうちの文化を指すこともあれば、いま一方で日本や中国という国家が独自に持つ特徴や雰囲気を指すこともある[47]。総じて、本書において文化の意味はあいまいなままである。

要するに、木宮は自らのオリジナリティを明らかにしていない。オリジナリティがないのではなく、オリジナリティをアピールする作法が欠けているのである。『日華文化交流史』に基づく研究が、二〇世紀後半になると博士学位請求論文としての審査に耐えられなかった理由もここにあろう。確かに「再版に際して」（一九六五（昭和四〇）年四月付け）が指摘するように、日本において「一般に国史研究者の視野は、あまりに国内に限られ、大陸の政変や文化の動向には殆ど無関心のようである」。しかしながら、一九六〇年代にはこうした認識はもはや時代遅れになりつつあったのではないか。東洋史研究の蓄積も増えていたはずである。

二、各篇各章の概要

ここでは、『日華文化交流史』の内容を概観する。篇ごとに、前半では各章の概要を記し、後半ではその篇で展開されている議論を示す。そうした作業を通じ、『日華文化交流史』の特徴や問題点を指摘しつつ、木宮泰彦が再現しようとした日中交流の歩みをつかみたい。なお、『日華文化交流史』からの引用に際しては、本文中に頁数のみを記す。

（〇）序文

⑴ 序（全四頁）

「序」において木宮は、「我が国は（…中略…）新文化を摂取し、これを咀嚼し、

[46] 国際社会での文化触変については、国際関係論の学問領域で議論があり、例えば次の著書がある。平野健一郎『国際文化論』（東京：東京大学出版会、二〇〇〇年）、五八頁。
[47] 文化という概念の３つの意味については、拙稿で整理したことがある。若松大祐「近代以来の日中両国における文化概念：『中国の命運』の背景を概観する」、『常葉大学外国語学部紀要』33 号（静岡：常葉大学外国語学部、2017 年３月）、pp.1－11。

醇化することによって、わが固有の文化を培い、特異優秀な国風文化を創造してきた」（一頁）と述べ、これは本書の一貫した立場となる。

序は、本書『日華文化交流史』が旧著『日支交通史』を増補改訂して出来上がったという経緯を説く。エピソードは大きく五つに分かれ、すなわち、日中両国で旧著が好評を博したために著者として増補改訂版を作る決意をしたこと、文部省の精神科学研究奨励金[48]を得て日本各地で資料調査を行ったこと、一九四〇（昭和一五）年の中国出張（現在でいうところのフィールドワーク）で江南を遊歴したこと、増補改訂版の原稿が印刷直前に東京大空襲に遭って灰になったこと、そしてさらに一〇年の歳月を経て増補改訂版を作り直して上梓したことに及ぶ[49]。木宮には、日中交流から日本史を理解するという学術的な動機とともに、日中交流の歴史研究に基づき、東アジアの平和の構築に寄与したいという現実的な動機もあった（四頁）。

⑵　再版に際して（全三頁）

『日華文化交流史』は一九五五年に初版が、一九六五年に再版がそれぞれ出版された。再版の序文に当たる「再版に際して」によると、再版に際して「時間的余裕もないので、旧版のまま再版した」という。

実のところ、さらに一九八七年には木宮泰彦の生誕百年を記念して再刊がある。一九八七年の再刊には、木宮和彦「生誕百年を記念して再刊するにあたり」（全三頁）、「木宮泰彦略歴」（全一頁）、「建学の精神」（全一頁）、「著作目録」（全三頁）が付く。他の個所には異同はなさそうである。

そもそも木宮泰彦は第二次大戦後になると『日華文化交流史』の一書しか学術書を公刊していない。したがって、一九六五年の「再版に際して」は木宮が研究者として表明した最後の学術的見解といえよう。「再版に際して」には、『日支交通史』を執筆して以来、『日華文化交流史』の本文や「序」で展開した主張が、良くも悪くも濃縮され、そして姿を新たにするのである。すなわち、「再版に際して」は、歴史的に眺めると日本文化には中国文化からの影響を無視できないと説く。この論

[48] 精神科学研究奨励金とは、一九二九年に文部省が国体明徴のために日本および東洋の精神文化に関する研究を奨励すべく交付した助成金である。詳しくは、駒込武、川村肇、奈須恵子（編）『戦時下学問の統制と動員：日本諸学振興委員会の研究』（東京：東京大学出版会 2011）、pp.228－232。また、次のサイトでも少しだけ言及されている。「文部科学省トップ＞白書・統計・出版物＞白書＞学制百二十年史＞第一節　学術行政」（http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318252.htm）〔2021/2/9 確認〕。

[49] 本稿 11 頁の漫画「木宮泰彦の奮闘」などを参照されたい。木宮泰彦や『日華文化交流史』について、漫画や年表や図表を使い解説している。

点については、本稿150頁で後に議論を展開したい。

(一) 第一篇「漢・六朝篇」(全四章、一－五六頁)

[第一篇各章の概要]

第一篇は原始時代から六朝までを範囲にして、日中間における人間の移動を考察する。各章の題目は、

第一章「原始時代に於ける中国文化の波及」(三－一三頁)、

第二章「倭国と漢魏との通交」(一四－二三頁)、

第三章「日本と中国南朝との交渉」(二四－四六頁)、

第四章「上古の帰化漢人と文化の流入」(四七－五六頁)、

である。

本篇は、原始時代から六朝までを扱う。この時代の交流は、自然発生的な特徴を持つ。中国や日本という国家同士の交流ではなかった。というのも、当時は日本にまだ日本規模の統一的な統治機構が成立していないからである。

第一篇第一章では、中国から朝鮮半島を経由して日本へ至る経路、特に朝鮮半島から日本への交通路の特定を行う。太古の時代の日中交流は朝鮮半島を経由した。朝鮮と日本との間には海があり、二つの交通路が存在したという。

まず、原始時代から存在した交通路は、日本海回流と呼びうるものである。日本海を左旋して流れる回流に沿って、朝鮮半島の辰韓から日本の山陰、そして北陸に連なる(三頁)。海流の関係があり、日本へは行きやすいものの、逆に辰韓へは行けない。いわば、片道の自然航路である(四頁)。

次に、時代が下ると海北道中という交通路が出現する。海北道中は、『日本書紀』神代巻で「ウミノキタノミチノナカ」と呼ばれた。この交通路は、辰韓や弁韓から対馬を経て筑前に至る。対馬海流を横断して往復するものであるから、航海術の発達を待たなければならなかった(一〇頁)。

第一篇第二章では、中国北方(後漢や魏)と日本(奴国や邪馬台国)の交流を考察する。中国文化が朝鮮半島経由で伝わり、それが日本を刺激し国家統一の機運を創り出したという(二二頁)。中国文化との接触は、大和朝廷の成立の外的要因になったのである。

第一篇第三章では、中国南方(南朝)と日本の交流を考察する。朝鮮半島での混乱から高句麗、百済、新羅の三国が鼎立し、朝鮮半島を陸路で経由しにくくなると、

新たな航路が出現する。九州から百済を経由し、さらに黄海を航り山東から江蘇へ至る南道である（四一頁）。南朝との交流は、日本をして「中国の礼文政治を参酌して宮廷の衣冠を飾り、紛乱した族制政治に秩序つけようと」せしめた（四六頁）。後の聖徳太子の冠位十二階の制定や十七条憲法の発布を準備したのであるから、日本にとって江南（南朝）との交流は、かつての華北（中国北方）との交流よりも文化的な影響が大きい（二四、四六頁）。

第一篇第四章では、秦人や漢人さらに新漢人が日本へもたらした影響を説く。漢の領土だった楽浪郡や帯方郡が高句麗や百済に併呑されると、この二つの郡にいた漢人のいくらかが日本へやってきた（四七頁）。大和朝廷は彼らの芸能を評価したため、彼らの帰化を歓迎した（四九頁）。雄略天皇の時代において秦人や漢人の文化的影響は、物心両面に及ぶ。養蚕や絹織り、さらに漢字をもたらす（五〇－五二頁）。帯方郡からの渡来は続き、応神天皇の時代になると、渡来した人々を新漢人と呼ぶ。新漢人は製陶、製鞍（転じて仏像製作）、絵画、刺繍をもたらす（五三－五五頁）。こうして文化の流入が「推古朝に於ける彫刻や絵画や織物や刺繍や、これら最善最美の芸術」を準備したのである（五六頁）。

総じて、本篇は上古以来、大陸の文物が頻繁に日本にもたらされ、その影響を強く受けながら日本に古代国家が形成されていく様子を概述する。大陸から日本への交通路は二つあり、一つが日本海回流路（対馬海流）に乗って大陸から山陰・北陸へと至る航路であり、いま一つが朝鮮半島南部から北九州に至る航路だったという。日中交流は双方向的であれども、文化程度が東へ行くほど低くなるから、中国が一方的に日本へ物心両面で影響を与えた。なお、本篇は日華文化交流というよりも、日韓華文化交流というべきであろう。とはいえ、本書は全体を通じて朝鮮を経路とする交流にはほとんど言及がない[50]。

［第一篇での議論］

⑴　資料と構成

本篇のページ数はわずか五四ページであり、本書総ページ数七二〇ページ（巻末付録の年表を除く）のうち、わずか七･五パーセントを占めるに過ぎない。しかし、本篇の紙幅が少ないのはやむを得ない。というのも、原始時代から六朝時代（三－六世紀）までの歴史資料は極めて限られるからである。中国には「正史」をはじめ

[50] 木宮は、近代に成立する国民国家を想定して、古代東北アジア世界を中国、朝鮮、日本に分けて議論している。このあたりは本書執筆の同時代的背景が影響したか。

多種の史料があるとはいえ、多くは唐代（七－十世紀）以降に編纂されたものであり、日本に関する情報を記した同時代史料は極めて乏しい[51]。まして日本側が自ら残した史料となれば、戦前は『記紀』を中心とするわずかな文献史料と、これまたわずかな考古資料がある程度だった。しかも、木宮の主たる関心は、禅宗を学ぶために多くの日本僧が中国に渡った宋元（十世紀後半－十三世紀後半）以降の時代に向いていた。したがって、六朝以前の時代を扱う本篇は、戦前に得られた基礎的な情報に基づき淡々と大陸と日本の交流状況を叙述したのであるから、その叙述がどうしても概説的で一般論的な性格を帯びるのは致し方ない。

⑵ 邪馬台国

戦前から激論があったはずの「邪馬台国論争」についても、

「吾人は星野恒博士の説に従ひ、邪馬台を以て、筑後国山門郡となし、卑弥呼を以てこの地方にあつた一女酋と解すべきものと信ずる。（中略）矢張り従来から行はれた星野博士の説が最も妥当であらう。」（『日華文化交流史』一九－二〇頁）

となんら判断の根拠も示さず、星野恒の一論文[52]に依拠して「九州説」に与している。戦後やかましくなった「任那日本府」の位置づけについても、何も言及がない。論争がかまびすしい問題は巧みに避けて、極力穏当な説に従って筆を進めている印象が強い。

⑶ 皇国神話と考古学

なお、木宮は『日華文化交流史』を通じて皇族（及びその祖先とされる神々）の行状を全て敬語で表わしている。一方で、底本となった『日支交通史』が明治末・大正初めの著書である以上当然とも言える。だが、いま一方で、敗戦後十年を経過して出版された『日華文化交流史』においても、この叙述法を改めなかった真意は何か、いささか疑問の残るところである。この点についてはすでに別稿が論じたので[53]、深入りは避ける。ただ皇族への敬称を徹底する一方で、木宮が『記紀』を「神

[51] 中国歴代正史における日本関係の記録を日本語へ訳出したものには、次の書籍がある。石原道博（編訳）『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』〔中国正史日本伝１、新訂版、岩波文庫〕（東京：岩波書店、一九八五年）。石原道博（編訳）『旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝』〔中国正史日本伝２、新訂版、岩波文庫〕（東京：岩波書店、一九八六年）。

[52] 星野恒「日本国号考」（『史学叢説』一、冨山房、一九〇九年）。

[53] 濱川栄「木宮泰彦と皇国史観―主として『日華文化交流史』に拠る―」（『常葉初等教育研究』四、二〇一九年）。本稿 185 頁に転載した。

話伝説」と断じ、

「海北道中と称する日韓交通路のあつたことは推測されるが、単に神話伝説のみに拠つたのでは、直に首肯し難いであらう。けれどもここに記紀とは全く離れて、専ら遺跡遺物のみによつて研究した考古学の結論がこれと合致するならば、その事実なることを承認せざるを得ないであらう。」（八頁）

とするように考古学の成果を重視していた。この点は、木宮が決して皇国史観に心酔した国粋主義者ではなく、あくまで実証を重んじた歴史研究者であったことをしのばせる根拠として注目しておきたい。

⑷　独創的な議論

なお、日露戦争後の浮流水雷の動きをもとに、日本海の海流を論じた部分（四頁）と、「弓月君が百二十県の民を率いて」日本に来たとする史料の表記を、「狛二十七県百姓」ではなかったかと問う部分（四八頁）は、具体的でおもしろい。

木宮は京都帝大大学院生時代に内田銀蔵から、他者の見解と自説を混同されないように出典を明記するように指導された[54]。右の論証が木宮のオリジナルであるなら、このユニークな意見はもっと強調してもよいはずである。しかし、あくまで控えめに提示するところに木宮の慎重かつ謙虚な姿勢がうかがえよう。

（二）第二篇「隋・唐篇」（全五章、五七－二三五頁）

［第二篇各章の概要］

第二篇は隋と唐を範囲にして、日中間における人間の移動を考察する。各章の題目は、

第一章「遣隋使」（五九－七三頁）、
第二章「遣唐使」（七四－一二一頁）、
第三章「遣唐使廃絶後の日唐交通」（一二二－一三六頁）、
第四章「遣唐学生・学問僧と文化の受容」（一三七－二一四頁）、
第五章「帰化唐人・印度人・西域人と文化の移植」（二一五－二三五頁）、
である。

[54] 創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』（静岡：編者、一九九二年）、六六－六七頁。

本篇は、遣隋使の始まりから遣唐使の終わり、さらには唐の滅亡（西暦九〇七年）までを扱う。原始時代から六朝まで（つまり第一篇の考察範囲）とは異なり、隋唐の時代になると日中双方は国家間での正式な交流を始めたのである。

第二篇第一章では、遣隋使について考察する。遣隋使は、日中双方にとって初の正式な国家間交流である。従来、日本が中国文化を受け入れるのは、朝鮮半島を経由してであった。今や日本は中国へ積極的に出向き、中国文化を直接摂取するようになる（五九－六〇頁）。中国文化とは、「仏教のみならず、汎く大陸文化」の全般であった（六三－六四頁）。遣隋留学生の留学は二十－三十年にわたり、これはちょうど隋末から唐初は唐王朝の「宮廷の儀礼や政府の組織や、諸般の法制が次第に整ひつつあつた時であつた」（七一頁）。中国文化を吸収した留学生が帰国すると、日本では族制政治から礼文政治への転換を求める機運が加速する。その結果として、冠位十二階の制定や十七条憲法の発布がある（七二頁）。

第二篇第二章では、遣唐使について考察する。優秀な中国文化をさらに摂取し模倣するために、遣隋使に続き遣唐使が六三〇年から八九四年まで派遣された。公式には一九回あったというものの、実際は一三回である（七四頁）。つまり、平均二〇年に一回の派遣があったことになる（一五七頁）。木宮はこれを四期に分け（八二頁）、第三期を遣唐使の最盛期に、第四期を衰微期に位置付ける。第四期は、「我が国に於ても、唐文化の摂取すべきはほぼ摂取し、やがて日本文化の萌芽が発しようとしてゐた時期である」（八四頁）。

時期	年数	派遣回数
第一期	第一回（六三〇年出発）－四回（六五九年出発）。	四回
第二期	第五回（六六五年出発）－七回（六六九年出発）。	二回
第三期 （最盛期）	第八回（七〇二年出発）－十一回（七五二年出発）。 日本の文武天皇－孝謙天皇期 唐の則天武后－玄宗期 七世紀末－八世紀半頃。	四回
第四期 （衰微期）	第一五回（七七七年出発）－一八回（八三八年出発）。 日本の光仁天皇－仁明天皇期 唐の安史の乱以後 八世紀後半。	三回

遣唐使への参加者は、学問僧のみに止まらず、様々な職業や立場の多くの人々で構成されていた（八五－八六、一一六頁）。というのも、遣唐使は「国際的儀礼の

形式によって行はれた官業的貿易」であったからである（一一七－一一八頁）。もちろん当時の航海は危険であり、「恰も戦場に向ふが如く、死を覚悟せねばならなかつた」（一〇八頁）。日本への帰国に際しては、唐法を犯してでも唐物を買おうとする者もいたのである（一二〇頁）。

第二篇第三章は、遣唐使廃絶後の日中交流を考察する。事実上の遣唐使廃絶（八三九年）から唐滅亡（九〇七年）まで日中間を往来したのは、ほとんどが唐の商船であり、担い手は唐人であった（一二二頁）。

第二篇第四章は、本書の前半における重点であろう。「我が中古における文化の多くが唐文化を摂取受容し、醇化整斉して我が固有文化に融合させたものである」（一三七頁）という一文から始まり、遣唐使によって日本へもたらされた文化を、日本がどのように受容したかを述べる。議論は、学生や学僧の名前、人数、留学期間、学習内容に始まる。さらには、彼らが日本にもたらした影響として、奈良仏教のあり方（国分寺、大仏、山岳拠点）や将来品に及ぶ。中でも、奈良の大仏が洛陽白司馬坂の大仏の模倣であるのを指摘したのは（一八二－一九〇頁）、旧著『日支交通史』発表以来の木宮のオリジナルな主張であった。こうした議論には、「我が中古の制度のうちには、我が国独得のものと思はれるやうなことも、一度唐史を検索するに及び、全く唐制の模倣であることを発見することが多い」（一七〇頁）、そして、「一体唐に於て行はれた事柄が我が国に移植せられたのは、数十年の後であることが普通である」（一七九頁）という木宮の歴史的な思考が横たわっていた。

第二篇第五章は、遣唐使によって唐文化のみならず、インド系イラン文化が日本へ移植されたと説く（二一五頁）。そもそも唐王朝は漢人のみならず、西アジア、南アジア、東アジアの人間を任用し、また唐僧の中には先進地域である西域やインドへ留学する人もいた（二二八頁）[55]。唐の開放主義的文化が留学僧や帰化僧によって日本へ伝わる。著名な帰化僧には鑑真がおり、その弟子には安如宝（ソグド人、唐招提寺住職）のように西アジアや南アジアの出身者がいた（二一八－二一九、二二九頁）。また、後の最澄や空海の新仏教の創設は突然のことではなく、帰化唐僧や留学僧たちが日本に伝えたものが時を経て開花したのだという（二二〇頁）。

総じて、本篇は日本と中国を古代東アジア世界に自律した主体とみなした上で、遣隋使や遣唐使を通じての文化変容を論じている。日中間の人の移動は双方向であれども、当時の文化程度の差は大きく、文化を受容するのは日本であった。そして、

[55] 遣唐使で唐へ渡った日本人は、さらに西域やインドへ赴くことはなかったのだろうか。

中国から日本へという文化受容の一般的な傾向は、本書の扱う清代や江戸時代まで続く。

［第二篇での議論］

⑴ 資料と構成

本篇が扱うのは、いよいよ日中交流が本格化した時代であり、関連史料も一気に豊富になるため、木宮の記述量も増え、本書全体の二五パーセント弱に及ぶ一七七ページにわたっている。

第一篇との大きな違いはページ数以外にもある。「遣隋留学生・学問僧一覧表」(七〇－七一頁)、「遣唐使一覧表」(七四－八一頁) を初めとして、大陸に渡った使者・学生・学僧の情報を網羅した表が八つも挿入されている。木宮は本篇以下で、僧侶を中心にして日本から中国へ渡航した人々を一覧表で示す。一覧表には渡航年、在留年数、主要事跡、参考文献などを載せる。

第二篇第三章において木宮は議論を展開するに際し、日本側の記紀を筆頭とする諸史料と、中国側の歴代正史を筆頭とする諸史料とを、単に網羅するだけでなく、日中双方の資料を突き合わせている。こうしたクロスチェックは、例えば中国側に記載があり、日本側に記載がないという現象から、日本が対中関係において対等な関係を主張したという結論を導く (一一二頁)。

また、聖徳太子や大化の改新から日本が法治国家 (木宮の言葉では「礼文政治」) という性格を持ち始めたという (七二頁)。こうした日本史上の時代区分は、一九二〇－三〇年代に流行していたのだろうか。後の『国体の本義』(東京：文部省、一九三七年) における時代区分と同一である。

⑵ 聖徳太子の対隋外交

遣隋使・遣唐使が盛んに派遣され、日中交流史上の一つのピークをなす時代であるにも関わらず、木宮の筆致はあくまで冷静かつ平板であり、読者を特段喜ばせるような配慮はほとんど皆無である。

しかし、わずかに木宮の感情の高ぶりを感じさせる個所が二つある。一つ目は聖徳太子の対隋外交について述べたところである。

「聖徳太子が一面中国文化に憧憬し給ひ、これを摂取しようとする念があらせられたに拘らず、他面にはどこまでも国家的体面を重んぜられ、隋に対して対等の態度を執らせたことはまことに、景仰すべきことといはねばならぬ。」(六六

頁）

木宮は中国文明に対する憧憬と敬意をほとんど隠さない。しかし、隋に対等な立場を主張した聖徳太子の外交に、快哉を叫ぶ。戦前の皇国史観に一定の距離をとっていた木宮にしても隠しようのなかった愛国心の発露が、ここに垣間見られる。

⑶　文化交流の犠牲者

もう一つは、病に倒れた一人の水夫をやむなく浜辺に置き去りにしなければならなくなった場面を、円仁『入唐求法巡礼行記』から引用した個所である。

「今将に息絶えなんとする病苦の身を、ただ独り淋しく異境の浜辺に棄て去られたあはれな一水手に対し、一掬同情の涙なきを得ない。美しく華やかであつた唐文化を移植せんが為には、かうした幾多のあはれな犠牲者があつたことであらう。」（九九頁）

このように木宮の感情が発露した記述は非常に珍しく、その意味で大変感興をそそられる。

⑷　遣唐使船の遭難理由

本篇からうかがえる木宮の独創的な見解を拾ってみよう。南路を取った第三期および第四期の遣唐使船のほとんどが遭難している原因について、東シナ海の季節風への無理解が原因と分析した部分（一〇六頁）は、のちに藤家禮之助『日中交流二千年』にも引用されており、卓見といえる解釈であるらしい[56]。

⑸　東大寺大仏の由来

第四章第八節「唐の白司馬坂の大仏像と我が東大寺大仏」（一八二－一九〇頁）という節を立てたように、奈良東大寺の大仏のモデルを唐の白司馬坂の大仏（銅仏）だと推定したのは、木宮の独創的な解釈だった。ただし、

「彼にあつては、ただ仏教尊信の余り、無用の大工事を企てたものに過ぎないが、我にあつては盧舎那仏の功徳により、国家の安寧、万民の幸福を祈らうとせられた聖武天皇の御聖旨に出たものである。」（一八八頁）[57]

と表現する。このように聖武天皇の発願と東大寺大仏の存在を過剰に評価するのは、木宮にしてはやや筆が走りすぎたか。

[56] 藤家禮之助『日中交流二千年』（東海大学出版部、一九七七年〔改訂版一九八八年〕）、一〇九頁。
[57] 引用文中の「彼」は唐の白司馬坂の大仏を、「我」は日本の奈良の大仏をそれぞれ指す。

⑸ 『日華文化交流史』(1955)

戦後自らが創建した学校名に聖武天皇の御製の一句を借りて「常葉」と名付けたことからもわかるとおり、木宮の聖武天皇への思い入れはすでに『日支交通史』を著したころからあったものと思われる。戦後、徒手空拳で学校経営に乗り出した背景には、「国家の安寧、万民の幸福」を祈って東大寺と大仏を建立した聖武天皇への長年の憧憬があった、と見るのは穿ち過ぎであろうか。

⑹ 中国からの印刷術の伝来

印刷術を日本の独創とする黒川真頼の説を否定し、唐から伝わったものと冷静に判断している(二一〇－二一四頁)点も、木宮のオリジナルな説と言える。

「奈良朝に於ける殆ど総べての文化が、いづれも唐代文化の影響を受けて発達した事実から類推するに、印刷法も亦遣唐学生・学問僧などによつて、唐から伝へられたものであらうと推測を下すも敢て不当ではないであらう。」(二一三－二一四頁)

こうした記述を見ると、国粋主義が蔓延した戦前にあっても木宮が過度にそれに毒されることなく、往時の中国文化のレヴェルの高さを率直に認め、敬意を抱いていたことがわかる。あえて言えば、木宮は過度な中国礼賛にも日本礼賛にも陥らず、史料に則し徹底して歴史事実を追究した末に看取された中国文化の恩恵を率直に記すのである。

⑺ 道教の伝来

今日の学問的水準から見て首肯しがたい見解も、もちろん垣間見られる。例えば、木宮は「我が国に道教が伝わらなかつた」(一七九頁)と断言している。しかし、福永光司の諸研究などが示すように、戦後は道教の日本文化への影響をむしろ積極的に論じている[58]。道教の日本文化への影響を見い出し得なかったのは、やはり木宮の関心が中国文化の中でも特に仏教に注がれていた点が関係しているのであろう。

⑻ 鑑真と最澄空海

第五章では、一方で帰化唐人の代表として鑑真を大きく取り上げ、仏寺建造、仏

[58] 福永光司『道教と日本文化』(人文書院、一九八二年)。福永光司『道教と日本思想』(徳間書店、一九八五年)。福永光司『道教思想史研究』(岩波書店、一九八七年)。福永光司『道教と古代日本』(人文書院、一九八七年)など。

像作成、教義（戒律、天台、密教）招来、医学、漢文学などさまざまな方面に多大な影響を残したことを説く。いま一方で、

「最澄・空海によつて大いに顕揚された台密二教は、平安朝に至つて突如として起つたものではない。厳正な意味に於て、平安朝の新仏教といふのは当らない。既に奈良朝に於ける帰化唐僧によつて、次第々々に養はれて来た潜流が、最澄・空海の二僧の力によつて、表流として歴史の表面に浮び出たといふ（ママ）[59] 過ぎぬ。」（二二〇頁）

と断じ、日本では極めて有名な最澄および空海の事蹟について、いたって淡白に記述する。こうした点にも木宮流の公平中立さがうかがえる。

⑼　西域人の来日

なお、唐文化が元来西域・インドなど周辺の多様な文化を包摂したものであったことから、それを移入した日本にも西域・インド文化の影響が少なからず及んだ状況を詳しく説いている。

その中で木宮は、鑑真の弟子の如寶について、「胡国人安如寶」（『唐大和上東征伝』）と史料にあるから、Bokhara（安国）出身であろうとしている。そうだとすれば、これは間違いなくソグド人のはずである（木宮は「ソグド人」とは述べていないが）。

ソグド人たちは、安・史など固有の姓を名乗った。従来は、唐代における商業面での活躍のみ語られてきた。しかし、墓誌などの新史料を用いたここ十数年のソグド人研究の深化により、軍事・外交・宗教面でも活躍していた事実が解明されている[60]。

今後は「日本にソグド人はどれだけ来ていたか？」という問題も一つのテーマになりうるであろう。如寶がその一例であることは、研究者間では周知の事実らしい。今日のソグド人研究の隆盛を泉下の木宮が知ったならば、そこにいささかの貢献ができたことをきっと喜ぶに違いない。

[59] この部分は、そもそも『日支交通史』上三三一頁では、「いふに過ぎぬ」というように正しく表記されていた。『日華文化交流史』はおおむね『日支交通史』の本文を転写しており、転写の際にこうした誤字、脱字、誤植が少なくない。単なる転写ミスとはいえ、校正作業が不充分だったと批判されても仕方なかろう。

[60] 唐代ソグドに関する日本での研究動向は、中田美絵「日本における唐代ソグド人研究の動向」（Recent Historiography in Japan on the Sogdians in Tang Dynasty China）、『歴史学研究』九八〇号（東京：歴史学研究会、二〇一九年 二月）、一七－二四頁に詳しい。

⑽ 古代日本の内外意識

日本へ伝わった音楽を述べた部分では、大和にとっては東国や隼人も唐や林邑と同じく異境に位置付けられており、奈良時代の日本の内外意識が現れていると言える（第二篇第五章、二三五頁）。なお、琉球（南島）が日本に服属したのは、遣唐使の最盛期である第三期だったという（九三頁）。

（三）第三篇「五代北宋篇」（全二章、二三七－三一七頁）。

［第三篇各章の概要］

第三篇は五代と北宋を範囲にして、日中間における人間の移動を考察する。各章の題目は、

第一章「五代に於ける日華交通」（二三九－二五三頁）、

第二章「北宋との通交」（二五四－三一七頁）、

であり、本篇は文字数も少なく、章数も二章だけである。

本篇は、五代から北宋までを扱う。遣隋使や遣唐使のような国家間の交流と異なり、この時代の日中間の交流は貿易を目的にして、主に中国の商船が日中間を往来した。

第三篇第一章「五代における日華交通」は、「日華間の文化的交渉は左程重大なものでなかった」という（二五二頁）。とはいえ、「彼の文化的影響を受くることははなはだ少なく、寧ろ我より彼に向かって文化の輸出が行われた。勿論質に於いても量に於いても、殆どいふに足らぬほどであるが（…下略…）」（二五二－二五三頁）というように、日本から中国への文化輸出という新しい動向があった。

第三篇第二章「北宋との通交」は、北宋時代における日中間の往来を仏僧に即して述べたものである。まず木宮は、北宋と南宋に時代を区分し、両者を日華交通に関して北宋は平安貴族の鎖国主義で、南宋は武家の貿易推奨というふうに位置づける。商船の往来、特に中国から日本への来航に着目しており、北宋を論ずる本章は「日華経済交易史」というような雰囲気がある。木宮は、奫然（ちょうねん）や源信という仏僧が日本文化の輸出に果たした役割を説く。

総じて、本篇は五代から北宋までの日中交流を、「彼我の文化的地位はほぼ対等であった」（二五四頁）という観点で論じている。日中交流は往々にして中国が文化を発し、日本が受けるという図式を一般的に持つ。しかし、五代や北宋では日本が文化を発し、中国が受けるという現象もわずかながら登場したのだった。

［第三篇での議論］

⑴　資料と構成

第三篇は二章からなり、ページ数は七九、全体の約一一パーセントと比較的分量の少ない篇となっている。しかし、木宮の研究の特徴と言える表は、

「五代に於ける日華往来船舶一覧表」（二三九－二四一頁）、

「五代に於ける入華僧一覧表」（二四九頁）、

「北宋との交渉一覧表」（二五五－二六二頁）、

「北宋時代に於ける入宋僧一覧表」（二七五－二七八頁）、

「摺供養表」[61]（三〇五－三〇六頁）

と五つもある。二倍以上のページ数があった前篇の表が八つであったことを考えると、本篇の方がむしろ充実しているとも言える。

⑵　日中が対等な時代

菅原道真の建議による遣唐使の中止（八九四年）、その後まもなくの唐王朝の滅亡（九〇七年）を受けた五代の時代（九〇七－九六〇年）は、貿易船の来航は意外に多かったものの文化的な交流が著しく停滞した時代であった。その後成立した北宋時代（九六〇－一一二七年）は日本の平安時代・藤原氏全盛時代に当たり、戦後に言う「国風文化」の隆盛期であった。この時代の特徴を木宮は、

「北宋時代にあつては、彼は唐末五代の擾乱によつて一旦衰へた文化を復興しようとしてゐた時であり、我は藤原時代に於ける日本文化の大いに栄えた時であつた。従つて我は彼の文化を摂取したが、また我が文化を彼に致して、その闕を補ふなど、彼我の文化的地位はほぼ対等であつた。」（二五四頁）

と断言する。

⑶　奝然

第二章では、一〇世紀末に北宋に渡り、北宋第二代皇帝・太宗に謁見した奝然（ちょうねん）[62]について詳細に取り上げる。奝然が日本の「国体の精華」[63]を中国へ伝え

[61] この表に木宮は名称をつけていない。本稿が便宜上付けた呼称である。

[62] 奝然については、数年前に関連するシンポジウムが開催された。ＧＢＳ実行委員会（編集）『論集日宋交流期の東大寺：奝然上人一千年大遠忌にちなんで』〔*The Role of Tōdai-ji in the Cultural Exchange of Song China and Japan: in Commemoration of Priest Chōnen: Papers from the Great Buddha Symposium no.15*、ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集、第一五号〕（奈良：東大寺、二〇一七年）。

[63]「國體ノ精華」という語句は、教育勅語を容易に想起させる。

たという理由で、木宮は奫然の言動を絶賛する（二九〇－二九三頁)。

奫然と太宗のやりとりは『宋史』日本伝に詳しく見える。それについて木宮は、

「彼は太宗の下問に答へて、

国王以王為姓、伝襲至今王六十四世、文武僚吏皆世官、

といつてゐる。外国の帝室･王室にはそれぞれ姓なり王朝の名なりがあるのに、我が皇室には全くかやうなものはない。蓋し諸外国は革命簒奪の忌はしい事変がしばしば繰返され、彼此前後の王朝の区別する必要があるが、我が国に於ては肇国以来万世一系の天皇を戴き、かやうな必要を認めないからである。さうして我が国では上古氏族制度の行はれた時代はいふまでもなく、大化改新以後も藤原氏以下文武百官は概ね世官世職であつた。」(二九〇頁)

というふうに、奫然が「万世一系」の天皇制と文武の官位の世襲制を日本の特徴としてアピールしたという。そして、

「太宗はこのことを聞いて大いに感嘆して宰相に謂つて曰く、「日本はただ島夷に過ぎないのに、世祚遐久にして、その臣も亦継襲絶えないのは、これ蓋し古の道である。然るに我が国は中華中国と称して文化を誇りながら、唐末の戦乱以来、国内が分裂して、五代に於ける攻防盛衰は最も甚だしく、大臣世胄家も亦よく嗣続したものは鮮い。(中略)」と。太宗に与へた感銘が如何に切実深刻であつたかが想像されるではないか。」(二九二頁)

というふうに、太宗が羨望の声を挙げたことを得々と記す。さらに、

「太宗は（中略）特に民政に意を注がしめるなど、仁政を施したことは有名である。奫然の物語つたところが、太宗の政治上に如何なる影響を与えたか、今ここに的確な証拠を挙げることは出来ないが、以上の事実から推測して相当の影響を与へたものと考へざるを得ない。」(二九三頁)

と述べている。

辺境の島国から来た一渡来僧の言がそれほどまでの影響を及ぼしたとはにわかに信じ難いが、奫然に対する木宮の絶賛ぶりを見ると、中国文化への憧憬を隠さない一方、その中国に対等以上の意思表示をした日本人の登場に快哉する様子もうかがえる。それは先述の聖徳太子への絶賛にも通じるものがある。こうしたところには、木宮の公平中立な態度を通じてもなおにじみ出る戦前の皇国史観・国粋主義の浸潤力を感じざるを得ない。また､こうした記述を戦後の編纂である『日華文化交流史』でも改めなかった点に、木宮の戦前・戦中・戦後を経ても変わらない皇室への崇敬の念を見てとることができる。

⑷　日本文化のレベルアップ

第二章では、日本文化のレベルアップを指摘する。その根拠に成尋（じょうじん）や源信の故事を挙げる。前者に関しては、北宋の神宗が僧成尋を厚遇し、その縁から日本に御筆文書や法華経経典･錦などを送ったことについて特筆する（二七一頁）。後者に関しては、源信が自著『往生要集』が宋でも普及するように尽力し、彼が自著を中国へ送ると、その主張は中国でも議論の俎上に上ったことについて特筆する（三一三－三一七頁）。木宮は、源信の行為に対し、「やがて独立せる日本仏教興隆の萌芽が認めらるる」と評価する（三一七頁）。

このように木宮が日本文化のレベルアップを指摘できたのは、文献資料の存在が大きいようである。一方で、宋代以降の中国において書物（印刷物）が大量に出版されるようになり、同時代の中国人が日本に関する情報に触れやすくなった。さらに、そうした書物の多くが今日まで残存している。

（四）第四篇「南宋・元篇」（全五章、三一九－五一九頁）

［第四篇各章の概要］

第四篇は南宋と元を範囲にして、日中間における人間の移動を考察する。各章の題目は、

第一章「南宋との貿易」（三二一－三三三頁）、

第二章「入宋僧・帰化宋僧と文化の移植」（三三四－四〇九頁）、

第三章「元との貿易」（四一〇－四三一頁）、

第四章「帰化元僧と文化の移植」（四三二－四四三頁）、

第五章「入元僧と文化の移植」（四四四－五二二頁）、

である。

本篇は、南宋から元までを扱う。この時代の日中交流でも引き続き正式な国交を持たず、商船が往来する。

第四篇第一章「南宋との貿易」は、本篇前半の南宋における文化交流の背景として、日宋間の貿易を概説したものである。商船や貿易港に言及し、そして貿易の方法や品物を挙げる。木宮が第三篇で予告したように、南宋は武家の貿易推奨という特徴を持つ。平安貴族が保守的であったのに対し、平清盛は武人で進取的であった。

第四篇第二章「入宋僧・帰化宋僧と文化の移植」は、入宋僧の特定から遊歴地の

確定を行った上で、入宋僧や帰化宋僧が日本にもたらした文化的な影響を論じている。考察は、具体的には仏教経典（特に大蔵経）、茶、思想、建築、工芸、医術に及ぶ。経典の印刷は日中両国で実施された。日本は最も中国化した仏教である禅宗を受け入れ、鎌倉幕府は鎌倉を禅宗の拠点に位置づけ、「政治の中心であると共に、また宗教上の一中心としたい」と考えたのだという。つまり、京都に対抗したのである。

本章は本篇の、さらには本書のクライマックスであろう。本章には木宮が本書の序でも述べたように、昭和一五年に中国出張で獲得した知見が大いに盛り込まれている。寺社の扁額の裏側に対してまで説明するくらいである。

第四篇第三章「元との貿易」は、従来は二度にわたる元寇のために日元間の往来が低調だとみなされていたのに対し、木宮は意外に頻繁であったことを強調している。日元間では政治的に対立していても、経済的かつ文化的には盛んに交流していた。この時代は前後の時代と比べても往来の多い時代だったのである。遣隋使、遣唐使、遣明使は公的であった。これに対し、日元間の往来は商船が中心であり、特に私的な商船が多く、ほとんどは日本船だったという（四一五－四一六頁）。日元貿易で有名な天龍寺船は私的なものではなく、例外的に政府（鎌倉幕府）の公認するものであり、僧侶が便乗した。それは幕府が安全を保障し、商船がその見返りとして経費を支払うというものであった（四一七 , 四二一頁）。

第四篇第四章「帰化元僧と文化の移植」は、元僧が日本に与えた影響を述べる。日元間の交流が盛んになるにつれ、元僧の来日も増えていく。一覧表に列挙した著名な十三名の元僧のほかにも多くの元僧が来日したという（四三三－四三四頁）。

元僧には元朝の命により来日して留まった場合と、日本からの招待で来日した場合と、さらに日本を慕って来日した場合がある（四三四頁）。一山一寧は元の命で渡日して鎌倉へ至る。後に京都へ移り、南禅寺の住持となった。従来は武家の宗教であった禅が、京都で公家にも広がり、禅宗の中心が鎌倉から京都へ移り始めたといえる（四三五－四三六頁）。同じく元の高僧であった清拙正澄は、北條高時の招きによって来日した。正澄は叢林（規矩。禅宗寺院の規則）の礼法の整備に貢献している。清拙正澄の来日の三年後、梵俊と梵仙の両名の来日は、日元間の交流が盛んになった時期であった。

いずれも日本における文化の促進に大きく貢献した。帰化元僧の影響を受け、日本の禅僧が中国へ盛んに留学するようになる。帰化元僧は日本の僧侶に対してだけでなく、朝廷や幕府の人々、特に多くの武士の精神生活に対して影響を与える。帰

化元僧は公家や武士に教えを説くほか、多くの詩文集を著す。それは五山文学の登場になった。

第四篇第五章「入元僧と文化の移植」は、日元間の往来が頻繁であったことを改めて強調した上で、元へ渡航した日本僧が日本へ持ち帰って移植した文化について言及している。将来したものには大蔵経、出版技術、禅林制度という仏教に関するものだけでなく、漢文学、儒学、諸子百家、史学、書道、絵画、茶会という中国文化全般にかかわるものもあった。本章は本書全体の一〇％を占めており、元が章題に入っているものの、第四篇の扱う南宋と元を総括した内容となっている。なお、近年の研究では、元代は中国史上、中国色を排除する時代だと位置づけられている。その元から日本が中国なるものを輸入していたというのは興味深い。日本が移入したものは果たして中国なるものだったのだろうか。

総じて、本篇は南宋から元までの日中交流を、日本と江南を往来する交易という観点から考察している。木宮はとりわけ日元貿易が、日宋貿易や日明貿易に匹敵するくらい盛んであると指摘する。また、日本の茶道にしても、京都の金閣銀閣にしても、木宮は突如出現したものとみなさない。入元僧の将来という蓄積、さらには宋以来の日中関係という蓄積を念頭に置くところに、歴史家としての木宮の研究があろう。

［第四篇での議論］

⑴　資料と構成

第四篇は一九九ページに及び、全体の二八パーセント近くを占める。本書における最長の篇である。

第四章に「帰化元僧一覧表」（四三二－四三三頁）、第五章に「入元僧一覧表」（四四五－四六五頁）がある。特に後者は、実に二二二人を数え挙げており、『日支交通史』下巻同表の一五五人を大幅に上回っている。木宮が好評を博した『日支交通史』の改訂版を執念をもって刊行しようとした理由は、端的にこの部分にあったのかもしれない。

第一章において木宮が何度か引用する加藤繁は、中国経済史を専攻し、戦前の代表的な研究者であった。木宮にとって、参考に値する中国史研究の成果だったのだろう[64]。

[64] なお、朝鮮史家の旗田巍は第二次大戦後になって加藤を一方的に批判している。旗田巍「日本における東洋史学の伝統」、『歴史学研究』二七〇号（東京：歴史学研究会、一九六二年）、二八−三五。

⑸ 『日華文化交流史』(1955)

第四篇第三章では、日元間における商船の往来に言及する際、摂津住吉神社所蔵文書に基づく。時代が下り江戸時代になると、大坂－江戸、中でも大坂－尾張の航路は伊勢商人が仕切っていた。住吉神社は航海安全を祈願するから、今でいうところの旅行傷害保険の役割を担っていた。後に、尾州廻船の登場で主導権が伊勢から内海へ移り、近代商船へ変質していく[65]。

⑵ 商船往来と武家登場

第一章冒頭に、

「我が国と南宋との国交は全くなかつたけれども、私に商舶の来往することは、すこぶる頻繁であつた。」(三二一頁)

と記す。実際は、商船の来往に便乗する形で平清盛や鎌倉幕府がさかんに南宋と交わり、仏僧の往来も盛んだった。

木宮は皇室による往来でなければ「国交」とは認めなかったようである。とはいえ、南宋から送られた牒書に「賜」字があるなどの些末な理由で日宋貿易を非難する公家・貴族の狭量さを描写しつつ、

「かく我が商舶の宋に赴くものの多くなつたのは、当時我が国人が武門の興隆につれて頗る進取的となり(後略)」(三二三頁)

と武士を評価している点は興味深い。平安貴族が保守的であったのに対し、平清盛は武人で進取的であった。後に、宮崎市定が武家は夷狄のような存在だと言ったのに通じよう[66]。

⑶ 武士と禅宗

第二章では、木宮の禅宗と鎌倉武士への思い入れが前面に出ている。それもそのはずで、木宮の東京帝国大学での卒業論文は「鎌倉時代に於ける禅僧と武士との関係」だった。『日華文化交流史』は、鎌倉時代に禅宗が急発展する事情を以下のように説明する。

「鎌倉に於ける禅の興隆に最も力を致したのは、いふまでもなく執権北條時頼であるが、彼は最初から誠実なる禅の帰依者ではなかつた。寧ろ政策上これが興隆に尽くしたものと思はれる。承久の乱後北條氏は確実に天下の政権を掌握し

---

[65] 日本福祉大学知多半島総合研究所編『知多半島歴史研究の十年』(半田：日本福祉大学知多半島総合研究所、一九九八年)。

[66] 宮崎市定『アジア史概説』〔中公文庫〕(東京：中央公論新社、一九八七年)、第七章。

たが、教権に至つては未だ何等獲るところがなかつた。諸大寺は概ね京畿地方に集まり、その門跡は皇族・公家の出身を以て満たされてゐた。このことは鎌倉幕府にとつて甚だ心淋しく感じたに相違ない。時頼の胸中には、鎌倉に一大伽藍を建立し、政治の中心である共（ママ）に、また宗教上の一中心としたいと熱望したことであらう。けれども在来の天台･真言や、これから派出した浄土･日蓮の如き宗派を以てしては、旧勢力の羈絆を脱することはむつかしい。寧ろ日本仏教とは全く関係のない、純中国式な、さうして今や大いに興隆の機運に向ひつつあつた禅を採用するに如かずと考へたのではあるまいか。」(三九〇頁)

さらに木宮は以下のように情熱的に述べる。

「当時在来の仏教徒が私利私欲を逞しうし､腐敗堕落の極に達してゐたのに反し、禅僧が専ら寡欲質素を旨とし、三衣一鉢の外は、居所を思はず、衣食を貪らず、百丈禅師の所謂「一日不作一日不食」といふ主義に則り、専心道の為に励んだことは、勤倹素朴を尚んだ時頼を始め鎌倉武士を感激せしめたのであらうし、また叢林の規矩の厳正であつたことや、彼等の機鋒の鋭い態度などは、礼節を重んじ、意気を尚んだ鎌倉武士のいたく悦ぶところであつたであらう。斯の如くにして､時頼は次第に熱心な禅法の帰依者になつたに違ひない。」(三九一頁)

具体的な史料も示さずに他宗徒の「腐敗堕落」を糾弾し、禅宗の長所とそれにいかに鎌倉武士が魅了されたかを熱く述べたこの部分は、全体に淡々と平板な記述が続く本書において一種異様な光彩を放つ。

(4)　禅の教理

さらに木宮は、禅の本質を以下のように語る。

「修禅者の説くところに従へば、禅は相対的なる吾人の常智と異り、絶対的知識で、有に非ず、無に非ず、而も有無共に存し、有無共に空しきもので、(中略)由来禅にあつては、教外別伝不立文字といひ、言葉を以てよく説く能はずとなすものは、全く絶対的であるが為である。例へば「時間とは何ぞや」「空間とは何ぞや」と問はば、これに対して何人も完全なる説明を為すことは出来ないであらう。是れ吾人が時間や空間を認識するのは全く絶対的[67]であるからである。吾人の常智は相対的であるが故に確然不動の真理なく、(中略) 事に臨ん

[67] ここは文脈から見て「絶対的」ではなく「相対的」でなければおかしいのであるが、『日支交通史』の該当個所（下巻八三頁、七－八行目）でも「絶対的」となっている。熱を込めて書いた個所であるだけに、この二度繰り返された誤記は非常に痛いミスと言わざるを得ない。

で周章狼狽するに至るのである。然るに禅は絶対的であるから、万古不易の真理で、所謂「立処皆真、随処為主」ことを得るのである。」(三九五頁)

木宮は自身が禅寺の出身であり、幼いころは他寺に出されて厳しい修行も経験した。そのような背景を持つゆえ、疑念を挟むことなく禅の教理を絶対で正当なものとみなしたのか。『日華文化交流史』は、他宗派の教義の内容に踏み込む記述がほぼ皆無である。禅の素晴らしさを絶賛するこの個所は、非常に感情のこもった記述にはなっている。しかし、はなはだ公平さを欠いた記述でもあり、歴史学の研究書として見た場合、ここは最も厳しく批判されるべき個所となるだろう。

⑸ 禅宗中心の日中交流史

事実、これ以降本書は専ら禅僧の日中交流の記述に傾き、他宗派のそれへの言及はほぼ皆無となる。確かに宋代以降、中国においても従来あった仏教諸宗派のほとんどが廃れ、上流階級がたしなむ禅宗と、庶民が心のよりどころとした浄土宗の二派だけが生き残る状態となった。木宮は、

「中国に於ける禅宗は五代・北宋を経て益々盛大に赴き、南宋にはすでに爛熟期に達し、中国の仏教といへば、殆ど禅宗に限られるようになつた。」(三五三頁)

と断じ、入宋禅僧による宋版大蔵経・儒教典籍・仏像・建築技術・医術・印刷技術・喫茶の習慣などさまざまな文化要素の招来について述べる。

しかし、禅宗の素晴らしさ、鎌倉武士による禅宗への帰依の深さと真摯な学びを力説されればされるほど、中国文化に盲目的に迎合する前近代社会の日本人の姿が浮き彫りにされるだけのようにも思われる。

ともかく、禅僧の往来を中心とする日中の文化交流はその後も拡大の一途を遂げた[68]。

⑹ 元寇と日元関係

元寇の後、日元関係は政治的に緊張していながらも、禅僧や商人を中心とした交流が盛んに行われていた。第三章の冒頭で木宮が元代の中国と日本の関係について、

「日元両国は互に戦備を整へ、頗る険悪な情勢にあつた(中略)何人と雖もこの間に平和的な通交が行はれやうとは、容易に想像も及ばないであらう。(中略)

[68] 何忠礼(著)、柏崎有里(訳)「南宋時期における日中文化交流:禅僧交流を中心に」『岩手大学平泉文化研究センター年報』五巻(盛岡:岩手大学平泉文化研究センター、二〇一七年三月)、一〇五頁－一一四頁。

日元間の通交が意外に頻繁であつたことに一驚を喫せざるを得ない。（中略）元末凡そ六七十年間は、各時代を通じて我商舶の最も盛んに彼地に赴いた時代と想はれる。」（四一〇－四一六頁）

と記し、入元僧も「幾百人あつたか計り知れないほどである」（四一六頁）とその多数を強調する。

木宮は、元寇後に多数の元の商船が盛んに往来した理由を次のように解説する。

「文永・弘安の両役（一二七四年・一二八九年）により、海洋を隔てた日本を征服することの困難なことを覚り、平和的手段によつて、帰服せしめようとしたからであろう。」（四一六頁）

しかし、こうした木宮の分析は根拠に乏しい。なぜなら、フビライが三度目の日本遠征を計画していたことは周知の事実だからである。なぜ二度の元寇を経ながらこの時期の日中間の貿易が突出して盛んだったのか、という根本的な疑問に木宮は答えていない。

実はこの点に関し、不可解な事実がある。木宮は『日支交通史』下巻に「第三章元寇」を設け、その中で日本征服に二度失敗したフビライが「憤激の余り、大規模の軍備を整へようとしたが、その結果徒に民を疲らし、騒擾を醸し中止の已むなきに至つた」。しかし、「そこで彼は日本の上下が深く禅宗に帰依してゐるといふことを聞いて一策を案じ、普陀山の僧愚渓如智等を遣はして、日本を諭さしめようと考へ」（『日支交通史』下巻、一二四頁）たものの失敗する。その後フビライが死去（一二九四年）した後も、元は高麗軍の派遣という形でしつこく三度目の日本侵攻を企てていた。ついに一三〇一年薩摩の甑島を襲撃したのを最後に、日本侵攻計画は記録から消える（『日支交通史』下巻一三二頁）。右の『日華文化交流史』四一六頁のあいまいな推測より、はるかに説得力のある記述である。

ところが、概ね『日支交通史』の本文･構成を引き継いでいる『日華文化交流史』において、なぜかこの「元寇」の章は完全に削除されている。なぜ木宮はそうしたのか。この章を残してあれば、あたかもフビライの第三次日本遠征計画について、木宮が知らないかのように誤解される恐れも生じる『日華文化交流史』四一六頁の記述も不要になったであろうに、全く不可思議としか言いようがない。

ちなみに今日では、日元間の活発な貿易も「モンゴル大帝国」のユーラシア支配による「商業の自由化」の成果の一端として、次のように理解されている。

「クビライ政権は、陳朝安南国、チャンパー、緬国（現在のミャンマー）、ジャワにも数次にわたって遠征部隊を送った。（…中略…）しかし、陸上進攻の緬

国遠征のほかは、炎暑と疫病などのため、いずれも軍事上は撤退するかたちで終わるものが多かった。従来、これをもって、「モンゴル敗退」といわれがちである。だが、(…中略…) これらの遠征は、もともと征服・支配よりも、服属や来貢をうながしたり、通商ルートを把握することを主目的としていた。結果として、東南アジア海域の海上ルートを、モンゴルは直接に掌握する。モンゴル側から見れば、十分に目的ははたされていた。」[69]

木宮に「商業の自由化」という視点がないのは、戦前の歴史学の水準の限界のゆえか。

⑺ 禅僧と文化交流

第四章や第五章において木宮は、帰化元僧・入元僧とも「総てが禅僧」(四八〇頁)と明言する。木宮は元僧に全て禅宗の僧侶ばかりを挙げており、他の宗派の僧侶を載せていない。実際に元僧は全て禅僧であったのか、それとも木宮の出自や関心から禅宗を取り上げたのか、詳らかにならない。

入元僧は、前代の入宋僧に比べて禅そのものを伝えるという志が低く、熱意に欠く。入元そのものが流行化しており (四六六頁)、彼らには「観光的漫遊的」(四六九頁) 傾向が強かった。したがって入宋僧に比べて、入元僧の日本に与えた影響力は小さい。とはいえ、いま一方で、彼らによって詩文学・儒学 (宋学)・史学・書道・絵画・茶道・日常の衣食住など広範な文化が中国 (元) からもたらされたことは、「寧ろ幸福」(四六九頁) と評す。外交・政治的交流や経済的交流、また仏教教義をめぐる交流よりも、それらを包摂しつつ日常の人々の暮らしや芸術にまで影響を与えた広義の「文化交流」に強い関心を抱いた木宮ならではの叙述と言える。

そもそも元の仏教 (元僧) の力が落ちているのに、観光的漫遊的な入元僧が多く存在した (四九八頁)。結果として、こうした入元僧のために、仏教以外の文化が多く日本へ移植されることになった。これは、20 世紀後半の日本における留学ブームと似ている。当初の留学生は純粋に学問追及を目的としていた。しかし、徐々に留学ブームが起こり、観光の延長線上の留学や何となく箔を付けるためだけの留学などが増えていく。とはいえ、観光客のような留学生が欧米文化を日本に持ち込み、新たな流行を作り出してきたことも事実である。

[69] 杉山正明『中国の歴史８　疾駆する草原の征服者―遼・西夏・金・元』(東京：講談社、二〇〇五年)、三二七頁。

⑻　大蔵経の開版

第四篇第五章では大蔵経の開版について記述する。大蔵経（一切経）とは仏教聖典の総集である[70]。宋代以降、写本から刊本へと移行し、多くの大蔵経が作られる。日本国内で開版できるようになったのは、江戸時代以降だという。したがって当時、元から日本へ持ち込まれた様々な大蔵経は大変貴重なものであったにちがいない。大蔵経の開版の試みはこれまでも何度も行われ、たび重なる試みが開版技術の向上につながった（四七六頁－四八〇頁）。大蔵経の開版は、入元僧が日本へもたらした文化移植の一つである。

⑼　独創的見解と豆知識

その他、本篇に見える木宮の独創になる記述を挙げておく。第五章で多数の元の彫工が来日し日本の開版事業が盛行したことを述べた個所について、木宮自身が『無量寿禅師日用清規』の彫工者を最も有名な彫工である兪良甫と明らかにした点（四八九頁）、同章で漢文学の「五山文学」を「全然和臭を脱して殆ど生粋の宋元の詩文学と異なるところがない」ことをもって前後の時代のそれと比べて「最も優秀なもの」とする点（四九九頁）、『喫茶往来』の製作年代について平泉澄の説を批判した点（五一二頁）などが挙げられる。また「自画自賛」の由来（五〇六頁）、ケンチン汁の由来（五一五頁、及び五一九頁注（５））などの情報も木宮ならではの該博な知識が垣間見られておもしろい。

（五）第五篇「明・清篇」（全六章、五二一－七一九頁）

［第五篇各章の概要］

第五篇は明と清を範囲にして、日中間における人間の移動を考察する。各章の題目は、

第一章「足利幕府と明との通交貿易（其一）（第一期勘合貿易）」（五二三－五四七頁）、
第二章「足利幕府と明との通交貿易（其二）（第二期勘合貿易）」（五四八－六〇一頁）、
第三章「入明僧・来朝明人と文化の移植」（六〇二－六二六頁）、
第四章「明末に於ける日華の通交」（六二七－六四三頁）、
第五章「清との貿易」（六四四－六九四頁）、

[70] 京都仏教各宗学校連合会（編）『大蔵経：成立と変遷』〔新編〕（京都：法藏館、2020）。宮崎展昌『大蔵経の歴史：成り立ちと伝承』（京都：方丈堂出版、2019）。

第六章「来朝並びに帰化明清人と文化の移植」(六九五－七二〇頁)、
である。

本篇は、明から清までを扱う。ただし、一八四〇年のアヘン戦争以降は含んでいない。この時代には、日中双方が国家間で正式な交流を再び行うことになった[71]。

第五篇第一章「足利幕府と明との通交貿易(其一)(第一期勘合貿易)」は、日明間の交易について概説している。木宮は日明間の交易を二つの時期に分け(五三三頁)、第一章で第一期(一四〇四－一四一九年)を、第二章で第二期(一四三二－一五四七年)をそれぞれ扱う(五三三－五三四頁)。

なお第一期に先行して、九州の征西府(懐良親王)と明との交渉もあり、これを第一章第一節で述べている。征西府が明との交流に消極的だったのに対し、足利幕府(足利義満)は明との交易によって得られるだろう利益を知り、積極的に交流を始める。足利幕府は当時、財政難だったという(五二九頁)。

日明双方が交易を企てる理由は、日本は経済的利益を獲得するためであり(五二九頁)、明は倭寇(武装した貿易組織)を取り締まるためである。日明両国は永楽条約(勘合貿易条約、制限規定)を結ぶ(五三二頁)。勘合符を使うのは、貿易船と倭寇船を区別するためである(五三三頁)。勘合貿易は、第一期の方が第二期よりも幕府が主導する性格が強く、交流が積極的である(五三四－五三五頁)。特に第一期は、「外交上の儀礼によって行われた一種の官貿易と見ることが出来る」。明からは銅銭が、日本からは金や馬などがそれぞれ往き来するも、品目が一定しなかったという(五四六頁)。後に足利義持が国交を絶ち、第一期の勘合貿易が終了すると、再び倭寇の勢いが増すこととなる(五三九頁)。

第五篇第二章「足利幕府と明との通交貿易(其二)(第二期勘合貿易)」は、第一章に引き続き、日明間の交易について概説している。第二章では、足利義政によって復活した第二期勘合貿易の様子が、例えば使節の規模、航路、貿易品などの観点から説明されている。宣徳条約にて、勘合貿易は「十年一貢、人三百人、船三艘」というふうに規定したものの、十年一貢しか遵守されなかった(五六四－五六五頁)。というのも日明双方の事情があり、とりわけ日本の事情があったからである。明としては頻繁に遣明があると返礼品の費用がかさむものの、倭寇の取り締まりのために、日本の進貢を歓迎せざるを得ない。特に日本としては勘合符の獲得をめぐり寺社、幕府、大名(大内、細川)が勢力を争うから、準備の時間が必要になったから

[71] 遣明船に関する最新の研究成果には、村井章介(編集代表)、橋本雄(ほか編集)『日明関係史研究入門：アジアのなかの遣明船』(東京：勉誠出版、二〇一五年)が挙がる。

だという（五六四－五六五頁）。第二期には勘合を巡って国内の勢力争いが起こったように、幕府に貿易を主導する力がなくなりつつあった（五五四頁－五五九頁）。また、応仁の乱のために、日本での航路が瀬戸内海（中国路）と四国南部（南海路）に分かれた（五五三、五七六－五七八頁）。

第五篇第三章「入明僧・来朝明人と文化の移植」は、日明双方の僧侶の往来により双方での文化の移植を説明しようと試みるものである。しかしながら、実際のところ木宮の考察は、入明僧の渡航（人名、目的（求法から文芸詩文へ）、遊歴地（江南から北京へ）、将来品（倭臭のない漢文））を跡付けるにとどまっている。もちろん跡付けるだけでも大変な作業である。また、来朝明人は著名人が少なく、そのため存在自体が知られていないようだ。

第五篇第四章「明末に於ける日華の通交」は、日華間の交易を日本のいくつかの勢力（幕府と非幕府）に基づいて解説する。足利時代には、幕府のみならず地方政権も日中交流に関わった。九州諸侯と明の通交貿易は盛んで、九州諸侯が明との通交貿易を求めて倭寇と結託したこともあった。しかし、織豊時代には、明の商船の来航が途絶する（六二七－六三五頁）。徳川家康が天下を統一すると、日明貿易の再開を企てる（六三六頁）。ただし、江戸幕府は鎖国政策を採ったため、前代までと異なり日本から中国に渡った人士について、本書は一切記述していない。

日明間の交易の経路には、対馬－朝鮮という経路と、薩摩－琉球という経路があった（五五三頁）。特に第二期勘合貿易時代に南海路が生まれてから、薩摩が交易の重要拠点になったという（六三一頁）。日明の貿易は、勘合貿易以外を禁止していたにも関わらず、薩摩、豊後、平戸には明船がよく来航していた（六二七頁）。

第五篇第五章「清との貿易」は、長崎という日本唯一の海外貿易港を中心にして、日清間の貿易を概述する。鎖国政策に伴い、日本から清へ渡った人々がいなくなったからである。ここでの清には、中国のみならず東南アジアも含まれている（六五八頁）[72]。

木宮は、まず幕府による長崎の管理や運営について述べる。続いて、清舶の来往を船舶の数量で示す。そして、貿易額や入港船数の制限に話題が及ぶ。制限したのは、清船の来航増加をそのまま放置すれば、日本の金銀銅が枯渇すると幕府が判断したからである（六六〇頁）[73]。例えば、「信牌」（割符、六六五頁）なるものを使い、

[72] 広南（六五八頁）は、ベトナム南部にあった国家のことである。
[73] 銀の流通については、次の書籍に詳しい。豊岡康史、大橋厚子（編）『銀の流通と中国・東南アジア』（東京：山川出版社、二〇一九年）。

それを持たない船の入港を禁じて、貿易を制限した。しかし密貿易（抜荷貿易）はやまない。貿易の場面では外国人に対する抜刀が禁じられていたから、違反を強く取り締まれなかった(六六四頁)。貿易が減少するのは、日本の銅の産出が次第に減ったからであるという（六六七頁)。一八世紀には海上貿易が低下する（六八五頁)。

本章ではさらに、長崎での唐人居留、貿易法、貿易税、貿易品にも話題が続く。貿易品では、中国書（唐書）の流入が、日本の学術全般を向上させたという。清との貿易では、物品や食品に加え、珍獣奇鳥などの輸入もあった。長らく日本からの輸出品として目玉商品だった刀剣や硫黄が禁輸品になった。ただし、禁輸に至った理由への言及はない（六八六頁－六九四頁)。

第五篇第六章「来朝並びに帰化明清人と文化の移植」は、日本に来た明清人が日本文化に与えた影響について述べている。本章は四つに分かれる。第一に、来日した明清僧を挙げる。一覧表には六〇余名が挙がり（六九五－七〇一頁)、人数は鎌倉足利時代より多い。中国から僧侶を迎え、長崎の唐三個寺（南京船の興福寺、漳州船の福済寺、福州船の崇福寺）の住持に充てる慣例になっていたからである。とはいえ凡僧ばかりであり、「文化的には殆ど影響を与ふるところがなかった」(七〇一－七〇二頁)。唐三個寺には、船神媽祖堂があったという（七〇二頁)。しかし、一七二六年以降、渡来が止む（七〇四頁)。第二に、隠元を中心にして禅宗（臨済宗）の日本文化への移植を説く。ここで鉄眼の名前も挙がるものの（七〇五頁)、一切経の印刷について言及はない[74]。渡来僧は中国風の生活を日本でも続けた。例えば普茶料理がそれである（七〇八頁)。第三に、長崎在住の中国人とその子孫、第四に、長崎以外に在住の中国人（例えば朱舜水）とその子孫にも話題がそれぞれ及ぶ。例えば、中国から医学が入ってきた。美術（書画）も日本へ入ってきて、池大雅や与謝蕪村を生み出す（七一六頁)。また、江戸時代の禅宗は中国語を使い、そうした風潮が荻生徂徠の漢文読解（訓読しない）に影響した（七一二頁）[75]。さらには、日本に来た中国人の中には、時にキリシタンがいたようだ（七一一頁)。要するに、本章は中国文化がどのように日本文化へ移植していったのかについて説明している。とはいえ、こうした説明は多くが中山久四郎の議論に依っているようである(七〇六頁など)。

総じて、本篇は明から清までの日中交流を、正式な国家間交流として考察してい

[74] 仏教経典の集大成である一切経を鉄眼が開版した。版木が宇治市の黄檗山宝蔵院（http://www.tetsugen-zakura.com）に残る。

[75] 荻生徂徠に中国語を教えた岡島冠山とは誰なのか。徂徠のナショナリズムと漢文読解はどのような関係にあるのだろうか。

る。それまでの時代と比べ、この時代は現存する資料も多いだろうから、木宮の考察はほとんどが事実関係の特定に集中していた。

［第五篇での議論］

⑴　資料と構成

第五篇（全六章）も一九八ページあり、第四篇と並び全体の二八パーセントを占めている。この時代は現代に近づくから、残っている史料も多い。そうした史料における記述を細大漏らさず取り上げるのが、木宮の研究姿勢である。そのため、第五篇の分量が増えたのは当然であろう。

第三章における入明僧の一覧表には百十余名が挙がる。上村觀光（編輯）『五山詩僧傳』（東京：民友社、1912）の挙げていた五〇余名を、人数においても、情報の正確さにおいても上回ると自負する（六〇二頁）。

第五章は、長崎での貿易の様子を詳細に記している。これは、鎖国下での貿易を厳しく管理統制しており、行政文書が多く残されたからか。

⑵　国体

第五篇で特に目立つのは、足利政権（室町幕府）の対明貿易の姿勢に対する批判と、逆に反明的姿勢に終始した懐良親王（後醍醐天皇の皇子。九州に征西府を置き室町幕府と対立）を絶賛する姿勢である（五二七頁）。足利義満が、「爾日本国王源道義」と記し日本を属国視した明･恵帝からの国書と正朔を甘んじて受けたことを、

「我が外交史上未だ曾て見ざる汚点を印したものとして、後世から大いに避難されたところである。」（五三一頁）

と断じる。また、義満が明の成祖永楽帝に自ら「日本国王臣源表」と題した国書を送ったことについても、

「我が国体を辱しめたことは言語道断といはねばならない。」（五三一頁）

と手厳しい。一方で明の太祖洪武帝に一戦を交える覚悟を示した返書を送った懐良親王については、

「その雄偉なる意気､その壮快なる文辞一異彩を放つものといふべきである。」（五二七頁）

と激賞している。このあたり、木宮の筆法は後醍醐天皇の建武の親政を挫折に追い込むことで成立した足利政権に終始批判的である。それは戦前の皇国史観に照らせばごく普通の態度ではあるが、戦後十年経ってもその態度を改めなかった理由は何

か、どうにも判然としない。

そうは言っても足利義満の低姿勢によって明とのいわゆる勘合貿易が始まり、日中の交流がまた盛んになったことは否定できない。その交流の事実についての木宮の記述は変わらず精細である。日本側は専ら貿易の利益を求め、明側は貿易と引き換えに日本が倭寇を取り締まることを常に期待していたと分析している。

第二章によると、一時途絶えていた勘合貿易が足利義政の時代に復活したのは、明が日本からの朝貢のないのを遺憾としたからだという。義政が天龍寺の僧侶である龍室道淵を使者として明へ送ると、明帝の宣宗は大いに喜び、道淵を天龍寺に住持させる勅諭を出した。木宮は、「道淵がもと明人であったとはいへ、明帝が彼を以て我が官寺である天龍寺に住持させるといふのは、甚だ奇怪なことである」と述べている(五四九頁)。

また、木宮は遣明表(勘合船を派遣する際に足利将軍から明帝へ送った書簡)に対して、「我が体面を損ずることの甚だしいものであった」と否定的にとらえている(五六〇頁)。とはいえ、中には文章表現を工夫して日本の体面を保とうとした事例も挙げている。

⑶ 海外に及ぶ守護大名の勢力争い

第二章によると、日本国内での競争や衝突が激化し、国内の有力守護大名である大内氏と細川氏が一五二三年に寧波で衝突(寧波の乱)し、勘合交易が一時中断される。古い弘治勘合を細川氏が、新しい正徳勘合を大内氏が持っており、これが両氏の権力闘争を煽る原因になった(五六三頁－五六七頁)。

⑷ 僧侶の役割

明初の入明僧は入元僧とほぼ同じく、商船に身を託して入明し、求法や詩文学修を目的とした。表面的には禅法を求めるために入明しながら、実際は叢林生活を経験し中国の風趣を味わい、明人に劣らぬ詩文を作ることが目的であった。滞在時間が長いだけに、明からの文化の移入に彼らは大きく貢献した(六一四頁)。

これに対し、永楽条約以降になると、入明僧は足利幕府からの使僧(外交使節の一員)のみになった。僧侶の役割の変化には、明の厳格な海禁政策の影響があったという。使僧であるから滞在時間が一、二年に過ぎないものの、詩文や学芸に秀でた者が多く、明で評価された僧も多い(六一六－六一七頁)。

⑸　和臭のない漢文

第三章では、木宮は入明僧が中国人と同じように詩文を作ることのできたのを高く評価する。永楽条約以降の入明僧は使僧であるから、外交使節の一員として江南の五山十刹などの名庭だけでなく、南京や北京といった都を訪問する。寧波から都までの相当長い道中で、様々な寺院や名刹に立ち寄った。このように入明僧は訪問期間が短く旅程も多忙を極めたにちがいないものの、遊歴地で多くを学び、中国の文化を日本へ移入した。入明僧の日本へ持ち帰った物のほとんどは書籍だった。木宮は、「五山文学が平安期の貴族によって作られた漢文学や徳川の儒者によって成された漢文学と異り、全然倭臭を脱した生粋の漢文学であったといふことも偶然ではない」（六二四頁）と述べて、入明僧の漢文運用能力の高さを評価する。ここには、中国文化に対する木宮の畏敬の念がある。

⑹　薩摩と琉球

第二期勘合貿易時代に南海路が生まれてから、薩摩が交易の重要拠点になる（六三一頁）。木宮は「薩摩が琉球を介して間接的に明と交易したことは看過し難い」と言い、薩摩による中国との密貿易を指摘する（六三五頁）。こうした薩摩の蓄積が明治維新につながるのだろう[76]。

⑺　長崎

江戸時代は日本から中国への渡航がない。そこで、その欠を埋めるためか、唯一の貿易港となった長崎における貿易機構や人的組織の説明（第五章第一節）や、長崎における清の貿易商人の滞在方法の説明（第五章第五節）、さらには貿易法（第五章第六節）や貿易税（第五章第七節）など、これまでの『日華文化交流史』ではほとんど見られなかった記述が目立つ。

例えば、清人を宿町に宿泊させる弊害は、清人の不作法な喧嘩、口論、町屋の妻娘との私通、さらには繰り返す密貿易だったという。そこで、江戸幕府は1689年から清人をことごとく唐人屋敷に居住させた（六七三頁－六七六頁）。長崎において清人の商人たちは傍若無人にみなされた。そもそも、長崎に来た清人は、どのような階層の人々だったのか。さらには、当時の清人は日本人をどのような態度で接していたのか。

[76] 薩摩や長州の密貿易については、後に宮崎市定も指摘している。宮崎市定『アジア史概説』〔中公文庫〕（東京：中央公論新社、一九八七年）、四三六頁。

また、貿易税にも言及する。「我が国に於ては、古来海外との貿易に於て、税を課したといふことはなかつた」。しかし長崎貿易において、様々な名目を設けて税の徴収が始まったのである。買い手である日本の商人からだけでなく、売り手である清商からも税を徴収し、税は長崎の収入となり、一部が幕府に上納された（六八〇頁－六八二頁）。

第五章には、長崎に登場した清国の文化が挙がる。『清俗紀聞』を併用して参照すると、『日華文化交流史』が文字で挙げた風俗や文物が絵図で理解できよう。『清俗紀聞』とは、寛政年間（一七八九－一八〇一年）に長崎奉行の中川忠英が中心となり、長崎貿易での実務を処理する際の参考書として、乾隆時代の中国南方の風俗慣行文物を記録した書籍である[77]。編集に際しては、長崎の唐通事を動員して、清の商人から情報を収集したという。絵画に解説を施した調査記録であるから、読者は視覚的に一八世紀末の中国文化を理解しやすい[78]。

⑻ 信牌交付をめぐる日清関係

鎖国下とはいえ、長崎での清との貿易は活発であった。そこで、江戸幕府は新井白石の建言に基づき、やむなく年間の来航船数を制限したり、「信牌」を発行してそれを持たない船の入港を禁じたりした。貿易を制限しないと、日本からの金銀銅の著しい流出が止まらないからである（第五章第三節）。

木宮は言及していないものの、清国では信牌事件が起こっていた。すなわち、清国において、「信牌」というものはそもそも清国が朝貢国に付与するものである。したがって、日本が清国に交付するのは適切でないのだという。朝廷での審議の末、康熙帝が勅裁を下す。それは、信牌は単なる商人の交易上の印判に過ぎず、国家間の外交文書でもなく、国典にかかわる大事ではないという内容だった[79]。信牌事件は国体に関係するできごとなので、木宮の論評が欲しかったところである。

---

[77] 入手しやすいのは、中川忠英（著）、孫伯醇、村松一弥（編）『清俗紀聞』〔東洋文庫 62,70〕（東京：平凡社、1966 年）になろう。

[78] 『清俗紀聞』については、小川快之氏（国士舘大学文学部教授）に下記の座談会でご教示いただいた。小川快之「木宮泰彦『日華文化交流史』を活用した異文化理解教育の可能性について――江戸時代における中国文化の影響を中心に」（常葉大学静岡草薙キャンパス、2020 年 1 月 9 日（木））。

[79] 劉序楓「清代前期の福建商人と長崎貿易」、『九州大学東洋史論集』十六（福岡：九州大学文学部東洋史研究会、一九八八年一月）、一四一頁。

⑼　黄檗宗

第六章は本書の最後を彩る記述であり、清代に日本に伝わった黄檗宗の文化的影響を記す。中国式の読経・建築様式・文化様式を日本でも堅持した黄檗宗の影響は、建築・書画・印刻・医術・音楽・料理など多岐に渉った。木宮は相変わらずそれぞれを詳細に述べる。黄檗宗の開祖である隠元が来日したことは、非常に大きな意味を持った。中国の臨済禅は、明末に浄土教を取り入れて念仏禅に変わる。そのため、隠元が日本へもたらした禅は、同時代の日本の臨済宗や曹洞宗の禅とは異なっていた。そのため、日本人の精神性に与えた影響は少ない。しかしながら、高僧中の高僧である隠元および彼の弟子たちの来日は、日本の禅宗に大きなインパクトを与えたに違いない（七〇四－七〇五頁）。

なぜ江戸幕府が黄檗宗をそれほど鷹揚に受容したのか。木宮はこの疑問に答えてくれない。他の研究によると、隠元の来日は、中国での王朝交代に伴う混乱からの避難だったという。明の仏僧が日本に亡命して、日本で黄檗宗を開いたわけである。江戸幕府は明を直接支援しなかったものの、明の遺臣の動向を追うのに著名な禅僧隠元や儒者朱瞬水を利用したのだった。そして、鄭成功は長崎での日本との接触を秘かに残しつつ、台湾を拠点にした[80]。4 世紀初めの楽浪郡や帯方郡の滅亡、7 世紀の白村江の戦い、17 世紀の明清交替の際に、中国大陸から日本へ亡命する人々がいる。こういった歴史的背景を踏まえると、近代における康有為、梁啓超、孫文らの日本への亡命は、近代だけの特異な現象なのではなかろう。

⑽　近世日中交流の意義

結局のところ、近世の日中交流は、同時代の世界史の中でどのような位置にあったのか。鎖国と呼ばれた江戸幕府の貿易は中国貿易だけでなく、オランダ貿易も展開した。ならば日本の近世文化にとって、中華文明はオランダやキリシタン（キリスト教）といった西洋文明とともに、どのような意味を持ったのか。さらに近世の日中交流は、アヘン戦争以降の近代の日中交流や日中両国の展開に対し、どのような影響を与えていくのか。例えば、近代仏教学は仏教学を大いに進展させたとい

[80] 劉序楓「第一章 近世日本における「華僑」社会の形成と変遷」、徐興慶、劉序楓（編）『十七世紀の東アジア文化交流：黄檗宗を中心に』〔日本学研究叢書 30〕（台北：國立臺灣大學出版中心、2018 年）、pp.44－45。エズラ・F・ヴォーゲル（著）、益尾知佐子（訳）『日中関係史：1500 年の交流から読むアジアの未来』（東京：日本経済新聞出版社、2019 年）、pp.89－90。ヴォーゲルの原著は、Ezra F. Vogel, *China and Japan: Facing History*, Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 2019.

う[81]。ならば、仏教においてどのような意義を持つのか。近世日本(室町から江戸まで)の仏教学は、日中交流を背景に持ちながら、仏教の教理の何をどのように追究し、そして近代仏教学の準備となったのか。大和朝廷の成立、大仏の建立、空海最澄の登場、国風文化の形成など、数々の新たな現象や事件を木宮は、前代からの日中交流の延長線で意義付けてきた。だからこそ、木宮が近代日中関係史を解説すれば、きっと興味深い内容だったに違いない。

なお、江戸時代における世界観や歴史観が明治以降のそれとの間に断絶があるのは、明治以来の教育に原因がありそうである。大庭脩によると、江戸以来の当たり前のことが明治になると特記されなくなるという。

「江戸時代の日中関係を調べているうちに、私は何だか江戸幕府の功績をネグレクトし、江戸幕府を必要以上に悪者に仕立てているのではないかという気がしてきた。もしも―歴史にもしは禁物だが―もしも明治維新が『聖武記』や『海国図志』を一番に買っていた人たちの手で、例えば公武合体派の手で行われたとしたら、どこかが変わっていたかも知れないという気もする。われわれ日本史の常識は、案外、薩長史観を無批判に受入れてしまっているのかも知れない。」[82]

【参考資料】

日外アソシエーツ株式会社(編集)『学校創立者人名事典』〔*Biographical Dictionary of School Founders in Japan*〕東京:日外アソシエーツ、二〇〇七年、一〇五頁。

[81] 近代仏教学とは、学問としての仏教研究である。近代になり、様々な学問分野(文献学、歴史学、言語学、考古学、文化人類学)から仏教の実態を究明する研究が始まった。小川一乗『仏性思想論』〔小川一乗仏教思想論集 第1巻〕京都:法藏館、2004年、pp.i-ii。日本に即して言えば、かつて江戸時代は宗派仏教内での教義の研究があった。明治になると、サンスクリット語で原典を読み、そもそも「仏教(大乗仏教)とは何か」を問うようになる。小川一乗『浄土思想論』〔小川一乗仏教思想論集 第4巻〕京都:法藏館、2004年、pp.185-186。

[82] 大庭脩『日中交流史話:江戸時代の日中関係を読む』(大阪:燃焼社、2003年)、pp.252-253

(6)「静岡女子高等学院設立趣旨」(1946)

敗戦によって混沌・不安・惨苦のどん底に陥った日本をして再び立ち上らしめ、光輝ある平和な文化新日本を建設する為には、何といっても先づ教育の力に俟たなければなりません。殊に将来家庭の主婦たるべき女子の教育は欧米諸国に比べて、今まで頗る軽視されてゐたゞけに、今後は大いにこれを重視し、その発展を図るべきであります。由来静岡の地は北に富士の霊峰を仰ぎ、南に碧なす駿河の海原を控へ、学都として好適の地であるにかゝわらず、若き世代を担ふべき女子の高等普通教育を授くべき、たゞ一つの機関すらなかったことは、如何にも不思議なことであり、遺憾なことであります。これが為に向学心の盛んな女性は、家を離れて遠く東都に遊学したのでありますが、戦災後の東都は宿るに家なく、食ふに糧なく、而も学費は月々嵩むのみで、修学を継続することは益々困難となり、中途退学を余儀なくされる状態にあります。この欠陥を幾分なりとも補ひ、若き女性の向学心に応へようとして計画しましたのが、静岡女子高等学院の設立であります。私はもともと本県の産であり、過去二十年間静岡高等学校教授として、育英に携わった関係上、最も静岡の地に親しみを覚え、愛着を感ずるものであります。性来甚だ不敏ではありますが、今までの永い体験を活かし、当市に於ける女子高等普通教育発展の礎を築きたいと念願してゐます。幸に大方諸賢の御支援と御庇護とを賜わらば、独り私のみの喜びではありません。

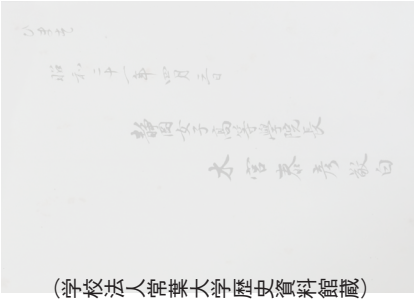
資材不足の折柄、遽かに新校舎を建設することは、困難でありますから、とりあへず、静岡大岩臨済寺の一部を借りて、授業を開始することに致します。荒涼たる焼野原のバラック生活に、若き女性の心は、ともすれば荒び勝ちになると思われます。名刹臨済寺の静寂な一室、明窓の下、浄机を並べ、趣味豊かな講義に耳を傾け、或はさまざまの優麗典雅な技能を習得し、和やかな心の糧を得ることは、今日真に意義あることゝ思ひます。

昭和二十一年四月三日

静岡女子高等学院長

木宮泰彦敬白

(6)「静岡女子高等学院設立趣旨」(1946)



(学校法人常葉大学歴史資料館蔵)

(7)　主要著作目録

『栄西禅師』東京：丙午出版社、1915 年 2 月。
『おもしろい日本歴史の話』東京：冨山房、1920 年 10 月。
『参考日本通史』東京：冨山房、1923 年 8 月。
「日本震災史概説」、『社会史研究』第 10 巻 4 号〔日本震災史〕（東京：日本学術普及会、1923 年 12 月）、pp.1-17。
『日支交通史』〔上巻〕東京：金刺芳流堂、1926（大正 15）年 9 月。
『日支交通史』〔下巻〕東京：金刺芳流堂、1927（昭和 2）年 10 月。
陳捷（訳）『中日交通史』〔上下巻〕上海：商務印書館、1931 年 5 月。
『新日本史：師範学校用』東京：冨山房、1931 年 9 月。
『日本古印刷文化史』東京：冨山房、1933 年 2 月。
『日宋関係』〔国史研究会編、岩波講座日本歴史〕東京：岩波書店、1933 年 10 月。
『参考新日本史』東京：冨山房、1937 年 4 月。
『新日本史：中学校用』〔初級用〕東京：冨山房、1937 年 8 月。
『新日本史：中学校用』〔上級用〕東京：冨山房、1937 年 9 月。
『新日本史：実業学校用』〔上級用〕東京：冨山房、1939 年 9 月。
『新日本史：実業学校用』〔初級用〕東京：冨山房、1939 年 10 月。
『日支文化交渉一覧図と年表』東京：冨山房、1940 年 2 月。
『日本喫茶史』東京：冨山房、1940 年 10 月。
「禅と印刷」、『禅』〔第 2 巻〕東京：雄山閣、1941 年 6 月、pp.1-65。
『日本民族と海洋思想』東京：日本文化連盟、1942 年 1 月。
『日華文化交流史』東京：冨山房、1955 年 7 月。
胡錫年（訳）『日中文化交流史』北京：商務印書館、1980 年 4 月。

* 『日華文化交流史』〔第 4 刷、生誕百年記念出版〕（東京：冨山房、1987 年 9 月）に所収の著作目録などに基づき、若松が作成（転写）した。

第３部
研究活動に対する評価

(1)　関係資料の所在

若松　大祐

はじめに
一、歴史資料館の現状
二、東京大学在学時のノート
三、木宮泰彦日記の所在不明

はじめに

木宮泰彦は『日支交通史』を増補改訂するに際し、1940 年夏に中国で臨地調査を行った。つまり、『日華文化交流史』には中国での調査が反映されている。木宮の日記は中国調査の実態をいくらか伝える。そこで我々の共同研究では、木宮泰彦の 1940 年夏の日記オリジナルを探している。残念ながら、日記オリジナルは今なお所在が不明なままである。本稿では日記オリジナルを探す過程で、学校法人常葉大学の所蔵する木宮泰彦関係資料の現状について確認できたことを記す。資料調査を進める上で関係者からの協力を得た。本稿ではすべて敬称略とする。

一、歴史資料館の現状

学校法人常葉大学には、歴史資料館がある。ここには創立者木宮泰彦に関するものだけでなく、学園全体の沿革に関するものを所蔵する。

歴史資料館

【表】学校法人常葉大学の歴史資料館

	創立者資料室	歴史資料館
目的	創立者木宮泰彦に関する資料を保管し、公開する。	学校法人常葉学園の沿革に関する資料を保管し、公開する。
収蔵品	216 品 －新川稔の作成した収蔵品台帳（目録）による。	180 品 －新川稔の作成した収蔵品台帳（目録）による。
所属	学校法人常葉大学 法人本部総務部総務課	学校法人常葉大学 法人本部総務部総務課
場所	瀬名キャンパス本館２階 →瀬名キャンパス本館４階 →閉館	瀬名キャンパス２号館２階 →瀬名キャンパス３号館３階
現状	資料が、常葉会館（静岡市葵区鷹匠）の倉庫および瀬名キャンパス３号館３階の歴史資料館に、分散して配置される。2020 年９月 18 日には、常葉会館奥の倉庫２階から段ボール箱（５箱）を瀬名キャンパスの歴史資料館へ移動した。	2021 年現在、事実上の閉館状態が続く。

若松が 2019 年 10 月 16 日（水）に、若松と中野直樹が 2020 年６月 24 日（水）および 11 月 20 日（金）にそれぞれ数時間ずつ、主に木宮泰彦日記の確保を目的として、極めて初歩的な資料調査を行った。残念ながら日記の所在は不明なままであるものの、木宮泰彦資料に関していくらか分かってきたことがある。

2021 年現在、学校法人常葉大学の歴史資料館は事実上の閉館状態が続き、展示場というよりも、倉庫という役割を担ってしまっている。今やどこに何があるのか、わからない。しかし、20 年ほど前に、当時の大学職員だった新川稔が収蔵品台帳（目録）を作成していた。この目録（２種類、計４冊）が残っていたために、我々は収蔵品の概要を把握できる。ただし、目録に記載された収蔵品が現在も存在しているのかどうかは不明であり、点検しなければならない。なお、目録に日記に関する記載はなかった。

二、東京大学在学時のノート

2020 年 11 月 20 日（金）の歴史資料館での資料調査では、2020 年９月 18 日に常

葉会館奥の倉庫2階から瀬名キャンパスの歴史資料館へ移動した段ボール箱（5箱）を開けた。残念ながら日記オリジナルは見つからなかったものの、段ボールの中身は、創立者資料室の収蔵品台帳（目録）に記載されながら、現物の所在が不明になっていたものばかりであった。例えば、木宮泰彦の大学時代の講義ノート（約20冊）や卒業論文「鎌倉時代に於ける禅僧と武士との関係」（1913年）、さらに友人や知人からの書簡があった。

特に講義ノートの重要性に気付き、それを訴えた文章が15年前の『常葉学園だより』に掲載されているので、ここに再掲する。

「　学園の創立者資料室には、木宮泰彦先生の著作と数々の遺品が展示されている。その中に、大学生のとき、熱心に聴講した講義のノートが、何十冊も保存されている。その一つに、元良勇次郎教授「心理学概論」のノートがある。明治43年9月に東京帝国大学文科大学史学科に入学した年のノートで、見開きの左のページに講義を克明に筆記し、右のページに整理して書き直している。漢字カナ混じり文で丹念にペン字で書きとめた大学ノート5冊分（約300ページ）である。

元良教授は、ジョンズ・ホプキンス大学のスタンレー・ホール教授の下で実験心理学を学び、明治21年7月に帰国し、同年9月から、帝国大学文科大学哲学科で、「精神物理学」の講義を行った。明治26年に、日本で初めて「心理学・倫理学・論理学第一講座」の教授に就任した。大正元年12月に54歳で亡くなるまで、後輩を指導し、自身の思想を、生涯にわたって練り上げていった。日本で心理学を学ぶものは、すべてその学統につながっている。

近年、日本の心理学史研究の中心に、元良研究がおかれている。講義ノートから、最晩年の講義がどのような体形ででなされていたかわかり、最後に到達した思想に、直接触れることのできる意義は、計り知れないほど大きなものである。講義の中で、「元良の説によれば…」という断りをいれて、自説が述べられている部分がある。「自己（元良）ノ立場ハNeovitalismニ近ク生活カト心トハ同一ナリ。今日ヨリ二十年以前ニオイテハ意識ヲ以テ心ノ本質トセル時代モアリシガ決シテ意識ノミガ心ノ本質ヲナスニアラズ」と述べていることは、今後の研究に重要な意味を持っている。

元良教授の前人未到の心理学の体系を確立しようという情熱と、心理学専攻でない他学科の受講生が、講義の一言も逃さず書きとめたノートを目の当たりにして、明治の教育者と大学生の学問に対する意気込みに圧倒された。教える

ものと教えられるものの真剣勝負が、このノートにある。木宮先生が、ノートを書かれてから 95 年、今年 60 年を迎える学園草創の志の原点が、このノートに示されている。」[1]

講義ノートを始めとする木宮泰彦が残した資料は、20 世紀前半の日本の人文学における最先端の議論を今に伝えている。これら資料の内容を精査すれば、当時の帝大教授陣の講義内容も明らかになってこよう。また、ノートや書簡には、当時の口語が伺える要素もある。様々な面から見て、貴重な資料なのである。したがって、まずは収蔵品台帳（目録）に基づいて歴史資料館（瀬名キャンパス）の所蔵資料を点検し、現存する資料を把握して記録する。次に、優先順を付けて資料を写真撮影し、デジタル化して閲覧しやすくする。こういった活動を発信し続けることで、人文学的関心から常葉大学への注目も集まると予測できる。

三、木宮泰彦日記の所在不明

我々は木宮泰彦の研究者としての意義を明らかにするという目標のもと、木宮泰彦の 1940 年夏の日記を探している。日記オリジナルの所在が今なお不明である。ここでは、日記オリジナルの所在調査の進捗状況を記す。

⑴　日記原本の重要性

木宮泰彦には生涯にわたって日記を書く習慣があり、1940 年 7 月 24 日から 8 月 24 日までの一ヶ月間、朝鮮、満洲、中国を遊歴した際にも日記を書いている。この日記は、旧制高校教授という立場から見た日中戦争期の朝鮮、満洲、華北、江南を記録するものであり、近代日中関係史研究において貴重な史料である。だからこそ、学校法人常葉大学の持つ独特無比の貴重な財産であるはずだと言えよう。

確かにこの一ヶ月間の日記（抄）は、すでに『八十年の生涯：木宮泰彦自傳と追憶』（一九七〇年）や『木宮泰彦：その生涯と業績』（一九九二年）が数十ページの紙幅を使い、活字で収録する[2]。しかしながら、活字化する過程での誤植があり、史

[1] 神部尚武「教えるものと教えられるもの：創立者資料室の講義ノートを読む」、『常葉学園だより』第 171 号（静岡：学校法人常葉学園、2006 年 2 月 15 日）、p.1。なお、著者は常葉学園大学教育学部教授。

[2]「八十年の生涯木宮泰彦自伝と追憶」刊行会（編）『八十年の生涯：木宮泰彦自傳と追憶』（静岡：編者、一九七〇年）、二四一－二八一頁。創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』（静岡：編者、一九九二年）、一七三－二一〇頁。

料としての価値を大きく損なっている。また、両書が収録するのはともに一九四〇年七月二五日から八月二四日までの「日記抄」であり、内容は恐らく同じである。「抄」という文字からも想像できるように、両書に収録されたものが一ヶ月間の日記の抄録なのか、全文なのかもわからない。

活字にはこうした問題点があるから、木宮泰彦を研究する上でも、近代日中関係史の貴重な資料と位置付ける上でも、日記オリジナルの確保や参照がやはり重要になってくる。さらに日記を校訂すれば、その重要性は増す。

⑵　所在調査

2017 年に我々の共同研究が講演会を開催した際、学外から招聘した講師が日記の重要性に気付く。講師よりオリジナルを閲覧したいという申し出があったものの、そもそも本学の誰も日記の所在を知らず、日記を探すことになった。特に、2019 年度には若松が大学事務（庶務課や学生課）の協力を得て、探し始めたものの見つけ出せなかった。この過程で、2019 年 10 月に瀬名キャンパスの歴史資料館で調査を行う。しかし、歴史資料館では収蔵品が混乱していて調査作業が捗らない。かろうじて旧創立者資料室と旧歴史資料室のそれぞれの収蔵品目録を見つけ、その中に日記に関する記載がないのを確認したにとどまった。

歴史資料館を管轄するのは常葉大学ではなく、学校法人常葉大学である。2020 年 1 月下旬に、担当者である木宮史彦に尋ねるも所在は不明であり、木宮史彦はそもそも日記の存在自体を知らなかった。

2020 年 3 月下旬には、平井雅孝が関係者を招集して、下記のように会議を開き情報交換を行う。

日時：2020 年 3 月 23 日（月）10 時 30 分－11 時 00 分
場所：常葉大学瀬名キャンパス本館 2 階会議室
参加者：平井雅孝（事務局次長、法人常務理事）
　　高木敏正（とこはスイミング社長）
　　木宮史彦（法人本部）
　　若松大祐（本学外国語学部）

残念ながら、この会議でも日記オリジナルの所在は明らかにならなかった。とはいえ、所在を知っていそうな関係者 2 名の名前（後述の尾崎と高田）が挙がった。ただし、2 名はいずれも日記の所在を知らなかった。

⑶　関係者への聞き取り

若松が次の３名の人物に日記オリジナルの所在を聞いたところ、いずれも知らなかった。日記の活字の初出は、『八十年の生涯：木宮泰彦自傳と追憶』（一九七〇年）であろう。したがって、『木宮泰彦：その生涯と業績』（一九八七年）の関係者に問い合わせるのは、妥当でなかった可能性が大きい。

１．尾崎富義（元常葉学園短期大学教授）→ 2020 年 3 月 23 日（月）夕方に、若松が電話

『木宮泰彦：その生涯と業績』（創立者生誕一〇〇年記念委員会、1987 年）のあとがきには、同書の編集に尾崎富義が携わったと書いてある。問い合わせたものの、尾崎が携わったのは同書のゲラの校正や確認であった。同書における日記の掲載を知らず、日記オリジナルを見たこともなく、その所在を知らなかった。

２．高田耕輔（元篠原印刷所職員）→ 2020 年 3 月 24 日（火）夕方に、若松が電話

『木宮泰彦：その生涯と業績』（創立者生誕一〇〇年記念委員会、一九八七年）のあとがきには、同書の編集に高田耕輔が携わったと書いてある。高田は日記が活字化されて同書に収録されているのを知っていた。しかし、日記オリジナルを見ておらず、その所在を知らなかった。

とはいえ、高田氏によると、日記のオリジナルを原稿用紙に書き写したのは、印刷業者でなく、常葉学園関係者か木宮家親族であるならば、三男栄彦（故人）である可能性が高い。木宮栄彦は泰彦と同居していたから、泰彦の死後に自宅に保管されている泰彦の日記を、自宅で書き写したと推測できるという。木宮栄彦は『木宮泰彦：その生涯と業績』の編者の一人である。

３．木宮暁子（常葉大学教育学部附属橘小学校教頭）→ 2020 年 9 月 18 日（金）夕方に、若松と中野が草薙キャンパスで面会

木宮暁子は泰彦の孫にあたる。「泰彦－栄彦－暁子」というふうに三代にわたり同じ家宅に住んでいる。しかし、自宅で日記オリジナルは見たこともなく、その所在を知らなかった。なお、木宮泰彦『日本古印刷文化史』が新装版として、2016 年１月に吉川弘文館から出版された際、木宮暁子が著作権者になっている。

⑷　木宮泰彦宅

日記は個人のプライベートな持ち物である。そのように考えると、木宮泰彦日記

が歴史資料館に収蔵されていないのも当然である。木宮泰彦の自宅に保管されていたとすると、泰彦と同居していた家族が保管している可能性が出てくる。「泰彦－栄彦－史彦」の三代が同じ家宅に住んでいるため、木宮史彦・木宮暁子の兄妹による自宅での資料調査を期待するしかない。資料調査を行う際には、『八十年の生涯：木宮泰彦自傳と追憶』（一九七〇年一〇月）の出版の直前数か月間の木宮栄彦の日記を参照すれば、何らかのヒントがあるかもしれない。栄彦もまた父親泰彦に学び、日記を付けており、日々の仕事の内容が記録されているからである。木宮史彦・木宮暁子の兄妹が自宅で日記を探すに際して、我々に手伝えることがあれば、喜んで協力したい。

生家西湖山龍雲寺

(2)　木宮泰彦の臨地調査[3]

関　　智英（著）
若松　大祐（編）

はじめに
一、大陸出張
二、旅程
三、旅行日記
四、大陸への眼差し
五、当時の事情
六、著作への反映
まとめ
附録、「支那方面旅行者の心得」

はじめに

木宮泰彦は主に文字資料を使いながら、時に臨地調査（フィールドワーク）に基づく知見も採用して『日華文化交流史』を書き上げた。ここでの臨地調査とは1940年夏の中国出張である。彼は一ヶ月にわたる旅行中に日記を書いており、我々は彼を通じて1940年の中国の状況や日本知識人の中国認識を知ることができる。

一、大陸出張

『日華文化交流史』の序文では、木宮泰彦は1940年夏の中国出張を次のように振り返る。

[3] 木宮泰彦の1940年夏中国出張については、関智英氏（東洋文庫奨励研究員〔現津田塾大学准教授〕）に下記の講演でご教示いただいた。関智英「近代日本人の大陸参詣――木宮泰彦の大陸訪問を手掛かりに」(常葉大学静岡キャンパス瀬名校舎、2018年2月14日（水))。本稿は、この講演での配布資料に適宜若松大祐が補足した。編集の際に、若松大祐「木宮泰彦『日華文化交流史』の学術的意義」、『常葉大学外国語学部紀要』第37号、2020年3月、3－18頁から転載した部分もいくつかある。

「昭和十五年の夏、文部省の命により中国に出張することとなり、先づ朝鮮・満洲を経て中国に入り、往昔我が入宋僧・入明僧等が好んで掛錫した江南地方の禅院五山・十刹・甲刹などの寺々を巡歴して、その遺跡を探る好機会を得た。これ等の僧徒にして今日まで史籍に名を留めるものは、四五百人の多数に上るであらうが、いづれも交通不便な時代に、万里の鯨波を冒して彼地に渡り、仏教はもとより儒学・詩文学・医学・書道・茶堂・絵画・建築・造庭・印刷など、さまざまの文化を究めて帰り、或は彼地の文化的所産を齎して、次ぎ次ぎに清新な刺戟を与へ、我が文化の促進と発展とに貢献した。故にそれ等の事蹟を徹底的に調査研究することは、日華両国の文化の淵源・本質・発展を探る上に、極めて緊要であるばかりでなく、両国の親善友好関係を促進する上にも等閑に附すべからざる事柄である。よって中国に出張したのを機会に、これ等に関する資料を蒐集し、再び勇を鼓して旧著の更訂に専心し、昭和十八年に至り漸く稿を了へた。これを旧著に比べると、特に文化交流の研究に於て、前人未墾の新境地を開拓したところもあり、紙幅に於ても約三分の一を増加し、内容体裁ともに全く更新されたかの感があったので、更めて『日華文化交流史』と題し、梓に上すこととした。」[4]

二、旅程

木宮泰彦は 1940（昭和 15）年 7 月 24 日に静岡を出発し、朝鮮、満洲、中国に遊び、8 月 24 日に静岡へ戻った。遊歴したのは、順に釜山、京城（ソウル）、平壌、奉天（瀋陽）、旅順、北京、天津、南京、鎮江、蘇州、上海、嘉興、杭州、上海である。大連と大同には訪問を予定しながらも、実施できなかった。移動手段は往路で関釜連絡船を、帰路で上海－長崎の連絡船をそれぞれ使い、残りは鉄道を使った。当然ながら、鉄道の無いところには行っていない。日記に基づき旅程を整理すると、次のページのとおりになる。

なお 1940 年夏の中国沿岸部は、日中戦争は継続しながらも、同年 3 月に南京で汪精衛政権が成立するなど、相対的に日本の占領地経営が安定していた時期と言える。

[4] 「序」、木宮泰彦『日華文化交流史』（東京：冨山房、1955 年）、2－3 頁。

月日	天気	時間		活動内容
7/25	晴	9:42		京都発、臨時普通急行乗車。
				食堂車で夕食。
		21:00		下関着。
				関釜連絡船乗船。
		24:00		就寝。
7/26	曇	5:00		起床、釜山近く。
		6:30		釜山〔桟橋〕上陸。
		〔7:05〕		特急「あかつき」発。 ※以下〔 〕内時刻は『満洲支那汽車時間表』(1940 年 8 月)に基づく。
		14:30	京城	京城着（13:45 着予定)。
				電車で備前屋ホテル。
				鍾路・和信百貨店を案内してもらい帰宿、入浴。
				朝鮮ホテルにて西洋料理での歓迎会。
				本町通り・朝鮮人の市場。
		23:00		帰宿。
7/27	雨	9:00		京城駅前より遊覧バス出発。南大門・朝鮮神宮・奨忠壇公園・博文寺・京城帝国大学前・経学院・文廟・昌慶苑・景福宮・徳寿宮。
		12:00 前		三越前で下車、昼食（真っ黒の麦飯)。
				高麗焼の徳利・杯を購入し帰宿。
				宿の自動車で京城駅に向かう。
		17:00 頃		普通急行「のぞみ」(15:40 発予定）発。水害のため１時間以上遅延。満員。
		22:00 過	平壌	平壌着（20:40〔20:38〕着予定)。
		23:00		人力車で三根旅館着。
		24:00		就床。
7/28	曇	10:00		起床。
		午前		宿引の案内で平壌神社・牡丹台公園・博物館・乙密台・玄武門・永明寺・浮碧台から大同江を川下り・妓生学校附近で上陸・大同門。
				食堂で昼食後、帰宿。
		午後		知人の案内で大同江に面した東一館（朝鮮料理屋）で妓生の接待。人力車で帰宿。
		23:30		平壌より「大陸」乗車（21:40 発予定・寝台車)。
7/29	時々雨	3:30		安東着〔1:35 着予定〕。税関検査。
		7:00		起床。車窓に満洲平原。食堂車で朝食。

月日	天気	時間		活動内容
			奉天	奉天着〔7:35 着予定〕。洋車でホービルホテル着。
		9:00		奉天駅前発遊覧バス乗車。忠霊塔・日善堂(孤児院・養老院)・北陵・北大営。
		12:00 頃		洋車でホテルに帰り、昼食。
		17:00		公祀飯店で卒業生による支那料理での歓迎会。
		21:00		散会、帰宿。
7/30	曇	午前		洋車で国立博物館(旧湯玉麟邸)。
		13:40		奉天発「はと」乗車〔13:47 発〕。満鉄勤務の知人より満鉄のパスを貰う。
				食堂車で夕食。
		16:45		大連着〔19:34〕、乗換〔20:05 発〕。
		〔21:27〕	旅順	旅順着。
		22:00		海野宅着。
		24:00 頃		就床。
7/31	曇	午前～午後		洋車で新市街・旅順博物館・川瀬氏官邸・ヤマトホテル。
		夕方		海野宅へ戻る。
				夕食後、旧市街を遊楽、買物。
8/1	晴	午後		戦蹟遊覧バス乗車。白玉山表忠塔・旧市街満人街・戦利品陳列所・東鶏冠山北堡塁・水師営・爾霊山。
				一旦帰宅後、馬車で旅順高校訪問。
				バスにて帰宅。
		24:00 過		就床。
8/2	暴風雨	9:00 頃		起床。
		午前		バスで旧市街に行き理髪。
		午後		休養しながら葉書十数枚。
8/3	小雨	6:00		起床。
		7:00		朝食終える。
		8:20		旅順発。
		〔10:07〕		沙河口で「はと」に乗換。
		〔15:59〕	奉天	奉天着。
				ヤマトホテルグリルで昼食。
				骨董屋をひやかす。ビューローで北京の案内書購入。
		18:40		奉天発急行「興亜」乗車(寝台車)。
8/4	晴	2:00		山海関着〔1:39 着・2:10 発〕。聯銀券 200 円両替。

月日	天気	時間		活動内容
		〔7:47〕		天津着。
		11:30 頃	北京	北京着〔10:35 着予定〕。
				洋車で蔦屋ホテル（王府井）。
				東安市場内の支那料理屋で昼食。
				風呂。
				宿で夕食。
				北海公園・五龍亭で喫茶。
				バスで帰宿。
		23:00 過		就床。
8/5	雨			華北交通に副参事竹内節三を訪う。案内記や絵葉書を貰う。
				洋車で大使館。北清事変籠城記念碑・郵便局で為替 300 円受取。
				郵便局附近の食堂でランチ（1 円）。
				洋車で前門。書店・喫茶店。
				宿で夕食。
		23:00		就床。
8/6	晴	9:30		洋車で東華門に向う。
		10:00		東華門より遊覧バス出発。北海・妙応寺白塔・紫禁城・万寿山・頤和園・天壇。
				日本料理喜久屋（刺身）。
		21:00		自動車で帰宿。
8/7	曇	午前		中支へ向かう日程を考え、葉書を十枚ばかり書く。
		12:00 過		洋車で雍和宮。歓喜仏画 2 枚（5 円）購入。
				孔子廟・国子監。
				洋車で故宮博物館。
		17:00		帰宿。
				蔦屋ホテル向側の支那料理屋で静岡高等学校同窓会の歓迎会。
		22:00 頃		散会。
8/8	晴	午前		洋車で景山。帰途、故宮博物館で歴史参考品の写真購入。
				洋車で東華門。紫禁城に入って城内の図を買おうとするも得られず。
				東華門前の骨董屋で山水画 4 枚・牡丹画 5 枚。
				昼食後、帰宿。

月日	天気	時間		活動内容
		午後		洋車・電車で周作人私邸訪問。揮毫を乞う。
				西大路に出て高島屋で喫茶。
				前門致美飯荘で夕食。
				附近の花柳街を散歩。一等の家に入る（茶代２円）。
		23:00 過		洋車で帰宿。
8/9	曇	朝		石橋丑雄（西安門内酒醋局三号）訪問、円明園の遺跡の図を頂戴して辞去。
				北京大学、図書館一覧。「日本考」閲覧。銭稲孫に面会。揮毫を乞う。
				南海公園で茶と饅頭。
				石橋丑雄を再訪するが会えず。
				洋車で護国寺訪問、市場縁日などを見て、東華門の骨董屋で唐代･明代の仏像と称するもの２体（35円）購入、帰宿。
				一浴夕食後、東安市場でカバン（20円）購入。
		23:00		茶を飲んで帰宿。
8/10	曇	朝		洋車で北京駅に向かう。
		9:20		大同行列車発。二等車はほぼ満員。
				南口で蒙疆銀行券に両替。
				食堂車でランチ（1円）。頗る不潔。
		13:30 頃		青龍橋着〔13:10〕。
				長城見学。
		16:50		北京行列車発〔16:43〕。二等車満員。
		19:30		北京着〔20:10〕。
				洋車で六国飯店に佐原氏を訪問するも不在。
				宿附近で夕食。
		21:00		沢口氏来訪。
				本屋が来て書籍（10円程）購入。
		24:00 頃		就床。
8/11	晴	早朝		起床。
		9:30		北京発。
		12:30 頃	天津	天津着〔12:26〕。
				横田英治氏邸で簡単な昼食。
				自動車で天津埠頭・英仏租界一巡・南開大学・支那人の商店街など散歩して中原公司（百貨店）。

月日	天気	時間		活動内容
				食堂でクリームソーダ水を馳走になり、一旦横田邸に戻る。
				ドイツ人経営の洋食屋。
				英国競馬場へドライブ。国際倶楽部に付属する庭園を散歩。
				自動車で日本人倶楽部に移動。
		23:00 頃		横田氏宅に戻り就寝。
8/12	晴	7:00		起床。
		午前		休養。
				自動車で天津駅に向かう。
		11:50		浦口行列車発（一等車）〔11:52〕。
				昼食・夕食とも食堂車。
8/13		早朝		憲兵による身分証明書検査。
		〔7:50〕		徐州着。30 分停車。聯銀券と軍票を交換。
		12:00 過		蚌埠着〔12:30〕。
		17:50	南京	浦口着。構外に孫文記念碑。
				下関から自動車で１里以上進み福田館着。
				食後街を散歩。喫茶店でミルクセーキ。
		23:00 頃		就床。
8/14	晴	8:00 過		華中鉄道の自動車で鼓楼・玄武門・玄武湖・鶏鳴寺・北極閣・紫金山・明孝陵・霊谷寺・革命紀念塔・中山門・光華門・中華門・雨花台・菊花台・忠霊塔。
				中山路日本人倶楽部にて支那料理で昼食。
		13:00 頃		帰宿。
		午後		昼寝。
				夕食後、手提カバン（15 円）、秦淮・骨董屋で古画４枚（10 円）購入。
				防空演習に遭遇、灯火管制、一時間ほど立往生。
				洋車で帰宿。
		23:00 過		就床。
8/15	晴	7:00		起床。
				華中鉄道の自動車で南京駅に向かう。途中防空演習のため交通規制あるも、華中鉄道の自動車は通過可能。
		8:00		急行列車乗車（一等車が軍人で満員だったので二等車）。

月日	天気	時間		活動内容
		9:12	鎮江	鎮江着〔9:07〕。
				駅長植木豊蔵の案内で、洋車で金山寺・甘露寺・高島屋百貨店。
		13:30		普通列車に乗車。
				昼食は弁当。
		17:14	蘇州	蘇州着〔17:38〕。
				黄包車で旅館繁廼家着。
8/16	晴	午前		人力車で楓橋・寒山寺・西園戒幢律寺・虎邱雲巌禅寺・獅子林・報恩寺・玄妙観。
				宿で昼食。
		14:50		特急「天馬」蘇州発（二等車）。
		16:10	上海	上海着。華中鉄道本社総務部長室に挨拶、辰巳屋旅館（呉淞路×有恒路）着。
				北四川路の支那料理屋で招宴。
				自動車で帰宿。
8/17	晴	午前		日本租界で土産物店をひやかす・理髪。
				森永製菓の食堂でランチ。
		13:00		華中鉄道の自動車で戦蹟視察。八字橋・持志大学・江湾鎮駅・大場鎮・忠霊塔・畑路・呉淞クリーク・呉淞砲台・黄浦江岸・上海市政府・松井路・維新学院・陸戦隊本部。
		16:00		帰宿。
				夕食後、北四川路・呉淞路を散策。
		22:00 頃		就床。
8/18	晴	朝		朝食後、迎えの自動車で上海駅。駅長室で休息。
		8:20		杭州行列車発車。
		10:53	嘉興	嘉興着〔10:46〕。
				駅から船で平湖・煙雨楼。日本間で昼食。
				平湖を遊覧後、入浴一睡。
		17:53		嘉興発、杭州へ向かう。
		〔20:20〕	杭州	杭州着。検疫頗る厳重。
				西冷飯店のバスで西冷飯店着。
		24:00 頃		就床。
8/19	晴	朝		朝食後、船で西湖観光。孤山山頂の西冷印社・湖心亭・三潭印月。
		10:00 過		帰宿。

月日	天気	時間		活動内容
				自動車で岳飛廟・秦檜夫妻像。日本軍警備区域外に出て霊隠寺・雲林禅寺。浄慈寺・霊峯塔址。
				帰宿し、食堂で昼食。
				ホテルのバスで杭州駅に向かう。
		15:20		杭州発。
		20:20	上海	上海着。華中鉄道の自動車で辰巳屋旅館。
				夕食後就床。
8/20	晴	午前		朝食後買い物。森永製菓で昼食。
		13:00		自動車で英仏租界見物。正金銀行・南京路・ゼスフィールドガーデン・二階建バス・永安公司・ブロードウェイマンション。
				洋車で帰宿。夕食を食べて就床。
8/21	晴	午前		不足品の買物。森永製菓で昼食。
		午後		映画見物。虹口の金光大戯院。
				明治製菓で喫茶。
				ブロードウェイマンションを経て帰宿。
8/22	晴	8:00		自動車で港に向かう。
		9:00		出帆。
8/23	晴	10:00		船上から五島列島目視。
		11:00 過		風呂から上がる。
		11:30		昼食。
		12:00		長崎入港。
		14:30		長崎発列車の改札開始。
				鳥栖で夕食（弁当）。
		19:00 過		門司着。連絡船で下関に渡る。
				駅附近で冷コーヒー。
		22:50		下関発車。
				小郡附近で寝台に移る。
8/24	晴			目覚めると姫路。
				食堂車で朝食。
				食堂車で昼食。
		16:20		静岡着。

三、旅行日記

木宮泰彦には日記を書く習慣があり、中国出張中にも日記を書いている。この一ヶ月間の日記（抄）は、『八十年の生涯――木宮泰彦自傳と追憶』（1970 年）や『木宮泰彦――その生涯と業績』（1992 年）が収録する[5]。ここでは、現在から見て興味深い個所をいくつか紹介しよう。なお、引用は上述の『木宮泰彦』（1992 年）に基づく。

この中国行は木宮泰彦にとって人生で初めての海外旅行だった。

「午前六時半、生れて五十四歳、始めて大陸の一角に足跡を印した。」（7/26）

釜山でこのように感動を記す。また、杭州では感嘆の声を上げる。

「賑やかな市街地を通りぬけ西湖の岸に出た。湖畔には柳があり自動車道路があり湖中には島が見える。十五夜の月が湖水を照して実に美しい。昔日本の留学僧が多く遊んだ地だ。おお、自分にとっても憧れの地だ。」（8/18）

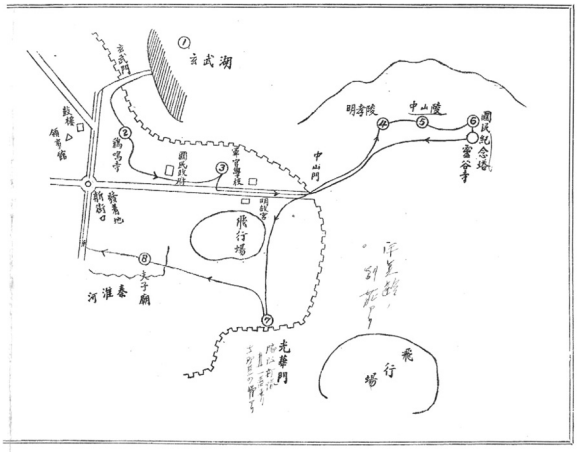
杭州には、8 月 18 日夜から 8 月 19 日午後 3 時まで滞在した。

木宮泰彦の旅行は、多くの日本人に助けられながら続く。登場人物の多くが「君付け」なので、彼の後輩や学生（静岡高等学校などの卒業生）なのだろう。中国現地の日本人で頻繁に登場するのは、満鉄や華北交通や華中鉄道といった主要な鉄道の駅長や助役である。駅長が日本人であるのは、木宮泰彦の遊歴地が日本軍の占領下であったことを示す。木宮は時に日本軍警備地域外へも赴く。匪賊が出現するというような記載もある。

「午前十時過ぎホテルに帰ると駅から電話があり、霊雲寺へ案内するという。自動車を依頼し、駅助役内藤介氏が駅員の兵隊上り二人に銃をもたせて来た。先づ岳飛廟に詣でた。流石に立派な廟で墓も調っている。入口に例の秦檜夫妻の像がある。それより皇軍警備区域外を自動車で突破して霊隠寺に詣でた。岩窟に石仏が多く、山幽すいにして谷川も流れている。雲林禅寺の三重の大雄宝殿、左右の古塔など古寺らしい。ゆっくり見たいと思ったが匪賊の出る所であるからグズグズして居られぬ。辞してもとの道をかえり白堤〔を〕突破して浄慈寺を見た。」（8/19）

[5]「八十年の生涯木宮泰彦自伝と追憶」刊行会（編）『八十年の生涯――木宮泰彦自傳と追憶』（静岡：編者、1970 年）、241 － 281 頁。創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦――その生涯と業績』（静岡：編者、1992 年）、173 － 210 頁。両者が収録するのはともに 1940 年 7 月 25 日から 8 月 24 日までの「日記抄」であり、内容は恐らく同じである。ただし、「抄」という文字から、全文ではない。日記のオリジナルの所在は 2020 年現在不明である。

木宮泰彦の旅行は、一方で当時の大陸旅行の定番コースであった。彼は遊覧バスや鉄道会社の自動車などを使った。1940 年の大陸では、戦跡巡りなどの観光コースが定着し、移動手段が整備されていたのである。



『南京視察は華中バスで』華中都市自動車株式会社南京営業所、1940 年頃（部分）。

朝鮮総督府鉄道局『朝鮮旅行案内』1938 年６月より。

いま一方で、この旅行は木宮の興味関心に沿ったものでもあった。彼は寺院を遊歴し、骨董や書籍を見て回る。寺院の遊歴に際し、日程の関係で大同への訪問を断念したのは残念だったに違いない。

「大同の石仏を見たいと思っていたが往復の車中が二日、見物に一日かかるし、雨でも降って水が出ていると出掛けられないとのことで止めることにした。」(8/10)

また、南京摂山にある古刹の棲霞寺を訪問していないのが不思議である。寧波（かつての明州）にも行っていないのは、寧波が依然重慶の国民政府の管下にあったためである（日本軍の寧波占領は 1941 年 4 月）。

旅先では著名人と交流する。例えば北京では周作人（北京大学文学部長、華北政務委員会教育督辦）を私邸に訪ねる。

「周作人氏は温厚の君子で、いろいろ話をした。夫人は静岡の水落の人で静岡へも来たことがあるという。（中略）揮毫を請うと（中略）書いて呉れた。」(8/8)

その翌日には、朝に石橋丑雄（北京特別市公署観光科専門委員・秀雄の父・崇雄の祖父）を訪ね、北京大学の図書館を参観し、さらに銭稲孫（北京大学教授）とも会っている。

「〔北京大学では〕先づ図書館を一覧し『日支交通史』が万有文庫中に翻訳されているのを知った。」(8/9)

ちなみに木宮泰彦は旅行にかかった諸経費をこまめに記録しており、こういったところに後に学校経営者となる片鱗が表れている、と言えるかもしれない。

四、大陸への眼差し

大陸に対する彼の眼差しは、今や歴史的な記録となっており、興味深い。時系列的に挙げてみよう。

⑴「〔朝鮮の水田は〕丸で内地の田舎と同じようだ。併し家は何と貧弱なことよ。農家という農家はわら葺きで縄の綱をかけ、間に一間か二間、周囲に壁を塗り屋内も頗る不潔らしい。稀に瓦葺の家があるが、これは素封家らしい。」(7/26)

⑵「〔京城において〕それから李朝の忠臣を祭ったという奨忠壇公園の前で下車、高台に上ると、博文寺がある。伊藤博文公の菩提寺で曹洞宗である。」(7/27)

⑶「〔北陵に向う〕その途中の街での不潔なことはいうまでもなく、路傍に子供の死体の棄てられたるを見る。十歳以下の子供は不幸なりとて路傍に棄て犬に食わしむる習慣なり。北陵附近には毎日遺棄死体ありという。」(7/29)

⑷「〔満洲国立博物館〕この附近白系露人の住むもの多く、露人の子供達がはだしで泥濘の内を満人の子供と遊んでいる。白人もこうなっては哀れである。」

(7/30)

⑸「旅順のバスの不潔には驚く。」(8/1)

⑹「奉天駅は非常な混雑で、駅員の満人を叱咤する声何事かと思わる。」(8/3)

⑺「食堂車に入り一円のランチを注文した。頗る不潔だ。フォークの股が黄色である。ライスカレーを食べたのがよく洗ってないらしい。給仕を呼んで取りかえさしたが余り奇麗でない。」(8/10)

⑻「〔天津―徐州間〕駅毎にトーチカがあり守備兵が居り、支那兵も銃をもって間抜けた顔をして立っている。」(8/12)

⑼「〔鎮江甘露寺〕この寺は今度の事変に支那兵が居ったので揚子江上からの我が砲撃や空からの爆撃によって殆ど破壊しつくされ終った。」(8/15)

⑽「帰途高島屋百貨店や日本人の多く住む町を過ぎ、駅近くへ来ると異様な声がする。見ると一輪車の両側に豚を一頭ずつ横に麻縄でくくりつけ、それが三十台も行列して行くのであるから一輪車のきしる音、豚のわめく声、実に異様な音響で支那町でなくては見られぬ光景だ。」(8/15)

⑾「村人が水牛のフンを瓦煎餅のようにして乾している。燃料にするのだそうだ。」(8/16)

⑿「車代は始め二円という約束であったが車夫が予の財布に多くの金があるのを見て頻りに途中で三本指を出して三円呉れといった。宿に帰ると三円要求したが番頭に叱り飛ばされて二円貰ってスゴスゴ引き上げたのは笑止であった。半日走りまわり暑いので車夫は町の辻に置いてある甕の水をがぶがぶのむのに驚いた。」(8/16)

⒀「〔上海日本租界〕街頭に中古の靴を沢山に並べて売っている。盗人の取って来たものであろう。」(8/17)

⒁「〔嘉興〕平湖には菱が多く植えてある。対岸には屢々匪賊が出るそうだから、油断がならぬ。(中略) 自分は平湖の岸に立って見ると小船が十もある。これが有名な女船頭の船で船中にはベットがあり卓子があり美人が居りお袋らしい人が船頭をしている。支那大官がその船に乗って湖中に遊びに出た。面白いと思った。」(8/18)

⒂「〔杭州駅〕駅頭車夫が客を得ようとして、競争する客がなくなると今度は運送会社の荷物を得ようとわめく、どなる。実に支那人の声は高い。騒々しい。これ等も日本人とは非常に違っている。」(8/18)

⒃「例の如く森永製菓で昼食を食べた。高いけれども奇麗だからすきだ。(中略)

支那映画は言葉が通ぜずよくわからぬ。兎に角日本の映画よりは七、八年は遅れている。」(8/21)

⒄「日本の山は樹木が生い繁っていて支那に比べると実に美しい。」(8/23)

五、当時の事情

木宮泰彦の臨地調査は、いわば中国現代史の一コマでもある。時系列的にいくつか挙げてみよう。

⑴「連絡船は忽ち満員（中略）船中は満員で暑さは暑く汗は滝のように流れる。兎に角横になった頗る窮屈で身動きもできぬほどだ。」(7/25)

⑵「特急あかつきに乗り込むと、殆ど満員であったが、流石に特急だけに席はあって助かった。」(7/26)

⑶「〔普通急行「のぞみ」に〕逸早く飛び込んだが満員でどうにうもならぬ。漸く寝台車の一隅に子供を連れている満州(ママ)行のおかみさんが居ったからその間に割り込んだ。だが二等車の廊下といわず洗面所といわず一杯の人で皆満州(ママ)行きの人々だから荷物も多いし、身動きもならぬ。食堂車は隣の車だが身動きもならぬからとても行かれぬ。」(7/27)

⑷「〔旅順〕戦蹟めぐりの客が多く第一のバスは忽ちに満員となり、大分待たされて第二のバスに乗った。」(8/1)

⑸「北海道から来た芸者は一箇月に五、六百円もかせぐという。佐原氏のことを「兄さん」といったのはおかしかった。彼等は次から次へと流れて歩くらしい。日本内地から大連へ、それから北京へ、今度は何処へ。」(8/6)

⑹「青龍橋で下車したが、支那人が二、三人日本人は自分一人だ。駅員に聞いて見るとこのあたりは時々匪賊が出るので軍部の諒解なしでは下車も出来ないところだという。（中略）向山の長城の上に時々匪賊が横行するとか、匪賊も戦争上手になり、殊に共産八路軍は山岳をかけまわるに上手だとか、守備兵が少いので討伐がうまく行かぬ、向って出て来れば反撃してやる程度だ、などいう話があった。」(8/10)

⑺「張家口あたりから土日にかけて北京に遊びに来るものが多いのか二等車が満員である。（中略）傍には袴をつけた若い女がいる。二十一、二歳である。聞けば静岡県引佐郡の出身で蒙疆自治政府に勤務しているタイピストである。女でも偉いものだ。」(8/10)

⑻「中原公司へ行った。天津第一の百貨店で三階は松坂屋の出張店になっている。時々スパイが入り込んでゼンマイ仕掛の爆弾などを仕掛けるから油断がならないという。」(8/11)

⑼「応接間で横田〔英治〕氏から三十年間支那各地を旅行した面白い話を聞いた。日清汽船に居った時代に揚子江で匪賊に襲撃され、匪賊に拉致された船員を救い出す為に賠償金十万円の現金を人足二十余人に持たせて奥地に入った苦心談をされ、又その時の船員の日記の原稿等をも見せて呉れた。」(8/12)

⑽「豊橋出身の自動車隊の将校が応召してからもう満三年にもなるが何時帰還出来るやらといってこぼしていた。匪賊もなかなかこすくなったことや、小勢と見ると殺さないで捕虜として先づ女を与えて抗日教育をすることや、先頃石家荘附近で小学校長が四人襲撃された話などして呉れた。(中略)臨城附近は時々匪賊が出て来るというし、一ケ月一回位は鉄道線路を破壊するなどいうことがあるから油断は出来ぬ。一等車の入口には警乗兵が番をしているし不気味だ。」(8/12)

⑾「浦口のプラットホームはすばらしい立派なものだ。東洋第一といわれている。駅長佐川薫氏の先導で恰も大官の如く――但し三十時間の乗車で顔は真黒になっているしワイシャツも洋服も汗とほこりでドロドロになっている――改札も受けず、検疫も受けず、別口から構外へ出て孫文の記念碑を見た。」(8/13)

⑿「北支ではまづい米ばかり食ったがここ（南京）で始めて日本米のような甘い飯を食った。」(8/13)

⒀「〔秦淮からの帰途〕その時恰も防空演習で、燈火をすべて消した。町の辻へ来ると支那巡査が熱心に活動し通行止になっているので一時間ばかり立往生した。空には十一日の月が冴えている。サーチライトが幾本となく空に光っている。」(8/14)

⒁「支那は煙草とカバンと洋車[6]だけは安い。」(8/14)

⒂「〔南京－鎮江間〕一等車は軍人で殆ど満員であったので二等車に乗った。二等車にも三分の一ほどは軍人席がとってある。満鉄や華北と違って全く日本の列車と同じで心地がよい。敵軍が退却する時に列車を悉く破壊して使用に堪えぬようにしたが、日本ではこれを予知して狭軌の列車の車輪を広軌にすることが出来るようにしてあったので直に間に合ったのだという。」(8/15)

[6] 洋車とは人力車のことで、これについては８月15日の日記にも関連する言及がある。曰く、「洋車＝中支ではヤンチョとはいわず黄包車（ワンホース）という＝」云々。

⑯ 「〔鎮江金山寺は〕寺全体が城郭をなし伽藍も立派で最も整っている。(中略)頂上に塔があり塔下に弘法大師の修業したという洞窟があるがこれは偽物だ。山上から眺めると眼下に放生池がありその向うは揚子江でよい眺めだ。江畔には葦が沢山に繁茂してこれを燃料に売るので寺の経済はよく数十万円の資産があり自給自足しているという。拓本数枚を買って下り僧堂を見た。広く大きな僧堂で日本の僧堂と殆ど変るところがない。事変[7]前は五百人も雲水がいたという。今も二百人も居るという。食堂も広い卓子腰掛で、極めて清潔、蝿も殆んどいない。如何にも禅寺らしい清らかさだ。この寺には蔵経もある。何頃の蔵経か軍隊で封印してあるので見ることが出来ぬ。」(8/15)

⑰ 「〔上海駅で〕新政府の要人が下車し多くの警衛に守られて行く後をついて構外に出た。」(8/16)

⑱ 「〔上海では〕蔣介石が新たに作った市政府の立派な建物の前を通った。今度の事変で大分破壊されたが今は修繕されて新政府[8]で用いているという。それから松井路に出て左に中学校右に維新学院という支那人に日本語を教える学校の前を通り上海市に入り、陸戦隊本部の前を過ぎて四時頃宿に帰った。」(8/17)

⑲ 「〔桜井機関員、建国軍第二十四路軍、豫北保安軍顧問相原光治〕夜になってから相原馬賊がいろいろ話をして呉れた。既に今は陸軍の嘱託になって佐官待遇を受けているが三年ほど前に支那に入って匪賊を手なづけて今では六万の兵を部下とし河北、河南、山西の境に蟠踞し敵軍と皇軍との中間に居るのだそうだ。そうした連中が十四もあって桜井大佐がそれを統一するのだという。支那の方にも家庭を持ち三人の妻を蓄えて豪奢な生活をしているという。」(8/22)

[7] 事変とは支那事変、すなわち盧溝橋事件を発端とする日中戦争を指す。
[8] 新政府は、汪精衛政権を指す。汪精衛は重慶の国民政府を南京に還す(還都)という体裁で、1940年3月に新政権を樹立していた。詳細は関智英『対日協力者の政治構想――日中戦争とその前後』(名古屋:名古屋大学出版会、2019年)に詳しい。

木宮泰彦による1940年８月の中国情勢に関する記録は、他の記録（例えば東亜同文書院の各年度の卒業旅行記や、東洋文庫所蔵の中国旅行記[9]）と比較すると、中国現代史や日中戦争史での意義が見いだせるかもしれない。

六、著作への反映

木宮泰彦は、1940年夏の出張での成果を自らの著作へ反映した。『日華文化交流史』には、次のように中国での臨地調査を特に明記している箇所がある。

「　白雲の去来する双峯（浙江省杭州西湖の西方に北高峯と南高峯とが相対峙し、「双峯挿雲」は西湖十景の一である。）を仰ぎ、清澄鏡の如き西湖に臨む杭州は、中国第一の風光明媚の地として知られてゐるが、また南宋の都臨安の地であつたゞけに、名勝旧蹟が頗る多い。楊柳の緑すがすがしき湖畔を逍遥し、或は小画舫を湖上に浮べる時、周囲に展開される山水の麗観は千古の歴史を織り交ぜて、恍惚として旅人の情趣をそゝるものがある。昔から中国人は「食は広州に、死は柳州に、さうして墓は杭州に」といひ、西湖の湖畔は永久の眠に入る楽土天国としてゐるのもさこそと肯かれる。この地には名藍古刹が多く、我が入宋僧の掛錫した寺としては西湖の西岸にある五山第二の霊隠と、同南岸にある五山第四の浄慈とがある。

霊隠は西湖の北岸にある有名な岳王廟から田舎道を五粁ほど行つた霊鷲山（鷲峯とも飛来峯ともいふ）にある。（中略）著者は昭和十五年夏北支から中支を巡歴し、親しくこの寺を訪ねた。宏壮な三門には霊隠古刹の額を掲げ、門内には岩窟や石仏が多く、巌壁に仰ぐ皆大歓喜仏は参詣者の目を欹たしめるものがある。その西方に大雄宝殿を始め、幾多の荘厳古雅な堂塔伽藍の立ち並んだ大刹は、今は雲林禅寺といひ、堂内に安置された仏像は古典美の香り豊かな優れたものが多い。日本僧としてこゝに始めて掛錫したのは覚阿で、彼はこの寺の仏海慧遠に参じ、帰朝後も屢々書信を通じたことは、前にもこれを述べた。（中略）

浄慈は山号を南山又は南宕・南蕩といひ、その境致の一に南屏山があるところから南屏と記したものもある。西湖の十景たる「南屏晩鐘」の地で、門前に

[9] 東亜同文書院の中国調査については、「手稿叢刊」「資料選訳」「旅行報告書総目次」「旅行報告書」「旅行記録」といった各種の史資料が出版されている。また、東洋文庫は明治以降の日本人による中国旅行記を大量に所蔵する。その内、1874年から1979年までに刊行された400冊余の解題が、東洋文庫近代中国研究委員会『明治以降日本人の中国旅行記：解題』（東京：東洋文庫、1980年）である。

は康熙帝の御筆になる南屏晩鐘の碑があり、その裏面には乾隆帝の御製が刻まれてゐる。南屏の晩鐘が幽かな余韻を残して湖面に響き渡る時、興亡常なき老大国の歴史が想ひ出される。(中略) 昭和十五年夏著者はこの寺をも訪ねたが、今は民国二十五年に改築された壮麗な大雄宝殿を始め、幾多の建造物こそあるが、霊隠のやうな古雅な趣のないのはもの足りない。裏の南屏山には日本僧の墓が三四十墓もあるといふ噂を聞いてゐたが、雑草が生ひ繁つて近づき難く、且つ日本軍の警備区域外であるので、ゆつくりこれを調査することが出来なかつたのは残念である。

浄慈の北方、西湖に突出した半島を夕映山といひ、その中央に有名な雷峯塔の址がある。この塔は越王の黄妃の建立するところで、初めは十三層にする計画であつたが五層を以て終つたと伝へられてゐる。全部煉瓦を以て造られた八角塔で、古塔に映ゆる夕陽は頗る詩趣に富み、「雷峯夕照」とて西湖十景の一とされてゐたが、惜しいかな、民国十三年九月に倒壊して、今は見ることが出来ぬ。今雷峯塔の址に立つて遠く想を古に馳せる時、南宋の昔、遥々日本から渡海した雲衲が、頭には編代笠を被り、肩には装包みを懸け、錫杖を手にして、夕陽雷峯塔に映え、南屏の晩鐘幽かに湖上に響き渡る夕まぐれ、この名刹を訪ねて掛錫を求め来つた姿が、髣髴として眼前に浮ぶが如くである。」(『日華文化交流史』360－362 頁)

また、次のようにも記している。

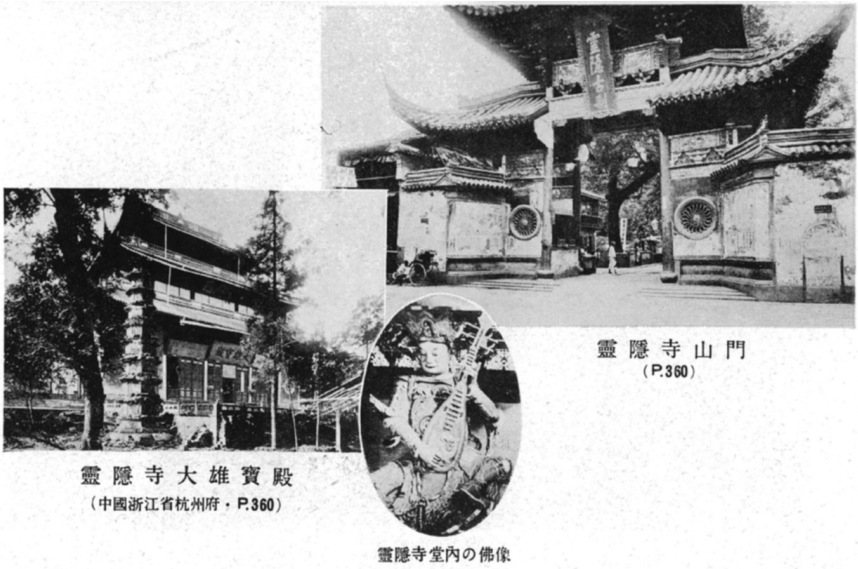
「虎丘　十刹第九。平江府にあり、寺名を雲巌禅寺といひ、開山は明教禅師である。虎丘といふのは、この地にある呉主闔閭の墳塋の名によつて称へたもので、もとは虎丘山寺といつた。予も昭和十五年夏親しくこの寺を訪ねたが、白楽天が蘇州の郡守であつた時、桃李一千本を栽ゑて行人を楽しませたといふ参道を登つて行くと、丘の上には古伝説に富んだ旧蹟が多い。虎丘の頂には八角七層筍型の塔が聳えてゐる。(中略) 今の塔は明の永楽中に再建し、同宣徳中に重修したもので、やや東方に傾き今にも崩れ落ちさうであるが、流石に古雅な趣のある塔である。我が龍山徳見等がここに掛錫した。

蔣山　十刹第三。建康 (江寧即ち南京) の東北にある山で、一に鍾山ともいふ。(中略) 今はその当時の面影を偲ぶよすがもない。ただ寺の後方に孫文の中国革命を記念する為に、新たに建てられた九層の華麗な記念塔のみ人目を惹いてゐる。」(『日華文化交流史』473 頁)

(中略)

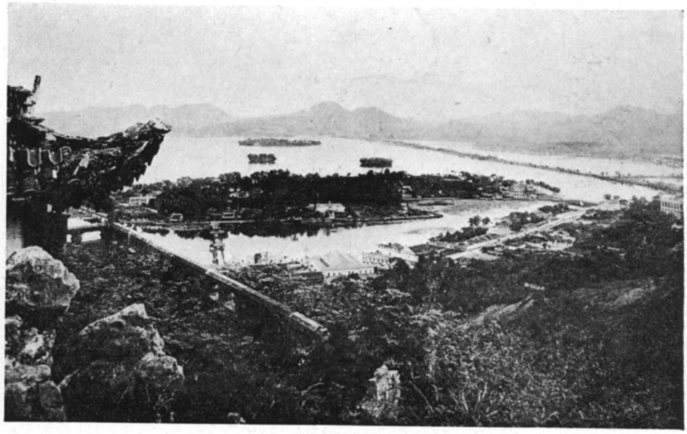
「金山　鎮江府金山の上にある。この地はもと揚子江中の一小島であつたが、今は陸地続きになつてゐる。（中略）現在の堂宇は太平天国の乱に消失した後、再建されたものであるが、頗る宏壮な大伽藍で、周囲の建造物によつて堅固な城郭をなしてゐる。南斜面に三門・仏殿・法堂・方丈等が並び、向つて左に大僧堂、右には食堂等があり、山顛には七重塔が聳えてゐる。大僧堂の内部には甎を敷き詰め、中央には聖僧を安置し、周囲には雲衲の座禅する所謂単があるなど、すべて我が京都・鎌倉の禅寺と異るところがない。金山は江南第一の良質の水が湧出するところで、風光も亦明媚であるから、我が入元僧はここを安息処として多く集つたことは、愚中周及の年譜に見えてゐる。」（『日華文化交流史』474 頁）

木宮泰彦の臨地調査については、次の３点を指摘できよう。第一に、『日華文化交流史』では 1940 年時点での中国の寺院の様子を記録する。ただし、多くは情景描写であり、同時代の他の文献を読めばわかることが多い[10]。木宮泰彦オリジナルの記載は無さそうである。



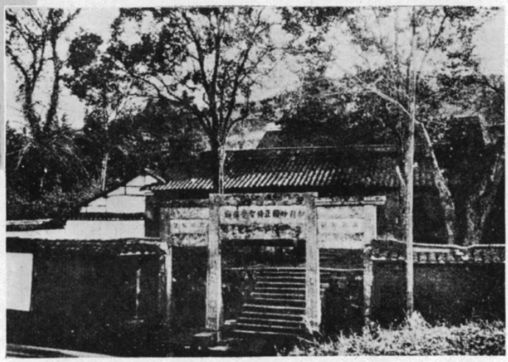
[10] 常盤大定『支那仏教史蹟踏査記』（東京：龍吟社、1938 年）。常盤大定、関野貞（共著）『支那仏教史蹟』〔*Buddhist Monuments in China*〕（東京：仏教史蹟研究会、1925 － 1928 年）。伊東忠太『伊東忠太建築文献』〔全 6 巻〕（東京：龍吟社、1936 － 1937 年）。

第二に、『日華文化交流史』で追加された口絵は、中国で購入（あるいは撮影）したものの可能性がある。そもそも『日支交通史』の口絵の写真は、『東洋歴史参考図譜』（東京：東洋歴史参考図譜刊行会、1924－1937 年）と『建築雑誌』（東京：造家学会、1887－現在）からの引用だった。



西　湖　展　望（中國浙江省杭州府・P.360）

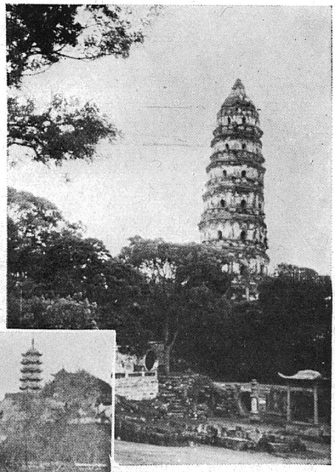
雷　峰　塔
（中國浙江省杭州府・P.362）



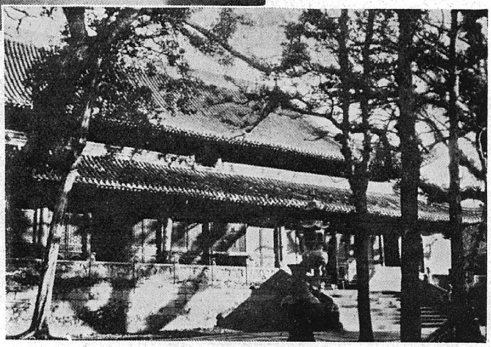
淨慈寺宗鏡堂（中國浙江省杭州府・P.361）

第三に、木宮泰彦の臨地調査は、実質的には観光だった。というのも、木宮の研究対象である宋代や元代の遺構は、中国にはほとんど残されていない。また、中国各地での滞在時間が短い。したがって、後に『日華文化交流史』の序文において、中国出張を「徹底的な調査研究」をすべく、「資料を蒐集」したと回想するものの、実際は充分な調査ができたとは考えにくい。

金山寺（中國江蘇省鎮江府・[illegible]頁）



虎丘の塔
（中國江蘇省蘇州府・P.473）



普陀　山（中國浙江省舟山列島・P.436）

まとめ

1940年8月は、戦前に日本人が大陸旅行のできたほぼ最後の時期であった（本稿附録参照）。そうした時期の日本、朝鮮、満洲、中国の様子を記録したものとして木宮泰彦の日記は一定の価値を持つ。ただ木宮の記した大陸の風物への感想は、他の日本人旅行記の内容と重なる部分も多い[11]。また木宮の中国出張は寺院の遊歴を目的にしていたから、鎮江金山寺などの寺院を高く評価しているものの、その分析は深いわけではない（例えば日本の仏教徒が中国寺院に対して、どのような感想を抱いたのかを分析したエリック・シッケタンツの研究と比べると参考になる[12]）。むろん木宮が中国出張に際して残した他の記録（写真や物品）があれば、日記と照合することで研究者としての木宮泰彦の人や思想をより深く知ることができるかもしれない。

〔附録〕「支那方面旅行者の心得」[13]

1　渡支制限の現況

新支那建設に必要なる現地実情に適応するため本年5月20日以降渡支者に対し厳重なる制限を見ることとなつた即ち今後の渡支者は新秩序建設に直接且積極的に協力を必要とする者に限られ不要不急の一般旅行者又はその他の理由に基くものも緊急止むを得ざるものの外は極力之が制限を受けるものである。（中略）

5　北支行旅客の携帯金制度

近来満洲国幣その他の北支流入により聯銀券の著しい膨脹を来し北支に於ける金融経済状態に悪影響を及しつゝある事態に鑑み本年七月一日以降下記の通り為替管理の強化を決定実施することとなった。

イ　日本内地及朝鮮発のものは　200円迄

ロ　満洲発のものは　50円迄

---

[11] Fogel, Joshua A., *The Literature of Travel in the Japanese Rediscovery of China, 1862-1945*, Stanford, Calif., Stanford University Press, 1996.；西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム——大正日本の中国幻想』（東京：中央公論新社、2003年）。

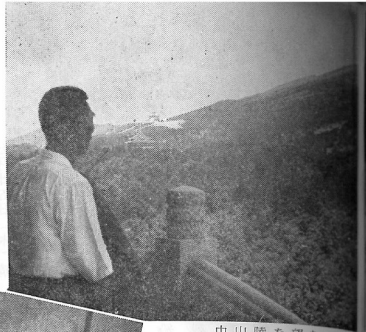
[12] エリック・シッケタンツ『堕落と復興の近代中国仏教——日本仏教との邂逅とその歴史像の構築』（京都：法蔵館、2016年）。

[13] ジャパン・ツーリスト・ビューロー満洲支部『満洲支那汽車時間表』第11巻第8号、1940年8月、27頁。

中国大陸

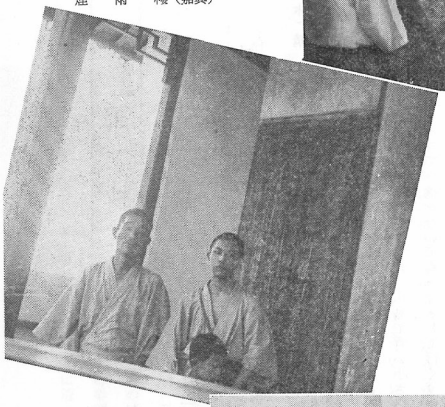
旅行スナップ

昭和15年7月25日～8月24日



中山陵を望む

左・本　人



煙雨樓（嘉興）

中央・本　人

ジェスフィールド公園（上海）

南京城外忠霊塔前にて

中央・本　人

「中国大陸旅行スナップ」『八十年の生涯』pp.242-243 より

(3)　日本での『日華文化交流史』に対する評価[14]

若松　大祐（編著）

はじめに
一、出版当時の評価
二、先行研究による評価
三、常葉大学教員による評価
おわりに

はじめに

木宮泰彦『日華文化交流史』（東京：冨山房、一九五五年。以下、時に本書と略す）は、日本の学術においてどのような意義を持つのか。ここでは日本史研究、特に対外関係史研究における評価を記す。その際、まずは出版当時の評価、続いて関連する先行研究による評価をそれぞれ概説し、最後に常葉大学教員による評価を紹介しよう。

一、出版当時の評価

『日華文化交流史』が出版されると、どのように評価されたのか。宮原佳昭の調査に基づき、『日支交通史』および『日華文化交流史』の二著に対する出版当時それぞれの評価を概説しよう[15]。

（一）『日支交通史』に対する出版当時の評価

[14] 本稿は、下記の二文から関係個所を転載し大きく改訂してなる。若松大祐がまとめ、その後に濱川栄が加筆修正を行った。
濱川栄「『日華文化交流史』に見る歴史学者・木宮泰彦の姿―『日華文化交流史』とその時代（一）―」、『常葉大学外国語学部紀要』三六号、二〇一九年三月、一－一九頁。
若松大祐「木宮泰彦『日華文化交流史』の学術的意義」、『常葉大学外国語学部紀要』三七号、二〇二〇年三月、三－一八頁。

[15] 『日支交通史』および『日華文化交流史』に対する出版当時の評価については、宮原佳昭氏（南山大学外国語学部・准教授）にご教示いただいた。講演「木宮泰彦『日華文化交流史』の同時代的評価について」（常葉大学静岡草薙キャンパス、2020 年 11 月 9 日（月））は新型コロナウイルス感染症の蔓延のために中止となった。しかし、講演のためのレジュメがあるため、本稿はこのレジュメに基づき、木宮泰彦の二著に対する出版当時の評価を概説する。

(1)　出版の背景

『木宮泰彦：その生涯と業績』は、『日支交通史』出版の背景を次のように説明する。

「水戸高校では、事務に関係するもののほかは、教授陣はきわめて自由で、定例の教授会もなく、自分の担当授業さえ終れば帰宅して、自由に勉強することができた。渡辺校長はもと日比谷図書館館頭をしていた人であったからか、新設高校には不似合なほどよく図書が揃っていた。泰彦は大正十二年八月、初めての概説書『参考日本通史』を冨山房から刊行した。そのほかのち公刊し不朽の名著とされた『日支交通史』の基礎的な研究執筆もこの水戸在任中になされたのである。この意味で、泰彦にとってこの時代は学究三昧に浸たることのできた幸福な時代でもあった。[16]

そして、出版当時の評価についても紹介する。

「泰彦が水戸高校教授時代から専心研究していた『日支交通史』は、大正十五年九月東京神田の金刺芳流堂から先ずその上巻が公刊された。五〇八ページからなる大著である。菊判・箱入りで自筆による書名・著者名が革クロースの背に金文字で記されている。ケースは黄色で書名のところだけ鮮明な赤色になっていて、中国風の装丁を思わせる豪華本であった。泰彦は書物を出版する以上は、装丁のりっぱな本を出すべきだという一家言をもっていた。次いで昭和二年十月に至りその下巻六七三ページが刊行され、泰彦多年の研鑽が結実したのである。さて『日支交通史』は単なる外交史や貿易史ではなく、むしろ文化の交流に重点をおいたものであった。ことに禅僧の往来を中心とした記述には苦心のあとをみることができる労作であった。これまでにない詳密な考証を試み、かつ文化史的な見方を強調したものであったから、学界や読書界に新風を吹き込んだ意義は大きかった。当時、朝日新聞の学芸欄に、奈良の大仏と洛陽白司馬坂の大仏といった題で、本書の紹介がこころみられ、とくに奈良の大仏の源流を唐代の造仏に求めた考証が高く評価された。それは、大仏は奴隷の労力の結晶なりといったような階級史観が一方でとなえられていた時代であったから、本書のような文化史観が珍重されたのでもあろう。本書は泰彦が四十歳のころの壮年期の著作であるが、いたく世の歓迎を受け、広く購読されたのみならず、昭和六年には中国の陳捷が本書を翻訳し、『中日交通史』と題して、上海商務

[16]「『日支交通史』の基礎研究」、創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』（静岡：編者、一九九二年）、九七頁。

印書館から出版し、次いで同十年には同書館の普及版叢書である「万有文庫」中にも入れられ、更に翌十一年には王輯五が本書を簡約して『中国日本交通史』を公刊するなど、中国学徒にもますます広く愛読され、日中両国民の融和親善に多大の貢献をなしたのである。」(傍線は引用者)[17]

(2) 出版当時の評価

まず、『日支交通史』上巻の出版に伴い、1926年に朝日新聞に広告が出た。広告には、同書の特徴が次のように書かれている。

「過去における支那は、實に我が文化の母國であつた。我は彼と交通することによつて、次ぎ次ぎに新文化を攝取し、彼進めば我も亦進み、常に彼に追從して來た。從て我が文化發展の跡を尋ね、その本質を究めるには、まづ日支交通の沿革を知らねばならぬ。本書は著者多年の蘊蓄を集大成したもので日支間の外交貿易を論じ、文化の移植を明にし、その詳細にして懇切なる、本書を措いて他に索むることは出來ぬ。」[18]

続いて、『歴史地理』の新刊紹介で上巻と下巻が、1926年と1928年にそれぞれ取り上げられる。

上巻:

「我邦の文化が支那のそれに負ふ所の多大なるは今更いふまでもない。從つて我が國史を明にせんには勢ひ溯つて支那西域諸國の關係を究明しなければならぬことは言ふまでもない。(…中略…)特に著者の取られた態度が單なる交通史に終わることなくして文化の移植といふことに力を致された點は、非常に結構なことである。されば所謂遣唐使や留學生乃至歸化漢人等に就いても可なり詳細に記されて居るのは喜ばしいことである。巻末の索引また至便(…下略…)。」[19]

下巻:

「本書は先年公にして好評を博された日支交通史の上巻を承けたもの(…中略…)。我邦の文化が支那のそれに負ふ所の多大なるは今更いふまでもないが、

[17]「『日支交通史』の出版」、創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦:その生涯と業績』(静岡:編者、一九九二年)、一〇三－一〇四頁。なお、引用文中に登場する「朝日新聞の学芸覧」について、引用者は未見である。

[18]『朝日新聞』1926(大正5)年9月19日東京版、朝刊、1ページ。朝日新聞データベース聞蔵IIを利用した。

[19]『歴史地理』第48巻第5号(通号322)(東京:日本歴史地理研究會、1926年11月)、九〇頁。

入宋交通の結果として禅宗の輸入によつて著しき變化を来した。」

「本書は先づ宋代文化の移植を説いて頗る詳細である。（…中略…）帰化元僧や入元僧による元の文化の移植も決して少しとしない。これ等の影響（…中略…）はやがて我が国民性にも影響を及ぼした所である。室町時代に入ると、（…中略…）更に進んで通商貿易を開いたところに時代の推移を知らねばならぬ。この傾向は明末から清初に入つて更に盛になつたことは言ふまでもないが、本書は實にこれ等の關係に亘つて頗る詳細に説き、且つ前巻同様一々その出典を明示して居る上に巻末には人名件名等の精しい索引が附けてあるから、研究者に取つては頗る便宜である。」

「その挿繪の如きも必ずしも多きを欲せずして、（…中略…）著者の意のある所を見るべきである。本文五八四頁、年表百頁、索引二三頁、以てこの下巻を完成した著者の勞は容易ではなかつたであらう。上巻と併せて我が支那交通史を知らんとする者の必讀の書として洽く之を江湖に推薦するものである。」[20]

以上の引用から理解できるように、『日支交通史』は出版当時の日本史研究の領域で高い評価を得ていた。

さらに、『日支交通史』に対する高い評価は日本のみに止まらない。『日支交通史』は中国で『中日交通史』として中国語に訳出された[21]。訳者の陳捷は訳者序（1935 年）において、『日支交通史』が時代やテーマを限定せず、総合的かつ系統的に叙述しているのを高く評価している。

（二）『日華文化交流史』に対する出版当時の評価

⑴　出版の背景

『木宮泰彦：その生涯と業績』は、『日華文化交流史』出版の背景を次のように説明する。

「昭和十五年の夏、泰彦は文部省の命により中国に出張した。（…中略…）こうした研究努力の成果が昭和十八年になって、漸くまとめられ、あらためて『日華文化交流史』と題して刊行されることとなった。しかし、紙の不足で、すぐには出版することができなかったから、原稿を出版社に預けたままであった。かくて、昭和二十年三月、漸く公刊の運びとなった。しかし、東京は米軍の大空襲にあい不幸にも印刷所は焼かれ、原稿も資料も一夜にして悉く灰燼に帰し

[20]『歴史地理』第 51 巻第 4 号（通号 339）（東京：日本歴史地理研究會、1928 年 4 月）、九七頁。
[21]『日支交通史』および『日華文化交流史』の中国語訳については、本稿 154 頁で後述する。

てしまった。これがため一時は失望落胆して、為すところを知らない有様であった。しかし、さらに勇を鼓し筐底に残った資料を順次整理し、十年後の昭和三十年七月になって『日華文化交流史』は漸く世に公刊されることになった。本書の刊行がいかに苦難の途をたどり、やっと日の目をみたかが窺い知られるであろう。本書の原点はさきの『日支交通史』上・下巻にあったとはいうものの、紙幅においては約三分の一を増加しての著書である。日本と中国との交流を広範な文献資料によって精査し、鋭い洞察と真摯な実証を試み、さらに豊富な文献資料を駆使して学問的に体系づけた画期的な著述でもある。最近中国において、陝西師範大学の胡錫年教授が本書を翻訳して、『中日文化交流史』を公刊している。また、司馬遼太郎は『週刊朝日』(昭和五九年八月二十四・三十一日)の「街道をゆく」という連載の中で本書の一部を引用しているなど、多数の学者や作家たちに利用され評価されている。」(傍線は引用者)[22]

(2) 出版当時の評価

1955年7月に『日華文化交流史』が出版されると、1956年1月に船木勝馬[23]が書評を書いた[24]。

「大正十五年に著者の「日支交通史」上・下二巻が刊行され、以来三十年を閲した今日に至るまで、同書の学問的価値は聊かも失われず、又その間同書は内外の学徒の耽読すべき書として洛陽の紙価を高からしめ、戦後その再刊は久しく渇望されて来たが、今回「日華文化交流史」として全一巻に纒められ、特に文化交流の問題を全面的に増補改訂せられたことは誠に同慶の至である。」

「大綱に於いては旧刊のそれを踏襲したものである。勿論各専門分野に於いて個人の問題を取上げて仔細に検討すれば疑義もあり、又最近の研究成果を無視した憾がないでもないが、然し之によって毫も本書の価値が減ぜられるものではなく、綜合された日華文化交流史の体系の前に粛然たらざるを得ない。」

以上の引用から理解できるように、旧著『日支交通史』(一九二六－一九二七年)

[22] 「『日華文化交流史』の刊行」、創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦:その生涯と業績』(静岡:編者、一九九二年)、二一二－二一三頁。なお、引用文中に登場する『週刊朝日』について、引用者は未見である。

[23] 船木勝馬(1924－?)、朝鮮仁川府出身。九州大学法文学部史学科卒。九州大学文学部助手を経て、1955年4月より東洋大学文学部助教授、白山史学会の再建に従事。1966年同教授、1975年より中央大学文学部教授。1994年に定年退職。

[24] 船木勝馬「木宮泰彦著『日華文化交流史』」、『白山史学』第2号(東京:東洋大学史学研究室白山史学会、1956年1月)、六三－六四、三九頁。

を高く評価し、新著『日華文化交流史』（一九五五年）での旧著以来の総合性や体系性を高く評価している。同時に、新著が当時の先行研究の個別具体的な成果を無視していることに、船木は苦言を呈していた。つまり、日本史研究の世界では、一九二〇年代と一九五五年とでスタイルに変化があった。研究課題が細分化し、先行研究との差異を明示しなければならなくなっていたのである。

要するに『日華文化交流史』は、第二次大戦後に大きく変化した日本史研究のスタイルを全く反映しておらず、いわゆる時代遅れの産物となってしまった。このことを坂本太郎[25]の回想が伝える。

「学位論文提出の経緯について、泰彦と同郷同学の後輩にも当たる東京大学名誉教授坂本太郎の「木宮先生を偲ぶ」の一文に、その間の事情をよく伝えているので次に記してみたい。

「（前略）当時、高等学校の教授といえば、安定した地位であって、勉強はあまりしないのが通例であったから、先生の篤学はとくに光って見えたのである。

これについて、私の残念に思うのは、先生は『日支交通史』を出版したとき学位論文として提出されればよかったのにということである。その頃に先生の恩師であった三上・黒板・辻の三教授が健在であったから論文の審査を請求するのにタイミングは丁度よかったと思われるのである。

戦後、昭和三十年代に、先生は『日支交通史』を『日華文化交流史』という一冊に改編せられて、これを学位論文にしたいという意向を私に洩らされたことがある。常葉学園の初代の学園長は学問の上でもりっぱな業績をあげたことを、後代に伝えたいというご趣旨であった。私は先生の心事を諒としたし、『日支交通史』の出版当時における学術的価値を認めるのにも人後に落ちるつもりはないが、ただ三十年たった後となると、その評価もかわらざるを得ないということを恐れた。そして、何よりも大先輩たる先生の著書を後輩の私どもが審査するのは、いかにもおこがましいという感情を抑えることができなかった。同僚であった岩生教授の意見も徴して、言いにくいことではあったが、先生の申出をおことわりしたのである。」」（傍線は引用者）[26]

[25] 坂本太郎（1901－1987）、静岡県浜名郡出身。東京帝国大学文学部国史学科卒業、同大学院満期退学。1945 年より 1962 年まで東京大学文学部教授。

[26]「学位論文のこと」、創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』（静岡：編者、一九九二年）、二七一－二七四頁。なお、引用文中に登場する『週刊朝日』について、引用者は未見である。

坂本太郎の回想は、『日支交通史』を高く評価しながら、昭和 30 年代（1955－1964 年）の日本史研究の物差しでは、『日華文化交流史』を博士論文として認定できなかったことを物語る。

このように木宮泰彦は 1955 年（木宮 68 歳）に『日華文化交流史』を出版し、その後に博士学位請求論文にしようと試みるも、東京大学から内々に審査を拒否された。また、1965 年（木宮 78 歳）に『日本古印刷文化史』と併せて再版するも、内容に変更はない。

なお、『日華文化交流史』に対する研究スタイル上の低評価は、日本だけに止まらなかった。『日華文化交流史』もまた中国で『日中文化交流史』として中国語に訳出された。訳者の胡錫年は訳序（1980 年）において、『日支交通史』以来の総合的かつ系統的な叙述を高く評価する。しかし同時に、史料の誤読や引用ミス、さらに先行研究への言及の欠如を指摘する。その評価は、船木勝馬の書評、坂本太郎の回想と相通じていると言える。

二、先行研究による評価

『日華文化交流史』は、どのような評価を受けてきたのか。この問いに応えるべく、ここでは二つの情報に基づく。情報の一つは、木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』（静岡：静岡谷島屋、一九八五年）である[27]。同書は、「歴史家木宮泰彦の日中文化交流史の本格的な研究を回顧して、いかにわが史学界に多大の業績と足跡とを残したかを再認識」しようと試みたものである。著者の木宮之彦はこの書籍の中で、木宮泰彦の多くの著書を刊行年順に取り上げ、それらの著作に対する書評や寸評、さらに引用や言及を網羅的に収録している。もう一つの情報は、大原嘉豊による概説である[28]。大原嘉豊は「美術史学から見た東アジア交流史研究の課題」を提示するために、その前提として対外交流史研究の成果を踏まえる。木宮之彦と大原嘉豊の案内を受け、以下ではいくつかの先行研究が『日支交通史』および『日華文化交流史』に対して下した評価を、それぞれ確認しよう。

[27] 木宮之彦は木宮泰彦の長男であり、父泰彦と同じ歴史研究者となり、『入宋僧奝然の研究』（東京：鹿島出版会、一九八三年）を著わした人物である。

[28] 対外交流史研究の動向については、大原嘉豊氏（京都国立博物館・保存修理指導室長）に下記の講演でご教示いただいた。大原嘉豊「美術史学から見た東アジア交流史研究の課題」（常葉大学静岡キャンパス瀬名校舎、2018 年 2 月 14 日（水））。

（一）国民的熱意の欠けた静かな研究

二〇世紀前半までに、日中関係史に関する研究がいくつか存在した。秋山謙蔵はそうした研究成果を四つに分類した上で、『日支交通史』を従来の諸研究の綜合というふうに評価する。

「明治維新以後における日支交渉史研究には四つの型がある。Ａ．維新型、Ｂ．明治型、Ｃ．大正型、Ｄ．昭和型であり、維新型の研究代表として『外交史稿』[29]を挙げ、明治型の代表として菅沼貞風の『大日本商業史』[30]を挙げることができる。大正型の代表として木宮泰彦『日支交通史』を挙げ、さらに三浦周行の論文「元寇に関する新研究」、八代国治の論文「蒙古襲来についての研究」などを付加挙示している。」（秋山謙蔵『日支交渉史研究』東京：岩波書店、一九三九年、三〇頁）[31]

「木宮泰彦の研究は従来の諸研究を綜合し大成したもので、維新型の研究を詳細にしたものであるが、菅沼貞風の『大日本商業史』に見られるような南進の気概、国力の伸展をになうような熱意が消えている。三浦・八代らの研究も「研究は静かに進められ」「新史料の発見をもってこの研究の基礎とせられ、ただこれを学界に報告せられたに止まる」と述べている。」（秋山謙蔵『日支交渉史研究』三三頁）[32]

「さらに昭和型は（…中略…）国際情勢の深刻化を背景に（…中略…）「さらに強靭なる国民的熱意」あるものといっている。そして秋山謙蔵は自らの著書『日支交渉史研究』こそまさに昭和型の代表的なものであると擬している。」（秋山謙蔵『日支交渉史研究』三五頁）[33]

このように秋山謙蔵は、木宮泰彦『日支交通史』に対して、従来の諸研究の綜合であり、国民的熱意の欠けた静かな研究であるという理由を挙げ、低い評価を下す。後に、川添昭二『蒙古襲来研究史論』は秋山の評価に反駁し、木宮泰彦『日支交通史』の実証性の高さを擁護した[34]。木宮之彦は「（筆者付記）」の中で川添昭二を引きながら、秋山に疑問を呈す。

---

[29] 外務省記録局（纂修）『外交志稿』（東京：外務省記録局、一八八四年）。
[30] 菅沼貞風『大日本商業史：附平戸貿易史』（東京：東邦協会、一八九二年）。
[31] 木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』（静岡：静岡谷島屋、一九八五年）、九七－九八頁。
[32] 木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』九八頁。
[33] 木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』九八頁。
[34] 川添昭二『蒙古襲来研究史論』〔中世史選書１〕（東京：雄山閣出版、一九七七）、一〇八－一〇九頁。木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』九九、一二七－一三一頁より再引用した。

「実証性は学問の本質であるが、それはなにもそのまま「国民的熱意」を喪失していることを意味していない。川添昭二氏はその著『蒙古襲来研究史論』のなかで述べられている。筆者は川添昭二氏の考察に全面的に賛意を表するものである。」[35]

なお、秋山謙蔵の研究には体制迎合的な側面があったことに、触れておかなければなるまい。

「日本の歴史を一貫するものの力とは何か。金甌無欠なる国体の尊厳であり、この尊厳無比なる国体を捧持して発展した国家及び国民の生活である。」(『歴史と現実』創元社、一九三九年、七頁)

特に日本の海外進出について、

「この活躍の一つの結論は、かの豊臣秀吉が、天皇を北支の中心である北京に、自らは南支の中心である寧波に移り住み、以て東亜百年の計を樹立しようとした征明役であつた。」(『歴史と現実』創元社、一九三九年、九頁)

と説明し、日中戦争の最中に、日中戦争と秀吉による明征服という夢想とを、あたかもその最終目標において重ねたほどの人物である。そのような体制迎合主義者の目から見れば、史料の博捜と実証に徹した木宮泰彦のような「大正型」の文献史学などは面白くもなんともなく、無味乾燥な代物に見えたのだろう。それにしても、「南進の気概、国力の進展をになうような熱意が消えている」と言って、木宮泰彦に評価を下すのは、まるで筋違いである。木宮之彦でなくても、秋山の言辞には反発を禁じ得ない。

(二) 平板で概説的な研究

少なくない研究者が、木宮泰彦の研究を「平板で概説的」だと評価する。旧著『日支交通史』(一九二六－一九二七)を含め『日華文化交流史』は、「平板ではあるが、系統的・総括的な叙述に優れている。特に文化的交渉の記事が詳しく、(…中略…)禅僧の往来を中心とした記述には苦心の跡を見ることができる」と評価されてきた[36]。

山内晋次は「解説　森克己の研究の意義と問題点」[37]の中で、木宮にも言及する。

[35] 木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』九九頁。
[36] 田中健夫『中世対外関係史』(東京：東京大学出版会、一九七五)、五頁。木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』(静岡：静岡谷島屋、一九八五)、一一八より再引用した。
[37] 山内晋次「解説 森克己の研究の意義と問題点」、森克己『新訂 日宋貿易の研究』(東京：勉誠出版、二〇〇八年)、四五三－四六五頁。

「日宋交通・日宋貿易に関する研究はもちろん、森克己以前にもさまざまにおこなわれている。たとえば、はやくは、森の恩師である黒板勝美（一九一一）・辻善之助（一九一七）、あるいは東京帝国大学の先輩にあたる木宮泰彦（一九二六・一九二七）・西岡虎之助（一九八四）らの研究がある。」（四五六頁）

この個所には注があり、次のように補足する。

「先行研究としておそらくもっとも詳細かつ体系的であったと思われる木宮泰彦の業績については、なぜか森はまったくといっていいほど言及していない。管見の限り、わずかに森克己（一九五九）において、「概説的平板的な研究」と低い評価を与えているのみである。」（四六三－四六四頁）（傍線引用者）

ここで言う「森克己（一九五九）」とは、国際歴史学会議日本国内委員会編『日本における歴史学の発達と現状』（東京大学出版会、一九五九年）の「〈第八章　外国関係史〉一　古代－室町時代」に見える森のコメントである。

ただし、ここで山内が付した注記には問題がある。森のコメントの全体は、次のようなものであった。

「遣唐使廃止後の対外関係は明治時代には単なる私貿易時代として殆んど関心がもたれなかった。大正末期に木宮泰彦がこの時代を取り上げ注目をひいたがそれは概説的平面的な研究であった。この所謂私貿易が掘り下げて研究されるようになったのは、昭和以後のことである。」

森は、明治時代には軽視された遣唐使廃止後の日中間の私貿易に木宮が『日支交通史』で言及した点を評価しつつも、その記述が「概説的平面的」なものにとどまった、と指摘しているのである。つまり、森はここでは木宮の私貿易に関する記述のみを「概説的平面的」だと言っているのであり、『日支交通史』や木宮の研究全体がそうだと言っているわけではない。その点でこの山内の注記は無用な誤解を招く恐れがあり、木宮にも、また森に対しても礼を失するものと言わざるを得ない。

しかし、木宮の長男の木宮之彦ですら『日支交通史』について「余りにも平板的であり、且つ概説的に叙述されている」と率直に認めているように、全体として木宮の研究が概説的で平面的なものであった、ということは大方の一致する見方であった。しかし、之彦はその上で、「しかし、平板的であり概説的であればこそ、本書は日中文化交流史に関するもっとも平易な通史であり、また入門書であると称してもよいであろう」と言い、その積極的価値を強調している[38]。

また、之彦の弟であり、泰彦の次男である木宮高彦も、木宮泰彦の概括的な研究

[38] 木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』二四頁。

を評価している。

「父の学問研鑽の方法は、膨大な資料に基いて、事実を丹念に分析総合して、その歴史的意義を探り、総合的な理論を展開するというやり方である。必ずしも直観力や想像力は豊かではなかったが、その透徹した分析力や厳しい批判力あるいは巧みな総合力は、遙かに人に秀でたものがあった。」(傍線引用者)[39]

としている。

第二次大戦後には新しい資料や研究方法が登場し、日中両国の歴史学界では研究水準が向上した。二〇世紀後半以降の歴史学の作法では、『日支交通史』や『日華文化交流史』の考察対象になる事項や現象はあまりに深く広く、もはや一個人による専門研究が扱える範囲を大いに超えた。そのために、『日華文化交流史』は平板で概説的だと評価され、日本史に限らず、中国史(特に中日関係史)の研究成果を眺めても、類似の専門書は見当たらない。

(三)近代日本で初めて史料を博覧しフレームを構築した先駆的研究

大原嘉豊は、近代日本で初めて史料を博覧してフレームを構築した研究であると、『日華文化交流史』(正確に言えば『日支交通史』)を評価する。木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』(1985 年)から 30 余年が経ち、対外交流史に関する研究成果もさらに登場した。大原嘉豊は自身の専門領域である美術史学(日本仏画専門)という立場から、木宮泰彦の研究を積極的に評価する。以下では、その概要を示そう。

美術史学において作品は一次史料であり、作品の編年を行うことが基礎作業である。作品は非言語的な視覚造形であるから、複数の作品を比較しながら、一つの作品がいつ作られたのかを判定していく。近代以前の日本美術を研究する際、対外交流史という発想が重要になってくる。ある地域の作品と別の地域の作品との影響関係は、作品を取り巻く二つの地域に相互交流があるから生じる。そして、交流の実態を把握するためには、地理、手段、経路など様々なファクターを想定しなければならない。

近代以前の日本の対外交流の歩みについて、近代日本で最初に史料を渉猟して叙述したのが木宮泰彦であり、ここに『日支交通史』の先駆性がある。木宮泰彦の研究には二つの特徴を指摘できよう。一つは、史料を一つ一つ実見しながら史料間に

[39] 木宮高彦「父への回想—その人と思想—」、「八十年の生涯 木宮泰彦自伝と追憶」刊行会(編)『八十年の生涯:木宮泰彦自傳と追憶』静岡:編者、一九七〇年、五六一頁。

脈絡を見出して、一五〇〇年以上に及ぶ日本の対外交流の歩みを説明するフレーム（枠組み）を構築したことである。こうした特徴は東京帝国大学での先輩に当たる辻善之助の日本仏教史研究と同じであった。史料を博覧して一つの大きな流れにまとめあげるというのは、非常に大変な作業である。『日支交通史』や『日華文化交流史』を単に史料を集めただけだというのは、的外れな非難である。木宮泰彦は、「大きなテーマを根気よく追求するのではなく、小さなテーマを徹底的に極めることである。その上で研究対象を小刻みに変えてゆく。かくすることによって研究の分野を諸分野に拡張することができる」と述べたという[40]。こうした木宮の研究態度も辻善之助と似ている。恐らく木宮泰彦はカードで項目整理していたのではないだろうか。

木宮の研究の特徴のもう一つは、木宮の対外交流史研究に取り組む動機が、当時の帝国主義的な風潮と無縁であったことにある。木宮自身が外国語を得意としなかったのと、寺院に生まれたのが影響したのか、木宮は禅宗史を研究したくて国史を専攻したというのが原因であろう。周知のとおり、戦前の日本では地理学などの地域研究（Regional Study）が非常に重視されていた。これは、日本の国策や戦略と密接に繋がっていたからである。木宮の著作にはあまり政治臭がなく、そのために同時代の中国で翻訳もされ、また今日でも学問的生命を持ち続けている理由でもあろう。この特徴も辻善之助とよく似ている。

対外交流史研究は一時期低調になったものの、近年は再び活性化している。木宮泰彦の少し後に、森克己（1903－1981）が登場して日宋貿易を中心に研究した。長らく木宮と森の研究業績が、対外交流史研究のスタンダードとなり、逆に研究の動向としてはしばらく低調になっていたところがある。というのは、やはりこの両人が日本史史料を使って研究できることを、ある程度やりきったからだろう。森克己は満洲建国大学にも赴任していたように、東洋史研究にも明るかったので、なおさらであった。木宮泰彦も一九四〇（昭和十五）年に中国調査を実施したのは、やはり交流のもう一方の側の方面の不足を感じていたからにちがいない。

いま一つ、日本の学界で対外交流史研究がしばらく一時期低調だった理由は、漢文資料へのアクセスが相変わらず難しかったからである。対外交流史という性格上、片側の国（つまり日本）だけの史料ではそもそも研究できない。もう片側（つまり

[40] ほぼ同じ発言が、創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』（静岡：編者、一九九二年）、二六四頁に載る。初出は、「八十年の生涯 木宮泰彦自伝と追憶」刊行会（編）『八十年の生涯：木宮泰彦自傳と追憶』静岡：編者、一九七〇年か。

中国）の史料（主に漢文資料）を扱わなければならない。ただし、漢文史料というのは扱うのに相当のスキルが必要である。漢文は、中国の膨大な地理的かつ歴史的な知識とその検索能力を持たなければ読めない。さらに、特に士大夫層が自らの教養をひけらかすように古典を踏まえて文章を作っているため、読み手はその出典に気づき、それを踏まえて読み解かなければならない。現在のように電子検索などできないから、長らくは博覧強記で読むしかなかった。しかも、中国は文の国だけあって、膨大な量の漢籍が残っている。つまり日本史学だけしか修めていない研究者では、漢文資料にまず歯が立たない。

しかし、2000年ごろを前後して、対外交流史研究が再び活性化して今にいたる。主な原因は、漢文史料へのアクセスが非常に良くなったことにある。中国の出版事情が向上し、基本的な史料はほとんど書籍として出版され、一般人が容易に入手可能になった。さらに、電子検索もできるようになった。こうして、日本史の研究者が再び対外交流史研究に参入できる条件が、整ってきた。まさに対外交流史研究は、更なる可能性を秘めた研究領域なのである。

重要な工具書や参考書が出版された。例えば、次のような文献が挙がろう。

石井正敏・川越泰博編著『日中・日朝関係研究文献目録』〔増補改訂版〕（国書刊行会、1996年）。

『対外関係史総合年表』（吉川弘文館、1999年）。

中田易直編『近世日本対外関係文献目録』（刀水書房、1999年）。

田中健夫『対外関係史研究のあゆみ』（吉川弘文館、2003年）[41]。

池田温編『日本古代史を学ぶための漢文入門』（吉川弘文館、2006年）。

田中健夫、石井正敏（編）『対外関係史辞典』（吉川弘文館、2009年）。

対外交流史研究の活性化に導いたのは、特に東京大学の田中健夫や村井章介である。村井の門下に橋本雄（北海道大学）や榎本渉（国際日本文化研究センター）がいる。研究活動は東京大学だけにとどまらず、近畿では東野治之や山内晋次が研究に携わっている。中でも榎本渉には、『南宋・元代日中渡航僧伝記集成：附江戸時代における僧伝集積過程の研究』（勉誠出版、2013年）や、『僧侶と海商たちの東シナ海（増訂版）』（講談社学術文庫、2020年）がある。研究対象が同じであることから、現在のところ榎本渉が木宮泰彦の研究を正負の両面で最も正当に評価でき

[41] 特に対外関係史研究のあゆみを概観できるのは、同書所収の「I 一 対外関係史研究の課題—中世の問題を中心に—」（二－三三頁）、および「II 一 中世対外関係史研究の動向（一九六三年）」（七二－九九頁）である。

る人物だと言えよう。

三、常葉大学教員による評価

ここでは、2017 年度から 2018 年度にかけて『日華文化交流史』を輪読した常葉大学教員による評価を、いくつか記そう。

（一）優れた歴史資料集（濱川栄）

『日支交通史』や『日華文化交流史』は、日中の文化交流に関わる膨大な史料に容易にアクセスできる「歴史資料集」としての価値が非常に高かった。特に、日中間を往来した僧侶や船舶を大量の一覧表で明示するから、読者は日中関係の歴史を系統的かつ概括的に理解できるのである。

『日華文化交流史』の底本となる『日支交通史』は、国内外で高い評価を受けた。特に中国で早々に翻訳され、以後も簡約版・通俗版が連綿と出版される。中国で『日支交通史』が高く評価されたのは、同書が日本独自の史料は当然のことながら、中国の貴重な史料を網羅的に取り上げていたからだろう。中国の資料の中には、かつては存在したのに戦乱や革命で散逸したり消滅したりして、もはや中国では見ることのできなくなったものもあった。そして、木宮自身もそのことをよく理解していた。だからこそ、『日支交通史』刊行後になって新たに入手しえた少なくない史料の情報をみすみす死蔵するわけにはいかず、あらゆる困難を顧みずに『日華文化交流史』の刊行を目指したにちがいない。

実のところ、木宮は自らの著作自体を、日中文化交流の一翼を担う文化遺産として残そうと願ったのだろう。我々は木宮に備わるそうした大きな理想を想定してこそ、木宮が B29 の空襲による焼失をものともせず、『日華文化交流史』の刊行に執念を燃やした理由を得心できる。

（二）興味深い中国観（濱川栄）

しかし、最後まで理解に苦しむのは木宮自身の中国観である。それはもちろん、木宮の皇国史観や国粋主義への態度と表裏をなす。戦前の姿勢はあえて問うまい。問題は、戦後になって木宮の考えに変化が生じたかどうかである。戦後十年目に刊行された『日華文化交流史』において、皇族に敬語を使い、足利義満を痛罵し、年表に皇紀を使う。その姿勢は、見ようによっては国粋主義を色濃く引きずっている

ように取られかねず、その中国観も推して知るべし、と誤解される恐れもある。

いったい、戦後の木宮は中国を、そして中国文化を、どう見ていたのか。今さらではあるが、『日支交通史』、『日華文化交流史』初版、『日華文化交流史』再版にそれぞれ所収の序文を比較し、その変化の跡を確認しておきたい。

そもそも、『日支交通史』の「序言」で木宮は、

「過去に於ける支那は、実に我が文化の母国であつた。我が国は支那と交通することによつて、次ぎ次ぎに新らしい文化を採り入れて、彼進めば我も亦進み、常に彼に追従して来た。」(傍線引用者)

と述べる。「過去に於ける支那は」という書きぶりは、「しかし今は違う」という意味に取れる。中国を蔑視し、侵略の対象と見ていた二十世紀初頭の一般的風潮が、ここにも反映しているようである。

しかし、戦後十年目刊行の『日華文化交流史』の「序」では、

「過去凡そ千八九百年の永きに亘り、日華両国間には絶えず文化の交流が行はれた。我が国は上代から朝鮮半島を経由し、或は直接に中国と交通して、次ぎ次ぎに新文化を摂取し、これを咀嚼し、醇化することによって我が固有の文化を培い、特異優秀な国風文化を創造して来た。さうして時にはこれを中国に致して、その文化の発展をも促した。」(傍線引用者)

とする。ここでは、中国文化の圧倒的影響を受けつつもそれを消化して固有の文化へと昇華し、国風文化を作り上げ、時々それを中国に逆輸出した、という面を強調している。

ところが、それからさらに十年後の一九六五(昭和四〇)年に出た再版『日華文化交流史』に所収の「再版に際して」では、

「我が史学界の傾向を観るに、一般に国史研究者の視野は、あまりに国内に限られ、大陸の政変や文化の動向には殆ど無関心のようである。これは国史研究の著しい欠陥であろう。いうまでもなく我が国は、アジヤ大陸とは海を隔て、東方に偏在する島国である。併し海は国と国とを隔離するが、また国と国とを結びつけるもので、遠距離の交通は、海によればこそ容易に行われる場合が多い。だから、原始時代に於てすら既に大陸の影響を被っていたことは、考古学の証明するところである。歴史時代に入ってから、大陸に於ける幾多の政変や文化の動向は、多少時代のずれはあっても、次ぎ次ぎに我が国に波及し、影響を及ぼしている。大陸との交通が殆ど杜絶した時代、我が国独特の、いわゆる国風文化が起ったといっても、仔細に検討すれば、これも既に前代に摂取し、受容

したものを、咀嚼し、醇化したに過ぎないことが多い。だから国史の研究には視野を広くし、常に大陸の政変を考え、文化の動向を察しなくては、正しく理解することは困難であろう。」（傍線引用者）

と言う。なんと、「国風文化」でさえ中国文化を「咀嚼し、醇化したに過ぎない」、と述べるのである[42]。

「再版に際して」が、木宮の研究者としての最後の意思表示とみなせる。そうであるなら、やはり木宮の研究における関心の根底には、中国文化に対する尽きせぬ感興と憧憬があったものと思われる。その感情は、『日支交通史』が中国で好評を博したことでさらに高まったのであろう。その好評にさらに応えるために、そして自らの著作を日中文化交流の礎の一つとするためにこそ、木宮は原稿焼失という障壁を乗り越え、『日支交通史』の改訂版たる『日華文化交流史』を刊行したのである。

こうなると、現在の中国において、『日華文化交流史』の認知度が必ずしも高くないことは、泉下の木宮を悲しませていることであろう。共産党政権の成立などの社会環境の激変が関係しているのかはにわかに判断がつかないものの、確かに『日支交通史』に比べて『日華文化交流史』の真価が中国で充分に知られていない。多生の縁で木宮泰彦の衣鉢を継ぐべき位置に置かれた我々としては、今後の日中関係の深化に貢献するために、『日華文化交流史』の有効活用の方法を考えていくべきであろう。

（三）近代日本の学知における高等学校教授の研究活動（若松大祐）

木宮泰彦『日華文化交流史』は、単に日本史研究史上の一里塚だっただけではない。木宮泰彦はそもそも旧制高等学校の教授として『日支交通史』を上梓し、一九四〇年の中国で臨地調査を実施して、『日華文化交流史』の増補改訂を目指す。米軍の爆撃で『日華文化交流史』の原稿が灰と化したから、『日華文化交流史』の完成は静岡高等学校教授の退官後になった。つまり、『日華文化交流史』は、高等学校教授の研究成果である。残念ながら、彼のような高等学校教授の研究活動（論著執筆や臨地調査）は、これまであまり注目されてこなかったようだ。

確かに、研究史上に名前を残す大家は多くが帝国大学や有名私立大学の教授であった。しかし、高等学校教授の木宮が一九三〇（昭和五）年五月三〇日に、天皇

[42] ちなみに『日華文化交流史』の本文では、p.208 に国風文化の形成についてのやや詳しい説明がある。

の静岡行幸に際して進講を行った[43]。当時の学界において高い評価を受けていた証左である。

また、最近、中国で復刊された『近代海外漢学名著叢刊』〔六五種〕（山西人民出版社、二〇一五年）は、一九四九年以降の中国で復刊されていない書籍を収録対象としたもので、このシリーズは「歴史文化与社会経済」（二三種）、「古典文献与語言文字」（二二種）、「中外交通与辺疆史」（一八種）の三つに分かれる。「中外交通与辺疆史」には、木宮泰彦『日支交通史』の中文訳[44]が収録されている。

木宮泰彦『日華文化交流史』の意義は、本書の成立背景にもある。『日支交通史』や『日華文化交流史』は、近代日本の学知における旧制高等学校の教授の研究成果を評価する契機になろう[45]。

【参考資料】

（原書）

木宮泰彦『日支交通史』〔上、下〕東京：金刺芳流堂、一九二六－一九二七年。

木宮泰彦『日華文化交流史』東京：冨山房、一九五五年。

木宮泰彦『日華文化交流史』〔再刊〕東京：冨山房、一九八七年。

（翻訳）

木宮泰彦（著）、陳捷（訳）『中日交通史』〔王雲五主編「万有文庫」第二集漢訳世界名著、七冊〕上海：商務印書館、一九三五年。

木宮泰彦（著）、胡錫年（訳）『日中文化交流史』北京：商務印書館、一九八〇年。

[43] 題目は「日支の交通路—日隋、日唐、日宋、日元、日明」であった。木宮之彦『歴史学者木宮泰彦の認識と再発見』（静岡：静岡谷島屋、一九八五年）、五頁。

[44] 木宮泰彦（著）、陳捷（訳）『中日交通史』〔王雲五主編「万有文庫」第二集漢訳世界名著、七冊〕（上海：商務印書館、一九三五年）。

[45] 旧制高等学校への理解を深めるには、『旧制高等学校史研究』一－二〇号（東京：旧制高等学校資料保存会、一九七四年七月－一九七九年四月）を参照しなければならない。また、竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折』〔講談社学術文庫二〇三六〕（東京：講談社、二〇一一年）が役立つ。同書には参考文献（三六五－三七九頁）が多く掲載されている。

(4)　中国での『日華文化交流史』に対する評価[46]

尤　淑君[47]（著）
岡﨑　滋樹[48]（訳）
若松　大祐　（編）

はじめに
一、『日支交通史』と『日華文化交流史』の中国語訳
二、陳捷（訳）『中日交通史』（一九三一年）
三、胡錫年（訳）『日中文化交流史』（一九八〇年）
四、木宮泰彦が中国の学術界に与えた影響
おわりに
附録１
附録２

はじめに

中国で広く知られる木宮泰彦の代表的著作は、『日支交通史』（一九二六－一九二七年）と『日華文化交流史』（一九五五年）の中国語訳である。ここでは両書の翻訳の成立過程をたどり、中国における木宮泰彦への評価の内容を考察したい。

一、『日支交通史』と『日華文化交流史』の中国語訳

中国で広く知られる木宮泰彦の代表的な著作は、『日支交通史』〔上下巻〕（東京：金刺芳流堂、一九二六－一九二七年）、および増補改訂版『日華文化交流史』（東京：冨山房、一九五五年）である。中国浙江大学歴史学部が 2019 年 3 月 25 日（月）に浙江大学で、常葉大学共同研究と国際座談会「木宮泰彦と日中文化交流」を共催した際、開会の辞で肖如平（浙江大学中国近現代史研究所所長）は次のよう述べた。

「中日両国は一衣帯水の友好的な隣国同士である。両国の国家間の、民間の交流

[46] 本稿は、尤淑君（著）、岡﨑滋樹（訳）「木宮泰彦『日支交通史』中国語訳とその学術的影響」、『常葉大学外国語学部紀要』三七号（静岡：常葉大学外国語学部、二〇二〇年三月）、一九－二八頁を編者が大幅に改稿してなる。石暁軍氏からのコメント（本稿附録２）を踏まえ、著者との議論を経て、編者が新たに加筆した部分もある。
[47] 中国浙江大学歴史系・准教授、博士後期課程指導教員、第三期之江青年社科学者。
[48] 立命館大学経済学部・初任研究員。

の歴史はいずれもはるか昔から続く。木宮泰彦もまた中日文化交流において傑出した成果を上げた。日本の著名な教育家であり歴史学者として、木宮泰彦は中日文化交流の領域で、研究成果が多い。その著作『中日交通史』、『中日佛教交通史』、『日中文化交流史』は、ある世代の中日両国の学者にとって中日文化交流の歩みを理解するための重要な窓口であった。そして、中日両国の文化交流を推し進め、両国民間の友誼の深まりに重要な役割を果たしたのである。」

ここからもわかるように、木宮泰彦の著作には複数の中国語訳がある。

表 1、木宮泰彦著作の中国語版の系譜

	書名	訳者	出版社、出版年	原著	付記
①	『中日交通史』(2 冊)	陳捷	上海：商務印書館、1931 年	『日支交通史－上・下巻』(東京：金刺芳流堂、1926－1927 年)	第一版
②	『中日交通史』(2 冊)	陳捷	上海：商務印書館、1932 年	同上	「国難後第一版」と表記有
③	『中日交通史』(7 冊)	陳捷	上海：商務印書館、1935 年	同上	万有文庫第二集
④	『中日交通史』(7 冊)	陳捷	台北：台湾商務印書館、1965 年	同上	台湾第一版
⑤	『中日交通史』(1 冊)	陳捷	台北：三人行出版社、1974 年	同上	曹永和文庫
⑥	『中日交通史』(1 冊)	陳捷	台北：九思出版社、1978 年	同上	台湾第二版
⑦	『中日佛教交通史』(1 冊)	陳捷	台北：華宇出版社、1985 年	陳捷訳『中日交通史』(1931 年版)中から仏教関係部分を抽出したもの	世界佛学名著訳叢第 49 冊
⑧	『日中文化交流史』(1 冊)	胡錫年	北京：商務印書館、1980 年	『日華文化交流史』(東京：冨山房、1955 年)	
⑨	『中日交通史(節選)』(1 冊)	陳捷	貴陽：貴州大学出版社、2014 年	『中日佛教交通史』(台北：華宇出版社、1985 年)	現代世界佛学文庫
⑩	『中日交通史』(7 冊)	陳捷	太原：山西人民出版社、2015 年	『日支交通史ー上・下巻』(東京：金刺芳流堂、1926 － 1927 年)	国家出版基金項目(近代海外漢学名著叢刊・中外交通与辺疆史)

出典：中国国家図書館、台湾中央研究院傅斯年図書館、台湾国立政治大学図書館より筆者作成。

そこで、複数の中国語訳の関係をまずは整理しよう。木宮泰彦の『日支交通史』は日本で出版されるとすぐに中国の学界で注目を浴び、一九三一年には中国語へ訳出された。というのも、同書は初めて日中両国の文化交流史を系統的に論じた専門書だったからである。一九三一年から二〇二〇年までに、中国や台湾で全訳あるいは部分訳として出版された『中日交通史』と『日中文化交流史』は、計一〇種にも上る。中国語訳出版の系譜をまとめると表１の通りになる。また、本稿 12 頁の「『日華文化交流史』の版本と翻訳」の通りでもある。『中日佛教交通史』は部分訳だった。計一〇種のうち九種は陳捷の翻訳であり、残り一種は胡錫年の翻訳である。

二、陳捷（訳）『中日交通史』（一九三一年）

訳者の陳捷は、「訳者序」（一九三五年）の中で、『日支交通史』について次のように評価している。

「日本の史料について言えば、古代の史籍はただ断片が残っているだけであり、最近の研究はまた多くが一つのテーマに限定している。二千年の史実を総合し、系統的に叙述できたのは、木宮泰彦の中日交通史だけであり、しかも最も完善だと言えよう。木宮氏は中日古今の史料数百種を収集し、考証を詳らかに加え、文を綴り史実を並べて、合計四十万字に及ぶ。私はこれを読み、二千年来の中日交流の経緯を詳しく理解できた。しかもそれだけでなく、古代に外国が朝貢を名目にしながら貿易の利を謀ったり、我が国が羈縻政策を懐柔の手段としたりしたことに関して、みな一目瞭然になった。」

すなわち、（すでに本稿 140 頁で指摘したとおり、）訳者の陳捷は『日支交通史』が時代やテーマを限定せず、総合的かつ系統的に叙述するのを高く評価している。なお、訳者の陳捷がいかなる人物であるのかは、詳らかでない。また、中国語訳『中日交通史』が商務印書館から上下巻で一九三一年に出版された際は、「訳者序」はなかった。「訳者序」は、一九三五年に同書が商務印書館の『万有文庫』シリーズの一部として、七分冊で出版された際に付く。

表１からも分かる通り、陳捷訳『中日交通史』（上海：商務印書館、一九三一年）は、概して『日支交通史』の中国語訳を出版する際の底本になり、影響は極めて大きい。陳捷の訳書『中日交通史』は非常に好評だったから、一九三五年には商務印書館の『万有文庫』にも採用される。

『万有文庫』とは、文庫版の書籍のシリーズをいう。文庫版は廉価で読み易いから、

中国の一般読者から広く愛された。一九二〇年代、商務印書館に勤めていた王雲五は、「今や社会の改革が大いに進展し、様々な新しい思想や学術、事業が起き、それはまるで雨後の春筍のようであり、瞬く間に変化を遂げている」という世間の状況を鑑み、あらためて百科全書を編纂しようと決意する。編集委員を担当したのは、向達、竺可楨、陳捷、程瀚章、胡衡臣、黄静淵、王憲民等だった。王雲五等の編集に携わった人々には、教育や文化の力で中国を強国にしたいという決心があった。王雲五等の強く壮大な志があったからこそ、中国は困難な非常時下にありながらも、一七一〇種・四〇〇〇冊にも及ぶ叢書を刊行することができた。大英百科全書、日本の大百科事典、米国百科全書を主な底本にして、編訳と校訂を繰り返したという。

こうして、「如何なる個人あるいは家庭でも、ないしは新しい図書館でも、最も経済的且つ系統的に、それを手軽に揃えることができる」ようになった。『万有文庫』はまさに、二〇世紀前半の中国において最も影響力のある、且つスケールの大きい近代叢書である。王雲五と商務印書館が成し遂げた偉業は、アメリカ *The New York Times* 紙上においても、「苦難の渦中にある中国に、爆弾ではなく書籍を授けた」と評価され、さらには「物事の意味を明らかにしてそれを伝播する上で、最も野心的な取り組みである」と称賛されたのだった[49]。

また、陳捷の翻訳した万有文庫版は、冊数が二分冊から七分冊に増えた。このため、一九三七年に王輯五（一八九九年～没年不明）が、縮訳して『中国日本交通史』を出版する[50]。この『中国日本交通史』は、木宮泰彦『日支交通史』を含む、日本人研究者による日中交流史に関する著作３冊を総合して圧縮し、中国語に訳出したものである。木宮泰彦『日華文化交流史』（一九五五年）の「序」によると、同書もまた中国で幅広く読まれ、高く評価されたという。後に、日本語に訳出された[51]。

三、胡錫年（訳）『日中文化交流史』（一九八〇年）

訳者の胡錫年は、「訳序」（一九七八年付け）の中で、『日華文化交流史』について次のように評価している。第一に、日本において、日中文化関係史の研究はほとんどが特定のテーマを扱う傾向にある。木宮泰彦『日華文化交流史』だけが、有史

[49] 王雲五「印行〈万有文庫〉緣起」、梁由之（主編）『夢想与路径（１９１１－２０１１百年文萃）』〔第一巻〕（上海：商務印書館、二〇一二年）、二五三－二五四頁。劉正剛「出版界翹楚王雲五」、『粤商好儒』（広州：中山大学出版社、二〇一六年）、五七頁。

[50] 王輯五（編著）『中国日本交通史』〔中国文化史叢書第二輯〕（上海：商務印書館、一九三七年）。

[51] 王輯五（原著）、今井啓一（訳註）『日支交通史』（京都、東京：立命館出版部、一九四一年）。

以来明治維新までの日中文化交流史を系統的かつ包括的に描いている。第二に、木宮泰彦の名前は、『日支交通史』の中国語訳があるから、中国でもよく知られている。第三に、『日華文化交流史』は、内容が豊富であり、参考に値する。引用資料の多さや幅広さを大いに評価できる。第四に、とはいえ、不注意な個所がある。史料に対する誤読、矛盾する議論、孫引きである。そこで訳者がこれを正し、補った。第五に、『日華文化交流史』は一九五五年に初版が、一九六五年に再版が出た。再版時に、日本の新しい研究成果を盛り込むべきだった[52]。このように、『日華文化交流史』に対する胡錫年の評価は、船木勝馬の書評や坂本太郎の回想と相通じるものがある[53]。

胡錫年（訳）『日中文化交流史』の成立を、もう少し詳しく見てみよう。一九五五年、木宮泰彦は先の『日支交通史』を増補改訂して、『日華文化交流史』を出版する。だが、当時の中国は東西冷戦の影響を受けて国際社会で孤立し、東アジアの国々との交流も制限されていた。そのため、中国の学術界では海外の多くの新しい学知に触れることが難しい。そうした困難な状況下で、胡錫年（一九一三年～一九九六年）が『日華文化交流史』を中国語に訳出しようと志す。胡錫年は、中国における日中関係史や日本史研究の著名な学者である。（胡錫年という人物については、本稿末尾の付録１を参照されたい。）しかし、一九六六年から一〇年間続く文化大革命の混乱により中国の学術界も荒れ果て、胡錫年自身も迫害を受け、訳稿の一部を失う。一九七二年の日中国交正常化と共同声明発表を経て、中国を取り巻く国際環境が変わる。一九七六年に文化大革命が集結して、一九八〇年に胡錫年が名誉回復され、ようやく『日華文化交流史』の中国語訳が『日中文化交流史』として商務印書館から正式に出版されたのである[54]。

原著の『日華文化交流史』は全ての原稿を米軍機に焼かれ、訳著の『日中文化交流史』は原稿の一部を紅衛兵に奪われた。著者の木宮泰彦も、訳者の胡錫年もいずれも挫けずに出版を成し遂げた。残念ながら、木宮泰彦は日中国交正常化と自著の中国語訳を見ることなく、一九六九年にこの世を去っていた。

胡錫年（訳）『日中文化交流史』は約七〇万字にも上る大作であり、その内容は

[52] 木宮泰彦（著）、胡錫年（訳）『日中文化交流史』（北京：商務印書館、一九八〇年）、一－三頁。
[53] 『日華文化交流史』に対する評価を胡錫年と船木勝馬と坂本太郎で比較するのは、宮原佳昭氏（南山大学外国語学部・准教授）のアイデアである。宮原佳昭「木宮泰彦『日華文化交流史』の同時代的評価について」（常葉大学静岡草薙キャンパス、2020 年 11 月 9 日（月））の講演でのレジュメに基づく。
[54] 小石「胡錫年教授」、『陝西師大学報（哲学社会科学版）』一九九〇年〇一期、二頁。江西人民出版社編『浙江古今人物大辞典（下）』（南昌：江西人民出版社、一九八八年）、六三〇頁。

精緻な実証に裏付けられ、使われる史料も膨大な量であった。そのため、同書は中国の学者にとって空前の整合された重要参考書となり、中国における日中関係史研究の発展を大きく後押しした。

同時に、前述したように、胡錫年は木宮泰彦の著作が本来補充すべき点を指摘して補充したから、同書は中国の歴史学界だけでなく、日本の歴史学界でも反響を呼ぶ。振り返れば、第二次大戦後の日本の学術界では新しい研究成果が多く生まれていた。そこで一九六五年に『日華文化交流史』を再版する際、木宮泰彦はこうした新たな成果を取り入れてさらに増補改訂すべきだった。しかし、木宮泰彦はすでに七八歳という高齢で体力的にも衰え、学校経営に忙しく、遺憾としながらも増補改訂を果たせない。したがって、一九八〇年に胡錫年（訳）『日中文化交流史』が木宮泰彦に代わって増補改訂し、日中両国の学術界に残っていた重要な宿題をやり遂げたのである。

さらに胡錫年は、原著『日華文化交流史』での次代や年号の誤記を訂正している。さらに史料に対する誤読を指摘し、正しい読解を示した。木宮泰彦のミスの原因は、時として木宮が原史料を参照せずに、二次史料を使ったからだという[55]。

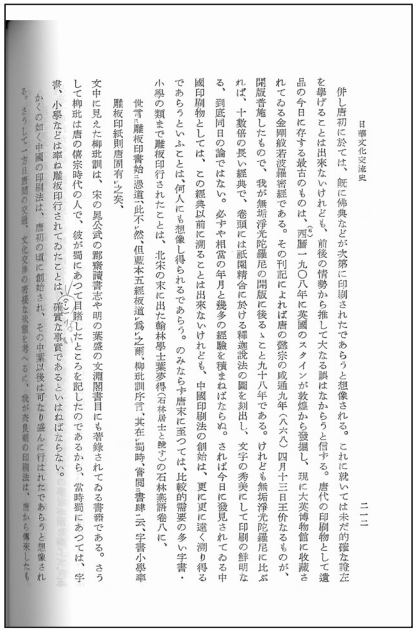
したがって、『日華文化交流史』は中国語訳版『日中文化交流史』（1980 年）が内容上、最も正確で豊富だと言える。訳者の胡錫年が日本語原著における誤字脱字を訂正するだけでなく、引用資料の誤読を正したのを、具体的に例示しよう。

[55] 木宮泰彦（著）、胡錫年（訳）『日中文化交流史』（北京：商務印書館、一九八〇年）、一－三頁。河村孝照「木宮泰彦先生著『日華文化交流史』と陝西師範大学教授胡錫年先生」、『国際経済論集』五巻一号＝通巻九号〔創立一〇周年記念号〕（浜松：浜松大学国際経済学部、一九九八年六月）、一八五－一九六頁。

【写真 1】

木宮泰彦『日華文化交流史』東京：冨山房、1955 年、pp.212－215。

p.212 の後ろから 5 行目に「柳玭訓」という書名が見える。また同じく p.212 の後ろから 3 行目に「(7)」という脚注番号がある。しかし、p.214 には脚注(7)に関する文章がない。

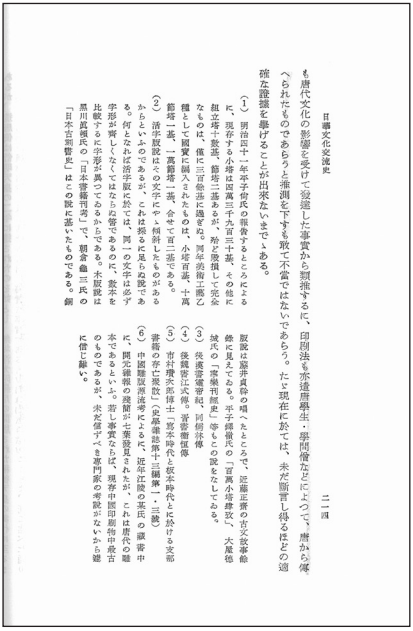


日華文化交流史　二一二

併し唐初に於ては、既に佛典などが次第に印刷されたであろうと想像される。これに就いては未だ的確な資料を挙げることは出来ないけれども、前後の情勢から推して大たる誤はなかろうと信ずる。唐代の印刷物として遺品の今日に存する最古のものは、西暦一九〇八年英國のスタインが敦煌から發掘し、現に大英博物館に收藏されてゐる金剛般若波羅密經である。その刊記によれば唐の咸通九年（八六八）四月十三日王价なるものが、開版壽施したもので、我が無垢淨光陀羅尼の開版に後るゝこと九十八年である。けれども無垢淨光陀羅尼に比ぶれば、十數倍の長い經典で、卷頭には紙闕續命に於ける轉讀法の圖を刻出し、文字の秀爽にして印刷の鮮明なる、到底同日の論ではない。必ずや相當の年月と幾多の經驗を積まねばなりたらぬ。されば今日に發見されてゐる中國印刷物としては、この經典以前に遡ることは出來ないけれども、中國印刷法の創始は、更に更に遠く測り得るであろうということは、何人にも想像し得られるであらう。のみならず唐末に至つては、比較的簡要の多い字書・小學の類まで離板印行されたことは、北宋の末に出た翰林學士葉夢得（石林燕語卷八に、世雪離板印書始遏道、此不然、但聚木五經板道爲之斷、柳玭訓所言、其在蜀時、嘗開書肆三云、字書小學率鬻板印鈔用唐開有之矣、

文中に見えた柳玭訓は、宋の見公武の郡齋讀書志や明の葉盛の文淵閣書目にも著錄されてゐる書籍である。さうして柳玭は蜀の僖宗時代の人で、彼が蜀にあつて目擊したところを記したのであるから、當時既にあつては、字書、小學などは率ね離板印行されてゐたことは、疑ふべき事實であるといはねばならない。

かくの如く中國の印刷法は、唐初の頃に創始され、その中葉以後は可なり盛んに行はれたであらうと想像される。さらしてソノ者日唐間の交通、文化交換の書籍を依據と考へるに、發兵夜見後の印刷法は、唐から傳來したものである。



日華文化交流史　二一四

も唐代文化の影響を受けて發達した事實から類推するに、印刷法も亦遣唐學生・學問僧などによつて、唐から傳へられたものであらうと推測を下すも敢て不當ではないであらう。たゞ現在に於ては、未だ斷言し得る程度の適確な證據を擧げることが出來ないまでである。

（1）明治三十一年平子曾氏の報告するところによる旧、現存する小塔は因萬三千九百三十基、その他に組立塔十數基、篩塔二基あるが、粉と飛損して完全なものは、僅に三百餘基に過ぎぬ。同年美術工藝乙種として國寶に編入されたものは、小塔百基、十萬篩塔一基、二萬篩塔一基、合せて百二基である。

（2）清水政說は、その文字にやゝ相異したものがあるからといふのであるが、これは根ゐ拔の說である。何とされば字板に於ては、同一の文字は必ず字形が異しくなくてはならぬ筈であるのに、數本を比較するに字形が異つてゐるからである。水原說は黒川眞頼の「日本書籍同考」で、朝倉龜三氏の「日本古刊書史」はこの說に基いたものである。銅版說は篠井眞蔭の唱へたところで、近藤正齋の古文獻餘錄に見えてゐる。平子鐵僧氏の「百萬小塔攷」、大屋德城氏の「寧樂刊經」等もこの說をなしてゐる。

（3）榮渡雲電報紙、同朝鮮傳

（4）後魏書江式傳、著書壇恒傳

（5）市村瓚次郎博士「寫本時代と板本時代と於ける支部書籍の存亡盛衰（史學雜誌第十三編第一、三號）

（6）中國雕版原流考によるに、近年江陵の某氏の調書中に、開元釋經の殘簡が出現發見されたが、これは唐代の雕本であるといふ。若し事實ならば、現存印刷物中最古のものであるが、未だ信ずべき專門家の考說がないから姑に信じ難い。

【写真 2】

木宮泰彦（著）、胡錫年（訳）『日中文化交流史』北京：商務印書館、1980 年、pp.200－201。

p.201 の脚注 2 では、訳者は「柳**玭**訓」や「柳**玭**訓序」という書名が不正確で、正しくは「柳氏序訓」と書くべきだと指摘している。

遗经，悉令雕撰”的雕，是指废像，撰是指遗经，原意当作“雕废像，撰遗经”解，从而断定不是刻书。

但在唐初，想象佛典等书已逐渐印刷。对此虽然还举不出确实的证据，但从前后的情况来推测，相信没有大错。现存最古的唐代印刷品遗物，当推 1908 年英国斯坦因在敦煌发掘、现藏在大英博物馆的《金刚般若波罗密经》①。根据它的刊记，原是唐懿宗咸通九年（868 年）四月十三日有个名为王价的刊印普舍的，晚于日本《无垢净光陀罗尼》刊印九十八年。但它是比《无垢净光陀罗尼》长十几倍的经典，卷首刻印释迦在祇园精舍说法的图画，字体秀丽，印刷鲜明，《无垢净光陀罗尼》怎么也比不上。不经相当年月，不积累许多经验决印不出来。作为迄今发现的中国古代印刷品，虽然不能追溯到这部经典以前，但是中国印刷术的创始，可以更加追溯到很远以前，这是任何人都可以想象得到的。不仅如此，到了唐末，就连需求较多的字书、小学之类，都刻版印行了。北宋末期翰林学士叶梦得（号石林居士）在他的《石林燕语》卷八中说：

> 世言雕版印书始冯道，此不然。但监本五经版，道为之尔。《柳玭训序》言，其在蜀时，尝阅书肆云：字书、小学，率雕版印纸。则唐固有之矣。

文中所说的《柳玭训》②，是著录在宋代晁公武《郡斋读书志》和明代叶盛《文渊阁书目》中的书籍。柳玭是唐僖宗时代的人，他所记载的是他在蜀地目睹的，因此，当时字书、小学之类在蜀率已刻版刊行，不能不说是确凿的事实。

---

① 据《中国雕版源流考》载：近年来在江陵某氏的藏书中发现开元杂报的残简七叶，据说是唐代雕本。如果属实，就该是现存的中国最古的印刷品。但因没有可以置信的专家的考证，难以骤然凭信。

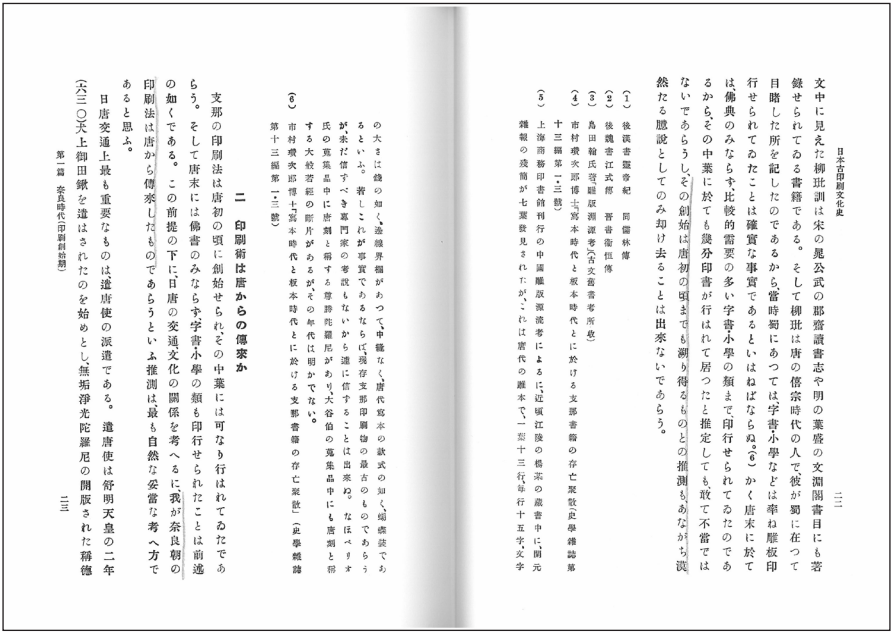
② 柳玭书的原名《柳氏序训》，见于《郡斋读书志》卷九。它的内容据说是：“序其祖公绰以下内外事迹，以训其子孙。”因此，这里称它为《柳玭训序》或《柳玭训》，都不正确。——译者

201

【写真 3】

木宮泰彦『日本古印刷文化史』〔新装版〕東京：吉川弘文館、2016 年、pp.22－23。（初版は「東京：冨山房、1932 年」。）

p.22 の 4 行目に「(6)」という脚注番号があり、p.23 の脚注本文（6）に対応している。また同じく p.22 の 1 行目に「柳玭訓」という書名が見える。



日本古印刷文化史　二二

文中に見えた柳玭訓は宋の晁公武の郡齋讀書志や明の葉盛の文淵閣書目にも著録せられてゐる書籍である。そして柳玭は唐の僖宗時代の人で、彼が蜀に在つて目睹した所を記したのであるから當時蜀にあつては字書小學などは率ね雕板印行せられてゐたことは確實な事實であるといはねばならぬ(6)かく唐末に於ては佛典のみならず比較的需要の多い字書小學の類まで印行せられてゐたのであるから、その中葉に於ても幾分印書が行はれて居つたと推定しても敢て不當ではないであらうし、その創始は唐初の頃までも溯り得るものとの推測もあながち渾然たる臆說としてのみ却け去ることは出來ないであらう。

(1) 後漢書靈帝紀　同儒林傳
(2) 後魏書江式傳　晉書衛恒傳
(3) 島田翰氏『古文舊書考所收』
(4) 市村瓚次郎博士『寫本時代と板本時代とに於ける支那書籍の存亡聚散』史學雜誌第十三編第一・三號）
(5) 上海商務印書館刊行の中國雕版源流考によれば、近頃江陵の橋流の廢書中に開元雜報の殘簡が七葉發見されたが、これは唐代の雕本で、一葉十三行、每行十五字、又字の大きは錢の如く、邊線界欄があつて、中縫なく、唐代寫本の款式の如く、線裝である といふ。若しこれが事實であるなら、現存支那印刷物の最古のものであらうが、未だ信ずべき確證の有無もないから、速に信ずることは出來ぬ。なほ、ペリオ氏の寫藏品中に唐刻と稱する尊勝陀羅尼があり、大谷伯の寫集品中にも唐刻と稱する大般若經の斷片があるが、その年代は明かでない。
(6) 市村瓚次郎博士「寫本時代と板本時代とに於ける支那書籍の存亡聚散」（史學雜誌第十三編第一・三號）

二　印刷術は唐からの傳來か

支那の印刷法は唐初の頃に創始せられ、その中葉には可なり行はれてゐたであらう。そして唐末には佛書のみならず字書小學の類も印行せられたことは前述の如くである。この前提の下に、日唐の交通文化の關係を考へるに、我が奈良朝の印刷法は唐から傳來したものであらうといふ推測は最も自然な妥當な考へ方であると思ふ。

日唐交通上最も重要なものは遣唐使の派遣である。遣唐使は舒明天皇の二年（六三〇）大上御田鍬を遣はされたのを始めとし、無垢淨光陀羅尼の開版された稱德

第一篇　奈良時代印刷始期　二三

［3 枚の写真からわかること］

→訳者の胡錫年が自らの見解を展開している。

→木宮泰彦『日華文化交流史』（1955 年）にあった誤植（脚注番号）を、胡錫年（訳）『日中文化交流史』は削除している。実は、『日華文化交流史』（1955 年）の当該箇所は、木宮泰彦『日本古印刷文化史』（1932 年）の一部をほとんどそのまま転載したものだった。したがって、『日華文化交流史』（1955 年）は誤植でなく、脚注本文の書き忘れ（転載漏れ）である。そして、胡錫年に非はない。

(4) 中国での『日華文化交流史』に対する評価

胡錫年は訳著『日中文化交流史』で原著の問題点を克服したのみならず、後に発表した自らの論文においても議論をさらに展開している[56]。すなわち、胡錫年は木宮泰彦の築いた基礎に立ち、日中関係史研究におけるいくつかの重要な議題を研究し、中国内外の学術界における定説を多く覆したのであった。胡錫年の展開した議論は、現在の中国の学術界でもなおもたびたび参考にされ、広く共有されている[57]。一九九七年三月に陝西省档案館が胡錫年関連の档案と著作を、「陝西名人档案」として所蔵することを決定した。これは、まさに日中関係史研究における胡錫年の大きな学術的貢献が評価されてのことだろう[58]。

四、木宮泰彦が中国の学術界に与えた影響

木宮泰彦の訳本『中日交通史』と『日中文化交流史』は、日中関係史研究における必読の古典である。のみならず、木宮泰彦の研究成果は長らく中国の学術界で高く評価され続け、『中日文化交流事典』に関係項目も立てられたほどである[59]。現在に至るまで中国の学界や出版界が木宮泰彦の研究成果を重視し、出版各社による上梓が相次ぐ。中国語訳を購入する人も多い。そこで改めて数値（中国知網 https://cnki.net/）を用い、中国学術界における木宮泰彦の影響力が如何ほどであったかを示そう。

[56] 例えば、「隋唐時代中日関係中的二三事」（1978 年）、「古代日本対中国的文化影響」（1979 年）、「唐代的日本留学生」（1981 年）、「中日両国在歴史上相互瞭解程度的比較」（1985 年）、“Recent Chinese Scholarship on Japan”（1985 年）等の一連の論文においてである。
[57] 汪向栄「他山之石—評胡訳《日中文化交流史》」、『読書』一九八一年一月、四九－五一頁。
[58] 邵継勇「新中国日本史研究述略」、『中国中日関係史研究』二〇一二年第二期、六九－七一頁。
[59] 劉徳有、馬興国（共編）『中日文化交流事典』（瀋陽：遼寧教育出版社、一九九二年）、八〇二頁。『日中文化交流史』という項目がある。

図１、木宮泰彦の訳本を参照・引用した論文数の年度別統計

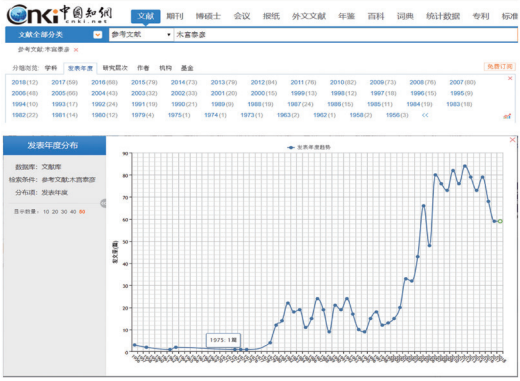
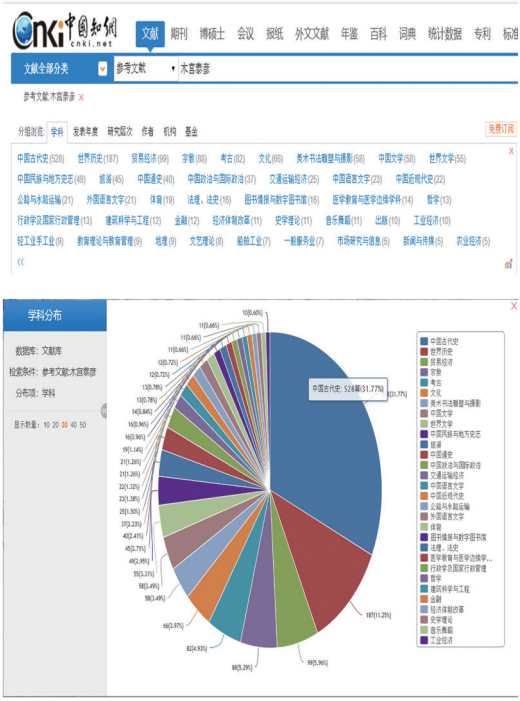


図２、木宮泰彦の訳本を参照・引用した論文のテーマ別統計



(4) 中国での『日華文化交流史』に対する評価

図３、木宮泰彦の訳本を参照・引用した論文の著者別統計

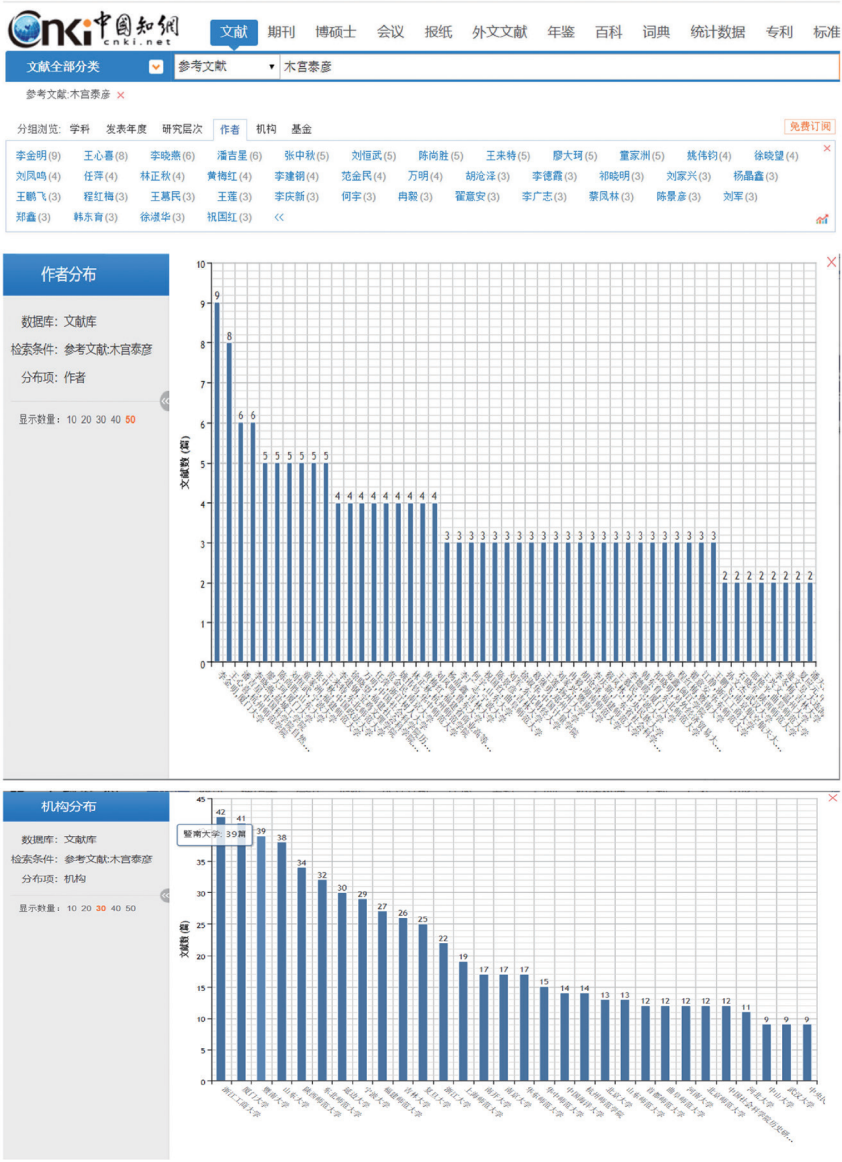


図４、木宮泰彦の訳本を参照・引用した論文の助成金種別統計

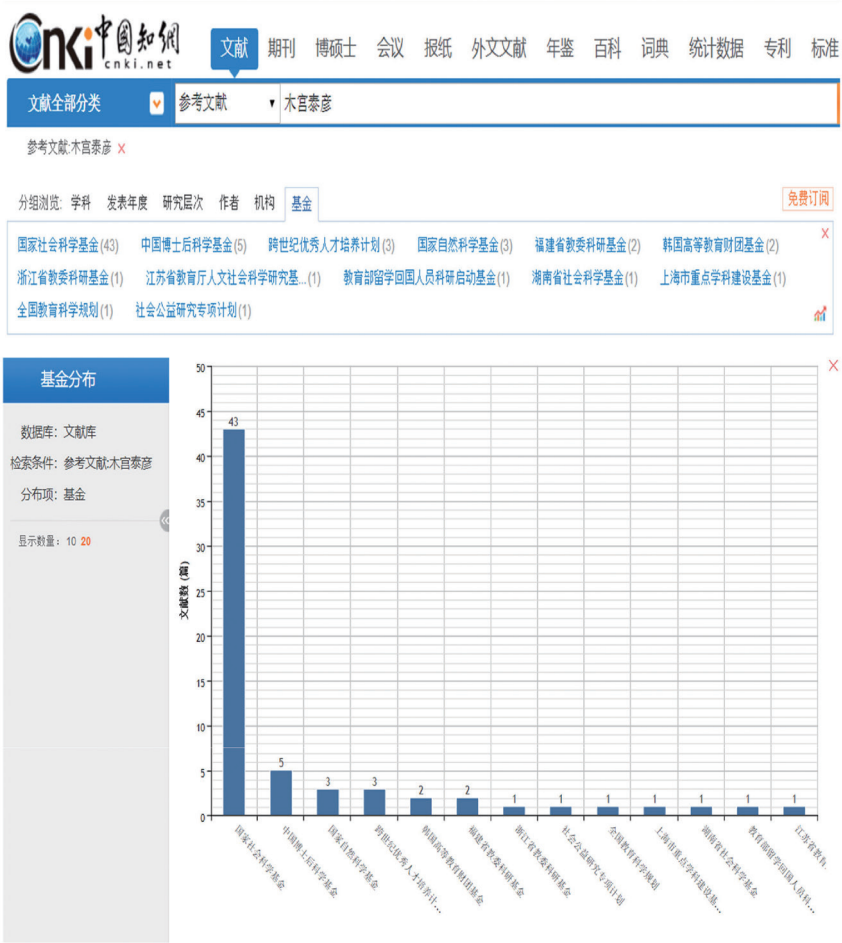


図１には中国において木宮泰彦の中国語訳を参照・引用した論文数の年度別統計を挙げている。ここから、中国学術界では早くから木宮の著作が参照・引用され、近年でも引き続き重宝されていることが分かろう。特に一九七六年の文化大革命終結、一九八九年の改革開放、二〇〇四年の日中尖閣問題という重要な動きが発生すると共に、参照・引用数もそれに呼応した変化を見せており、三度の増加転換点が看取できる。この三大画期は、中国の内政面で変化が生じ、外交でも改革が求めら

れた時期に該当し、そのため間接的に日中文化交流研究が重要性を持った時期なのだろう。

図２は木宮泰彦の中国語訳を参照・引用した論文のテーマ別統計結果である。中国史がその主要な分野であり、それに世界史が続く。木宮の極めて優れた研究成果とそれを裏付ける豊富な史料は、中国史研究者にも広く共有されていることが理解できよう。図３は同じく論文執筆者別統計であり、その中の多くの著者が中国の重点大学の出身であり、また著名な学者でもある。例えば、陳尚勝、韓東育、范金民等は中国の学術界が認める優秀な文系学者であり、中には長江学者（中華人民共和国政府の認定する優秀な学者）に選ばれ、国家から専門家待遇を受けた者もいる。図４は論文執筆者が獲得している中国政府研究助成金の種別統計である。木宮の中国語訳を参照・引用した研究者の多くは、決して無名ではない。論文は政府の助成金を受けて執筆され、大学から地方政府そして中央部会までの数回の審査を経て発表されたものである。木宮泰彦の研究成果は、まさにこうした優れた研究成果の基礎となり、中国の学術界に大きな影響を与えていると言えよう。

おわりに

一九七二年に日中国交正常化が達成され、両国の関係は改善を見せた。近年、日中両国の学術交流はさらに顕著な発展を遂げている。木宮泰彦は近代中国の学術界において日中文化交流史研究の始まりに当たり、その後の研究に大きな影響を与えた。すでに確認したように、旧著『日支交通史』を増補改訂したのが新著『日華文化交流史』であり、さらに新著『日華文化交流史』の不足を補ったのが『日中文化交流史』（胡錫年訳、一九八〇年）である。

確かに中国において、日中関係史の専門研究者は『日中文化交流史』（胡錫年訳）を使う。本稿末尾の付録２の通りである。しかし、昨今の中国の出版事情が厄介な問題を引き起こす。『日中文化交流史』（胡錫年訳）は絶版になり、入手に手間がかかる。図書館で閲覧するか、古書を求めなければならない。対して、『中日交通史』（陳捷訳）は近年、再版を繰り返すから、入手しやすい。インターネットで新書を注文できる。これでは、日中関係史を直接に専門としない研究者や一般人は、旧著『日支交通史』を訳した『中日交通史』（陳捷訳、一九三一年）を使ってしまう。そうすると、木宮泰彦の研究成果が中国で充分に活かされなくなる。

〔付録 1〕

私が知る恩師胡錫年先生[60]

石　暁軍[61]（著）
岡﨑滋樹　（訳）

胡錫年（1913 年～ 1996 年）は生前、陝西師範大学歴史学部教授として教鞭を執る一方、1980 年代から 90 年代にかけて中国日本史学会初代常務理事兼中日関係史分会長も務めた。現役時代には他にも、中国中日関係史研究会初代常務理事兼秘書長および中国中外関係史学会理事なども歴任し、学術界での活躍は多大なるものがあった。胡錫年は、中国の中日関係史と日本史研究を牽引してきた著名な学者であり、中国の大学研究機関において最初に中日関係史をテーマとする大学院生を受け入れた指導教員の一人でもある。

胡錫年は、1913 年 5 月 1 日に浙江省海塩県通元鎮で生まれた。1929 年には浙江の名門私立の嘉興秀州中学校に入学する。秀州中学では、国語と英語の成績は常に「優」であり、文才を発揮して積極的に校内誌などで論著も発表した。また、朝鮮出身の 2 名の同級生から朝鮮語と日本語も習い、その後に進むこととなる研究人生のために、確固たる基礎を形成した。秀州中学を卒業すると、極めて優れた成績で浙江大学外国語学部へ入学する。

1933 年に浙江大学に入学した時、胡喬木（1912 年～1992 年）と出会い、学部の有志達とマルクスやレーニンなどの原著読書会を開く。しかし、当時、大学当局は学生のサークル活動を厳しく監視していた。胡錫年は積極的に読書会などの活動に参加したため、胡喬木をはじめ十数人の革命派と疑われる学生とともに、1935 年の夏休みに除籍処分を受ける。そして、1935 年秋からは清華大学外国語学部へ再入学することとなった。

清華大では英語と英米文学の研究に励むいっぽうで、時局の変化にも敏感に反応し、正しく日本を理解するために日本語の勉強にもより一層力を入れた。精力的に

[60] 本文は、石暁軍「我所知道的恩師胡錫年先生」、陝西師範大学国際長安学研究院『長安学研究』〔第 5 輯〕（北京：科学出版社、2020 年 9 月）、一五－一八頁の抄訳である。そもそも、栗田元次（著）、胡錫年（訳）『日本近代史』（上海：正中、1947 年）が近く再版されることになり、石暁軍氏は再版のために「序言」を寄稿した。しかし、再版の作業に時間がかかっており、再版は二〇二一年三月の時点では実現していない。この「序言」の一部が、「我所知道的恩師胡錫年先生」である。石暁軍氏には、日本語に訳出しての転載をご快諾いただいた。

[61] 姫路獨協大学人間社会学群教授。

日本語論著を翻訳し、長澤規矩也『支那学術文芸史』の訳著である『中国学術文芸史講話』(世界書局、1943年)は、胡錫年が清華大在籍時に完成させた一労作である。また、訳著『日本近代史』(正中書局、1947年)の「訳序」からも分かるように、胡錫年は日中戦争勃発前にはすでに膨大な数の日本史原著を読破し、多方面にわたる関連史料の収集に着手していた。『日本近代史』については、日本の学者たちの先行研究を参考にし、「系統的な叙述で、五十万字ほどの通史」として出版するのが適当であるとしていた。そのために、胡錫年は「多くの時間を費やして要点をまとめ、概略を整えた」という[62]。

胡錫年は、大学生活の最後の一年を昆明で過ごした。1938年10月に西南連合大学を卒業後、26歳から32歳までの間は昆明のほかに上海や重慶などの地を転々とし、おもに新聞業界で活躍する。昆明では今日評論社と朝報館で編集を務め、1940年初頭からは上海の『中美日報』の翻訳を担当する。この間、胡錫年はソ連・タス通信社の英語翻訳員も兼務している。1942年から1945年までは、重慶で中央通訊社の記者となり、USIS[63]でも翻訳作業に従事した。

日本の敗戦直後の1945年秋、胡錫年はイギリス留学の機会を得、ロンドン大学政治経済研究院で国際関係史と外交史を学ぶ。2年の履修課程を終え、1947年9月からは中央通訊社ロンドン支社の記者として再就職し、1949年12月まで現場での経験を積む。こうした経験を通じて、理論と実践の双方から国際関係史に対する理解を深め、後に系統的に中国と日本の関係史を研究する上での鞏固な基礎を確立したのである。

中華人民共和国成立後の1950年初め、37歳の胡錫年は妻と子女とともにロンドンを発ち、香港を経由し天津港に到着した。天津から北京に戻ると、まずは華北人民革命大学に入り、共産党系理論を一年間学ぶ。1951年9月に蘭州大学英文学部准教授となり、1953年1月には西安の陝西師範大学歴史学部に転任する。その後、

[62] [訳者岡崎滋樹注] 栗田元次著・胡錫年訳『日本近代史』(上海:正中書局、1947年)中「訳序」1頁。なお、本書は、栗田元次『総合日本史概説・下巻』(東京:中文館書店、1928年)を底本としている。『日本近代史』は、胡が当初期した「通史」の完成ではなく、江戸時代を中心とした内容であり、分量も予定していた50万字のおよそ半分である25万字ほどに止まる。その理由として、胡の生活環境の変化で通史を完成させる余裕がなかったことは大きい。また、江戸時代を主に扱った理由は、日本の歴史を知る上で栗田『総合日本史概説・下巻』を最適の文献だと評価していたためである。加えて、自らが生きる時代から近い過去の歴史を知る必要性に基づくと、日本の江戸時代は長く続き、社会や文化の側面において日本史上の特殊な位置にあると見做していたためであった。

[63] [編者若松大祐注] USIS(アメリカ合衆国広報文化交流局)は第二次世界大戦後に成立するはずだから、胡錫年が勤務したのは、その前身の組織か。

准教授から教授に昇格し、同大では逝去するまで教育と日本史や中日関係史の研究に尽力した。しかし、国際基督教大学の特別招聘教授として来日していた最中の1984 年 12 月、脳溢血のために突然倒れ、教育・研究の第一線から退くこととなる。そして、1996 年 9 月 16 日に西安でその人生を終えたのであった（享年 84 歳）。

青年期に記者として働いた経験は、胡錫年の歴史研究における観察力や分析力に一層の磨きをかけた。20 世紀の中ごろから後半にかけて、中国における日本史研究と中日関係史研究は、その研究手法や基礎的な史料研究において、日本における歴史学界の動向に大きく遅れをとっていた。かかる現状にあって、胡錫年は古代～中世の両国の関係史や文化交流史に関する研究成果を、国内外の学術誌で次々と発表していく。「隋唐時代中日関係中的二三事」（1978 年）、「古代日本対中国的文化影響」（1979 年）、「唐代的日本留学生」（1981 年）、「中日両国在歴史上相互瞭解程度的比較」（1985 年）、“Recent Chinese Scholarship on Japan”（1985 年）等の一連の傑作は、研究史上の空白を埋めていった。例えば、古代日本が中国に対して文化的影響を与えたのか。なぜ遣唐留学僧の数は遣唐留学生よりも多かったのか、等等。これまで看過されていた問題についてメスを入れて新知見を提示し、多くの旧説を修正していったのである。これら論著は当時中国の歴史学界では最高水準の日本史研究であったと言え、中国国内はもちろん日本を含む海外の学術界においても高い関心を集めた。精緻な実証に裏付けられた多くの学説は、現在の学術界でも脈々と受け継がれている。

胡錫年は 1930 年代後半に日本史研究を始めて以来、常々中国における日本史研究が遅れていることを痛感していた。中国の歴史学界の全体的な研究水準は、日本の歴史学界のとは比べものにならず、双方の学術的な対話は困難であった。この状況を打開するためには、中国における研究の基盤から変えていく必要があり、まずは日本の代表的な論著を翻訳して、中国人に紹介することから始めなければならなかったのである。前掲『日本近代史』のほか、東亜同文会『対支回顧録』を中国語に訳出した。訳著『対華回憶録』は、1959 年に商務印書館から「内部出版」の形で発行された 500 頁超の大作である。同書は、日中両国の関係史および中国近代史の研究に対し、重要な情報を提供したのであった。

1960 年代に入ると、胡錫年は近代以前の日中両国の文化交流史の研究に心血を注ぐ。中国の学術界に日本の最高水準を誇る通史を提供するために、著名な歴史学者である木宮泰彦の大著『日華文化交流史』を翻訳し、後に『日中文化交流史』（商務印書館、1980 年）として出版した。木宮の大作は、日本の歴史学界における文

化交流史研究の集大成であり、この分野では必読文献とみなされている。胡錫年は翻訳の過程で、原著に散見する問題箇所に対し、自身の研究成果や所見を「訳注」で示しながら、丁寧に修正を加える。こうして長年心血を注いで翻訳した『日中文化交流史』は、当初1960年代末に出版される予定だった。しかし、不幸にも10年にわたる文化大革命の混乱によって、原稿の一部が消失してしまう。70万字を超える訳著は、混乱期を経た1980年にようやく商務印書館から出版されたのである。本書の出版によって、中国の学者は見事に完成された重要参考書に触れることとなり、学術界で極めて高い評価を得た。それはまた、1980年代以降の中国における中日関係史研究の発展を大きく後押ししたのである。

ここで紹介した論著と訳著によって、胡錫年は学術界においてその名声を博した。胡錫年は中国における日本史研究、とりわけ中日関係史研究の開拓者であり、学術界を牽引した偉人の一人とみなされている。

〔付録2〕

尤淑君「木宮泰彦『日支交通史』中国語訳とその学術的影響」に対するコメント[64]

石暁軍

日本語抄訳：

第一に、尤淑君論文は木宮泰彦の著作の中国語訳について系統的に調査したものであり、管見の限り、類似の研究はこれまで存在しない。尤淑君論文は木宮泰彦に関する研究を深めるためのみならず、中国語圏での中日文化交流史研究、日本史研究、日本文化研究の状況を理解する上でも、参考に値し、学術的な意義を持つ。

第二に、尤淑君論文は「おわりに」において、「中国の学術界においては『中日交通史』（陳捷訳、一九三一年）を使うことが多く、『日中文化交流史』（胡錫年訳、一九八〇年）を使わない。そのために木宮泰彦の研究成果が中国で充分に活かされているとは言い難く、残念である」と述べており、この論点は私の認識と大きく食

[64] 本文は、石暁軍氏が若松大祐（編者）の要請を受け、尤淑君（著）、岡崎滋樹（訳）「木宮泰彦『日支交通史』中国語訳とその学術的影響」、『常葉大学外国語学部紀要』三七号（静岡：常葉大学外国語学部、二〇二〇年三月）、一九－二八頁に対して書いたコメントである。石暁軍氏のご寄稿に感謝申し上げる。本来は全文を日本語に訳出すべきであるものの、編者は多忙にかまけて、日本語抄訳を作成する時間しか取れなかった。

い違う。私の研究者生活は、現代中国における日中関係史研究の領域の歩みと重なる。辞書などの工具書や学界動向を示す文章を見ても、さらに 1990 年から 2020 年までの主要な論著を見ても、専門研究者が参照するのは『日中文化交流史』（胡錫年訳、一九八〇年）もしくは原著『日華文化交流史』（一九五五年）である。『中日交通史』（陳捷訳、一九三一年）を使った論著をあまり見たことがない。ちなみに、2015 年には、木宮泰彦『日中文化交流史』（つまり胡錫年訳）を超える総合的な学術書を書くのが、中国人研究者の取り組むべき目標であるという声すらあった。

第三に、尤淑君氏が、中国の学術界において『中日交通史』（陳捷訳、一九三一年）を使い、『日中文化交流史』（胡錫年訳、一九八〇年）を使わないと考えたのは、次のような理由があるのではなかろうか。

一つは、台湾で陳捷訳がいくつかの出版社から再刊されていたからである。しかし中国では 1970 年代まで、1949 年以前に出版された書籍を閲覧するのは困難であり、したがって陳捷訳をそもそも繙くことができなかった。1980 年代になると、『日中文化交流史』（胡錫年訳）が流通する。

いま一つは、2010 年代に陳捷訳の全訳と抄訳が中国でそれぞれ再刊されたからである。中華人民共和国著作権法が 2010 年に修正され、著作権の保護期限が 50 年になったことも、1949 年以前の書籍の再刊に関係しているのかもしれない。胡錫年訳は 1980 年代初めに 8000 冊を発行し、40 年が経過した今は絶版である。そこでインターネットで検索すると、絶版となった胡錫年訳よりも、現在販売中の陳捷訳がヒットしやすい。

要するに、中国において、真剣に日中文化交流史の研究に取り組む研究者は、やはり胡錫年訳を使う。

（若松大祐）

尤淑君氏《木宫泰彦《日支交通史》中译版本及其学术影响》读后

石晓军

日前，常叶大学外国语学部若松大佑先生给我传来了尤淑君氏的《木宫泰彦《日支交通史》中译版本及其学术影响》一文，征询我对该文的看法。遵嘱不揣冒昧，在此略述拜读尤淑君氏大作之后的若干拙见。不当之处，敬请批评指正。

（一）

尤淑君氏的这篇大作，围绕木宫泰彦《日支交通史》中译本诸版本，进行了系统的调查与整理，并兼及木宫泰彦先生的这部著作在中文圈的影响情况。

管见所及，迄今为止学术界似乎无人从这一角度加以考察和整理，尤淑君氏的论文当属于这一方面最早的研究。

尤淑君氏的大作不仅对于有关木宫泰彦的研究，而且对于了解考察中文圈的中日文化交流史研究、以及日本史、日本文化研究状况，也具有很大的参考价值以及学术史意义。我对此表示赞赏，并予以积极的评价。

（二）

然而，尤淑君氏论文在讨论木宫泰彦先生在中国的学术影响之后，却得出了下述结论：

「木宫教授作为中日文化交流史研究的开山之祖，其学术影响不容小觑。可惜的是，目前中国学界仍多用 1931 年陈捷翻译的《日支交通史》译著，未能改用 1980 年胡锡年翻译《日华文化交流史》的译著，使木宫教授的成就无形中打了折扣，相当遗憾。」（见尤氏论文「结语」）

对于尤淑君氏的这一结论，我不敢苟同。因为此说与我的认知有较大的差异。下面简单地谈谈我所了解的情况，并略述其理由以及根据。

进入正题以前，先略微介绍一下我的求学以及步入中日关系史研究领域的情况。1982 年至 1984 年我在中国读中日关系史专业硕士研究生课程时，导师正是 1980 年中译本的译者陕西师范大学的胡锡年先生（1913－1996），而我的硕士论文答辩委员会主席则是中国社会科学院世界史研究所的汪向荣先生（1920－2006）。关于这两位先生在当时中国中日关系史学界的地位，正如 1985 年北京市社会科学院杨正光先生在《中日关系史研究的回顾与前瞻》一文中，在回顾八十年代初研究状况时所说：

「在中国社会科学院和陕西师范大学设置了中日关系史的研究生课程，由汪向荣和胡锡年担任导师，为培养下一代研究中日关系史的专家学者而设置这样一个专业，在中国中日关系史的学术史上还是第一次。」[65]

即胡锡年先生和汪向荣先生是当时中国唯一招收中日关系史专业研究生的两大导

[65] 杨正光〈中日关系史研究的回顾与前瞻〉，中国中日关系史研究会（编）《从徐福到黄遵宪》〔中日关系史论文集第一辑〕（北京：时事出版社，1985 年），19 页。

师。换言之也就是说，两位先生是当时中国中日关系史学界最具代表性的两位学者。我有幸作为其入室弟子，也因此在硕士研究生阶段就成为中国中日关系史研究会最早的会员之一，并且在两位老师的推荐下，拙作《宋代从日本进口的主要商品及其用途》一文还得以入选刊载于上述中日关系史论文集第一辑。尔后三十余年来，我的研究方向虽有若干调整，但中日关系史研究始终是我的主要研究领域之一。因此无论是作为译者胡锡年先生的学生（附言之，迄今为止有关胡锡年先生的生平事迹，当以我的介绍文字为最早，尤淑君氏论文注释 7 引用《陕西师大学报》哲学社会科学版 1990 年第 1 期所载《胡锡年教授》一文作者“小石”就是我的笔名之一），还是作为自上世纪八十年代以来，目睹并亲历中国中日关系史学界的成长、发展历程的一名研究者来说，我对于中国中日关系史学界的状况以及木宫泰彦著作中译本的情况都有着比较多的了解。而在我看来，尤淑君氏论文的上述结论是有问题的，似乎并不符合实际情况。以下略述拙见。

1980 年 4 月商务印书馆出版了胡锡年先生翻译的《日中文化交流史》以后，汪向荣先生旋即在中国知识界具有广泛影响的人文社科刊物《读书》（三联书店出版）1981 年第 1 期上发表了《他山之石—评胡译《日中文化交流史》的书评，予以积极推介。由于汪先生和胡先生在中国中日关系史研究领域拥有很高的学术地位，加之在 1949 年以后的中国大陆，民国时期的出版物借阅受限制，不仅一般民众，包括研究者在内，都很难见到三十年代出版的陈捷译本，因此，根据木宫泰彦新增订本翻译的胡锡年译本一问世，立刻就受到了中国中日关系史学界以及其他相关领域研究者们的欢迎以及高度评价。前述杨正光先生在 1985 年发表的《中日关系史研究的回顾与前瞻》一文中论述七八十年代中国学界有关中日关系史研究的重要成果时，曾专门介绍了胡锡年译本的情况（同上书第 19 页）。八十年代初我在陕西师范大学中日关系史专业读硕士研究生时，所用的基本教材之一便是胡锡年译本。不仅如此，就我的所见所闻而言，当时中国史学界相关学术论著凡是引用木宫泰彦著作者，几乎都是使用胡锡年译本，关于这一点，只要看一下前文提到的 1985 年由北京的时事出版社出版的中日关系史论文集第一辑《从徐福到黄遵宪》所收诸论文的引用文献情况，即可一目了然。

除此之外，关于这一方面的情况，最典型的表现是 1992 年中国学界出版的有关中日文化交流的的集大成著作《中日文化交流事典》（辽宁教育出版社，1992 年）。在这部由中国中日关系史、日本史学界百余名相关研究者执笔，篇幅长达二百多万字的大型工具书中，也收录了木宫泰彦先生的著作词条（第 802 页），但值得注意的是，该词条介绍内容并非陈捷译本，而是胡锡年译本。这里节录其主要内容如下：

「《日中文化交流史》：日中关系史著作。日本木宫泰彦著，富山房 1955 年版 。

该书史料丰富，学术造诣精深，是研究中日关系史奠基性著作。1978 年陕西师范大学胡锡年教授译成中文，1980 年由商务印书馆出版，在中国史学界产生较大影响。

(…中略…)《日中文化交流史》出版后，一直是中日两国研究日本中国关系史学者的基础学术书籍，起着指导作用。由于该书史料丰富，考证严谨，有重要史料价值，起着工具书的作用。」(陈立旭执笔)[66]

不仅如此，在《中日文化交流事典》卷末所附的“主要参考书目”中，所列举的也是胡锡年译本，而并非陈捷译本（参见同书第 1121 页）。

通过上述情况，我们已可略窥胡锡年译本在中国学界受到重视的状况。

此外，包括我本人在内，研究中日文化交流史或日本史的师友们在专业学术论文的引用及参考文献中，一般是直接注明木宫泰彦先生的原著版本以及页码。而只有在撰写面向中文圈一般读者的书籍时，才会去引用中译本。尽管如此，根据我的一般印象以及所见所闻，从事专业研究的师友们在需要引用中译本时，似乎都是使用的胡锡年译本。

为了证实我的这一印象，我查阅了架藏 20 世纪 90 年代到最近出版的有关中日关系史、中国对外关系史、日本史、日本文化等的中文出版物。相关注释（页下注、文末注等）姑且不论，仅仅就书籍最后设有的“主要参考文献”或“主要参考书目”栏目的中文著作加以考察，就可以发现其凡是提及木宫泰彦的著作时，都是使用胡锡年译本。举例如下：

1. 严绍璗著《日本中国学史》(江西人民出版社 1991 年)，卷末第 619 页。
2. 张维华主编《中国古代对外关系史》(高等教育出版社 1993 年)，卷末第 492 页。
3. 王勇著《日本文化》(高等教育出版社 2001 年)，卷末第 418 页。
4. 苌岚著《7—14 世纪中日文化交流的考古学研究》(中国社会科学出版社 2001 年)，卷末第 323 页。
5. 李寅生编著《中日古代帝王年号及大事对照表》(四川辞书出版社 2004 年)，卷末第 216 页。
6. 郝祥满著《朝贡体系的建构与解构：另眼相看中日关系史》(湖北人民出版社 2007 年)，卷末第 311 页。
7. 拜根兴著《唐朝与新罗关系史论》(中国社会科学出版社 2009 年)，卷末第 341 页。
8. 吴光辉著《日本的中国形象》(人民出版社 2010 年)，卷末第 226 页。

[66] 刘德有，马兴国（主编）《中日文化交流事典》(沈阳：辽宁教育出版社，1992 年)，802 页。

9. 滕军著《中日文化交流史—考察与研究》（北京大学出版社 2011 年），卷末第 281 页。
10. 陈小法著《明代中日文化交流史研究》（商务印书馆 2011 年），卷末第 443 页。
11. 江静著《赴日宋僧无学祖元研究》（商务印书馆 2011 年），卷末第 431 页。
12. 杨栋梁主编《近代以来日本的中国观》（江苏人民出版社 2012 年）第三卷（刘岳兵执笔），卷末第 435 页。
13. 王勇主编《历代正史日本传考注》全五卷（上海交通大学出版社 2016 年），《汉魏两晋南北朝卷》，卷末第 315 页、《隋唐卷》，卷末第 267 页、《宋元卷》，卷末第 267 页。
14. 王贞平著《唐代宾礼研究》（中西书局 2017 年），卷末 231 页。

等等

上述中文著作的主要参考文献都只是列出了胡锡年译本，而并非陈捷译本。众所周知，上面提到的北京大学严绍璗教授、浙江大学王勇教授、南开大学杨栋梁教授、南洋理工大学王贞平教授等中日关系史研究重镇自不待言，其他诸氏都堪称是这一领域或相关领域的知名研究者，由此已经足以窥见中国研究界的一般状况。

再以我本人为例来说，我凡是引用或参考中译本时，都是使用的胡锡年译本。例如在拙著《中日两国相互认识的变迁》（台湾商务印书馆 1992 年）一书中，我曾不下数十处引用木宫泰彦先生的著作，所用中译本无一例外都是胡锡年译本。此外，在大庭脩、王晓秋主编“日中文化交流史叢書”《歴史》（大修馆书店 1995 年）中，由北京大学王晓秋教授执笔的“序说 2”《中国の研究者から見た日中文化交流史》（石晓军译）在谈及 1972 年以来有关中日文化交流史的重要翻译书籍时，第一个举出的就是胡锡年译本（第 72－73 页）。再如曾经主编中国大陆第一部《日本通史》（复旦大学出版社 1989 年）的复旦大学赵建民教授，在其惠赠我的论文集《晴雨耕耘录—日本和东亚研究交流文集》（上海人民出版社 2014 年）一书的自序中，在谈及中国的中日关系史研究时，也特别指出胡锡年译本是“颇有影响的著译”（第 4 页）。南开大学日本研究院的刘岳兵教授在《“中国式”日本研究的实像与虚像》（中国社会科学出版社 2015 年）所收《中日文化交流史研究的回顾与展望》一文中更是明确指出：

「如何在十三卷本“东亚中的日本历史”和十卷本“中日文化交流史大系”以及大量先行研究的基础上，撰写一本超越木宫泰彦的《日中文化交流史》的综合

性的学术专著《中日文化交流史》来，仍然是中国学者尚需努力的目标。」[67]

这里提到的十三卷本“东亚中的日本历史”指的是1988—1989年东京的“六興出版”出版的由中国学者执笔的“東アジアの中の日本史”系列十三卷；十卷本“中日文化交流史大系”则是指1995—1996年由大修馆书店与浙江人民出版社分别在日本和中国出版的十卷本系列丛书。刘岳兵教授呼吁中国的研究者应该在此基础上，“撰写一本超越木宫泰彦的《日中文化交流史》的综合性的学术专著《中日文化交流史》”，根据刘岳兵的注释（第143页），这里所说的“木宫泰彦的《日中文化交流史》”就是指1980年商务印书馆出版的胡锡年译本。

综上所述，我们可以清楚地看到，胡锡年译本在中国中日关系史学界拥有重要的地位。

（三）

既然如此，那么尤淑君氏所谓“目前中国学界仍多用1931年陈捷翻译的《日支交通史》译著，未能改用1980年胡锡年翻译《日华文化交流史》的译著”之说又从何而来的呢？

本来只准备写几句拜读尤淑君氏大作后的感想，但既述拙见，则当出示相应根据，结果越写越长，已经大大超出了我预想的篇幅。因此，关于这一问题在此就不展开了。仅提示一下我的一些初步想法。

倘若容我大胆臆测的话，尤淑君氏的结论，或许是来自于对中译本统计的结果。因为在现有的十个中译本版本中，有九个都是陈捷译本，而胡锡年译本则只有一种。

但是，这里有两个问题值得我们注意。

其一，倘若我们仔细观察九种陈捷译本的情况就可以发现，其中除早期由上海商务印书馆出版的三种（1931年初版、1932年重印、1935年收入“万有文库”）之外，在其他六种之中，有四种都是20世纪六十年代至八十年代台湾有关出版社根据三十年代陈捷译本的重印本（1965年台湾商务印书馆版、1974年三人行出版社“曹永和文库”版、1978年九思出版社版、1985年华宇出版社节选佛教交流部分收入“世界佛学名著译丛”版）。然而，由于众所周知的原因，中国大陆读者在当时是见不到上述四个台湾重印本的。

不仅如此，如前所述，在二十世纪中期以后的中国大陆，对于民国即1949年以前的出版物，在借阅等方面有很大的限制，包括研究者在内，对三十年代的陈捷译本

[67] 刘岳兵〈中日文化交流史研究的回顾与展望〉，刘岳兵《“中国式”日本研究的实像与虚像：重建中国日本研究相关学术传统的初步考察》（北京：中国社会科学出版社，2015年），143页。

也是基本见不到的。换言之，从 20 世纪五十年代到七十年代末，中国大陆读者基本上没有条件利用陈捷译本。这一背景，正是 1980 年商务印书馆胡锡年译本出版以后，立即受到了大陆读者的欢迎以及广泛阅读的重要原因之一。

其二，在九种陈捷译本中，在中国大陆出版的其实只有两种，而且都是最近几年之事。即 2014 年贵州大学出版社节选本、2015 年山西人民出版社本。前者基本上是 1985 年台湾华宇出版社节选本的翻版，后者则是作为“近代海外汉学名著丛刊”之一种而以“原书原貌重新整理”出版的（出版社编辑推荐语）。

关于该“近代海外汉学名著丛刊”出版的宗旨，按照该丛书主编郑培凯教授的表述来说就是：“汇集上百部自从 1949 年以来在国内不曾重印的学术著作，再度公之于世”，因为“这些汉学译著，除了部分因王云五重新入主台湾商务印书馆，而得以在台湾做了少量的重印，在大陆的出版界，则完全受到遗忘，甚至在许多新成立的大学图书馆中也不见踪影”（郑培凯《温故而知新—《近代海外汉学名著丛刊资料》总序》）。换言之，该丛书是原封不动地重印 1949 年以前出版的海外汉学中文译著。实际重印 63 种共 97 册，其中也包括 1931 年上海商务印书馆出版的陈捷译《中日交通史》。

关于三十年代陈捷译本等“1949 年以来在国内不曾重印的学术著作”近年在中国大陆重印有无其他具体背景及原因，“近代海外汉学名著丛刊”编者没有明言。我也因没有系统考察，不敢断言。但在我看来，其恐怕应该与 2010 年修正的《中华人民共和国著作权法》不无关联。因为根据该著作权法第 21 条的规定，著作权的保护期限为五十年。1949 年以前出版的海外汉学译著都属于这个范围。

基于上述背景，陈捷译本近年得以在大陆重印。而胡锡年译本自从 1980 年初版发行 8000 册以后，其后四十年来没有重印再版。我以为，这应该就是为何在互联网上检索，陈捷译本的出现频度高于胡锡年译本的基本原因。

尽管如此，如上所述，中国学术界真正从事中日文化交流史及其相关领域的研究者都知道，如果要参考引用木宫泰彦著作的中译本，当然是应该是使用胡锡年译本。

（附言之，胡锡年译本初版似乎已绝版。但初版八千册应该已基本保证了各大学图书馆以及相关研究者之需。我尝试检索了一下中国古旧书籍的网络，目前胡锡年译本的价格大致在人民币三百元左右，比 1980 年初版价格 3.7 元高出数十倍到百倍。）

（2021 年 1 月 8 日稿，14 日改定于往来斋）

(5)－１　生家西湖山龍雲寺

木宮　敬信

一、西湖山龍雲寺の沿革

木宮泰彦は、臨済宗西湖山龍雲寺（せいこさん・りょううんじ）に生まれた。龍雲寺は、静岡県浜松市内の周囲7㎞の佐鳴湖のほとり、風光明媚な場所にある。浜松駅から車で15分の距離にあり、今は多くの観光客が訪れる名刹となっている。

龍雲寺の成り立ちは、今から約700年前の南北朝時代までさかのぼる。寺院を開創したのは、御二条天皇の孫にあたる木寺宮康仁親王である。康仁親王は天皇になる正当な血筋であったものの、後醍醐天皇の台頭によってその道が絶たれ、東国に下野することとなった。現在の龍雲寺東墓地あたりに御館を建立し、さらに御館の南西に祈願所として寺を建てた。これが龍雲寺の始まりである。寺を開くにあたり、後に普明国師と仰がれる人物を開山として迎え、康仁親王の第二子を出家させて、龍雲寺第一世とした。

木寺宮家は康仁親王以後250年あまりにわたり、龍雲寺に住んでいた。1572年に武田信玄が三方が原の戦いで徳川家康と戦うこととなった。開山普明国師は、武田家菩提寺の恵林寺の弟子であり、甲斐の国出身であった。木寺宮家はそうした縁で、合戦の際に武田方につくこととなった。三方が原の戦いは武田方の勝利に終わったものの、徳川家康はこの敗戦の恨みを忘れることがなかった。後に家康が天下人になると、1580年10月に龍雲寺に攻め込む。この時、木寺宮家は自ら建物に火を放ち、信州を抜け越後方面へ逃げたと言われている。この兵火のために、本尊阿弥陀如来像と山門を除き、寺の建物はすべて焼け落ちてしまう。

その後、長きにわたって世は徳川の時代となったため、寺の復興もままならない時代が続く。ようやく元禄に天下泰平の世を迎えた時、中興開山鳳髄丹和尚が現われ、龍雲寺を再興するものの、復興された本堂は仮本堂と呼ばれ、以前に比べると、かなり控えめなものとなった。現在の本堂は再興時のものであり、敷居や柱などの材はほとんどが元禄以来そのまま用いている。その後も現在に至るまで諸堂の復興が進み、兵火以前には及ばないものの、中本寺としての体裁を整えつつある。

現在、龍雲寺は臨済宗妙心寺派の別格地である。中本山として複数の末寺を抱え、地域を代表している。また、座禅会、写経会、婚活パーティーを主催したり、子どもサマースクールを開催したりしている。枯山水庭園は平成の小堀遠州と称される

北山安夫が手掛け、世界一大きな般若心経はダウン症の書家金澤翔子が揮毫した。多くの寺宝を一般に無料公開しており、観光目的で来訪する人々も多い。

二、木宮泰彦と龍雲寺

木宮泰彦の幼少期は、母や末寺の住職等によって育てられた。龍雲寺の住職であった父の充邦は学僧であり、西湖学林という僧侶の学校を開き多くの修行僧を育成した。また、京都の本山妙心寺において花園学院の創立に関わり教学部長を務めるなどして、京都に赴任している期間が長かった。泰彦にとって、充邦は非常にアカデミックで厳しい父親だったようである。

泰彦はその後、当時の寺院の子弟の多くと同じように、幼少時から他の寺院に小僧として預けられた。泰彦は次男であり、龍雲寺の跡取りではないから、他寺での修業は、泰彦が将来他の寺院の僧侶になるための準備だったのだろう。

通常、中学校を卒業すると、僧堂で修業をすることになる。しかし、泰彦は向学心が芽生えたため、高等学校への進学を希望し、預けられた寺から脱走したのである。その後、龍雲寺で寺仕事をしながら勉学に励み、ついに上京して高等学校と大学で学ぶことになった。

大学卒業後は、教員としての人生を歩む。しかし、泰彦は自身の長女を、長兄の継いだ龍雲寺に残していた。長女は婿を迎えて龍雲寺を継ぐ。そうした背景があり、泰彦はたびたび龍雲寺を訪れている。ちなみに、泰彦の長女の長男の長男が筆者である。つまり、筆者は泰彦の曽孫にあたる。

泰彦は僧侶という人生を歩まなかった。しかし、『日本古印刷文化史』や『日華文化交流史』には、仏教とりわけ禅宗に着目し過ぎた叙述がある。また、自身が創立した常葉学園の教育には、禅宗の教えを織り込んだ。つまり、泰彦と仏教の関わりは深い。研究者や教育者としての木宮泰彦の根底には、龍雲寺や他寺での生活体験があったに違いない。

【参考資料】

創立者生誕一〇〇年記念委員会『木宮泰彦：その生涯と業績』静岡：編者、一九八七年。
木宮亮邦『龍雲寺史談』浜松：西湖山文庫、1968 年。
「龍雲寺ホームページ」（https://www.ryouun.com/）

(5)－２『日支交通史』と『日華文化交流史』の関係[68]

濱川　栄

『日支交通史』（一九二六－一九二七）と『日華文化交流史』（一九五五）の関係について、表という観点から説明してみよう。両書はともに、総じて概説的かつ平板的な叙述が続く。しかも、『日華文化交流史』は『日支交通史』の本文をほぼ丸写したものである。そんな『日華文化交流史』だが、以下に確認するように、戦禍による原稿焼失にも関わらず執念で刊行した最大の理由は、大幅に増補した表を公にすることだったと思われる。

そもそも木宮泰彦の著作として内外で評価が高いのは、『日支交通史』である。木宮自身の回顧によれば、その理由は以下のようになる。

「この書は交通史とはいへ、単なる外交史や貿易史ではなく、寧ろ文化の交流に重点を置いたものであった。さうしてその頃はこの種の著述に乏しく、殊に日華文化の関係に就いて、終始一貫体系を整へた研究が全くなかったからであらう。いたく世の歓迎を受け、広く購読されたのみならず、昭和六年には中国の陳捷氏が本書を翻訳し、『中日交通史』と題して、上海商務印書館から出版し、次いで同十年には、同書館の普及版叢書である『萬有文庫』中にも入れられ、更に翌十一年には、王輯五氏が本書を簡約して、『中国日本交通史』を公刊するなど、中国学徒にも益々広く愛読され、日華両国民の融和親善にも多少の貢献をなしたことは、著者の私かに喜びに堪へないところであった。」（『日華文化交流史』序文）

日本国内における好評以上に、中国で早々に翻訳本が出たことに加え、普及版や簡約版まで次々と刊行され、幅広く読まれた。これを木宮は大いに喜んだのである。しかし、木宮は『日支交通史』の内容に満足していたわけではなかった。

「併しこの書はもともと取扱った事柄が多方面に亙ってゐたから、刻苦数年大いに力めたとはいへ、なほ史料の蒐集検討の到らなかった点もあり、従って多少の遺漏若しくは紕謬のあることは免れ難いところであった。故にこの書が益々愛読されるに従って、著者としての責任の重大なことを痛感し、慚悚の情禁じ

[68] 本稿は、濱川栄「『日華文化交流史』に見る歴史学者・木宮泰彦の姿―『日華文化交流史』とその時代（一）―」、『常葉大学外国語学部紀要』三六号、二〇一九年三月、一－一九頁の一部を抜き出し、大幅に改訂したものである。

難いものがあった。」（『日華文化交流史』序文）

つまり、史料の蒐集および検討が必ずしも充分でないまま刊行したものであり、望外の好評を得られたことで、かえってその遺漏の部分への忸怩たる思いが増したのであろう。ここに、研究者としての木宮の真摯な姿勢がうかがえる。後述するように、木宮の理想とする歴史研究の在り方からすれば、確かにそうした遺漏は決して許されないものであった。

そこで木宮は同書の増補版の制作に着手する。

「適々文部省から精神科学奨励金を受けたのを機会に、数年に亙り宮内庁図書寮・東京大学史料編纂所・岩崎文庫・京都大学図書館・久原文庫・足利学校・神宮文庫・京都五山の寺々の書庫等を訪ねて、断簡零墨を探り、これが更訂を試みたが、一方公私の業務は日と共に繁多を加へるのみで、容易に進捗せず、筆を投じて嗟嘆したことも数々であった。」（『日華文化交流史』序文）

旧制高等学校の教員として多忙な日々を送る中での史料集めと更訂は、なかなか進まない。「大人の風格」[69] で知られた木宮も内心焦燥を感じ、成就をしばしばあきらめたほどであった。

文部省の命を受けて中国に長期出張した一九四〇（昭和一五）年の経験が、消えかかっていた木宮の情熱に火をつける。特に、宋・元・明の時代（十世紀－一七世紀）に日本から渡った数百人の禅僧の学んだ江南の禅院の数々を訪れた体験が、やはり大きい。

「これ等の僧徒にして今日まで史籍に名を留めるものは、四五百人の多数に上るであらうが、いづれも交通不便な時代に、万里の鯨波を冒して彼地に渡り、仏教はもとより儒学・詩文学・医学・書道・茶道・絵画・建築・造庭・印刷など、さまざまの文化を究めて帰り、或は彼地の文化的所産を齎して、次ぎ次ぎに清新な刺戟を与へ、我が文化の促進と発展とに貢献した。故にそれ等の事蹟を徹底的に調査研究することは、日華両国の文化の淵源・本質・発展を探る上に、極めて緊要であるばかりでなく、両国の親善友好関係を促進する上にも等閑に附すべからざる事柄である。よって中国に出張したのを機会に、これ等に関する資料を蒐集し、再び勇を鼓して旧著の更訂に専心し、昭和十八年に至り漸く

[69] 木宮の親族・関係者によって編纂された『八十年の生涯―木宮泰彦　自伝と追憶』（同書刊行会、一九七〇年、非売品）の三六七－三六八頁に掲載された教え子の一人・秋鹿重彦の一文の題目。

稿を了へた。これを旧著に比べると、特に文化交流の研究に於て、前人未墾の新境地を開拓したところもあり、紙幅に於ても約三分の一を増加し、内容体裁ともに全く更新されたかの感があったので、更めて『日華文化交流史』と題し、梓に上すこととした。」（『日華文化交流史』序文）

しかし、ようやく出版寸前までこぎつけた増補版の原稿は一九四五（昭和二〇）年三月十日の東京大空襲によって印刷所もろとも焼失してしまう。木宮の失望と落胆は深かった。ところが、木宮の執念はそれを上回る。『日支交通史』が日本だけでなく中国でも好評を得、数種の翻訳が出たのも、中国では散逸した史料を見ることができるという点が評価されたからであろう。だからこそ『日支交通史』に未収の史料に多数接した木宮は、どうしても『日支交通史』の増補改訂版を出したかったのである。以後十年を費やし、一九五五（昭和三〇）年に待望の増補改訂版を刊行する。それが現在の『日華文化交流史』である。そしてこの一書が、木宮が戦後に公刊した唯一の学術書となるのである。

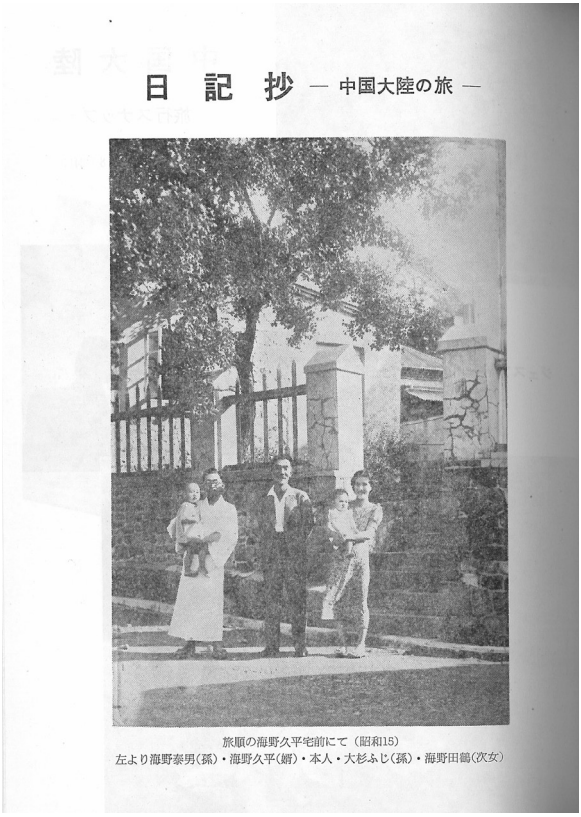
『日華文化交流史』の序文からも伝わってくるように、木宮には日中関係の深化に貢献したいとの意欲が満ちている。しかしながら、『日華文化交流史』の本文は全篇を通じて、あい変わらず史料に基づきながら淡々とした筆致で事実を確認するような筆致が続く。前述のように本文はほぼ『日支交通史』の丸写しであり、重大な誤記もそのまま転写するなど粗さも見える。また、戦後十年を経ているにも関わらず皇族への敬称も、戦前さながらにそのまま継承されている。もちろん出版目前の原稿が東京大空襲で焼失し、戦後は学校経営に忙殺され、『日支交通史』の本文を一新する余裕は到底なく、『日華文化交流史』の本文はその焼き直しで間に合わせるしかなかったのだろう。そうした事情のあったことは、想像に難くない。本文の改稿に木宮がほとんど意を用いていないことは、歴然としている。したがって、木宮自身の本文からその歴史観や価値認識を読み取ることはかなり難しい。

実のところ、木宮の研究者としての面目は、詳細な表にこそ現れている。表の充実は、『日支交通史』以来の木宮の著作に共通する特徴であった。膨大な資料から基本的な事実、つまり英語でいう「５Ｗ１Ｈ」（いつ・どこで・誰が・何を・どのように・どうしたか）を要領よく抽出し、時系列に沿って見やすい形で表に簡潔にあらわす。これは、歴史研究の最も基礎的な作業である。

今日、歴史学の研究論文では表を掲載することはごく一般的なことである。しかし、戦前においては案外、例が少ない。表の作成は、極めて地味で根気のいる作業

であり、同時に研究者の史料解読能力の水準を露呈しやすい。ともすれば自己の歴史観を雄弁に語ることが研究者の本分とみなされがちだった戦前の歴史学界において、しばしば軽視され忌避される傾向にあった。木宮はあるいは意図的にそうした風潮に逆らい、あえて「表づくり」という地道な作業に打ち込み、それを公開することで、自身の標榜する実証主義的歴史研究の正当性を訴えようとしたのかもしれない。

だからこそ、その表に多くの遺漏があることが判明した以上、いかに『日支交通史』の評価が高くとも、木宮はその増補改訂版を出さずにはいられなかったのである。



旅順にて（1940 年）『八十年の生涯』p.241 より

(5)－３　木宮泰彦と皇国史観

濱川　栄

一、はじめに

本学創立者の木宮泰彦は、近年は教育者･学校経営者として語られる場合が多い。しかし､本来は歴史研究者であり､戦前から大部な著作を多数残している。特に『日支交通史』上･下（1926･27年）と、その増補改訂版『日華文化交流史』（1955年）は、仏教、特に禅宗の交流を中心に近代以前の日中の文化交流について詳細に記しており、特に評価の高い名著である。

しかし、木宮が研究者として活躍したのは皇国史観が日本中を覆い尽くしていた時代であった。木宮が皇国史観にどう対応したのかは、本学に学び、働く者にとって見過ごせない問題である。我々は、戦後の民主主義体制の下で本学が創立されたものと理解して日々を過ごしている。もし創立者が戦後も皇国史観を信奉し続けていたならば、少なくない学生・教職員が本学で学び働く意義を見失いかねない（かえって意義を感じる向きもあるかもしれないが)。

そうした問題意識から木宮の『日華文化交流史』を読み直すと、気になる記述が少なからず見えてくる。いったい木宮は、皇国史観にどう向き合ったのか。その姿勢は戦後、どう変わったのか（変わらなかったのか)。同書の分析からそれらの問題を明らかにしていきたい。

二、木宮泰彦の学問的業績と戦前の教員歴

木宮泰彦は1887（明治20）年、現静岡県浜松市西区入野町にある臨済宗の寺院･龍雲寺に生まれた。禅寺の4人兄弟の次男に生まれた木宮は、幼いころは他の寺に小僧として出され厳しい修行を課された時期もあったが、1910（明治43）年に東京帝国大学史学科国史専攻に進むと、日中の文化交流史の研究に打ち込むようになった。東京帝大卒業（1912年）からわずか3年で最初の著書『栄西禅師』（丙午出版社、1915年）を刊行、その後『おもしろい日本歴史の話』（冨山房、1920年）など通俗書も著しながら、1926（大正15）年・1927年（昭和2年）に大作『日支交通史』上･下（金刺芳流堂）を刊行した。その後も『日本古印刷文化史』（冨山房、1933年)、『日本喫茶史』（冨山房、1940年）など日中の文化交流を主題とする著書

を刊行している。また、東京帝大卒業後すぐに京都の私立花園学院（現花園高校）に就職した（1912 年）[70] のを皮切りに、千葉県立大多喜中学校（現千葉県立大多喜高校）、県立福岡中学校（現県立福岡高校）、山形高等学校、水戸高等学校の教諭・教授職を歴任し、1927（昭和 2）年に静岡高等学校教授となり、終戦翌年（1946 年）に依願退官するまで同校で国史を教え続けた。つまり、木宮は大学卒業から終戦直後まで一貫して旧制中学・高校の教員として過ごしたのである。しかも、単に授業で国史を教えただけではなく、1937（昭和 12）年・1939（昭和 14）年には中学校用・実業学校用の国史教科書『新日本史』（ともに冨山房）も刊行している。

1937 年といえば日中戦争が始まった年であり、皇国史観による軍国主義教育がいよいよ徹底され始めたころである。そんな時期に皇国史観の定着を主な目的とする国史の教科書を著わしている以上、木宮を皇国史観の信奉者と見る人がいても無理はない。その見立てが正しいならば、敗戦による体制の激変に直面した木宮は深刻な内面的危機、いわゆるアイデンティティ・クライシスに陥ったことであろう。後述する家永三郎のように、同様の内面的危機を体験し、皇国史観を容認しそれに加担した戦前の自分を反省・否定した研究者も確かに存在する。

しかし、戦後の木宮にはそうした自己省察的な言動がほとんど見られない。そもそも木宮は、新たな学術論文や学術書を戦後一切残していない。戦後の学術的刊行物は、『日支交通史』に大幅に加筆修正して 1955（昭和 30）年に出版した『日華文化交流史』（冨山房。以下、『日華文化交流史』）しかないのである。自伝的な文章 [71] にさえ見えない木宮の皇国史観への思いを、我々は当面『日華文化交流史』から読み解くしかない。

三、『日華文化交流史』に見える木宮の「皇国史観」観

『日華文化交流史』の刊行にはドラマのような経緯があった。『日支交通史』の刊行後十数年の間にかつては読むことができなかった禅宗史料などを多数入手した木宮は、同書の大幅な改訂版の刊行を切望し、着々と準備を整え、1945（昭和 20）

[70] 1914（大正 4）年に京都帝大大学院に進み、内田銀蔵に師事し、大多喜中に転職するまで 1 年間学んでいる。

[71] 木宮は 80 歳（1967、昭和 42 年）の時に過去の日記をもとに自伝「八十年の生涯」を書き始めた。しかし 1939（昭和 14）年 4 月の段で中断し、本人の死去により未完となった。のちに木宮の三男・栄彦と娘婿の海野泰男が「八十年の生涯」の全文に 1940（昭和 15）年文部省命による中国視察旅行の間の日記抄録、親族・関係者の追悼文等を加えて『八十年の生涯―木宮泰彦自伝と追憶』（同書刊行会、1970 年〔非売品〕）として一書にした。

年に出版の運びとなった。ところが、同年3月10日の東京大空襲により原稿は印刷所もろとも焼失してしまったのである。当時の心境を木宮は「一時は失望落膽して、為すところを知らない有様であった」と記している[72]。しかし木宮の執念はすさまじく、「更に勇を鼓し、公務の余暇ある毎に、筐底の資料を順次整理し、満十年の後漸くこの一書を完成した」とあるとおり[73]、すでに静岡女子高等学院や常葉中学校を創立しその経営に忙殺される中、原稿焼失と終戦から10年にしてついに『日華文化交流史』の刊行にこぎつけたのである。

こうして世に出た同書は、前書『日支交通史』に3分の1の分量を加筆して成ったものだが、両書の文章の内容はほぼ同じであり、増量分のほとんどは前書の長所として高く評価された多数の表（特に日本から中国に渡った僧の事績を示す表）の加筆であった。すでに定評を得ていた『日支交通史』を大幅に増補し、原稿焼失という絶望的状況を乗り越えて『日華文化交流史』を刊行した背景には、新たに入手できた史料を生かせないことで『日支交通史』の高い評価が将来低下する事態を避けたい、という思いがあったのではないか。すでに学校経営者として多忙を極め、新たな論文も著作も残さなかった戦後にあって、木宮は実証主義者としての面目に賭けて『日華文化交流史』だけは残したかったのであろう。

その『日華文化交流史』から木宮の皇国史観との関わりを探っていくのであるが、その前に、まず皇国史観とは何か、という点を確認しておきたい。皇国史観にもさまざまな解釈があるが、あえて標準的定義として百科事典の解説だけを挙げておく。

> アジア太平洋戦争期にいわば国教化した天皇中心の超国家主義的日本史観。その根源は幕末の尊攘（そんじょう）思想、平田国学、明治の国粋主義などまでさかのぼりうるが、とくに昭和前期平泉澄（ひらいずみきよし）らにより提唱されたものをさす。唯物史観歴史学の発展に対し危機意識を強めた平泉らは、「万世一系」の「国体」とそれを基軸として展開してきたとみる日本歴史の優越性を強調し、「大東亜共栄圏」思想に歴史的裏づけを与えようとした。その意味で皇国史観は非科学的であるのみならず、独善的な自国中心の歴史観で、天皇制と帝国主義を支えるイデオロギーであった。平泉やその追随者たちは戦時中軍部・文部省と深く結び付き、国民の歴史観に強い影響を与えた。敗戦に伴い皇国史観はその存在理由を失うとともに、日本歴史の科学的研究の進展で

[72]『日華文化交流史』序文。
[73]『日華文化交流史』序文。

急速に消滅に向かうが、平泉の追随者のなかには文部省（現、文部科学省）の教科書調査官などとなって、皇国史観の温存を図る動きを根強く続ける者もいた。［永原慶二］（『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館、1994 年）

このように、皇国史観は幕末から第二次世界大戦の敗戦（1945 年）までの日本近代史を通じて日本国民の思考・行動に多大な影響を与え続けた国家イデオロギーであり、一種の「国家宗教」であった。具体的には 1890（明治 23）年の「教育勅語」の制定によって公的な地位を得、『国体の本義』（文部省、1937〔昭和 12〕年）によって絶対的な価値を保証されたものである。日本史（国史）教育上における皇国史観の影響は、建国神話の史実化、天皇親政を妨げた武家政権（特に足利政権）の酷評、民主主義の軽視（ないし敵視）、などの諸点に端的に認められる。

それでは、『日華文化交流史』と皇国史観はどのように関わるのか。まず目に付くのは、皇族の言動を全て敬語で表わしている点である。それは天照大神（アマテラスオオミカミ）や素戔嗚（スサノオ）にまで共通している（下線は濱川。以下、同じ）。

天照大神が高天原に於て素戔嗚尊と誓を<u>なされた</u>時に（後略）
（第 1 部漢・六朝篇、第 1 章「原始時代に於ける中国文化の波及」、p7）

崇神天皇に至つて皇威は著しく四方に伸張<u>せられ</u>（後略）
（第 1 部漢・六朝篇、第 3 章「日本と中国南朝との交渉」、p25）

我が朝廷の関知<u>し給はぬ</u>ところであった（後略）
（第 1 部漢・六朝篇、第 3 章、p35）

聖徳太子が一面中国文化に憧憬<u>し給ひ</u>、これを摂取しようとする念が強く<u>あらせられた</u>に拘らず、他面にはどこまでも国家的体面を<u>重んぜられ</u>、隋に対して対等の態度を執らせたことはまことに、景仰すべきことといはねばならぬ。
（第 3 部隋・唐篇、第 1 章「遣唐使」、p67）

これらの記述は戦前刊行の『日支交通史』と全く同じであるが、敗戦から 10 年後に世に出た『日華文化交流史』がそれを継承している点には違和感を感じざるを

得ない。『日華文化交流史』の刊行に際し、敬体を常体に改めるぐらいは大した苦労ではなかったはずである。

しかし、終戦直後には学術書でもまだ皇族に対して敬体を使う例は少なくなかった。後に厳しく皇国史観を批判した家永三郎（1913 年―2002 年）でさえ、戦前と戦後すぐの著作における聖徳太子についての記述は以下のようであった。

> 太子は先づ目前に見る諸種の人間悪、（中略）之を「必ず遣除」せんとする道徳的努力より出発せられたのであった。
> （『日本思想史に於ける否定の論理の発達』弘文堂、1935 年）

> 太子が摂政でおいでの間になされた御仕事は（中略）政治の上で特に重要なのは、十二階の冠位をお定めになつたことと、憲法十七條をおつくりになつたことである。
> （『新日本史』冨山房、1947 年）

このように戦後すぐにはまだ皇室への敬意を示していた家永であるが、1970 年代ともなるとそうしたそぶりは皆無となる。

> 太子は、冠位十二階や憲法十七条に、中国を源泉とする儒教・仏教等の外来思想をその理論的体系に基き、日本人として初めて主体的にとり入れた。（中略）推古三十年壬午（六二二）二月二十二日に斑鳩宮で死し、（後略）
> （「歴史上の人物としての聖徳太子」、1975 年[74]）

家永は一方で、戦前は皇国史観を素直に受け入れ、明治天皇や教育勅語を高く評価していたことを認めている[75]。また、戦後間もない時点でも皇室への尊崇の念を表明していた[76]。そんな家永が急激に戦前の皇国史観を批判し始め、最高裁まで争ったいわゆる「家永教科書裁判」に見られるように戦後日本の教育行政にも激しく抵抗するようになったのは、1950 年の朝鮮戦争勃発以後のいわゆる「逆コース」へ

---

[74] 家永三郎他『聖徳太子集』（岩波書店日本思想大系 2、1975 年）所収。
[75] 家永三郎『家永三郎集』第 16 巻（自伝：付著作目録・年譜）、岩波書店。
[76] 家永三郎『新日本史』（冨山房、1947 年）。

の反発がきっかけだった[77]。家永のように率直に戦前と戦後の自身の信条の変化を告白した研究者は実は少ない。その姿勢は、一方では真摯な態度と評価されたが、一方では「変節」と酷評されもした[78]。しかし、家永の弟子の鹿野政直が「戦前期に成長した一人の知識人にとって、「天皇制イデオロギーの呪縛」からみずからを解放してゆくことが、いかに困難であったか」[79]とおもんぱかった苦悩は、ひとり家永のみに課されたものではなく、戦前・戦後を通じて活動した全ての研究者・教育者に降りかかったものであったろう。

日本古代思想史の大家・津田左右吉（1873 年－1961 年）の戦前と戦後の態度の変化は特に興味深い。津田の場合は家永と逆で、戦前は皇国史観に批判的であったのが、戦後はむしろ肯定的な姿勢に転じた。戦前の津田は、徹底した史料批判により『古事記』『日本書紀』などの神話が史実でないと断じたために「不敬罪」の疑いで告発され、主要著書は発禁処分となり（1940、昭和 15 年）、早稲田大学教授の職も辞職に追い込まれ、「皇室を冒涜した」として出版法違反の有罪判決を受ける（1942 年。禁錮 3 ヶ月・執行猶予 2 年）など、皇国史観を否定したがために厳しい弾圧を受けたのである。一方､そうした経歴から戦後は一時英雄的扱いを受けたが、本人はマルクス主義的唯物史観の信奉者から持ち上げられることを嫌い、かえって皇室への尊崇の念を鮮明にし、日本の伝統文化に対する中国文化の影響を認めないという戦前以来の姿勢を一層強め、むしろ皇国史観を肯定するような主張を繰り返したのである。

津田の戦前と戦後の研究における記述の変化を実際に見てみよう。

> クマソに関する説話で最もよく人に知られてゐるものは、いふまでもなく、ヤマトタケルの命がクマソタケルを誅せられたといふ物語である。（中略）ただ古事記では、ヤマトタケルの命の御行動がクマソ征討の全体であるのに、書紀では、その前に景行天皇親征の物語があつて、（中略）ヤマトタケルの御事業は比較的軽いものになつてゐるので、（後略）
> （『古事記及び日本書紀の新研究』洛陽堂、1919 年）

クマソに関する説話で最もよく人に知られてゐるものは、いふまでもなく、ヤ

[77] 家永三郎『家永三郎集』第 16 巻（自伝：付著作目録・年譜）、および家永三郎「付篇　私と天皇制・天皇」（『一歴史学者の歩み』岩波現代文庫、2003 年所収）。
[78] 秦郁彦『日本占領秘史』下（朝日新聞社、1977 年）p103。
[79] 家永三郎『一歴史学者の歩み』の「解説」。

マトタケルの命がクマソタケルを誅せられたといふ物語である。（中略）ただ古事記では、ヤマトタケルの命の行動がクマソ征討の全体であるのに、書紀では、その前に景行天皇親征の物語があつて、（中略）ヤマトタケルの事業は比較的軽いものになつてゐるので、（後略）
（『日本古典の研究』上、岩波書店、1948 年）

後者が前者のほぼ丸写しであることは一目瞭然である。津田の場合、過去の論稿を何度も修正し、別の論稿とする例が多い。今日的な観点から言えば研究倫理の面で疑問がぬぐえない姿勢であるが、それはさておき、全く同内容の上の２つの文章を見ると、どちらもヤマトタケルに敬語を使っているが、戦前版の「御行動」が戦後版は「行動」となっている点が目につく。ここからわかることは、皇国史観を否定した戦前の津田も皇室に敬体を使っていること、戦後はわずかながら敬意を弱めている、ということである。「御」だけを省くのはほとんど無意味な行為に見えるが、皇国史観の排除に躍起な GHQ に対する過剰な「忖度」から出版社が勝手に改めた可能性も考えられる。ともかく、戦前に皇国史観否定派の旗手とされた津田ですら皇室に敬体を使っていたこと、戦後はその敬意の度合いを抑制しようとしたことには留意したい。

しかし、戦前に皇国史観を否定したのは津田左右吉だけではない。社会主義・共産主義・唯物史観を信奉する人々の多くは、皇国史観どころか天皇制そのものの打倒をも叫んでいた。もちろん、そうした姿勢を鮮明に打ち出した人々は官憲による厳しい摘発・弾圧を受け、獄死したり獄中で転向したりしてほとんど根絶やしにされた。それほどまでに体制側に逆らった彼らの著述に、皇室への敬体などみじんもないのは当然のことである。ここではその代表例として野呂栄太郎（1900 年―1934 年）の文章を挙げておく。

今日史実として伝ふる所を綜合、分析した結果は、略々崇神天皇（西暦紀元前九六―二九年）乃至垂仁天皇（西暦紀元前二九年―西暦七〇年）の頃に、我が国家組織生成の端緒を求むることの妥当なるを知るであらう。これは、日本書紀の紀年が約六百年程多きに失し、従つて大体神武紀元は西暦紀元と時を同じくすとなす諸家の見解と一致する（後略）
（野呂栄太郎『日本資本主義発達史』岩波書店、1930 年）

而して崇神天皇の代に於ける、四道将軍の派遣は、此等の階級的支配権を維持し拡張せんが為めの常備軍の設置と見るべく、（後略）
（野呂栄太郎『日本資本主義発達史』岩波書店、1930 年）

野呂は気鋭のマルクス主義経済学者にして非合法化時代の日本共産党の指導者の一人であり、警察に逮捕されて拷問を受け、持病の結核を悪化させて急死するという壮絶な人生を送った人物である。文字通り命懸けで天皇制や皇国史観と戦った野呂の文章が、皇室に敬意を示すどころか、天皇を「階級的支配権」を「拡張せん」とする階級の敵とするのは当然である。しかし、そんな野呂でさえ「神武紀元は西暦紀元と時を同じくす」とし、皇国史観で絶対視された神武紀元＝前 660 年説は否定する[80]ものの、神武天皇の実在は否定していない点には注目される。皇国史観はこれほどまでに戦前の日本人の骨肉に浸みこんでいたのである。

さて、以上の数人の文章を比較する限り、戦前・戦後を通じて最も姿勢に変化がないのは実は木宮である、ということにならないだろうか。木宮こそが戦前・戦後を通じ首尾一貫した皇国史観の信奉者であった、とも見えてしまうのである。

疑いの原因は、単に皇室に敬語を使っている点だけにとどまらない。後醍醐天皇の建武の新政（1334 年－ 1336 年）が足利尊氏の離反によって瓦解したのちも、後醍醐の皇子の懐良（かねよし／かねなが）親王は征西将軍として九州を支配し、室町幕府と対立していた。そこに創建間もない中国の明の太祖（洪武帝、朱元璋）から、沿海を荒らす倭寇の取り締まりを日本国王に求める使節が来た（1369 年）。しかし明からの国書の高圧的な態度に怒った懐良親王は使節数名を惨殺し、太祖を批判する返書を送った。この行為について木宮は、

その雄偉なる意気、その壮快なる文辞一異彩を放つものといふべきである。
（第５部明・清篇、第１章「足利幕府と明との通交貿易（其一）」、p527）

と絶賛している。一方、後に足利義満が「爾日本国王源道義」との明からの呼称と正朔の賜与を甘んじて受理し勘合貿易を始めた（1404 年）ことについては、

我が外交上未だ曾て見ざる汚点（後略）

[80] 木宮も「記紀の（中略）神話伝説は、直に採つて証拠とすることの不可なることはいふまでもない」（『日華文化交流史』p5）とし、記紀神話をそのまま史実とみなすことは否定している。

（第5部明・清篇、第1章「足利幕府と明との通交貿易（其一）」、p531）

と厳しく批判し、同じく義満が明の永楽帝に「日本国王臣源表」で始まる国書を送ったことを、

我が国体を辱めたことは言語道断（後略）
（第5部明・清篇、第1章「足利幕府と明との通交貿易（其一）」、p531）

と酷評している。平明・平板、悪く言えば無味乾燥で感情をほとんど表すことのない木宮の文体にしては、この一連の表現は異様でさえある。これらも『日支交通史』と全く同文であり、戦前の文の単なる丸写しに過ぎないと言えばそれまでだが、天皇親政を打倒して成立した足利政権（室町幕府）を逆賊とみなす皇国史観の典型的価値観を、終戦から10年後に出版した『日華文化交流史』にそのまま投影している事実には、やはり大きな違和感を感じざるを得ない。これでは、終生皇国史観を鼓吹し続けた平泉澄（1984年死去）と大差ないではないか。1955年の段階でもこうした内容のまま『日華文化交流史』を刊行した木宮の真意は、いったいどのようなものであったのだろうか。

四、日常の言動から見る木宮の「皇国史観」観

いったい、木宮自身が皇国史観について語った記録はないのであろうか。これまでのところ、筆者はそうしたものを目にしていない。しかし、木宮栄彦・海野泰男の手になる『八十年の生涯―木宮泰彦自伝と追憶』[81]には木宮の教え子の回想ではあるが、木宮と皇国史観の距離をうかがわせる記述が散見する。

わが国の上古の紀年は（中略）推古天皇の九年、辛酉の年からさかのぼって千二百六十年前の辛酉の年を以て神武天皇の即位の年と定めたのであって実際の年代よりは約六百年ほどのびているということは学者の意見の一致するところである」等のことを通じて小・中学校時代の国民教育としての歴史と高等学校以上の学問としての歴史との差異をはっきりと認識させていただきました。昭和十年代に、いわゆる皇国史観の歴史教育を受けた人々が未だにその後遺症に悩んでいるという訴えを聞くにつけ、（中略）私たちの受けた歴史教育が啓蒙

[81] 前掲『八十年の生涯―木宮泰彦自伝と追憶』（同書刊行会、1970年〔非売品〕）。

的で大変面白く「神話は神話、歴史は歴史」と聞き分ける耳、見分ける目を年若い時代に開いて下さったことを本当に有難く思っております。
（静岡高校の教え子で後の東京麻布高校教諭・宇野鴻の言。p377 ～ p378）

木宮先生から（中略）記紀の伝承の誤りを指摘され、神話的歴史を科学的に分析批判する態度を教えられたことは、大変な驚きであった。第一に日本紀元の計算が誤りであり、初期の天皇の実在性が疑わしいといった話を聞かされたことからして、中学教育までの常識を根底から覆される思いがして、（中略）非常なショックであり、やがては非常な感銘となった。（中略）漸く軍国主義の力が強まってきていた日本の国情のもとで、右翼的な思想攻勢の波はとりわけ歴史学界の内部につよく盛り上がってきていた頃であったから、木宮先生の講義にしても何らの抵抗なしに済まされえたとは思われない。戦時中に先生が文教当局から受けられた扱いにも、何かその影響を思わせるもの[82]が感じられた。（中略）要するに史実に対する歴史学者としての実証的研究態度のきびしさと、くもりなき史的評価眼のするどさであるが、救いはそれでいて木宮先生の講義には、実証をただの無味乾燥な自然主義に終わらせぬ文化史的態度の豊かさがあったことである。そしてまたこれは今日の、逆にあまりにも実証主義あるはい（ママ）自然主義に偏しすぎた日本の歴史教育に対する一つの警告を含むものだと思うのである。
（静岡高校の教え子で後の静岡大学名誉教授・山下太郎の言。p396 ）

木宮は高校生（旧制。現在の大学１、２年生に相当）に対しては、「神話は神話、歴史は歴史」と両者を峻別する姿勢を示し、記紀神話の史実性を否定する授業を展開していたのである。しかし、これは木宮だけに見られた態度ではない。木宮の東京帝大時代の恩師でもある三上参次（1865 年－1939 年）は、1933 年の東大史学科新入生歓迎会の席上で次のように言ったという。

諸君は（中略）教師になつたとき、大学で学んだことをそのまま生徒に教えてはいけない。学問としての歴史と教育としての歴史とはちがうのである。（中略）いままで二千六百年と教えているから、それをいま、そうでないなどといつて

[82] ここでいう「扱い」が何を指すかは不明だが、あるいは木宮が静岡高校に 20 年勤務しながらついに校長になれなかったことを指すか。

はならぬ（後略）。[83]

三上参次が木宮にも同様の教えを垂れていたかは不明だが、結果的に木宮は恩師の考えを実践したことになる。そしてそれは、三上と木宮のみの姿勢ではなく、恐らく一定の数の国史教師にも見られた姿勢ではなかったかと思われる。要するに、皇国史観を信奉する素振りを見せながら、ある程度理解力のついた生徒（旧制高校以上）には実証的な歴史を教える、という「面従腹背」的な態度である。教え子の回想によると、木宮自身も次のように言っていたという。

> いつか県下の歴史研究の会で、講師としてお見えになられたとき、「神話と歴史」についての若い教師たちの意見が分かれたとき、たしか、生の研究をそのまま教室で生徒の前に展開してはならない―禁句の多かった戦前の歴史授業！の時代―として、教材の選択をお教え下さったこともありました。[84]

まさに三上と同じ態度であり、教育と学問（研究）を峻別し、旧制中学までは教育としての歴史、旧制高校以上で初めて学問としての歴史を講ずるということであった。木宮が著わした旧制中学校初年級用国史教科書である『新日本史』（冨山房、1932 年）には次のような記述が見える。

> 国民精神の涵養を国史教育の最大眼目とすべきことはいふまでもない。著者はこの点に就いて最も細心の注意を払ひ、国体の尊厳を説き、大義名分を明らかにすることに努めた。
> （序文）

> 我が大日本帝国は太古から万世一系の天皇の治め給ふ国で、（中略）未だ一度も外国の侮（あなどり）を受けず、国運はいよいよ隆盛となつた。（中略）世界にたぐひのない国体の由来するところと、国運発展の有様とを知らなければならない。
> （第１篇第１章「神代」）

[83] 井上清『くにのあゆみ批判―正しい日本歴史』（解放社、1947 年、p27－p28）。
[84]『八十年の生涯―木宮泰彦自伝と追憶』p380 に見える、静岡市立商業高校校長（1970 年当時）の小沢誠一の言。

神武天皇は高千穂にいましたが、東方には未だ従ひまつらぬものどもが多かつたから、これを平げようと思召され、皇族の方々と舟師を率ゐて日向を発し、海路瀬戸内海を経て、浪速に到り、河内から進んで大和に入らうとせられた。
（第１篇第２章「神武天皇の創業」）

義満は明との貿易の利益ある事を聞き、辞を卑うしてこれと交り、名を進貢に託して貿易の利益を占めた。その子義持は父の失態を慙ぢて、一旦その交を絶つたが、義教に至つて、再び旧に復し、諸大名・諸大寺もこれにつれて貿易船を派遣した。
（第３篇第８章「室町時代の外交と分化」）

まさに皇国史観を体現した教科書としか言いようがない。1927 年に静岡高校に赴任後、木宮が旧制中学で教鞭を取ることはなかったが、仮にその機会があったとしても、こうした教科書を書いた自身が「学問としての歴史」を中学生に教えることはできなかったであろう。木宮の親族の手になる伝記には次のようにある。

泰彦は、学問としての歴史と歴史教育としての歴史との立場を明確に区分していたと思われる。神話伝説をあたかも歴史的事実であるように論じたりすることを嫌い、反面、神話伝説を軽視して唯物史観的な歴史教育に走ることも嫌ったのである。戦前の小・中学校時代の国民教育としての歴史と高等学校以上の学問としての歴史との差異をはっきり認識して「歴史教育」を施さねばならないという立場であったと思われる。[85]

木宮が皇国史観の純然たる信奉者であるなら、高校・大学でも堂々とそれを（平泉澄のように）教えたはずである。しかし、そうできる立場にありながら、しかも国家からそうするように求められた立場にありながら、そうしなかった以上、木宮が本心では皇国史観に一定の距離を置いていたことは疑いない。しかし、かといって木宮は津田や野呂のように正面から皇国史観を批判することもしなかった。批判が何をもたらすかは火を見るより明らかであったし、上述のような教科書を数冊執

[85] 木宮栄彦・小田久夫『木宮泰彦―その生涯と業績』（創立者生誕百年記念委員会、2006 年）p267。木宮栄彦は三男、小田久夫は娘婿になる。

筆している点から見る限り、皇国史観を全面的に否定するつもりもなかったのであろう。結局、小・中学校では国民教育として皇国史観に沿う歴史を教え、高校・大学でのみ自身の納得する歴史を教える（ただし国家権力の許す範囲で）という二重規範を採らざるを得ず、しかもそのことにさほど痛痒を感じていた形跡もないのである。

なお、上の文章からはもう一点、木宮が「唯物史観的な歴史教育」を嫌ったことが判読できる。それは同書の次の文章からもうかがえる。

> 第二次世界大戦が熾烈になるに従い国体明徴の観点からも、皇国史観が次第に幅を利かせるようになった。泰彦は歴史家ではあったが、極端な皇国史観には与しなかった。当時の歴史学者は、政治的な関わりから、とかく思想的影響を受け易く、左右両極端に走りがちであった。しかし、泰彦は思想的には無色の立場をとり、歴史学者の立場から自己の思想を公言したり、記述することはなかった。[86]

特定の思想という色眼鏡で歴史を見ることを嫌い、あくまでも史料に基づいた実証的な歴史を目指したということなのであろう。しかし、木宮自身による唯物史観への言及は全く残されておらず、その本心は測り難い。

五、木宮泰彦の中国文明観

皇国史観にも唯物史観にも絶妙な距離を取り、本心の表明を避け続けた木宮であったが、皇室への敬愛の心情は戦前・戦後を通じて隠さず表明していた。戦後10年目刊行の『日華文化交流史』における皇室への敬語はもちろん、勇を鼓して創立した学校法人に聖武天皇の御製に基づき「常葉」と命名したことにもその一端がうかがえる。だがそこに皇国史観信奉者にありがちな熱狂性は感じられない。木宮の生家と皇室との関わりから見れば、むしろそれは抑制的とさえ言える態度であった。

木宮の生家である龍安寺は、大覚寺統の後二条天皇（位1301年－1308年）の皇孫・木寺宮康仁親王（1320年－1355年）の創建とされ、「木宮」の姓もそこから来ているという。それが本当なら、木宮は戦前、自らの出自を利用して名を売ることもで

[86]『木宮泰彦―その生涯と業績』p300。

きたはずである。しかし、そうした振る舞いをした形跡は全くない。

一方、上述のように懐良親王の対明強硬姿勢を賛美し、足利義満の明への臣従を「汚点」「言語道断」とまで非難した木宮であるが、国粋的な日本至上主義者であったわけでもない。それは『日華文化交流史』の以下のような記述からうかがえる。

> 五山文学は平安朝貴族の玩んだ漢文学や、江戸時代の儒者によつてなされた漢文学に比べて、最も優秀なものとせられ、全然和臭を脱して殆ど生粋の宋元の詩文学と異なるところがない。（中略）斯の如く五山文学が和臭を脱して、宋元の詩人と日を同じうして語り得たる域に達し得たのは、実に入元僧が永い間彼地に滞留して、心ゆくばかり彼地の山川風物を味ひ、その趣味といひ風尚といひ全く中国的になつてゐたからである。
> （第４部南宋・元篇、第５章「入元僧と文化の移植」、p499）

> 当時五山の僧徒が如何にして中国人らしい詩文を作らうとして苦心したが（ママ）、明の文儒名緇の讃辞を得ることを無上の栄誉と考へてゐたかが察せられるであらう。五山文学が平安朝の貴族によつて作られた漢文学や徳川時代の儒者によつて成された漢文学と異り、全然倭臭を脱した生粋の漢文学であつたというふことも偶然ではない。
> （第５部明・清篇、第３章「入明僧・来朝明人と文化の移植」、p624）

このように日本の禅僧の間で、特に南宋・元・明時代（12 世紀前半－17 世紀半）に書かれた漢詩・漢文（五山文学）が、平安貴族や江戸時代の儒者の手になるそれらのような「和臭」がなく、「生粋の漢文学」「中国人らしい詩文」であり、「最も優秀なもの」であったことを高く評価している（もちろんこれらも戦前の『日支交通史』とほぼ同文である）[87]。こうした記述からは明らかに中国の伝統文化への崇敬

[87] 前者の文は『日支交通史』では、
「五山文学は平安朝の貴族によつて作られた支那文学、徳川時代の儒者によつて成された支那文学に対立し、然かも三者の内最も優秀なものであると評せられてゐるのは、その詩文が全然倭臭を脱し、宋元詩文学の一分派と見らるるほど生粋なる支那文学であるからである。（中略）平安朝以来深く根柢を固めた倭臭紛々たる旧套を脱して、宋元の詩人と日を同じうして馳駆し得らるる域に達したのは、実に彼等禅僧が十年二十年といふ永い歳月を彼地に暮し、常住坐臥總て支那人と同じ生活を営み、その趣味といひ、好尚といひ、全然支那人化した結果に外ならぬ。」（『日支交通史』下、p243）。
後者の文は、『日支交通史』で「支那文学」とあるのが『日華文化交流史』で「漢文学」に改められている点以外は、全く同文である。

の念が読み取れる。日本に対する中国の文化的影響を徹底的に否定した津田左右吉とは全く対照的な態度であり、戦前においては日本文化を卑下するものとして問題視されかねない記述ともいえる。それでも木宮は、「和臭」の漂う漢文を非とした。また、そもそも『日支交通史』も『日華文化交流史』も篇・章の題目が中国王朝の名称に基づいて立てられており、日本史の時代区分に依拠していないことや、『日支交通史』で「支那」「支那文学」としている表記を『日華文化交流史』では全て「中国」「漢文学」と改めていること、さらに言えば『日支交通史』の増補改訂版を『日中文化交流史』とはせず『日華文化交流史』と題した点からも、木宮の伝統中国への崇敬の念が読み取れると同時に、皇国史観との一定の隔たりも感じ取れるのではないだろうか。

六、おわりに

木宮は皇国史観を積極的に肯定も否定もしなかった。しかもその態度は、戦前も戦後もあまり変わることがなかった。それはマルクス主義史観（唯物史観）に対しても同様であった。憶測をたくましくすれば、戦後一世を風靡しながらも、あたかも戦前の皇国史観のように硬直化･独善化するマルクス主義史観への反発から、『日華文化交流史』においても皇室への敬体を維持したのかもしれない。明確には測りがたい木宮の内心をあえて一文化すれば、特定の思想やイデオロギーには距離を置き、長い歴史の風雪に耐えて保ち続けられた皇室と中国文明（特に禅宗文化）を心底から敬愛する、というものだったと言えようか。

木宮はあくまでも実証主義に徹した歴史学者であった。歴史学者はそのようであらねばならない、という声は今日でも少なからず聞く。しかし、皇国史観が世界に与えた惨禍を考えると、木宮の振る舞いを全面的に肯定することには躊躇を覚える。あえて以下のような意見も示しておきたい。

> 戦時下における歴史学の筆禍事件として取り上げられるのが常に津田左右吉であり、あるいは羽仁五郎など一部のマルクス主義歴史学者でしかないことは、他の歴史学者が戦時体制に迎合していたか、少なくとも実証主義の殻に閉じこもっていたことを示している――
> （長谷川亮一『「皇国史観」という問題』、2008 年、p322）

残念ながら、客観的には木宮は下線部に該当する歴史家と見なされざるを得ない。積極的ではないにしろ結局は長いもの（皇国史観）に巻かれ、長いものが許す範囲内でのみ実証主義を唱え、安住する姿勢に終始したと言えよう。「あの時代はそうするしかなかったのだ」という声もよく聞く。その声はもちろん理解できる。しかし、「あの時代」はいつでも戻ってき得る。「あんな時代は二度と戻らない」という保証はどこにもないのである。

長谷川亮一の次の指摘も重要である。

> （皇国史観について、戦前の）文部省自身は、この歴史観は『古事記』『日本書紀』『神皇正統記』『大日本史』などの国体論の聖典とされてきた書物を貫流する歴史観だと主張したが、実際にはむしろ、一九三〇年代以後の対外侵略と国民統合・国民動員の正当化の必要に応じて、これら一連の書物の内容を恣意的に取捨選択しながら作り上げられた歴史観というべきである。また、ファシズム体制を築き上げ戦争を引き起こしたイデオロギーというよりは、むしろ戦争という状況を事後的に追認し、自己正当化を図るために作りだされた国策イデオロギーとしての性格が強いものであった。
>
> （長谷川亮一『「皇国史観」という問題』、2008 年、p313）

木宮はもちろん、本心では皇国史観を全面的に肯定していたわけではないであろう。高校以上では実証的な歴史を教えるべきだ、という姿勢からもそれはうかがえる。しかし一方で、皇国史観に基づく中学用の教科書を数編著しているのも事実である。まさに木宮は、「国民統合・国民動員の正当化の必要に応じて」「戦争という状況を事後的に追認し、自己正当化を図るために作りだされた国策」に積極的に加担したのである。二度と戻って欲しくないあの時代の形成者の一人であったことは、否定しようのない事実である。特に自身の手に成る教科書によって皇国史観を注入され、高校に進んで「学問としての歴史」を教わる機会などあろうはずもなく、戦禍に散った多くの国民のことを、木宮はどう考えていたのであろうか。

もちろん、筆者は木宮を非難するつもりはない。しかし、歴史を学ぶ者のはしくれとして、「もし自分が木宮と同じ立場だったら、どう振る舞ったか」ということは考えざるを得ない。「あんな時代は二度と戻って欲しくない」と願うだけなら誰でもできる。しかし、現に今、世界は「あんな時代」に刻一刻と戻りつつあるように思われる。今ならまだ食い止められる、そんな瀬戸際で、果たして自分はどう振

る舞うべきか。津田左右吉や野呂栄太郎のような振る舞いをすべきなのか（そもそもそれができるのか）。それとも木宮のように振る舞うべきなのか。間違いなく言えることは、食い止めるには、一人二人ではない、数多くの津田や野呂のような存在が必要だということである。法律・国策・学校制度がこうだから、不本意ではあってもそれに従うという木宮のような振る舞いをする人間だけならば、「あんな時代」の再来はいつでも現実のものとなるであろう。

木宮は、1956（昭和 31）年の常葉学園の機関紙「たちばな」第 3 号に、「私達の信条」5 箇条を掲げている[88]が、その第 1 条は、

一、私達は自由を尊び常に明るく強く生きます。

となっている。戦後の木宮が、心底からその願いをもって本学を創立したことを、奉職する一人として願わずにはいられない。

参考文献

津田左右吉『古事記及び日本書紀の新研究』（洛陽堂、1919 年）。
木宮泰彦『日支交通史』上・下（金刺芳流堂、1926 年・1927 年）。
野呂栄太郎『日本資本主義発達史』（岩波書店、1930 年）。
家永三郎『日本思想史に於ける否定の論理の発達』（弘文堂、1935 年）。
木宮泰彦『新日本史』（冨山房、1937 年）。
家永三郎『新日本史』（冨山房、1947 年）。
井上清『くにのあゆみ批判―正しい日本歴史』（解放社、1947 年）。
津田左右吉『日本古典の研究』上（岩波書店、1948 年）。
木宮泰彦『日華文化交流史』（冨山房、1955 年）。
木宮栄彦・海野泰男『八十年の生涯―木宮泰彦自伝と追憶』（同書刊行会、1970 年）。
家永三郎「歴史上の人物としての聖徳太子」（家永三郎他『聖徳太子集』岩波書店日本思想大系 2、1975 年）。
永原慶二「皇国史観」（『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館、1994 年）。
家永三郎『一歴史学者の歩み』（岩波現代文庫、2003 年）。
木宮栄彦・小田久夫『木宮泰彦―その生涯と業績』（創立者生誕百年記念委員会、2006 年）。

[88]『八十年の生涯―木宮泰彦自伝と追憶』p645－p646 に再録。

長谷川亮一『「皇国史観」という問題』（白澤社、2008 年）。

付記：本稿は、濱川栄「木宮泰彦と皇国史観―主として『日華文化交流史』に拠る―」（『常葉初等教育研究』四、二〇一九年）を一部改編のうえ転載したものである。

第４部
学内共同研究の取り組み

(1)　常葉大学共同研究の歩み

若松　大祐

我々の共同研究は 2017 年度から現在までの 4 年間にわたり、常葉大学共同研究費の支援を受けて活動を続けてきた。ここでは我々の共同研究の公式サイトの記録に基づき、主旨、メンバー、定例研究会、その他の活動の 4 つに分けて概説しよう。

https://sites.google.com/view/dwakamatsu/readings/japan-sino
若松大祐と美麗島 > 読書会 >『日華文化交流史』とその時代
http://www.tokoha-u.ac.jp/research-pro/system/cooperative
常葉大学 > 研究推進 > 研究支援・推進体制 > 共同研究

一、主旨とメンバー

4 年間の活動の主旨は、研究者としての木宮泰彦の意義を検証するところにある。4 年間の活動は、大きく二つに分かれる。

<2017－2019 年度 >（複数年）
『日華文化交流史』とその時代：木宮泰彦の研究成果を常葉大学の授業で活用する試み

年度	氏名	所属	役割	専門
2017－2019	若松大祐	外国語学部・講師	代表	中国近代史
2017－2019	濱川　栄	教育学部・准教授	会計	中国古代史
2018－2019	木宮敬信	教育学部・准教授	管理	仏教

［目的］木宮泰彦『日華文化交流史』（東京：冨山房、1955 年）を精読し、同書の研究成果を常葉大学の授業で活用できるように目指す。

<2020 年度 >（単年）
研究者としての木宮泰彦の意義を検証する試み：2020 年における成果と課題

年度	氏名	所属	役割	専門
2020	若松大祐	外国語学部・准教授	代表	中国近代史
2020	濱川　栄	教育学部・教授	会計	中国古代史
2020	木宮敬信	教育学部・教授	管理	仏教
2020	中野直樹	短期大学部日本語日本文学科・助教		国語学

［目的］研究者としての木宮泰彦の意義を検証し、本学の建学の精神を可視化する。

二、定例研究会

我々の共同研究の主な活動は定例研究会であり、木宮泰彦の主著を繙く。定例研究会としての読書会で輪読したのは、次の二著である。

・木宮泰彦『日華文化交流史』東京：冨山房、1955 年。

・木宮泰彦『日本古印刷文化史』〔新装版〕東京：吉川弘文館、2016 年。

参加者は事前に所定の範囲を読み、各自が概要と感想を A4 用紙 1－2 枚程度にまとめ、読書会で交換した。共同研究の公式サイト「若松大祐と美麗島」に読書会の開催を予告し、1 ヶ月に 1 度のペースで濱川研究室や草薙図書館 KNOWLEDGE SQUARE などで実施した。所要時間は 1 時間ほどである。教職員や学生や学外者の参加も募ったものの、メンバー以外の参加がなく、残念だった。

〈定例研究会などの開催実績〉

回	月日	篇章	ページ	参加者
	2017 年度			
1	7/20（水）	『日華』序文	p.1－4.	H, S, W
2	8/30（水）	『日華』1 篇	p.3－58.	H, W
3	11/22（水）	『日華』2 篇 1－3 章	p.59－136.	H, W
	11/25（土）	学内学会発表		H, W
4	12/13（水）	『日華』2 篇 4 章	p.137－214.	H, W
5	1/17（水）	『日華』2 篇 5 章，3 篇 1 章	p.215－253.	H, W
◇	2/14（水）	講演会開催		H, S, W
☆	2/20（火）－22（木）	臨地調査		H, S, W
◆	3/2（金）	学内共同研究報告会		H, W
	2018 年度			
6	4/24（火）	『日華』3 篇 2 章	p.254－317.	H, S, W
7	5/8（火）	『日華』4 篇 1 章	p.319－333.	H, W
8	6/5（火）	『日華』4 篇 2 章	p.334－409.	H, W
9	6/28（木）	『日華』4 篇 3－4 章	p.410－443.	H, K, W
◇	7/17（火）	講演会開催		W
10	7/31（火）	『日華』4 篇 5 章	p.444－522.	H,（K），W
11	10/2（火）	『日華』5 篇 1 章	p.523－547.	H, K, W
	10/23（火）	打ち合わせ		H, K, W

(1)　常葉大学共同研究の歩み

回	月日	篇章	ページ	参加者
◆	11/3（土）	学内学会発表		H
12	11/13（火）	『日華』5 篇 2 章	p.548－601.	K, W
13	12/18（火）	『日華』5 篇 3－4 章	p.602－643.	H, K, W
☆	1/17（木）	臨地調査		H, W
14	1/29（火）	『日華』5 篇 5 章	p.644－694.	H, K, W
15	2/20（水）	『日華』5 篇 6 章	p.695－720.	H, K, W
☆	2/23（土）	研究会参加		W
☆	2/27（水）－3/1（金）	臨地調査		H, K, W
◆ ☆	3/25（月）	中国での国際座談会 および臨地調査		H, K, W
	2019 年度			
	4/23（火）	打ち合わせ		H, K, W
16	5/16（木）	『日華』1 篇の再読		H, K, W
☆	10/16（水）	歴史資料館の調査		W
17	10/18（金）	『日華』概要作成		H, K, W
	12/12（木）	打ち合わせ		H, K, W
◇	1/9（木）	座談会開催		H, W, N
◇	2/21（金）	座談会開催		中止
	3/4（水）	宮原佳昭氏への電話		
	3/10（火）	石暁軍氏への電話		
	2020 年度			
	4 月	打ち合わせ（電話）		H, K, N, W
☆	6/24（水）	歴史資料館の調査		N, W
18	7/17（金）	「日本震災史概説」		K, N, W
19	8/27（木）	『古印刷史』1－2 篇	p.1－60.	H, N, W
20	9/3（木）	『古印刷史』3 篇	p.61－207.	N, W
21	9/17（木）	『古印刷史』4 篇	p.208－314.	H, N, W
22	10/1（木）	『古印刷史』5 篇	p.315－372.	N, H, W
23	10/15（木）	『古印刷史』6 篇	p.373－453.	N, W
☆	11/20（金）	歴史資料館の調査		N, W
	11/25（水）	報告書の編集会議		N, W

参加者欄の（　）は、書面参加。
◇は外部講師を招聘して常葉大学で実施する講演会。
◆は我々のメンバーによる研究発表。
☆は学内外での臨地調査（フィールドワーク）。

三、定例研究会以外の活動

定例研究会以外の活動には、不定期の研究会と臨地調査があり、さらに毎年の之山忌での展示も含む。之山忌については、本稿第 1 部の 5－6 頁で述べた。上述の図表＜定例研究会などの開催実績＞で簡単に言及したものを、ここではもう少し詳しく紹介しよう。

まず、不定期の研究会は、本学に講師を招聘して実施したもの、共同研究のメンバーが学内外で実施したものがある。

［2017 年度］

・常葉大学教育学部学内学会

常葉大学静岡キャンパス瀬名校舎

2017/11/25（土）11:20 ～ 11:50

濱川栄、若松大祐「木宮泰彦研究序説―研究者としての木宮泰彦の一側面」

・主催講演会

「『日華文化交流史』を読み直す」

常葉大学静岡キャンパス瀬名校舎

2018/2/14（水）14:00 ～ 17:00

［総合司会・趣旨説明］若松大祐

［あいさつ］木宮岳志（学校法人常葉大学法人本部常務理事・事務局長）

［講演］関智英（日本学術振興会・特別研究員 PD）

「近代日本人の大陸参詣 」

［講演］大原嘉豊（京都国立博物館・保存修理指導室長）

「美術史学から見た東アジア交流史研究の課題」

［コメント］宮内肇（立命館大学・准教授）

「森清太朗の中国仏教への関心――本講演のコメントにかえて」

［総合討論］（司会）濱川栄

［参加者 10 名］

・常葉大学学内共同研究（瀬名校舎）報告会

常葉大学静岡キャンパス瀬名校舎

2018/3/2（金）11:50 ～ 12:00

若松大祐、濱川栄

[2018 年度]

・主催講演会

常葉大学静岡草薙キャンパス

2018/7/17（火）15:00 ～ 16:30

尤淑君（中国浙江大学歴史学系・准教授）

「木宮泰彦教授著作中譯版本及其學術影響」

[参加者 8 名]

・常葉大学教育学部学内学会

常葉大学静岡草薙キャンパス

2018/11/3（土）

濱川栄「木宮泰彦と皇国史観」

・共催講演会

“木宮泰彦与中日文化交流”国际学术座谈会

（国際座談会「木宮泰彦と日中文化交流」）

[主办] 浙江大学历史系、常叶大学

浙江大学西溪校区西四楼历史系

2019/3/25（一）9:00－11:40

开幕式（09:00－09:15）

09:00－09:10 肖如平（浙江大学历史系教授、中国近现代史研究所所长）致辞

09:10－09:15 与会学者拍摄纪念照

第一场（09:15－10:00）主持人 : 陈志坚（浙江大学历史系副教授）

09:15－09:30

报告人 : 木宫敬信（常叶大学副教授）

题目 : 木宫泰彦的老家“西湖山龙云寺”

09:30－09:45

报告人 : 孙英刚（浙江大学历史系教授）

题目 : 三善清行《革命勘文》所见纬学思想与 7－9 世纪的东亚政治

09:45－10:00

互相对谈，自由讨论

第二场（10:00－10:45）主持人 : 孙英刚

10:00－10:15

报告人 : 若松大佑（常叶大学副教授）

题目 : 浅论木宫泰彦《日华文化交流史》在日本学术界的意义

10:15－10:30

报告人 : 尤淑君（浙江大学历史系副教授）

题目 : 木宫泰彦《日华文化交流史》对中国学界的影响

10:30－10:45

互相对谈，自由讨论

茶　歇（10:45－10:50）

第三场（10:50－11:35）主持人 : 尤淑君

10:50－11:05

报告人 : 滨川荣（常叶大学副教授）

题目 : 木宫泰彦与日本皇国史观 : 以《日华文化交流史》为主

11:05－11:20

报告人 : 陈志坚

题目 : 成寻在杭州的足迹

11:20－11:35

互相对谈，自由讨论

闭幕式（11:35－11:40）

若松大佑致辞

［参加人約 20 名］

(1) 常葉大学共同研究の歩み

“木宫泰彦与中日文化交流”国际学术座谈会

2019 年3 月 25 日（一）（浙江 · 杭州）

会议议程

09：00～09：10 开幕式 浙大中国近现代史所长肖如平教授

09：10～09：15 与会学者拍摄纪念照

09：15～10：00 第一场　　主持人：陈志坚

报告人	木宫敬信 木宫泰彦的老家“西湖山龙云寺”	09：15-09：30
对谈人	孙英刚 三善清行《革命勘文》所见纬学思想与7-9世纪的东亚政治	09：30-09：45
互相对谈，自由讨论		09：45-10：00

10：00～10：45 第二场　　主持人：孙英刚

报告人	若松大佑 浅论木宫泰彦《日华文化交流史》在日本学术界的意义	10：00-10：15
对谈人	尤淑君 木宫泰彦《日华文化交流史》对中国学界的影响	10：15-10：30
互相对谈，自由讨论		10：30-10：45

茶歇5分钟

10：50～11：35 第三场　　主持人：尤淑君

报告人	濱川栄 木宫泰彦与日本皇国史观：以《日华文化交流史》为主	10：50-11：05
对谈人	陈志坚 成寻在杭州的足迹	11：05-11：20
互相对谈，自由讨论		11：20-11：35

11：35～11：40 会议闭幕式 常叶大学 若松大佑

［2019 年度］

・主催座談会

常葉大学静岡草薙キャンパス

2020/1/9（木）15:10 ～ 16:15

小川快之（国士館大学文学部・教授）

「木宮泰彦『日華文化交流史』を活用した 異文化理解教育 の可能性について」

［参加者 4 名］

・主催講演会

「木宮泰彦の検証と顕彰」

常葉大学静岡草薙キャンパス

2020/2/21（金）13:00－16:30

［開会の辞・趣旨説明］若松大祐

［講演］宮原佳昭（南山大学外国語学部・准教授）

「木宮泰彦『日華文化交流史』の同時代的評価について」

［講演］吉良芳恵（日本女子大学文学部・名誉教授）

「大学の歴史編纂と資料収集について」

［閉会の辞］濱川栄

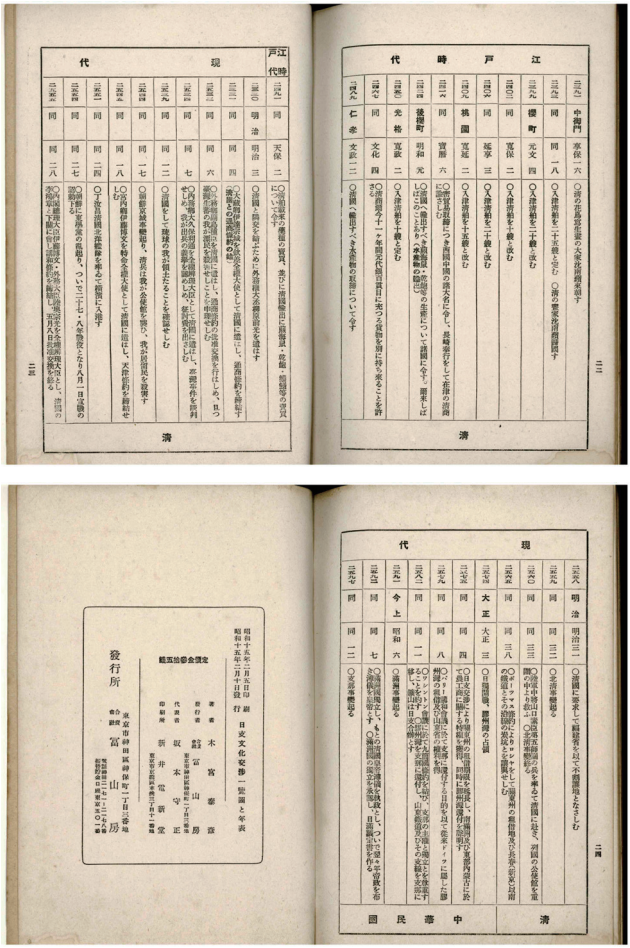
［Covid-19 のため中止］

そして、学内外で実施した臨地調査がある。

年月日	場所	参加者
2018 年 2/20（火）－22（木）	橿原神宮、唐招提寺、延暦寺などの参観	濱川　栄 若松大祐
2019 年 1/17（木）	黄檗山万福寺百丈忌、および黄檗山寶藏院の参観	濱川　栄 若松大祐
2019 年 2/27（水）－3/1（金）	花園大学禅文化研究所、東寺などの参観	木宮敬信 濱川　栄 若松大祐
2019 年 3/25（月）	中国杭州市の霊穏寺、雷峰塔、元代清真寺などの参観	木宮敬信 陳　志堅 濱川　栄 尤　淑君 若松大祐

年月日	場所	参加者
2019 年 10/16（水）午後	本学瀬名キャンパス歴史資料館での資料調査	若松大祐
2020 年 6/24（水）午後	本学瀬名キャンパス歴史資料館での資料調査	若松大祐 中野直樹
2020 年 11/20（金）午後	本学瀬名キャンパス歴史資料館での資料調査	若松大祐 中野直樹

年表の上には「江戸時代」や「現代」、年表の下には「清」や「中華民国」といった文字が見える



『日支文化交渉一覧図と年表』東京：冨山房、1940 年２月（学校法人常葉大学歴史資料館蔵）。

(2)　主著から木宮泰彦の思いを汲み取る

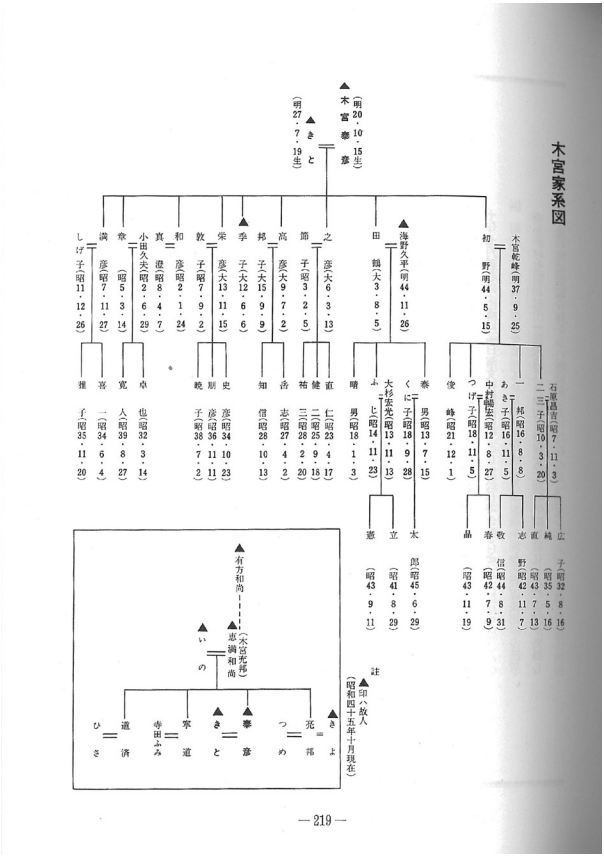
木宮　敬信

2018 年度より「学内共同研究:『日華文化交流史』とその時代（代表:若松大祐)」に参加し、木宮泰彦の主著である『日華文化交流史』の輪読を行ってきた。私自身は、木宮泰彦の生家である浜松市にある臨済宗妙心寺派龍雲寺を継いだ長女初野の孫にあたり、木宮家のルーツである龍雲寺の跡取り（長男）として若年期を過ごしてきた。一方、初野の婿となる乾峰は、文部事務官として初代学習指導要領の作成に関わり、中央大学教授等を経て、龍雲寺の住職を兼務しながら常葉学園に奉職し、短期大学学長などを務めた。また、父親の一邦も、地質学者として静岡大学教授を経て、龍雲寺の住職を兼務しながら常葉学園に奉職し、浜松大学長や副理事長などを務めた。このように、私の家系は、常葉学園創設以来、学園と龍雲寺を兼務する生活を送ってきた。現在の龍雲寺は、私の弟が専従の住職となり、私自身は先代副住職として龍雲寺に関わりながら、常葉大学に奉職している。このように教育者、宗教者としての両側面を持っているのが木宮泰彦に通じる私の家系の共通点である。私自身の研究分野は、「学校安全」「安全教育学」であり、本共同研究は全くの専門外である。そのため、そもそもの基礎的な知識が不足しているだけでなく、古書を読むのもほぼ初めてであり、大変苦労しながら輪読に参加してきた。当初は記述内容を追うことで精一杯であったが、読み進めるうちに木宮泰彦の思想を垣間見ることができるようになった。木宮泰彦が亡くなったのは、1969 年 10 月であり私が生まれた約 1 か月後である。当然、曾祖父の記憶は何も残っておらず、これまで之山忌などの大学行事を通じて、どこか他人事のようになぞってきた。しかし、この輪読を通じ、リアルな存在として木宮泰彦を感じることができたことが、自分にとっての大きな収穫である。

『日華文化交流史』は『日支交通史』を改訂したものであるが、東京大空襲によって焼失した原稿を再度書き直し出版されたとされる。河村（1998）は、同じ著書を再び書き直し事に要する気力とエネルギーは膨大であり、木宮の強靭な精神力をうかがい知ることのできる事柄であると評している。また、この時代に戦局に不急の『日華文化交流史』に紙の配給が割当てられたことは、国家的評価を得ていたか察するに余りあるとしている。そして、敗戦の 10 年後の序に書かれることになる、「東亜の中枢をなすものは日中両国である。両国の国交が調整され、善隣の有効が達成されない限り、東洋における永遠の平和は、到底期待し得られないであろう」とい

う理念が、戦中の当局を動かしたものであろうと記している[1]。

この木宮泰彦の強靭な精神力および平和への思いが、後に創立する「常葉学園（現常葉大学）」の建学の精神に反映されている。常葉学園の建学の精神は、「より高きを目指して～Learning for Life～」であり、「美しい心を持ち、より高い目標に向かってチャレンジし、学び続ける姿勢こそ、常葉の精神」と説明されている。現状に満足することなく、常に向上心を持ってチャレンジする姿勢、これこそ『日華文化交流史』出版に向けた創立者木宮泰彦の精神に通じるものであろう。



『八十年の生涯』より

[1] 河村孝照「木宮泰彦先生著『日華文化交流史』と陝西師範大学教授胡錫年先生」、『国際経済論集』五巻一号＝通巻九号〔創立一〇周年記念号〕（浜松：浜松大学国際経済学部、一九九八年六月）、一八五頁－一九六頁。

(3)　著者の書物への熱意に触れる

中野　直樹

本研究会には中途（2020 年度）から参加したため、木宮氏の著作のうち私が研究班のメンバーとしっかりと読めたのは、『日本古印刷文化史』と震災史に関する論文のみとなる。もう少し早くに参加させてもらっていればと悔やまれるが仕方がない。他の著作は自分一人で読むことにする。

さて、『日本古印刷文化史』という本であるが、奈良時代から江戸時代までの印刷について押さえた大部な本であり（700 頁超）、気軽に読める本では決してない。時には細かすぎるところまで記述されており、読むのが結構疲れるというのが正直なところ。

しかしながら、この本を通して著者が私の中に印刷史についての知識体系を授けてくれたことは間違いない。印刷史については、これまで専門的にしっかり勉強してこなかったので、あやふやな知識のままにしていた箇所も多い。いつか印刷史の通史をきちんと読みたいと思っていたので、良いタイミングで最善の本を読む機会を得ることができ大変嬉しい。

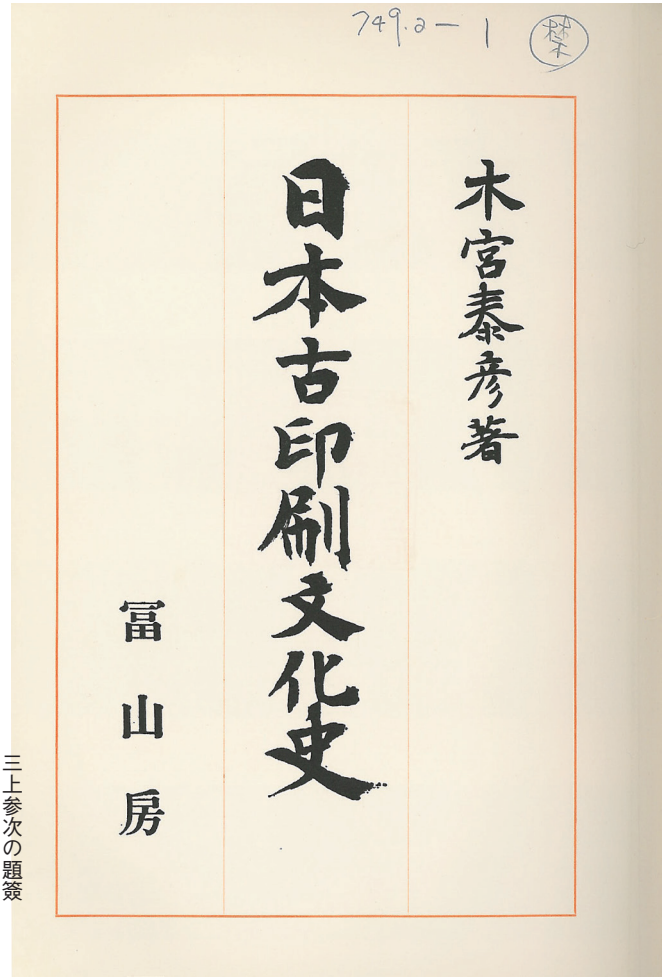
概要にも書いたが、本書は著者が旧制静岡高校に赴任してから内地留学をした際に、様々な文庫を利用して書かれたものである。本書中には様々な書物が縦横に利用され解説されており、且つその一つ一つの書物への観察があり、初学者でもよく分かるように書かれている。また、記述は主観を排しており淡々と進むけれども、有名無名関係なく書物に対して熱意、さらに言えば「愛」がある。愛が無ければこういった難しい、中々成果にならない仕事を成し遂げることは不可能である。

私も研究の為、様々な文庫に書物を見せてもらうことがあるが、こういった研究は書物への熱意がないと、まず続かない。一つの文庫を見るだけでも、かなりの根気と体力と運と社交性が必要である。私などは社交性がなく苦労することが多い（運はある方と自認する）。

著者が多くの文庫を訪れていることは『日本古印刷文化史』の序文から知られるが、それを自慢するでもなく実にあっさりと書かれている。下調べだけでどれほどの時間を費やしたのであろうか。コピー機のない時代、手写しだけの研究はかなりの労力を必要としたであろうが、私にはおおよそのところが分かる気がする。これほどの調査を行ったのであるから、筆まめな著者のこと、どこかに書誌情報を書き込んだノートがあるはずだが、残念ながら現存するかどうかさえ分からない。学術

的損失と言っても良いと私は思うが、こればかりは仕方がない。

印刷に関心が有る人も無い人も、一度『日本古印刷文化史』を覗いてみてほしいと私は思っている。これはと思ったなら、ぜひ一部分だけでも読んでほしい。本文は時代順に記述されており、どこからでも読み始められる。好きな時代だけを読むだけでも勉強になる。著者の淡々とした静かな熱意がそこにある。



三上参次の題簽

⑷　皇国史観との関わり

濱川　　栄

我々は、木宮泰彦の歴史学者としての特長を顕彰するために、４年にわたり共同研究を続けてきた。その間、凡百の大学にありがちな、創立者をひたすら褒めちぎる提灯文を残すようではつまらない、木宮泰彦は本来歴史学者であり、自身が創立した学園に奉職する者たちからとはいえ、その業績を賛美するだけの美辞麗句は決して喜ばないであろう、という思いを維持してきた。木宮泰彦を敬愛するからこそ、その研究上の欠点や疑問点は積極的に批判し、質すことを心がけながら『日華文化交流史』をはじめとする諸業績を精読したのである。

その前提に立って、木宮泰彦の歴史学者としての側面を評価する場合、私としてはやはり皇国史観との関係が気になって仕方がない。それについてはすでに拙稿「木宮泰彦と皇国史観―主として『日華文化交流史』に拠る―」（『常葉初等教育研究』第４号、二〇一九年）で扱ったが、満足のいく成果が得られたとは言えない。中国文化、特に禅宗とそれに付随する豊穣な仏教文化への憧憬を隠そうとしない木宮が、その中国を侵略していた戦前の日本、そしてその政策を根幹から支えた皇国史観という、今日の目から見ればあまりに独善的・非科学的・排外主義的な思想について、心底どう思っていたのか、という疑問は解ききれなかった。戦前の木宮の姿は、決して皇国史観の積極的信奉者には見えない。控えめに、形式的に大日本帝国を賛美していたに過ぎないように見える。ところが、戦後十年を経て刊行された『日華文化交流史』は、皇族の言行の描写に全て敬語を使い、巻末の年表に神武紀元の皇紀を用いている。むしろ、戦後になってからの方が皇国史観への共感が目立つように思われるのである。ある意味、木宮の態度は戦前も戦後も変わらず一貫していた、とも言える。勝手に変わったのは世の中の方だった、とも言えよう。もちろん、多くの学者や国民のように、木宮も敗戦とともに手のひらを反すように態度を変えるべきだった、などとは思わない。しかし、価値観が激変する中で首尾一貫した態度を貫こうとするならば、そこには少なからざる懊悩が生じるはずであろう。いったい、木宮は皇国史観について、あるいは戦後の日本国憲法に基づく体制について、どのように考えていたのだろうか。悩まなかったのだろうか。その悩みは、戦後に歴史研究を断念し、学園経営に邁進したこととどう関わったのか。私は端的にそうした悩みに迫りたかったのであるが、４年間の研究では迫り切れなかった。今後もこの課題を追究していく他はない。

(5) 木宮泰彦の研究を疑う

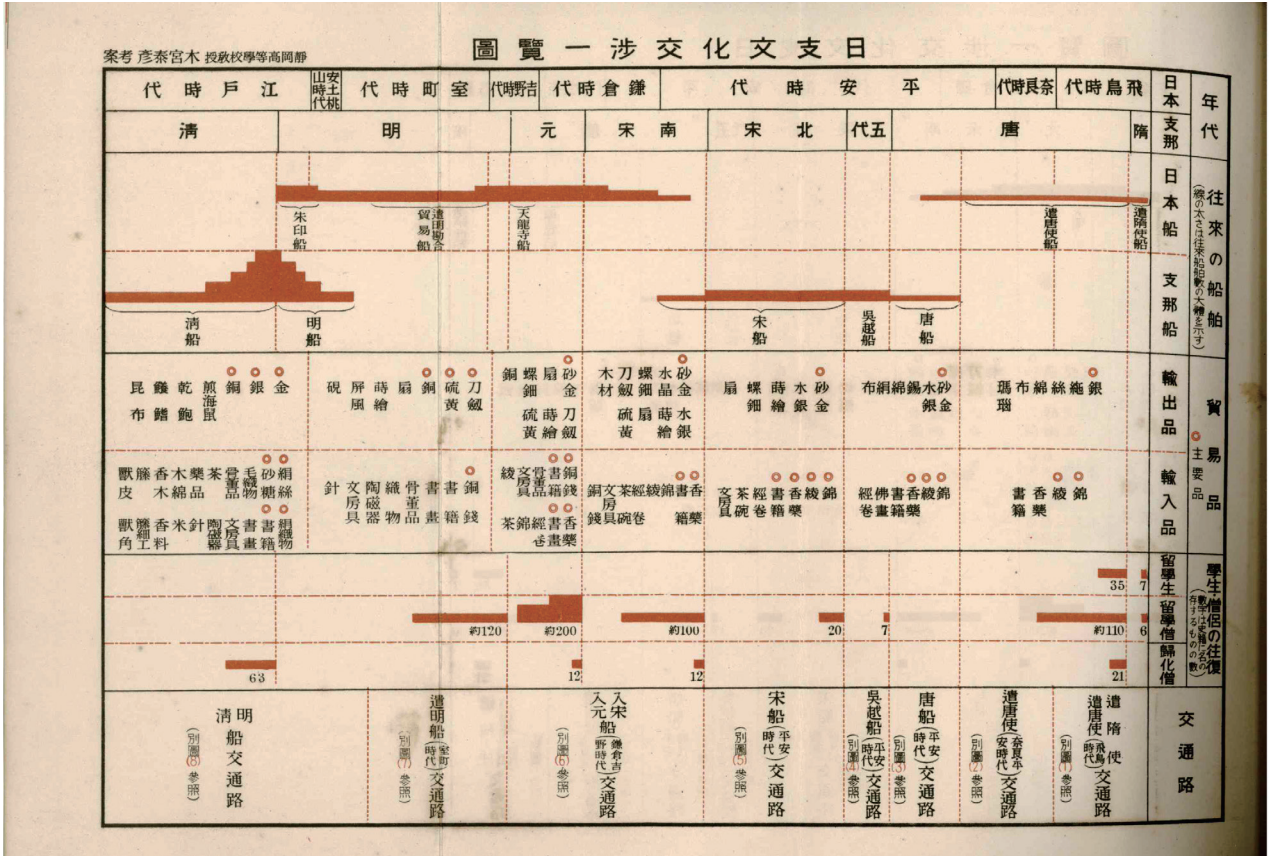
若松　大祐

木宮泰彦は研究者として何を達成したのか。このように疑いながら、私は彼の書いた書籍を繙いている。私は2015年4月に、縁もゆかりもない常葉大学へ赴く。自身の勤務する学校の創立者木宮泰彦が日本史の専門家であり、特に日中関係史を研究していると知り、木宮泰彦の研究内容に関心を持つ。ところが、残念ながら、常葉大学や同じ法人内の諸学校で、木宮泰彦の研究内容について理解を深められる資料はほとんどなく、詳しい人もいない。管見の限り、学外はなおさらほぼ皆無のようだ。

そこで、同僚の教員数名を誘い、「木宮泰彦の研究者としての側面」を一緒に細々と研究している。2016年度は不採択だったものの、2017年度からは常葉大学共同研究に採択され、今にいたる。主な活動内容は、木宮泰彦の主著を読むことである。木宮泰彦の研究対象は古代から近世まで、つまり日本でいえば奈良時代から江戸時代まで、中国でいえば漢代から清代までだった。私は現代台湾や近代中国史を専門に研究しており、古代から近世までについてはわからないことだらけ。したがって、実のところ木宮泰彦の『日華文化交流史』(1955年)や『日本古印刷文化史』(1932年)を読んだと言えず、全ページをめくったというのが正直なところである。

このような私が周囲の力を借りてわかってきたことを、3つほど紹介しよう。ただし、すでに日本史研究者の間では、わかりきったことなのかもしれない。第一は、『日華文化交流史』は中国語訳版『日中文化交流史』(1980年)が内容上、最も正確で豊富だということである。この点については、本稿第3部⑷がやや詳しく述べた。第二は、『日支交通史』(1926－27年、『日華文化交流史』の前身)と『日本古印刷文化史』(1932年)が内容上の補完関係にあるということである。この点については、本稿13頁で図示した。第三は、恐らく木宮泰彦は生涯にわたり、日本文化の特徴は何であり、どのように形成されたのかと問い続けていただろうということである。3点目については、今のところは私の仮説にすぎないので、引き続き疑い、吟味検討したい。

最後に気になるのは、日中関係史の時代区分である。木宮泰彦は『日華文化交流史』において、古代から近世までの日中関係史を、中華王朝の名前で「漢・六朝」、「隋・唐」、「五代・北宋」、「南宋・元」、「明・清」というふうに5つに区分している。果たして、この時代区分は木宮泰彦が始めたものなのか。



『日支文化交渉一覧図と年表』東京：冨山房、1940年２月。

後序

若松　大祐

『おもしろい木宮泰彦初稿』を編集するために、共同研究の一環として書き散らした文章を改めて読み、書き直した。学内外の専門家に執筆を依頼した文章も、改めて読み直した。研究者としての木宮泰彦の業績を検証することを目的に掲げ、集まった文章をいざ編んでみると、時として我々は木宮泰彦に対して批判めいた態度で臨みすぎたようだ。あくまでも批判であり、批難ではない。批判する以上、根拠を挙げなければならない。つまり、我々は木宮泰彦の立場に立ち、彼の主張に即して、彼の主張が本当に正しいのかどうかを疑ったのである。実のところ、我々がいかに木宮泰彦を重視していることか！

ただし、我々は木宮泰彦に厳しく臨みながら、自らには同じように厳しく臨めていない。本稿には誤字脱字や書式不統一を始めとして、内容上の未熟な分析や矛盾が残る。書名に「初稿」を付けざるを得なかった。本稿を締めくくるにあたり、「著者としては更に訂正すべきであるが、時間的余裕もないので、旧版のまま再版した。希くば読者これを諒とせられよ」という文章に対し、我が事のように共感できてしまう。本稿の出来栄えに不満を覚え、研究者としての木宮泰彦を検証しようと試みる人々が続出するのを、我々は心待ちにしている。

『日支交通史』上下巻の出版時、木宮泰彦は三九歳と四〇歳だった。その後の木宮泰彦は同書での学説をさらに推し進めていくから、同書はまさに不惑の書だったのである。五年後と六年後に出版一〇〇周年が迫る。その時、国際社会において日中両国の関係はどのようであるのか。そして、我々には何ができるのか。

関係者一覧

常葉大学共同研究を展開する上で、下記の人々から多くの協力を得た。改めてお礼申し上げるとともに、引き続きご協力いただけるようお願い申し上げたい。

愛宕　航希	常葉大学造形学部学生
天野　忍	常葉大学教員
飯塚　美結	常葉大学造形学部学生
石塚　尚子	常葉大学職員
伊東　明子	常葉大学教員
植田　貴久	常葉大学外国語学部学生
江藤　秀一	常葉大学教員
王　韶君	呉三連台湾史料基金会研究員
大原　嘉豊	京都国立博物館学芸部研究員
岡崎　滋樹	松本大学総合経営学部教員
小川　快之	国士舘大学文学部教員
尾崎　富義	常葉大学教員
片山　イザベラ	常葉大学外国語学部学生
木宮　暁子	常葉大学教育学部附属橘小学校教員
木宮　史彦	常葉大学職員
木宮　敬信	常葉大学教員
木宮　岳志	学校法人常葉大学職員
黒澤　真帆	常葉大学職員
小林　凌輔	常葉大学外国語学部学生
小柳　直人	常葉大学外国語学部学生
佐藤　佑紀	常葉大学外国語学部学生

篠原　剛	篠原印刷所社員
肖　如平	浙江大学歴史学部教員
杉山　瑞貴	常葉大学外国語学部学生
鈴木　神威	常葉大学外国語学部学生
石　暁軍	姫路獨協大学人間社会学群教員
関　智英	津田塾大学学芸学部教員
孫　英剛	浙江大学歴史学部教員
高木　敏正	とこはスイミング職員
高田　耕輔	篠原印刷所社員
竹中　智泰	常葉大学教員
陳　志堅	浙江大学歴史学部教員
辻村　希実	常葉大学外国語学部学生
中川　邦明	常葉大学教員
中野　直樹	常葉大学教員
中村　聰	常葉大学職員
中村　大太	常葉大学造形学部学生
西村　惠学	禅文化研究所研究員
野中　繭	常葉大学職員
花谷　充生	常葉大学造形学部学生
濱川　栄	常葉大学教員
林　啓子	学校法人常葉大学職員
原賀　美空	常葉大学造形学部学生
平井　雅孝	学校法人常葉大学職員
増井　実子	常葉大学教員
松丸　悦子	常葉大学職員

宮内　肇	立命館大学文学部教員
宮原　佳昭	南山大学外国語学部教員
武藤　陽香	常葉大学造形学部学生
安武　伸朗	常葉大学教員
尤　淑君	浙江大学歴史学部教員
吉松　愛結	常葉大学外国語学部学生
若松　大祐	常葉大学教員
和田　瑞紀	常葉大学職員
Kieran ALEXANDER	Alpha English School 教員

* すでに退職したり、卒業したりして、身分に異動のある場合がある。

Planning
&Presentation
100年企業を目指して
株式会社篠原印刷所
〒422-8033 静岡市駿河区登呂6丁目7番5号
tel/054-286-5141
http://www.shinohara-print.jp

おもしろい木宮泰彦初稿

常葉大学共同研究報告書

2017 年度－2019 年度「『日華文化交流史』とその時代：
木宮泰彦の研究成果を常葉大学の授業で活用する試み」
2020 年度「研究者としての木宮泰彦の意義を検証する試み：
2020 年における成果と課題」

2021 年 3 月 31 日

編　　者：若松大祐
連 絡 先：〒 422-8581 静岡市駿河区弥生町 6 番 1 号
常葉大学外国語学部
TEL（054）297-6100［代表］
FAX（054）297-6101［代表］
https://www.tokoha-u.ac.jp/

ISBN:978-4-901580-55-7
非売品

Wakamatsu Daisuke (ed.)
Amazing Historian Kimiya Yasuhiko: Draft Version
Tokoha University
6-1 Yayoi-cho, Suruga-ku, Shizuoka-shi, JAPAN, 422-8581
31st March, 2021
Copyright © 2021 WAKAMATSU Daisuke. All Rights Reserved.

るものとも補ひ、若き女性に向学心に應へようとして計画されたのが、静岡女子高等學院の設立でありました。私はもともと本縣の産であり、過去二十年間静岡高等學校教授として、育英に携わった関係上、最も静岡の地に親しみを覚え、愛着を感ずるものであります。性来甚だ不敏ではありますが、今までの永い経験を活かして、当市に於ける女子高等普通教育の発展の礎を築きたいと念願しております。幸に大方諸賢の御支援と御庇護とを賜わらば、狗り私のみに喜びではありません。

資材不足の折柄、遽かに新校舎を建設することも困難でありますから、とりあへず、静岡大岩臨済寺の一部を借りて、授業を開始することに致します。蕭然たる浣聖系のバラック生活に、若き女性の心はともすれば荒び勝ちになると思はれます。名刹臨済寺の静寂な一室、明窓の下、浄机を並べ、趣味豊かな講義に耳を傾け、或ときは、方の優雅典雅な技能を習得し、和やかな心と糧を得ることは、今日実に意義あること、思ひます。

昭和二十一年四月三日

静岡女子高等學院長

水宮春彦敬白

ISBN:978-4-901580-55-7
非売品